

難波宮址の研究

第 十

—後期難波宮大極殿院地域の調査—



1995.9

財団法人 大阪市文化財協会

難波宮址の研究

第 十

—後期難波宮大極殿院地域の調査—



1995.9

財団法人 大阪市文化財協会

『難波宮址の研究』第十 正誤表

頁	行 (位置)	誤	正
例言	14	甲子園学院短期大学	甲子園短期大学
目次vii	左段 1 7 2.	西礎石	西地覆石
25	10	南基壇上	西面回廊基壇上
29	10	SD3545	SD3582
63	Fig.22 (左端)	36.96	41.64m
折込	Fig.24 凡例下段	SD3681	(削除)
76	27	後期時期を	後期か時期を
77	9	約1.3mのに	約1.3mの
90	2	南西部の	南西部に
97	18	100点	99点
99	16~17	内行斜縁	内向斜縁
100	12, 13	内行	内向
101	9, 25	内行斜縁	内向斜縁
101	10	斜目	斜め
107	9	21個	19個
109	7	凹面	凸面
113	4	切ってつき	切落とし
113	30	右端部, 平瓦左上	左端部, 平瓦右上
115	25	刀先	刃先
129	5	竪穴式住居	竪穴式住居
133	9	小壘田宮	小壘田宮
134	Fig.48 SB2001	13.46m	14.46m
135	25	小壘田宮	小壘田宮
146	20~21	大政官	太政官
147	16	甲子園学院短期大学	甲子園短期大学
151	13	宮都における	宮都における
151	17	(Fig.52)	(Fig.53)
154	1	記したと	記した
155	6	(Fig.10)	(Tab.10)
155	14, Tab.10	大目方克司	大目方克己
156	29	宮城部分	皇城部分
157	23	口答	口頭
157	26	梁がかけられた	梁がかけられた
158	1	山崎直治氏, 口答	山崎直治氏, 口頭
171	8	西外郭築地	西外郭築地
折込	Fig.55 後期難波宮	(723~784)	(726~784)
179	14	6575A	6572A
194	Fig.61 基壇出	(11尺)	(10.75尺)
198	6	67?	68
英文目次・要旨i	21	of Latter	of The Latter
英文目次・要旨v	16	was	were
図面9	下段	114 (6010b)	113 (6010a)
図版17	下段	礎石	地覆石
奥付	ISBN番号	4-900687-12-4	4-900687-12-X



難波宮跡(1994年11月)

難波宮址の研究

第 十

—後期難波宮大極殿院地域の調査—



1995.9

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

上町台地北部では古墳時代以降、古代・中世・近世と人々の生活が営まれてきました。その中で特に日本の歴史の重要な舞台となった古代の難波宮から近世の大阪城を一体化した歴史公園づくりが、大阪市によって進められております。

高い石垣と広い濠を残す大阪城に比べ、地下に埋もれてしまった難波宮の解明は、山根徳太郎博士を中心に1954年から開始された発掘調査を待たざるを得ませんでした。初期の暗中模索ともいえる段階から、後期難波宮の内裏回廊がわかり、それをもとに大極殿・後殿の確認された1961年頃から難波宮跡の調査は都市再開発の中での困難を伴いつつも計画的に実施できるようになりました。

1964年に大極殿跡地の保存が契機となって、難波宮の大極殿院と内裏の主要部17,500㎡がはじめて国の史跡に指定されました。そこで、史跡公園として環境整備をするにあたり、後期難波宮大極殿院地域の発掘調査が1969～1973年に大阪市と難波宮址顕彰会によって実施されました。朝堂院や官衙に調査の範囲も広がり、重複した前期・後期二時期の宮殿が明らかになった現在、古代宮都の研究において難波宮の重要性は非常に高くなっています。

本書は、難波宮址顕彰会を引き継いだ本協会が大阪市教育委員会の委託を受けて、後期難波宮大極殿院地域の後期大極殿院および前期内裏南門等の発掘調査の成果をまとめたものです。

古代、難波津から発着した遣隋使・遣唐使らによって、大陸からより高い文化がもたらされました。7世紀中頃における前期難波宮は、まさに国際都市大阪の出発点であります。21世紀の新しい大阪において、難波宮・大阪城の歴史公園が調査に基づいた素晴らしいものとなり、市民のみなさんが歴史や文化に親しんでいただける場となることを望んでやみません。

発掘調査や報告書の作成には多くの方々のご協力とご教示を得ることができました。深く感謝し、厚くお礼を申し上げます。

1995年9月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 佐治 敬三

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が大阪市教育委員会の委託を受けて作成した、難波宮跡後期難波宮大極殿地域の発掘調査報告書である。
- 一、発掘調査は、難波宮跡史跡指定地の環境整備に備えて、山根徳太郎氏(難波宮址顕彰会専門委員、文学博士)の指導のもとに、大阪市教育委員会と難波宮址顕彰会が、1969年3月から1973年2月まで実施した。
- 一、発掘調査に当っては難波宮址顕彰会専門委員の諸先生からご指導・ご教示を賜わった。特に澤村仁氏(当時：奈良国立文化財研究所発掘調査部第1調査室長)には直接的にご指導をさせていただいた。
- 一、本書の作成には、当時調査を担当した中尾芳治氏(現帝塚山学院大学文学部教授)と長山雅一氏(現流通科学大学情報学部教授)にご協力をお願いし、執筆には中尾氏、長山氏、佐藤隆(当協会調査員)、八木久栄(当協会主幹)が当り、編集は八木が担当した。筆署名は担当個所の最後に明記した。巻末の英文要旨の作成はオーストラリア・クイーンズランド大学学生Robert Condon氏に依頼し、岡村勝行(当協会調査員)がこれに協力した。
- 一、今回の報告は前期・後期難波宮と難波宮下層遺跡を範囲とし、上層については割愛した。
- 一、考察には文献史料から直木孝次郎氏(大阪市立大学名誉教授、甲子園学院短期大学教授)、建物の復元については澤村仁氏(九州芸術工科大学名誉教授、愛知みずほ大学教授)から玉稿を頂戴した。
- 一、資料整理・報告書作成には、澤村氏、榎本久氏(大阪市教育委員会主任学芸員)をはじめ、当協会調査員等多くの方々からご教示とご協力を得た。
- 一、遺構は、構・堀(SA)、建物(SB)、廊(SC)、溝・地覆石採取跡(SD)、土壌(SK)、足場穴(SS)、柱(SZ)、小石散(SX)、その他(SX)の記号の後に、本報告書独自の通し番号を1から順に付した。前期難波宮の遺構は1～20番、後期難波宮の遺構は21～40番、難波宮下層遺跡の遺構は41～60番、中世・近世の遺構は61～80番、時期不明・その他の遺構は81～99番とした。大阪市教育委員会発行の昭和43～46年度「難波宮跡調査報告書」、難波宮址顕彰会刊行「難波宮跡研究調査年報」1971、1972の遺構番号とは異なるものもあるので、今後は本書の番号によられたい。遺構や建物の規模の数字についても同じである。
- 一、本書で用いた難波宮基準高は $0 = T.P. + 22.8285m$ である。また、東西の基準線とした難波宮中軸線は座標北から $0^{\circ}50'45''$ 、真北から $0^{\circ}34'35''$ 東に振れる。
- 一、本書に使用した写真は、遺構・遺物ともに徳永閑治氏の撮影によるものである。一部に調査担当者のものが含まれる。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物その他の資料は当協会が保管している。
- 一、発掘調査と資料整理・図表の作成には、補助員の方々のご協力を得た。深く感謝の意を表したい。

本文目次

序文

例言

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
1 難波宮跡の発掘調査と保存	1
2 後期大極殿院地域の発掘調査	2
3 難波宮跡環境整備事業の開始	2
4 前期・後期難波宮の呼称について	5
第Ⅱ章 調査の経過と概要	7
第1節 第33・34次調査	8
1 調査の目的	8
2 調査の基本方針	8
3 調査の経過	9
4 遺構の概要	16
(1) 前期難波宮	16
(2) 後期難波宮	17
(3) その他の遺構	19
第2節 第35次調査	20
1 調査の目的	20
2 調査の経過	20
3 遺構の概要	26
(1) 前期難波宮	26
(2) 後期難波宮北面西回廊	27
(3) その他の遺構	29
第3節 第36次調査	30
1 調査の目的	30

2	調査の経過	30
3	遺構の概要	31
	(1) 前期難波宮	31
	(2) 後期難波宮	32
	(3) その他の遺構	33
第4節	第37次調査	34
1	調査の目的	34
2	調査の経過	34
3	遺構の概要	42
	(1) 後期大極殿跡	42
	(2) 前期大極殿相当建物跡	43
	(3) その他の遺構	45
第5節	第37次補足調査	47
1	調査の目的	47
2	調査の結果	47
第6節	第39次調査	48
1	調査の目的	48
2	調査の経過	48
3	遺構の概要	53
	(1) 大極殿前庭	53
	(2) 後期難波宮閤門と南面回廊	53
	(3) その他の遺構	54
第Ⅲ章	遺構	55
第1節	層序	55
1	第37次調査	55
2	大極殿院地域の層序	58
第2節	前期難波宮の遺構	62
1	内裏南門	62
2	内裏南面回廊	65
	(1) 内裏南面東回廊	65
	(2) 内裏南面西回廊	66
3	内裏西面回廊	66
4	内裏西長殿	67

5	西八角殿院東面回廊	67
6	西八角殿院北面回廊	68
7	西八角殿院南面回廊	68
第3節	後期難波宮の遺構	70
1	大極殿	70
2	軒廊	76
3	大極殿後殿	76
4	北面回廊	79
	(1) 北面東回廊	79
	(2) 北面西回廊	80
5	西面回廊	84
6	閤門と南面回廊	85
7	その他の遺構	87
第4節	難波宮下層遺跡	89
第5節	その他の遺構	91
第Ⅳ章	遺物	93
第1節	前期難波宮	93
1	土器	93
2	瓦埴類	95
	(1) 瓦	95
	(2) 埴	95
第2節	後期難波宮	96
1	土器	96
2	瓦埴類	97
	(1) 軒丸瓦	97
	(2) 軒平瓦	102
	(3) 丸瓦・平瓦	108
	(4) 道具瓦	110
	(5) 埴	114
3	凝灰岩	115
第3節	難波宮下層遺跡	125
1	土器	125
2	瓦類	130

3	その他	130
第V章	考察	131
第1節	難波宮大極殿の成立	直木孝次郎 131
	はじめに	
1	小墾田宮から前期難波宮までの「大極殿(大殿)」	131
2	天武朝の政情と飛鳥浄御原宮の構造	136
3	持統朝の政情と藤原宮の大極殿	140
4	後期難波宮大極殿の成立と平城宮との関係	143
	付論 太政官院と朝堂院	146
第2節	前期難波宮の内裏南門	長山雅一 149
1	問題の所在	150
2	前期難波宮の計画	151
3	前期難波宮の小柱穴	151
4	内裏南門の規模・構造	152
5	内裏南門の機能と役割	153
第3節	後期難波宮大極殿院の規模と構造について	中尾芳治 159
	はじめに	
1	後期難波宮大極殿院の規模と構造	159
2	平城宮第二次大極殿院の遺構	161
3	長岡宮大極殿院の遺構	163
4	後期難波宮大極殿院と平城宮第二次大極殿院の比較	164
5	後期難波宮大極殿院と長岡宮大極殿院の比較	168
第4節	後期難波宮大極殿院の屋瓦	八木久栄 175
1	後期難波宮大極殿院の屋瓦	175
2	造営時の瓦・補修の瓦	180
第5節	後期難波宮大極殿の建物ほか二・三の問題	澤村 仁 185
1	建築時期の問題	185
	(1) 平城宮との関係……………185 (2) 遺構自体のもつ問題点……………186	
2	大極殿基壇の技術的問題	187

3	大極殿の規模と使用尺度	188
4	大極殿後殿の問題	191
5	大極殿建物の構造復原	192

引用・参考文献

あとがき

索引

英文目次・要旨

報告書抄録

図面

原色図版

図版

図 面 目 次

- 図面1 前期・後期難波宮内裏・朝堂院道構配置図
 図面2 後期難波宮大極殿院地域道構配置図
 図面3 後期難波宮大極殿院道構配置図
 図面4 第33・34次調査実測図
 図面5 第35次調査実測図
 図面6 第36次調査実測図
 図面7 第37次・同補足調査実測図
 図面8 第39次調査実測図
 図面9 後期難波宮出土遺物(軒九瓦)

- 図面10 後期難波宮出土遺物(軒平瓦)
 図面11 後期難波宮出土遺物(九瓦)
 図面12 後期難波宮出土遺物(平瓦)
 図面13 後期難波宮出土遺物(平瓦)
 図面14 後期難波宮出土遺物(平瓦・隅平瓦)
 図面15 後期難波宮出土遺物(端瓦・鬼板)
 図面16 後期難波宮出土遺物(面戸瓦・地)
 図面17 後期難波宮出土遺物(凝灰岩)

原 色 図 版

後期難波宮大極殿跡(北から)

コンピューターグラフィックスによって復元された
 後期難波宮大極殿(南西から)

図 版 目 次

- 1 第33・34次調査
 1. 調査地遠景(北東から)
 2. 調査地遠景(南から)
- 2 第33・34次調査
 1. 調査地全景(南から)
 2. 調査地全景(北から)
- 3 第33・34次調査
 1. 調査地全景(西から)
 2. 調査中央部(南から)
- 4 第33・34次調査
 1. 調査東部(南西から)
 2. 調査西部(南東から)
- 5 第33・34次調査
 1. 調査地全景(東から)
 2. 調査東部(東から)
- 6 第33・34次調査
 1. 調査地全景(西から)
 2. 調査西部(西から)
- 7 第33・34次調査
 1. 前期内裏南門SB3301と後期大極殿後殿SB1326(西から)
 2. 前期内裏南門SB3301と後期大極殿後殿SB1326に取付く前期回廊SC3304と後期回廊SC3324(北から)
- 8 第33・34次調査
 1. 前期内裏南門の掘立柱群、3列に並び手前の南側柱には小柱穴、2つの足場穴、さらに先行する掘形がみられる(南から)
 2. 前期内裏南門北側柱(北から)
- 9 第33・34次調査
 1. 前期内裏南門小柱穴を伴う南側柱(南から)
 2. 前期北面東回廊SC1301の掘立柱、柱穴には礎板が残っていた
- 10 第33・34次調査
 1. 後期大極殿後殿南西隅と回廊取付き部(北西から)

2. 後期大極殿後殿西端と北面西回廊取付き部(南から)
- 11 第33・34次調査
 1. 後期大極殿後殿から回廊の北半部(東から)
 2. 後期大極殿後殿背面の雨落溝SD3323からつづく回廊雨落溝SD1325(北から)
- 12 第33・34次調査
 1. 後期大極殿後殿背面の雨落溝と北辺の小石敷SX3322(東から)
 2. 後期大極殿後殿土壇と背面雨落溝(北から)
- 13 第33・34次調査
 1. 後期大極殿後殿背面雨落溝(東から)
 2. 後期大極殿後殿北西部土壇と雨落溝(北から)
- 14 第33・34次調査
 1. 後期大極殿後殿土壇・背面雨落溝と北辺の小石敷(西から)
 2. 後期大極殿後殿土壇・背面雨落溝と北辺の小石敷 細部(西から)
- 15 第33・34次調査
 1. 後期大極殿後殿土壇・背面雨落溝と前期内裏南門掘立柱(東から)
 2. 後期大極殿後殿土壇・背面雨落溝と前期内裏南門掘立柱 細部(北から)
- 16 第33・34次調査
 1. 後期大極殿後殿から軒端への入隅部分(南東から)
 2. 後期大極殿後殿前面の地覆石抜き取り跡(東から)
- 17 第33・34次調査
 1. 後期軒廊SC3321から後殿へ地覆石抜き取り跡に堆積した瓦類(南西から)
 2. 後期軒廊西礎石抜き取り跡から小石敷上の瓦類・隅軒平・鬼板もみられる(南から)
- 18 第33・34次調査
 1. 後期後殿南東辺の小石敷と散布する瓦(東から)
 2. 後期後殿南西辺の小石敷と散布する瓦(西から)
- 19 第33・34次調査
 1. 基壇西部の状況と5世紀密状遺構SX3381(南から)
- 20 第33・34次調査
 1. 5世紀密状遺構SX3381(西から)
 2. 5世紀密状遺構SX3381(北から)
- 21 第35次調査
 1. 調査地遠景(南から)
 2. 調査地全景(東から)
- 22 第35次調査
 1. 前期・後期難波宮回廊(東から)
 2. 前期・後期難波宮回廊(西から)
- 23 第35次調査
 1. 前期内裏南面西回廊SC3304と後期大極殿院北面西回廊SC3324の重複(東から)
 2. 前期内裏南面西回廊SC3304と後期大極殿院北面西回廊SC3324の重複(西から)
- 24 第35次調査
 1. 前期西八角殿院東面回廊SC3501と後期大極殿院北西隅(南から)
 2. 前期西八角殿院東面回廊SC3501と後期大極殿院北西隅(北から)
- 25 第35次調査
 1. 前期内裏西面回廊SC803・西八角殿院東面回廊と同北面回廊SC3504、手前は内裏西長殿SB1101・SB1102の南端部(東から)
 2. 前期内裏西長殿(西から)
- 26 第35次調査
 1. 前期西八角殿院東面回廊柱穴
 2. 前期内裏南面西回廊柱穴
- 27 第35次調査
 1. 前期と後期回廊柱跡の重複(東から)
 2. 前期と後期回廊柱跡の重複、後期礎石根石抜き取り跡
- 28 第35次調査
 1. 後期大極殿院北西入隅の雨落溝SD3325・SD3525と暗渠SD3521(南から)
 2. 後期大極殿院北西入隅の雨落溝と暗渠・灰岩切石の底石(西から)

- 29 第36次調査
1. 調査地遠景(第35次・第36次調査)(南から)
 2. 調査地遠景(第35次・第36次調査)(北西から)
- 30 第36次調査
1. 調査地全景(南から)
 2. 調査地全景(北西から)
- 31 第36次調査
1. 調査地全景(西から)
 2. 調査地全景(東から)
- 32 第36次調査
1. 後期西面回廊東雨落溝SD3525と瓦の出土状況(北から)
 2. 後期西面回廊東雨落溝SD3525と瓦の出土状況(東から)
- 33 第37次調査
1. 発掘前現状写真(北西から)
 2. 調査地全景(南から)
- 34 第37次調査
1. 調査地全景(南から)
 2. 調査地全景(北から)
- 35 第37次調査
1. 調査地全景(東から)
 2. 調査地全景(西から)
- 36 第37次調査
1. 大極殿南面東階段(西から)
 2. 大極殿南面東階段(東から)
- 37 第37次調査
1. 大極殿南面中央階段と小石散(南から)
 2. 大極殿南面中央階段(南から)
- 38 第37次調査
1. 大極殿南面西階段(南から)
 2. 大極殿南面西階段(南から)
- 39 第37次調査
1. 大極殿北面東階段(南東から)
 2. 大極殿北面東階段(北から)
- 40 第37次調査
1. 大極殿北面西階段(北から)
 2. 大極殿北面西階段(北から)
- 41 第37次調査
1. 大極殿西面西階段(西から)
 2. 大極殿西面西階段(西から)
- 42 第37次調査
1. 軒窓SC3321(北から)
 2. 軒窓SC3321(北から)
- 43 第37次調査
1. 大極殿土壇西面(北から)
 2. 大極殿土壇西面(南から)
- 44 第37次調査
1. 大極殿土壇北側(西から)
 2. 大極殿土壇南側と近基柱列(西から)
- 45 第37次調査
1. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(東から)
 2. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(北西から)
- 46 第37次調査
1. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(北から)
 2. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(北から)
- 47 第37次調査
1. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(西から)
 2. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(東から)
- 48 第37次調査
1. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(北から)
 2. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(南から)
- 49 第37次調査
1. 前期難波宮小石散SX3701(左)と後期難波宮小石散SX1321(右)(東から)
 2. 大極殿北面東階段南東部の前期難波宮小石散(東から)
- 50 第37次調査
1. 後期難波宮大極殿土壇下の前期難波宮小石散(東から)
 2. 後期難波宮大極殿土壇下の前期難波宮小石散部分(東から)
- 51 第37次調査
- 後期難波宮大極殿土壇G-G'断面の版基状況(東から)
- 52 第37次調査

1. 近世擾乱地の壁面にみえる後期難波宮大極殿土壇の版築状況全景(南から)
 2. 近世擾乱地の壁面にみえる後期難波宮大極殿土壇の版築状況 部分(西から)
- 53 第37次調査
1. 大極殿南面東階段西側の凝灰岩出土状況(北から)
 2. 軒廊SC3321東側の瓦出土状況
- 54 第37次調査
1. 大極殿鬼板6920出土状況(南西から)
 2. 大極殿土壇北西隅の瓦出土状況(北から)
- 55 第37次調査
1. 難波宮下層遺跡柱穴(右下)と時期不明溝SD3681(左上)(北から)
 2. 難波宮下層遺跡柱穴(右)と時期不明溝SD3681(左)(東から)
- 56 第37次調査
1. 難波宮下層遺跡柱穴SZ3750(東から)
 2. 難波宮下層遺跡柱穴SZ3750・51(東から)
- 57 第37次調査
1. 後期難波宮小石敷下層の掘形SA3781(南から)
 2. 後期難波宮小石敷下層の掘形SA3781(南から)
- 58 第37次調査
1. 大極殿南面東階段と難波宮下層遺跡柱列SA3741(北東から)
 2. 難波宮下層遺跡柱列SA3741(東から)
- 59 第37次調査
1. 擾乱地埋戻し後の大極殿土壇(北東から)
 2. 擾乱地埋戻し後の大極殿土壇(南から)
- 60 第37次調査
1. 擾乱地埋戻し後の大極殿土壇(北から)
 2. 擾乱地埋戻し後の大極殿土壇(東から)
- 61 第37次補足調査
1. 調査地全景(北から)
 2. 調査地全景とSA3741(南から)
- 62 第37次補足調査
1. 大極殿土壇北東隅(北から)
 2. 大極殿土壇北東隅(西から)
- 63 第37次補足調査
1. 大極殿東面階段(東から)
 2. 大極殿東面階段(西から)
- 64 第39次調査(前半)
1. 調査地全景(北から)
 2. 調査地全景(東から)
- 65 第39次調査(前半)
1. 後期大極殿前庭小石敷SX1321(東から)
 2. 後期大極殿前庭小石敷と掘立柱欄SA3926(西から)
- 66 第39次調査(後半)
1. 調査地全景(北から)
 2. 調査地全景(東から)
- 67 第39次調査(後半)
1. 調査地東部(北から)
 2. 後期間門北方の小石敷SX3923(南から)
- 68 第39次調査(後半)
1. 後期南面東回廊柱跡(東から)
 2. 後期南面西回廊柱跡(北から)
- 69 第39次調査(後半)
1. 後期大極殿院回廊南西隅(北から)
 2. 後期大極殿院回廊南西隅、暗渠SD1523と回廊北雨落溝SD3925(西から)
- 70 第39次調査(後半)
1. 後期大極殿院回廊南西隅暗渠(東から)
 2. 後期南面西回廊北雨落溝(南から)
- 71 第39次調査(後半)
1. 後期暗渠凝灰岩切石の底石と甬石(南から)
 2. 後期暗渠凝灰岩切石の底石と甬石(西から)
- 72 前期・後期難波宮、難波宮下層遺跡出土土器
- 73 難波宮下層遺跡出土土器
- 74 後期難波宮出土遺物(軒九瓦)
- 75 後期難波宮出土遺物(軒九瓦)
- 76 後期難波宮出土遺物(軒平瓦)
- 77 後期難波宮出土遺物(軒平瓦)
- 78 後期難波宮出土遺物(軒九瓦・軒平瓦)、その他
- 79 後期難波宮出土遺物(軒九瓦・軒平瓦)
- 80 後期難波宮出土遺物(九瓦)

81	後期難波宮出土遺物(平瓦)
82	後期難波宮出土遺物(平瓦)
83	後期難波宮出土遺物(平瓦・隅平瓦)

84	後期難波宮出土遺物(扇尾・鬼杵)
85	後期難波宮出土遺物(面瓦)

挿 図 目 次

Fig. 1	難波宮跡史跡指定地および大阪市有地の範囲	Fig. 27	後期大極殿基壇地覆石出土状況実測図
Fig. 2	大極殿の整備状況(1976年3月)	Fig. 28	後期大極殿基壇地覆石実測図
Fig. 3	後期難波宮大極殿院地域発掘調査区と大・中地区割図	Fig. 29	後期大極殿後殿南西部から回廊取付き部
Fig. 4	第33・34次調査(CO地区)地区割図	Fig. 30	後期大極殿院回廊北西人間部
Fig. 5	大極殿後殿東側の回廊取付き部	Fig. 31	後期大極殿院回廊南西隅溝
Fig. 6	第35次調査(CO地区)地区割図	Fig. 32	前期難波宮の土器
Fig. 7	第35次調査I・II区遺構検出	Fig. 33	平瓦と埴
Fig. 8	現地説明会における山根先生の講演	Fig. 34	後期難波宮の土器
Fig. 9	第36次調査(CL地区)地区割図	Fig. 35	後期難波宮軒瓦拓影
Fig. 10	後期大極殿院西面回廊東南落溝	Fig. 36	後期難波宮軒瓦拓影と実測図
Fig. 11	第13次発掘調査成果主要部略図	Fig. 37	後期難波宮軒平瓦拓影
Fig. 12	前期難波宮復元図 〔「難波宮址の研究」第6 1970年〕	Fig. 38	後期難波宮軒平瓦拓影と実測図
Fig. 13	第37次・同補足調査(CL地区)地区割図	Fig. 39	後期難波宮埴と凝灰岩
Fig. 14	現地説明会	Fig. 40	後期難波宮大極殿院出土平瓦分布図
Fig. 15	奈良国立文化財研究所による写真測量(上) と写真測量用カメラ(下)	Fig. 41	後期難波宮大極殿院出土平瓦分布図
Fig. 16	第13次調査遺跡実測図	Fig. 42	宮状遺構出土土器
Fig. 17	第39次調査(BQ・BT・CL地区)地区割図	Fig. 43	遺物包含層出土土器
Fig. 18	中世大溝(北西から)	Fig. 44	遺物包含層出土土器
Fig. 19	第37次調査基本層序(東西トレンチ)	Fig. 45	遺物包含層出土土器
Fig. 20	第37次調査基本層序(南北トレンチ)	Fig. 46	遺物包含層出土土器
Fig. 21	大極殿院地域の柱状断面模式図	Fig. 47	進華文軒瓦
Fig. 22	前期難波宮第33～36次遺構配置図	Fig. 48	前期難波宮
Fig. 23	前期内裏南門柱穴と先行する柱穴	Fig. 49	エビノコ郭
Fig. 24	後期大極殿土壇南北・東西断面図 (断面位置は図面を参照)	Fig. 50	板蓋宮伝承地宮跡 第Ⅱ-B期
Fig. 25	後期大極殿土壇東西・南北断面図(部分)	Fig. 51	難波・藤原・平城宮の比較
Fig. 26	後期大極殿北面東階段入隅部地覆石	Fig. 52	平城宮中央区の大極殿・朝堂 (神亀前後～天平12年)
		Fig. 53	前期難波宮計画図
		Fig. 54	後期難波宮・平城宮・長岡宮大極殿院・ 朝堂院比較図
		Fig. 55	日本古代宮都の内裏・朝堂院の変遷

Fig. 56 後期難波宮軒平瓦6573拓影	181	Fig. 60 『營造方式』にみられる殿堂(右)と庁堂(左)の構造	193
Fig. 57 大極殿(右)・軒廊(左)入隅基壇復元図	188	Fig. 61 後期難波宮大極殿復元断面図	194
Fig. 58 後期難波宮大極殿・同後殿復元(平面図)	190	Fig. 62 後期難波宮大極殿・同後殿復元想定図	195
Fig. 59 唐招提寺金堂の断面(上)と五台仏光寺大殿の断面(下)	192		

表 目 次

Tab. 1 後期難波宮大極殿院地域発掘調査一覧	8	Tab. 7 後期難波宮瓦類出土数量表	124
Tab. 2 内裏南門の柱穴と土器	93	Tab. 8 宮殿諸門比較表	135
Tab. 3 後期難波宮大極殿院瓦類地区別出土一覧表	120	Tab. 9 前期難波宮跡の門	149
Tab. 4 後期難波宮出土軒丸瓦計測表	121	Tab. 10 『日本書紀』にみえる軒札	155
Tab. 5 後期難波宮出土軒平瓦計測表	122	Tab. 11 大極殿院基壇・建物比較表	160
Tab. 6 後期難波宮出土丸瓦・平瓦計測表	123		

第Ⅰ章 調査に至る経緯

1. 難波宮跡の発掘調査と保存

1954年(昭和29)2月から開始された難波宮跡の発掘調査は、初期の暗中模索と試行錯誤の時期を経て、1959・60年の第10～12次調査によって、東西幅179.3m(602天平尺)に及ぶ後期(聖武朝)難波宮内裏回廊の存在を確認することができた[澤村仁1961]。

次いで1961年春の第13次調査では、第12次調査で確認された後期(聖武朝)難波宮内裏回廊の南に、平城宮の殿舎配置を参考にして大極殿および大極殿後殿の位置を想定して調査したところ、予想通りの位置に大極殿南面中央階段、北面東・西階段、大極殿後殿およびそれに取付く大極殿回廊の跡を検出することに成功した[澤村仁1964]。

この第13次調査によって、後期(聖武朝)難波宮が北に内裏、南に大極殿を置く平城宮跡内裏・「第二次」朝堂院と同じ構造をもつことが明らかになり、法門坂町所在遺跡が難波宮跡であることの確証を高めたのである。

ところが、1962年8月、その前年に発見されたばかりの後期(聖武朝)大極殿跡に、近畿財務局が第2合同庁舎建設を計画していることが明らかになったのである。

当時、大阪市長を会長とする難波宮址顕彰会と大阪市は、大極殿跡を中心とする16,500㎡を国の史跡に指定するように文化財保護委員会に申請する準備を進めている矢先であったので、直ちに庁舎建設地の変更を要請し、大阪市会でも「難波宮址保存に関する意見書」が可決された。10月には山根徳太郎氏の奔走によって、難波宮跡の保存を要望する関西の8大学長声明が出されて大きな反響を呼んだ。

同じく10月には、研究者・学生・市民により直木孝次郎大阪市大助教授を代表とする「難波宮址を守る会」が結成され、署名運動をはじめとする広範な保存運動を展開した。これより先、平城宮跡においても、近鉄の検車区建設問題が契機となって全国的な平城宮跡の保存運動が起こったが、難波宮跡の保存運動は、平城宮跡の保存運動とタイアップして進められ、12月には難波宮跡の保存を求める国会請願が行われた。

こうした保存運動が実って、1963年3月、第2合同庁舎は大阪市の提供した代替地に建設されることになり、1964年5月には、後期大極殿・内裏正殿周辺17,500㎡が、国の史跡に指

定・公示され、その保存に成功した[直木孝次郎1965]。

この保存運動の成功には多くの理由があるが、1961年春に後期大極殿跡(第13次調査)、1962年夏に後期内裏正殿跡(第16次調査)が発掘されて、後期難波宮中枢部の存在が確認されていたことが、難波宮跡保存の重要性を訴える上で大きな力となったことがその一つに挙げられよう。

なお、難波宮跡の史跡指定に関連して、後期大極殿院の範囲確認調査として1962年春に第15次調査が、1963年春に第17次調査が実施されている[澤村1964・中尾芳治1970]。

2. 後期大極殿院地域の発掘調査

当初、第2合同庁舎建設が計画されていた大阪管区行政監察局、近畿矯正研修所、近畿矯正管区の敷地とその周辺道路部分は、大阪市の提供した大阪市中央体育館西方の代替地と等価交換され大阪市有地となった(Fig.1)。

1968年に第2合同庁舎が完成すると、これらの官庁は移転し、その庁舎は取り壊されて更地となった。

大阪市教育委員会は、これらの史跡指定地の将来の環境整備に備えて、まず市有地部分の発掘調査を実施することにし、1969年から1973年にかけて第33・34・35・36・37・39次調査と第37次補足調査が継続して行われ、多大な成果を挙げた。

本報告書は上記調査の正報告書に当たる。

3. 難波宮跡環境整備事業の開始

大阪市はこれらの調査結果を承けて、1971年度より第1次環境整備事業を国の補助事業として着手した。

難波宮跡の環境整備については、当時調査事業の指導機関であった難波宮址顕彰会専門委員会の委員の中から選出された整備計画小委員会によって、まず基本構想が検討された。続いてその構想を具体化するために、1970年12月に設置された整備計画審議幹事会で検討がすすめられ、基本計画が立案された。

その内容は、①前期遺構・後期遺構ともにでき得る限り忠実に復元的整備を行い、宮殿・官衙の構造を理解し易い形で整備すること。②遺構は地下で保存し、地表で整備すること。③後期遺構については、かなり確実な推定復原ができるので、建物基壇などを石材などで復元的に整備することとし、前期遺構については復元が難しい点があるので、遺構の



大極殿院復元基壇全景
(北西から)



大極殿院復元基壇全景
(南西から)



大極殿からみた町並・大極殿院
後殿の復元基壇(南西から)

Fig.2 大極殿院の整備状況 (1976年3月)

位置と規模を象徴的に平面で表示し、材質も植栽などを主体に柔かみのある形で後期とのちがいを理解し易いものとする、というものであった。

この基本計画に基づき、1971年度より1975年度まで第1次環境整備事業が実施され、1976年3月には、奈良時代の後期難波宮大極殿・同後殿・軒廊の基壇復元、大極殿院回廊の遺構表示、大極殿前庭の整備や大極殿周辺の植栽など約9,000㎡の工事が竣工して一般に公開された。

1976年度からは、引き続き第2次環境整備事業が基本計画に沿ってすすめられることになった。

1979年7月に財団法人大阪市文化財協会が設立され、難波宮跡の調査研究面での充実をはかるとともに、1981年10月には、大阪市教育委員会教育長の諮問機関として難波宮跡整備計画委員会が設置され、前記の難波宮址顕彰会整備計画小委員会を引継いで基本構想の検討を行うことになった。そして難波宮跡整備計画委員会で検討された基本構想を具体化するために、下部機構として難波宮跡整備計画専門委員会が設置され、この両者の協力の下に整備事業が現在も進行中である〔大阪市教育委員会1978・1984・1987〕(巻頭カラー写真)。

4. 前期・後期難波宮の呼称について

1954年以来41年にわたる発掘調査の結果、現大阪市中央区法門坂1丁目、馬場町一帯の地に、ほぼ中軸線を同じくして前・後2時期の宮殿跡が発掘された。

一つは重圓文や蓮華・唐草文軒瓦など奈良時代の屋瓦を伴出すること、1尺=29.8cm前後のいわゆる天平尺が造営の基準尺となっているとみられること、奈良時代の平城宮の内裏や「第二次」大極殿院と規模や殿舎配置が近似することなどから、726年(神亀3)10月、聖武天皇が式部卿従三位藤原宇合を知造難波宮事に任命して造営に着手し、732年(天平4)ごろ造営が一段落した奈良時代の難波宮に当たると考えられる遺構である。

他の一つは、掘立柱穴の重複状況や出土層位からみて、奈良時代の難波宮よりも明らかに時期の古い遺構で、全て掘立柱建物で屋瓦を伴わないこと、造営尺が奈良時代のものより短い1尺=29.2cmが基準となっていることなどの古い建築様式を示している。こうした特徴に加えて、特に全面に火災の痕跡を残していることから『日本書紀』天武天皇朱鳥元年(686)正月条に「難波の大藏省失火し宮室悉く焚く」と記録される難波宮に比定できる遺構である。

そうしたことから、かつて前者を「聖武朝」難波宮、後者については天武朝には存在して

いたという意味で「天武朝」難波宮と呼んでいた。また、文献史料をもとに孝徳朝の難波長柄豊碕宮(大化元年～?)を第I期難波宮、天武朝の難波宮(?～朱鳥元年)を第II期難波宮、朱鳥元年の焼亡から神亀3年の再建開始までの難波宮を第III期難波宮、聖武朝難波宮(神亀3年～延暦3年)を第IV期難波宮として区別した。

しかし、その後の発掘調査の進展の結果、「天武朝」難波宮跡が同時に難波長柄豊碕宮の遺構である可能性が高まったこともあって、それまでの「天武朝」難波宮の呼称ではいろいろとまぎらわしい点やあいまいな点があって適切でなくなってきた。奈良時代の難波宮についても、その存続が桓武天皇の延暦3年(784)まで認められ、内裏正殿やその前殿などには少なくとも一度の造替が認められる以上、聖武朝に造営されたという意味での「聖武朝」難波宮の呼称も必ずしも適切と言えなくなった。

そこで、1970年10月に刊行された発掘調査報告書「難波宮址の研究」第6でそれまでの「天武朝」難波宮を前期難波宮、「聖武朝」難波宮を後期難波宮と呼称することを提唱し、以来その呼称が定着して現在に至っている[中尾1970]。

したがって第33～36次調査では旧呼称を、第37～39次調査では新旧呼称を並用して使用していたが、本報告書では、前期・後期難波宮の呼称で統一し、必要に応じて新旧呼称を並記することにした。

(中尾芳治)

第Ⅱ章 調査の経過と概要

後期難波宮大極殿院地域の発掘調査は、1969年3月より1973年2月にかけて実施され、合計5,603㎡を発掘調査した(Fig.3、Tab.1)。なお、発掘調査にあたっては難波宮跡の地区割(Fig.3、「難波宮址発掘地区割表示図(昭和34年現在)」「難波宮址の研究」第6)にしたがって大・中地区を決め、さらに一辺を3m四方に分割した小地区を設定して各調査に用いた。

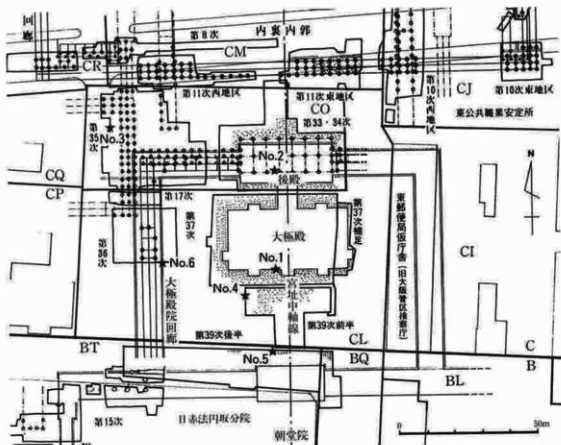


Fig.3 後期難波宮大極殿院地域発掘調査区と大・中地区割図
(No.1～No.6は柱状断面図位置 Fig.21)

Tab.1 後期難波宮大極殿院地域発掘調査一覧

	調査回数	調査面積	調査期間	現地説明会
1	33・34次調査	1,056㎡	1969年 3月 8日～1969年9月24日	1969年 9月 6日
2	35次調査	1,035㎡	1969年10月 1日～1970年3月31日	1969年12月20日
3	36次調査	429㎡	1970年 2月12日～1970年3月31日	
4	37次調査	1,463㎡	1970年 7月 1日～1971年3月31日	1970年12月19日
5	37次補足調査	165㎡	1972年12月20日～1973年2月 7日	
6	39次調査	1,455㎡	1971年 5月12日～1972年2月26日	1972年 3月24日
		計5,603㎡		

第1節 第33・34次調査(図面4.図版1～20)

1. 調査の目的

1961年春の第13次調査で、後期(聖武朝)難波宮大極殿と同後殿の東に取付く大極殿院回廊の一部が発見された[澤村仁1964]。1963年の第17次調査(CL地区)で大極殿院西回廊を調査し、大極殿院の規模が確認された[澤村1964・中尾芳治1970]。その後、国の第2合同庁舎建設の問題など曲折があったが、1964年5月、大極殿院と内裏正殿地域17,500㎡が史跡に指定された。そして、大阪市を事業主体者として、国の補助で環境整備が行われることになり、環境整備に先立ち、1969年春から、学術調査として発掘調査が行われることとなったのである。

そこで、第33・34次調査(註1)では大極殿後殿とそれに取付く回廊の規模・構造の確認を第1の目的とし、同時にそれと重なって存在することが予想される前期(天武朝)難波宮の内裏南面回廊と門の所在と規模・構造の確認を併せて行うこととした。

2. 調査の基本方針

この発掘調査は史跡整備を適切に行うために実施するもので、調査は遺跡を破壊しないことを基本の方針とした。したがって、前期難波宮の遺構より古い遺構については、あえて調査をしないこと、必要以上に遺構を掘りあげることを避けることも方針とした。

第33次調査では、第13次調査の時点で、建物があって調査できなかった行政監察局の跡地を中心に大極殿後殿跡の調査を行った。第13次調査地と重複する部分については、必要に応じて再発掘することにした。

3. 調査の経過

調査区域の設定 今回の発掘調査は第13次調査の結果を承けて実施した。後期の太極殿院回廊が梁間3.1m×2間の複廊であること、火災痕跡がある前期の遺構が柱間2.25m×4間の掘立柱建物の東妻と、その最も北とその次の柱跡の東約2.9mに掘立柱がある回廊が存在することが知られていた[澤村1964]。

そこで、効果的な調査を行うため、まずトレンチ調査を行い、その後全面調査を行うこととし、第13次調査区の西側に東西39m、南北18mで幅3mのトレンチを設定した(Fig.4)。**発掘調査の経過** 発掘調査は1969年3月8日からはじめた。翌9日から13日までは実測基準点の設置とトレンチの縄張りをおこない、14日から掘削にとりかかった。

その間、作業実施計画の策定を行うとともに、発掘調査方針を調査員・補助員など調査関係者の間で統一をとるための会議が行われた。奈良国立文化財研究所の澤村仁氏の指導により、大阪市教育委員会の事務担当係長も議論に加わり、3月14日の会議で方針を決定した。そこでの議論の要点は、調査の基本方針のとおりであるが、史跡整備に必要な資料が得られれば目的が達成かとの疑問もだされた。すなわち、学術調査としてどこまで掘るかという問題であった。そして、調査をどう進めるかの判断については、具体的な調査のなかで協議をして決定することとした。しかし、難波宮の遺構より下層の遺跡については、遺構の破壊を伴うような調査は実施しないことで合意をみた。

3月14日からの掘削は、人力で行った。翌15日には地表下0.6~1mで黄褐色の整地層の存在が認められ、遺構の保存状況が良いとの見通しを得た。しかし、難波宮跡一帯は第2次大戦時、陸軍第八連隊の敷地であったため各所に防空壕があり、遺構が破壊されていることもわかってきた。

17日から遺構の検出にとりかかると、すぐ防空壕の断面から前期難波宮の柱掘形とみられる遺構が検出されてきた。整地層が残っているところもあるが、後期難波宮の柱跡は発見されず、根石など後期の遺構面はすでに削平されていると判断された。

現地表面から遺構面までの土層の堆積状況を確認するためトレンチ壁面を観察し、土層の基本的堆積状況をⅠ=表土層(明治以降現代まで)、Ⅱ=中近世堆積層、Ⅲ=難波宮整地層、Ⅳ=黄白色砂層の地山に大別した。南北トレンチの後殿の北面中央階段の位置にあたるところで凝灰岩の破片が出土し、階段の痕跡かと期待させられた。

このようにトレンチ全面で検討を加えた結果、遺跡がよく残っていることを確認し、調

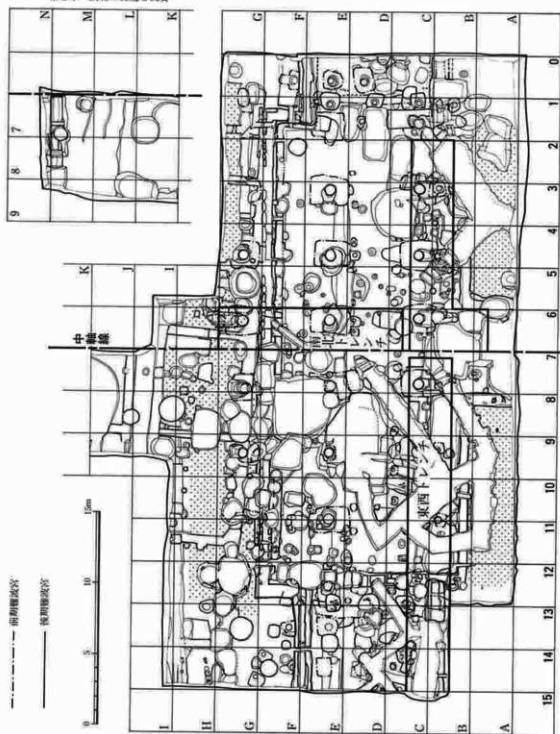


Fig.4 第33・34次調査(CO地区)地区別図

査範囲を広げることにした。そこで、再び調査方針について協議し、第13次調査地を含めて全面発掘を行うこととなった。調査範囲を中央区COのA～Gの0～12区に設定し、東西39m×南北21mの819m²とすることにした。

この時点で年度末をむかえたので、発掘次数はこれまでのトレンチ調査を第33次調査とし、以後の全面調査を第34次調査とすることにした。調査区の北東隅から全面発掘の掘削作業は開始した。トレンチ調査でおおよその層位関係が確認されているので、掘削には重機を使用した。4月3日に粗掘りを完了した。粗掘りののち調査区の全域で、遺構の上面に残された土砂を人力で除去した。約2週間を要して、4月18日この作業を終えたが、その過程でいくつかの問題点が見えてきた。粗掘りと残土処理の工程の中で得られた所見は次のとおりである。

- ① 調査区は東西で異なり、西半部は地山が露出しているが、東半部は地山が低く、その上に灰色粘土層(註2)や遺物を含んだ褐色の整地層や土壌積土が残っている。
- ② 後期大極殿後殿の周辺に小石敷が存在するが、防空壕など近代以降の攪乱が多いため、大極殿のように基壇の規模を小石敷の切れ目で検出することは困難である。
- ③ 防空壕などの攪乱壕の壁面に見られる掘立柱の柱穴には、焼土が入っており前期の建物と考えられた。
- ④ C10区で、攪乱の壁面に須恵器を伴う特殊な遺構の存在が確認された。
- ⑤ 小石敷の上に堆積する層から瓦器が検出され、難波宮廃絶後の堆積層が存在することがわかった。
- ⑥ 後殿基壇北側には雨落溝があるが、溝石は抜取られて存在しない。雨落溝の状況は溝石の抜取り跡の調査で復元する。
- ⑦ トレンチ調査のF6区で凝灰岩が現位置を留めて存在することがわかった。それは後殿の階段に関わるものではないかと考えられるので、全面調査では階段の存在とその構造を確認する。
- ⑧ 後殿の規模は基壇化粧の凝灰岩の抜取り跡の調査から復元することが必要である。

4月19日以降は、上記のような課題をもって全面的な発掘調査に取組むことになった。後期と前期の両期の遺構検出が課題であるが、まずは後期の後殿後殿から取りかかった。

同時に調査区の南半部に存在する第2次大戦時に掘られた防空壕の壁面を観察し、土層の堆積状況や柱掘形の確認を行った。

調査は地山上に堆積層が少なく、遺構検出が比較的容易な調査区の北西部から開始した。

基壇周辺に広がる小石敷の上面には瓦を包含する暗褐色の粘質土が堆積し、それを掘下げると基壇跡と小石敷の間の雨落溝の上には、土壌の崩壊土とみられる黄褐色粘質土が存在することが確認された。そこで、石敷上の堆積層と土壌崩壊土を去除し、溝側石の抜取り跡と溝の掘形、基壇化粧石の抜取り跡の確認を行うこととした。

精査の範囲は後殿基壇の北西部から西回廊の取付き部へと広げた。回廊の取付き部では柱跡が重複して検出された。焼壁・焼土を含んだ前期と考えられる柱穴を切った礎石抜き跡の埋土からは、瓦の小片や凝灰岩片が出土し、後殿に続く回廊の柱跡と考えられた。第13次調査で後期の大極殿院北面東回廊取付き部では掘立柱を確認しているのに、西回廊では掘立柱の跡が確認出来ず、疑問が残った。そこで、西回廊の柱跡の状況を把握することを目的に南側柱の位置を西へ2本分約6m(C13・14区)を拡張することになった。

調査は後殿基壇の南辺へと広げた。そこでも土層の堆積状況は、北側と同じく土壌積土が崩壊して基壇化粧石の抜取り跡上にかぶさる状況を明らかにした。小石敷上面に堆積するのは、難波宮廃絶後の瓦片を含む暗褐色粘質土であることがわかったので、瓦の堆積状況の実測と写真撮影を行い、瓦を取上げて小石敷面を検出した。北西隅の瓦堆積の中から後殿の降棟に使用されたと考えられる鬼板(6921)が検出された。

小石敷面の調査は後殿の南辺中央部から西でも同様に行った。南面の中軸線に近いA8区で南北方向に凝灰岩痕跡が認められ、その西側の小石敷の上面にも瓦が堆積しており、北面の状況と同様であることがわかった。そこから、東へ約6m離れたA5区でも凝灰岩痕跡が南北に続くことがわかった。凝灰岩痕跡は基壇化粧石の抜取り跡で、その間は太極殿と後殿を結ぶ軒廊と推定された。

調査区の西半分で旧地表面である小石敷の状況がつかめてきたので、後殿北面で凝灰岩溝石が抜かれた雨落溝埋土を掘り、溝の状態を確認する調査にとりかかった。埋土には瓦片や凝灰岩の細片が混入し、抜取り跡面には凝灰岩の粉末が付着し、溝に使用された底石・側石等のそれぞれの大きさが推定できる状態であった。ところが、F11区では基壇側の溝側石の抜取り跡が認められなかったため、階段に関わる施設があったのではないかとする考えが出された。

一方、後殿と軒廊が接続するB8区の地覆石の抜取り跡から、重園文系軒平瓦の隅瓦が出土した。瓦は小型の6572型式で軒廊のような小さな規模の建物に葺かれるのにふさわしいと思われた。建物の西北隅で出土した鬼板とともに、建物の屋根の構造を復元するための貴重な出土品である。

4月末に西へ拡張した枝トレンチで、遺構面が確認されたが、防空壕のため柱路の確認に手間どった。調査は東部へ広げ、北面では小石敷面と大極殿後殿の土壇と雨落溝の凝灰岩切り抜き跡を調査し、階段の痕跡確認など課題の追求を行った。北側の中央より東では、現代の建物のコンクリート基礎で雨落溝の上面が破壊されていたが、基礎の掘形の底で抜き跡がかろうじて残っていた。そして、雨落溝の構造はほぼ復元することができた。しかし、階段と関係があるのではと期待されていたF5・6区では基壇側の化粧石の抜き跡は明確でなかった。状態はF11・12区とよく似ているので、階段の痕跡である可能性は残るものの、明らかにそうと言える状況ではなく判断を保留した。

後殿南辺には雨落溝は存在しないが、凝灰岩の破片が混る基壇化粧石の抜き跡が存在した。調査は東部へ小石敷面を広げていったが、基壇の南辺は防空壕で破壊され、軒庇の取付き部から3mまでしか確認することが出来なかった。また、後殿から西へ拡張した枝トレンチでは回廊の南側雨落溝の抜き跡を掘上げた。

調査は5月の連休中も行い、後殿の状況がほぼ確認できる段階に達したが、後殿と回廊との取付き部については判断ができないうままで残された。第13次で調査した北面東回廊が後殿に取付く部分を再発掘し、回廊南の雨落溝から重圓文系の鬼板を検出した。この鬼板は後殿のものと予想されたが、大極殿の鬼板(6920)であることがわかった。

連休明けより、調査は後期の遺構から前期の掘立柱穴の確認へと移行した。東回廊のD0区とC10区で特殊遺構と考えた焼土面のある窓状の遺構の存在が確認された。第21次調査で検出した難波宮の建物とは方位を異にし、遺構面が焼けた南北方向の細長い遺構との関連が考えられた(註3)。しかしこれらの遺構は前期難波宮以前であるので、詳しい調査はあとにまわした。

以後の調査は前期の柱穴の確認と柱抜き穴の掘下げにも力を入れ、後期の基壇復元に必要な基壇化粧石の抜き跡の確認も継続した。B11ラインの東1mで凝灰岩の抜き痕跡から凝灰岩の据え方に違いがあることがわかった。北面でもよく似た状況があったので、階段施設との関係が注目された。

5月23日、今後の調査の進め方を、調査関係者で検討し、6月末で調査を完了することを目標とすることが決まった。そこで、遺構検出と併行して後期の遺構実測を行うこととし、調査区内に遺り方を設置した。

前期の掘立柱穴は後期の基壇南辺から1m北と中央、さらに北側の雨落溝の北の3列に存在することがわかった。柱の間隔は南北方向が約6m、東西方向が約4.5mで柱の直径は60～

75cmの巨大なものであり、発掘当初に想定した建物の規模とまったく異なることがわかってきた。柱穴からは焼壁や木炭片も出土するので、土の判別は比較的容易であったが、南側の柱は複雑に重複していたため、掘下げには困難がともなった。北側柱は後期の小石敷の下に存在しており、遺構を破壊しないで調査する方針のため、調査は一定の制約を受けることになった。

後期後殿の土境内では、焼土が混入した層が前期の柱穴の面を覆って存在するので、前期の柱穴はそれを取除かないと検出できなかった。そこで、厚さは5cm程度の土壇積土の残りと思われるその赤味を帯びた土を掘下げ、前期の柱位置を確認する調査を行った。土壇積土の残存状況は、基壇の北に約2mと南に約1m幅で東西に帯状に連続して存在した。したがって後期の土壇積土が前期の柱穴と重なるのは、中央列の北部と南の柱位置に並行する部分であった。土壇積土が残っていない南側柱列と中央柱列の間では、前期の柱穴に切られた掘形が存在した。また、南側柱列の柱掘形には北辺両隅の外方に、中央柱列には南辺両隅の外方に各1箇所ずつ径30～50cmほどの不定形の掘立柱穴が付属していた。この柱穴には焼壁は混入しておらず、建設時の足場穴と考えられた。北側柱に付属する足場穴は、後期後殿背面の雨落溝と重複していて発見できなかった。

前期建物の柱掘形の平面規模は、南北約250cm、東西約200cmと大きいですが、底部では柱が建てられる範囲だけが深く掘下げられ、掘形内に段がついていることがわかった。

この建物と東に取付く回廊の柱穴には、掘形内に一定の深さで敷きつめられたような状態で小石が入っているものがあることが発見された。また、4つの柱が重複するように見えた南側柱穴は、建物本体の柱とその抜取り穴と前期の主要建物に特徴的な小柱穴が重なり、その南に前期より古い柱穴が存在することがわかった。このように判断するまでには、長い時間を費やした。

6月1日、奈良国立文化財研究所澤村仁氏に、遺構の解釈と調査の進め方について指導を仰いだ。検討箇所は後殿の北雨落溝の凝灰岩抜取り跡からの復元と西につながる回廊との間の納まり方、さらに前期建物の性格とそれと前後する柱穴についての考え方であった。後殿北面の溝石の抜取り跡には2種類の痕跡が確認されたため、それらの解釈が2つ考えられた。1つは外観が同じで、溝石の設置方法に2通りあったとの考え方で、2つめは基壇が途中で修復されたのではないかと見る考え方であったが、1案の外観が同じで仕事の仕方に2通りあったと考えた方がよいとされた。

次に建物と回廊の取付き部分はその検出状況から、後殿の基壇化粧石を取除き、土壇の

積土が崩れ地覆石の上に堆積した後に、その上から地覆石を抜取ったもので、南北に存在する溝状の遺構は、後殿の基礎化粧石の抜取り跡であることがわかった。

前期の柱穴は3列であり、後殿の東西とはほぼ同じ幅の東西7間で南北2間の巨大な門と考えられた。この建物は北方の中央大通りの地下に存在する、内裏前殿SB1801の南に開く前期難波宮の内裏南門であることがわかった。さらにその南には第13次調査で大極殿下層に存在が予想された前期朝堂院正殿があるのではないかと推定された。そして、この時には解決できなかった、南側柱の小柱穴とそれより古い柱の関係について、詳しく調査するよう指導があった。

澤村氏の指導に従い、だめ押し調査や未確認部分の調査を続けた。前期門跡の東南隅の柱穴では、南側に存在する柱穴が門の柱より古いものであることがわかった。同様のことは、西の方の柱穴でも確認され、前期の門に重なって、それより古い建物があったことが推定された。

6月20日、南側柱と切合いのある北側と南側の柱穴とを掘下げたところ、北の柱穴からは焼土・木炭は検出できず、南の方からは少しではあるが焼土・木炭が出土した。南の柱穴は本体の建物と同時に焼けている小柱穴で、従来の所見と同様である。北の柱からは焼壁など焼けた痕跡が見つからないので、門とは同時に存在しなかったと見られた。柱穴を本格的に掘下げたところ、いくつかの柱穴から瓦の小片が出土した。数はごくわずかで、タタキメをスリ消しており、後期難波宮跡で出土するものより古い時期の瓦であると判断した。

6月16日から遺構の調査と並行して実測を行うため、遣り方を作り直した。調査の終了予定時期が近づいたが、前期の柱穴の掘下げや重複関係の確認に手間取り、調査は遅延した。そこへ6月下旬から梅雨末期の集中豪雨に見舞われ、7月10日頃までは、毎日のように排水作業の繰り返しが続いた。

調査が遅延するなかで、大極殿院北面向廊の柱跡が後殿の東西で異なること、前期の門と向廊の接続部に溝状遺構が南北に存在することなどがわかってきた。現在の調査区域では、調査が十分行えないため、北西部と北部へ調査区を拡張し、調査期間も延長することになった。拡張範囲は北方の後期難波宮内裏向廊に近づけるため、北は中軸線の西側7.5mを道路いっぱいまで。その他は5ラインより西に約4m、西は後期内裏の向廊の南側柱近くまでの約230mとなった。

そして、7月26日より重機を使って拡張区の掘削をはじめ、継続中の調査と並行して作業

を続けた。後期難波宮内裏回廊へ向けて行った拡張区では、期待された小石敷の残りはよくないが、部分的に乱された状態で小石敷の痕跡が認められた。またトレンチの北端では溝状遺構が検出され、後期の内裏回廊の南雨落溝ではないかと推定された。拡張した区域は掘乱土壌が多いが、その壁面には遺構が見つからず、内裏南門と内裏前殿の間は広場であったと考えられた。西回廊の拡張区では、後期の回廊の柱跡とみられる礎石を支える根石が検出された。すでに南側柱は礎石建ちであることがわかっている。東回廊の柱は掘立柱であることとの相違をどう解釈するかの課題が残った。

お盆の休みををさんで、8月も調査は思いのほか進まなかったが、8月21日から拡張区の実測のため遺り方を追加設置し、22日よりだめ押し調査と並行して実測を行った。

9月6日(土)には現地説明会を催した。また調査を保留していた焼けた面のある特殊遺構について調査を行った。須恵器の甕などの遺物が出土し、窯跡と推定されたので、地磁気測定を大阪大学の広岡公夫氏にお願いした。9月19日資料の採集を行い、この作業を最後として第33・34次調査を終了した。その後9月24日埋戻しを完了し、長期におよんだ発掘調査は終了した。

4. 遺構の概要

(1) 前期難波宮

内裏南門SB3301は桁行7間(4.67m 16尺)×梁行2間(6.13m 21尺)、総長は32.68m(112尺)×12.26m(42尺)の巨大な門である。柱の直径は、柱穴から60~75cmと推定される。

門の東西には複廊SC1301・SC3304が取付く。門の妻側の柱筋と回廊の南・北側柱筋の延長が交わる場所に、回廊の側柱と同規模の柱跡が存在している。門の妻柱と回廊の柱との柱間は、2.92mである。回廊の延長上の柱と門の妻柱との間隔は、西妻側では南北ともに2.35mで8尺である。門の妻側の柱は後殿の基壇抜取り跡と重複していたため、柱穴を掘下げていないが、柱の太さは回廊のものに近いと推定する。

内裏南門の南と北の柱筋の外側1.4mのところの本柱とは別に掘形の一边が80~100cmの小柱穴が存在する。隣の柱には外方3方向に同種の柱穴が付属している。本柱と小柱穴の距離は南・北の間隔と同じである。この小柱穴は内裏前殿や内裏後殿とそれをつなぐ軒廊などに存在し[中尾1970]、本柱を立てたあとに立てられているのが特徴で、柱穴からは焼壁や木炭が出土している。

なお、この遺構の中軸線は調査の設定中軸線と比べると東へ約20cmずれている。

溝状遺構SD3302・SD3303は門の東・西の妻側柱列と回廊との間に、幅50～80cmの素掘りの溝状遺構が南北方向に存在する。門の東の溝状SD3302は延長が約7m、西の溝状SD3303は約8mが残っている。雨落溝ではなく、基壇の施設とみられる〔澤村1964〕。

内裏南面東回廊SC1301は内裏南門SB3301に取付く回廊で、取付き部1間分を検出しているだけである。回廊は梁行2.40m(約8尺:1尺=29.2cm)の2間で桁行2.92m(10尺)の複廊と推測される。柱の径は約45cmで、中央柱の底には柱の不等沈下を防ぐため木の礎板が据えられていた。北側柱には本柱に接して小柱穴が付属した可能性がある。

内裏南面西回廊SC3304は内裏南門SB3301の西に取付く回廊で門との取付き部を含めて2間分が調査された。柱間は東回廊と同じで、梁行は2.40m×2間、桁行は2.92mである。柱穴が確認されたものは径が約45cmである。東回廊SC1301と同様に北側柱に小柱穴が付属する。

(2) 後期難波宮

大極殿後殿SB1326が基壇化粧石の抜取り跡から復元できる規模は、東西は約32.5m、南北は約13.7mである。1尺=29.58cmの復元尺(第V章第5節)で東西110尺、南北46.5尺と復元される。溝の抜取り跡等から凝灰岩の破片が検出され、抜取り跡面にも凝灰岩の痕跡が認められるので、基壇は壇正積基壇であったと復元される。残存している土壇の高さは後殿周囲の旧地表面の小石敷から約25cmであった。したがって、後殿の柱跡はすでに削りとられて残っていなかった。掘立柱の痕跡もないので、礎石建物と考えられる。

背面の基壇化粧石の抜取り跡から後方に約20cm幅で裏込めの土が認められた。そこから約60cmをおいて約2mの幅で焼土や木炭が混じった土壇の積土が約5cmの厚さで残っていた。同様の積土は土壇の南部では、幅1mで東西に約10mが残っているだけで、土壇積土の詳細な状況はわからない。また、積土の下層には造営前の包含層が認められるところもあった。

後殿基壇の南面中央は幅6mの軒廊で大極殿とつながる。後殿の前面には地覆石の抜取り跡が、50cmの幅で溝状に残る。背面では雨落溝が伴っていたが、地覆石を含め溝の側石や底石はすべて抜取られていた。抜取り跡は約150cmの幅で、外側から溝の北側石・底石・南側石・地覆石が約20cm・50cm・25cm・55cmで段をなして残っていた。抜取り跡の黒土は暗紫色粘質土で瓦片が含まれ、地覆石や溝石は難波宮の廃絶と同時に抜取られ、長岡京へ運ばれたのであろう。

後殿の前面と背面には、階段が設けられていたはずである。調査の段階では、階段の痕跡らしい部分が散見されたが、確実な遺構としては確認することができなかった。しかし、建物の周囲は直径5cm程度の小石が全面にあるので、大極殿のように階段が基壇の外側に付いておれ

ば、小石敷の状況から復元が可能であったが、後殿にはそのような痕跡は存在しなかった。

後殿の妻端には背面雨落溝の抜き取り跡より約20cm内側に幅1.3mの基礎化粧石の抜き取り跡が存在した(Fig29)。

軒廊SC3321は幅6mで後殿と大極殿とをつなぐ軒廊である。礎石痕跡が残っておらず、柱位置を確認することはできない。軒廊には幅約70cmの溝状の地覆石の抜き取り跡が存在する。地覆石の抜き取り跡の埋土の中からは小型の重圈文系の鬼瓦(6922)や重圈文系の軒隅平瓦(6572F)が出土している。

大極殿院北面東回廊SC1323は第13次調査の再発掘で、後殿との取付き部5mの範囲で調査した。南と北に雨落溝が付き、回廊幅は溝の心々で9.45mを測る。回廊の柱跡は梁間3.1mで2間の掘立柱が3箇所で見出された。ところが後殿や西回廊は礎石建物である。一部に礎石の痕跡と思える遺構が存在している。検出された柱跡から調査区の端までは3.5mなので、次の柱跡が見出されるはずであるが、礎石・掘立柱ともに発見されなかった。柱間を広げた施設を考えるべきか。

南側の雨落溝は第13次調査で凝灰岩切石の溝石が1式発見されている(Fig4)。検出され

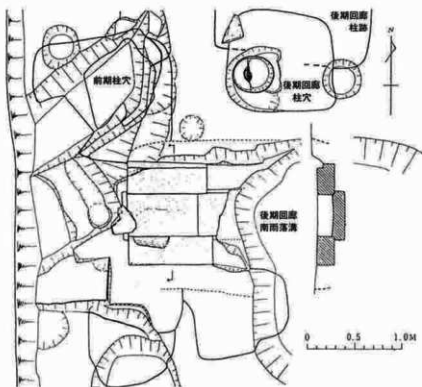


Fig.5 大極殿後殿東側の回廊取付き部(『熊波宮址の研究』第5-1 1964年から)

た溝石は後殿の取付き部で行止まりになっている[澤村1964]。北側ではすべてが抜取られていたが、鍵の手に曲がって後殿の背面に続いている。

大極殿院北面西回廊SB3324は南と北に雨落溝をもつ回廊で、溝心々で約9.3～9.4mを測る。土壇はわずかに残るだけであるが、ここでは6個所の柱跡が検出された。礎石の根石が残っているものがあり、西回廊は礎石建ちと考えられる。3本目の柱痕跡は検出されないが、梁間は約2.4mの8尺で、桁行は約3mの10尺に復元される。

(3) その他の遺構

柱跡SZ3341は前期難波宮内裏南門の柱跡に切られた南北の方位を持つ柱跡である。門SB3301の柱穴に切られて北側柱の南・中央柱の南・南側柱の北に存在する。柱跡が検出される範囲は門の東西方1.4mまでに限られる。柱跡は1辺約70cmの大きさで、柱穴が検出されたものは径20～30cmを測る。柱跡の間隔は約4mと約3mであるが、おのおのの柱跡に関連性があるのか、独立しているのか見当がつかない。切合い関係から、内裏南門の以前と解釈した。

構SA3342は西回廊の北方で北で西へ60°振った掘立柱が4本検出されたもので、掘形の大きさは1辺が90～100cmで、柱跡は25～30cmの規模の大きな建物である。柱間は約1.7mで古い様相を示す。

窯状遺構SX3381は調査区の南西C9・10区で出土した5世紀代の窯状の遺構で、東西は約2.6m、南北は約4.3mで薄いレンズ状の断面をもつ遺構である。遺構の北と南は後世の掘乱で壊されている。床面は火を受け、埋土内に須恵器片が残っていた。地磁気の測定による年代観は5世紀後半であるとの報告が岡岡氏からあった。(長山雅一)

註)

- (1) 同一調査に2回の調査回数がついているのは事務手続き上の問題である。1969年3月から3月末の年度末までを第33次、4月以降を第34次と呼んだ。しかし、連続して発掘調査を行ったため、まとめて報告書を作成した。したがってこの調査で検出された遺構の番号はすべて33ではじめた。
- (2) 土層名は当時のものをそのまま本報告で用いた。
- (3) D0区の遺構からは遺物は出土していない。第21次調査時には遺構の性格が判断できなかったが、報告書では今回の調査の結果を参考に窯跡と報告している[中尾1970]。

第2節 第35次調査（図面5、図版21～28）

1. 調査の目的

環境整備に先立つ第35次調査は次の目的で行われた。後期（聖武朝）難波宮については、第33・34次調査を承けて大極殿院北面回廊の規模や構造を明らかにするとともに大極殿院の北西隅を確認し、第15次・第17次調査〔澤村仁1964・中尾芳治1970〕の成果と合わせて後期難波宮大極殿院の規模を明確にすることである。前期（天武朝）難波宮については内裏の南西部にあたり、内裏南門から西の内裏南面回廊と第8次・第9次調査〔藤原光輝1960〕で検出した内裏西面回廊との接合、さらにこれら内裏回廊と朝堂院西面回廊（第22次・第23次・第25次調査〔澤村1966・大阪市教育委員会1967〕）との接続を明らかにし、各回廊についての資料を得ることである。また第8次・第11次調査〔澤村1961〕で判明している内裏西長殿の南半部を検出し、その規模を明らかにする課題もある。

2. 調査の経過

調査区域の設定 調査箇所は行政監察局跡地である。調査区は前期・後期難波宮の東西回廊が重複していると推定される敷地南半部に、第34次調査地から6mを空けて敷地西端までの約33mに南北約15mの東西区を、また前期難波宮内裏西回廊が予想される敷地西端に幅約9～10mで南北約33mの南北区を定めて両者をつなぎL字状に設定した（Fig.6）。また前期内裏西長殿調査のために回廊調査区の東北に小L字状のトレンチを設けた。そして重機による掘削開始後、地層の状態が良好であったので両トレンチをつないで800㎡余の1つの調査区とした。

実測基準点は第33・34次調査基準点からJ26に移し、大・中地区はCO、3m方眼の小地区も第33・34次調査と同じ基準でA～L17～28区を設定した。

調査の方針 10月1日に粗掘りを始め、残土処理・遺構検出と作業を進めて遺構の状態をみた上で、10月10日に調査の次のような方針を調査員会議で確認した。

- ① 調査地を4区に分けて進める。各区と班の担当者は、Ⅰ区 北西部：前期内裏西回廊（吉本堯俊）、Ⅱ区 北東部：前期内裏西長殿（中尾芳治）、Ⅲ区 南西部：前期内裏回廊南西隅・後期大極殿回廊北西隅（長山雅一）、Ⅳ区 南東部：前期内裏南回廊、後期大極殿院北面回廊（八木久栄）である。

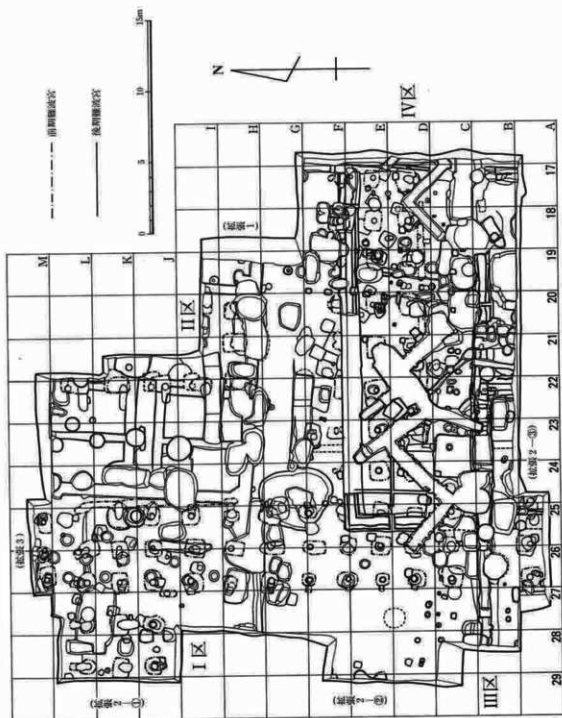


Fig.6 第35次調査(CO地区)地区別図

- ② 遺構の調査は保存を考慮した上で、どこまでやるか話合って進める。例えば掘立柱の場合、柱穴を全て掘抜くのではなく柱間寸法を知るのに必要な所に限定するとか、後期回廊の雨落溝は構造がわかれば部分的な検出にとどめるなどである。
- ③ 遺構は少なくとも前期・後期が重複しており、残土処理が終わればできるだけ早く遣り方をつくり、各段階で実測をして進められるようにしておく。

なお、事務所の整理整頓や見学者の対応のために日曜日も交代で出勤する。

調査の進行 調査地の北西隅から残土処理・遺構検出を進めると同時に、調査地の西壁・北壁の断面土層を調べて実測した。北壁では表土層下に暗褐色土層・茶褐色土層があり、一部には薄い褐色～暗褐色粘質土層があって、地表下80～120cmで地山となる。難波宮の遺構は地山を切込んでいることがわかる。

4 班編成で10月前半は遺構検出、後半にはⅠ・Ⅱ区で精査を始めた。

後期難波宮の回廊はF・Gラインにある北雨落溝が25区で南折して北西出隅が明らかになったが、Bラインの南雨落溝はB22区北西入隅から南折するものと西回廊を横断して西側の雨落溝と交差して28区の調査区西壁まで続くものが確認できた。調査地東端には後期回廊に直交する南北溝もあった。

前期難波宮内裏南面回廊は掘立柱跡が3列に検出されるが、D～F26区に柱穴はみつからず、南面回廊は南折して朝堂院につながる可能性が強くなる。



Fig.7 第35次調査Ⅰ・Ⅱ区遺構検出

Ⅱ区の内裏西長殿はH～L22区で西側柱が従来同様建替えた状態でみつき、G22区にはみつからないのでH22区が西長殿の南端と考え、10月16日にG～I19～21区の7×6mを拡張し、妻柱と東南隅柱を確認した(拡張1)。西長殿の柱穴はこれまでの調査と同様に第1次建物の柱掘形と、第1次の柱抜取り穴があり、それを拡張して南に約1m寄せて建てた第2次の柱穴と、焼壁の混入した第2次の柱抜取り穴とが重複している。切合い関係を明らかにし、各々の埋土を数cm掘下げてわかりやすくした。西長殿は第11次調査成果と東長殿とから計算して第1次建物は16間、第2次建物は11間であることがわかった。

11月にはいとⅡ区に遣り方をつくり、前期西長殿とその周辺の実測をした。Ⅲ・Ⅳ区

の前期と後期の回廊が重複している所は遺構検出に難渋していたが、11月4日にD・E20区で前期と後期の回廊柱跡が重複しているのがわかってからは作業が比較的順調に進んだ。後期回廊の柱跡は一辺が80～120cm位の隅丸方形に近く、埋土には瓦や河原石が入っている。柱跡はⅣ区の一部に残っているだけであるが、回廊は礎石建物で柱間寸法は桁行約3.75m、梁行約2.4m×2間とみられた。回廊隅部では焼土や焼壁のはいった薄層が前期掘立柱の上を覆っていた。東西回廊の北雨落溝から約3mの間には帯状に瓦の散布がみられ、F・G24・25区には瓦を包含する土壌があり、これらは出土高を測って掘りあげた。

前期南面回廊は中央柱と南側柱・南雨落溝が後期回廊の基壇と同位置にあり、北側柱は後期回廊の北雨落溝によって切られている。また、Ⅲ・Ⅳ区には難波宮に先行する方位の異なる掘立柱列もいくつかあることがわかってきた。

前期難波宮の南北回廊の柱穴は、精査によって明らかにされていくと同時にいくつかの疑問点も出てきた。①南北回廊の西側柱の外方には小柱穴が付き、東側柱に小柱穴は存在するが、L25・26区の柱穴の北側にも同様の小柱穴があるのはなぜか。②側柱穴と小柱穴の切合い関係は、側柱掘形を切って小柱穴の掘形が掘られる。双方の抜き取り穴には焼壁が混入している。側柱の抜き取り穴は外側から小柱穴の掘形・柱穴を切っているの、抜き取り穴の精査や掘下げる段階で小柱穴を見つけることが多い。側柱と小柱穴との関係はこれでのいか。③L25区では東側柱穴が見つからないのはなぜか。④南北回廊の柱間距離を略測すると梁間は約2.4mで、内裏南面回廊と接合するD・F25・26区では桁行も約2.4mで真隅になる。それより北5間の桁行は2.7～2.8mであるが、J・L25・26区ではまた約2.4mの真隅になることがわかった。Lラインには東側柱がないこと、中央柱と西側柱には北側に小柱穴が付くことと合わせて何か理由があるのではないか。⑤東側柱の東方I～L24区には南北方向の溝があり、L25区の東側柱の見つからないところで西に湾曲して終わるのはなぜかなどである。

回廊柱穴は抜き取り穴の平面形から柱位置がほぼわかるものも多く、抜き取り穴を底まで掘るのは原則として内裏西面回廊の西側柱と、真隅になる接合部の柱、内裏南面回廊の中央柱とに決める。

11月8日、13日には奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部第1調査室長澤村仁氏が来訪され、遺構の検討をされた後、調査についてご指導を受けた。調査地南壁の土層を掃除し写真撮影後実測する。(11月18日終了)

I区は遣り方をつくり11月26日から12月6日まで実測。11月28日に打合せをし、12月20日

(土)に現地説明会をすること、年内に全景の写真撮影を行い、実測を終了させること等を決める。

12月3日、澤村氏に指摘されていた事項のうち、前期回廊の柱間が真隅になるJ・L27・28区①と、D～F28区②の2個所に西行する回廊が存在するかどうか、また南行する回廊B・C25・26区では後期回廊と重複したり防空壕で攪乱されているために柱跡がよくわからないので、複廊かどうかを確認するためにA25・26区③の3個所を拡張した(拡張2)。遺構の検出・精査により、①J・L27・28区では西行する複廊2間分の柱穴を検出した。柱桁行は2.8～2.9mで、北側柱の北には小柱穴がある。②D～F27・28区に回廊の柱は続かず、内裏西回廊と南回廊はト状につながり、③A25・26区では3個の柱跡が並ぶので南行するのは複廊であることがわかった。

かつて、第35次調査のすぐ南に当る第17次CL地区出土の掘立柱回廊について、第13次大極殿後殿東取付き部の柱が掘立柱であり聖武朝大極殿院西回廊と考えられていたが[中尾1970]、第33～35次調査で大極殿院北面西回廊は礎石建物であること、また、宮中軸線から西回廊中央柱までの距離は前期では約57m、後期では50m余であり、第17次調査で検出した柱列は約56.7mであるから第17次CL地区検出の回廊は後期ではなく前期難波宮であることがわかった。

後期難波宮回廊の雨落溝や柱跡も調査が進んだので12月初めに写真撮影を行い、Ⅲ・Ⅳ区の雨落溝の溝石抜き取り跡埋土を掘りはじめる。回廊雨落溝はⅢ区ではE・F25区出隅から西雨落溝を、Ⅳ区はE・F17～20区の間を掘り、E・F20～24区の約12mはこのまま保存することにする。溝埋土は暗褐色粘質土で、上部に多い瓦片を取り上げ、下面は凝灰岩片の付着した面を探して掘り進めた。

12月15日、前期西面回廊について第12次調査との関係を見るために、12月10日中央大通り歩道際の補助電柱を支柱線に替えて、M25・26区を拡張する(拡張3)。12月にはいると現地説明会の準備も始めた。

12月20日(土)午後現地説明会。第35次調査の成果について南大江小学校講堂で説明した後、現地見学を行う。夕方からは山根先生・調査員が、市政記者クラブで第35次調査について発表した。

12月には現地説明会の準備と並行して遺構精査を進めていたが、浅野清先生(大阪市立大学工学部教授)はじめ福山敏男先生(京都大学工学部教授)、中山修一先生(西京商業高等学校教諭)、奈良国立文化財研究所から坪井清足次長、伊藤延男室長、澤村仁室長が来られ



Fig.8 現地説明会における山根先生の講演

て、ご指導・ご助言を得ることができた。

Ⅳ区とⅠ区拡張区の遣り方をつくり、12月25日から実測をはじめた。12月27日には高所からの撮影のためにシュノーケル車の出動を依頼して全景写真と、遺構各部分の写真撮影を行う。実測は予定より遅れて年内には終らず、寒さが厳しいので遺構を筵で覆い、28日から31日は日直を置いて年を越すことにする。

1月に入りⅠ・Ⅳ区は実測を続行し、Ⅲ区も遣り方をつくり9日から実測をはじめた。一方でⅢ・Ⅳ区は後期北面西回廊雨落溝の溝石抜き取り跡の埋土を掘る。F17区の南北溝と回廊との関係は上層の攪乱のためわからない。回廊南側の雨落溝も攪乱が多い。B22・23区の西面回廊基壇上に溝の凝灰岩底石が1枚と数枚分へだてて西に3枚並列して原位置に残っていた。南基壇上にある溝は雨落溝よりも約15cm低くなり暗渠である。基壇を抜けた西外方B26～28区の溝は、幅70～80cmでU字形をした溝になる。入隅から折れて南行する雨落溝はB22区、中軸線から約46m西にあたり、暗渠とT字状に交わる所は溝石抜き取り跡が複雑である。

Ⅲ・Ⅳ区の実測は2月初旬までかかり、それと並行して1月28日からは補足調査に入った。おもな箇所は、①Ⅰ区北拡張区の前期回廊は、柱間寸法が北方の第8次調査と今回出土している所とは合わないの、拡張したM25・26区の柱穴を3本とも掘って確かめる。②福山先生のご教示により、前期回廊について、柱の太さと根入れの深さによって各柱にかかる重量および、回廊の構造を知る手がかりとして、Gライン25・26区の3本の柱抜き取り穴を掘って柱穴の深さを確認する。③Ⅳ区E・F17・18区で、後期回廊と重複する前期回廊北側柱穴の検出と、後期回廊と南北溝の切合い関係の確認。④Ⅳ区前期回廊の柱穴と溝、

後期回廊柱穴が重複した所D18～24区の切合い関係の確認。⑤F21～23区の宮と方位の異なる掘立柱の検出である。

I区北拉張区では前期回廊の梁間が約2.05mと、南より約30cm短くなって第8次・第9次調査の梁間と合った。補足の続きとして、IV区内裏南回廊では中央柱列で桁行を、D～F18区で梁行の柱間寸法を確認するために柱抜取り穴を掘ることにした。

2月20日には、後期難波宮回廊について検討し、雨落溝の調査が現状では不十分なので見直しをすることになった。2月25日には写真撮影をし、調査は月末に終わる予定であったが、2月下旬は雨天が続き、3月第1週は人手不足のために現場作業を一時中断し、3月17日の写真撮影も再度雨で延期となった。ようやく3月28日に第36次調査と一緒にシュノーケル車からの全景写真を、29・30両日は部分写真を撮り、その間にだめ押し調査もして、30日からは保護砂を入れ発掘調査終了にこぎつけることができた。

3. 遺構の概要

(1) 前期難波宮

前期難波宮の内裏南西部の回廊と西長殿を検出した。前期難波宮はすべて掘立柱建物で、柱抜取り穴には焼壁などが混入して火災に遭った痕跡がある。

第33・34次調査で明らかになった内裏南門SB3301とそれに取付く複廊の内裏南面西回廊SC3304は、西進して中軸線から西約57mで複廊の南北回廊と接続する。この南北回廊は当初内裏西面回廊と考えられたが、柱間距離の違いや北方で西行する複廊が接続するなど複雑な様相を示している。検討した結果、南北回廊は北の内裏回廊SC803に西八角殿院東面回廊SC3501(註1)と同北面回廊SC3504が接続し、西八角殿院東面回廊が内裏西面回廊を兼ねて内裏南面西回廊とト字状に交わっていることがわかった。

内裏南面西回廊SC3304は内裏南門に取付く柱から南北回廊の東側柱まで桁行13間、梁行2間である。柱間距離は桁行2.92m(10尺)の等間、梁間2.34m(8尺)である。南北回廊と接続する個所の柱間は2.34m(8尺)の真隅になる。中央柱の柱痕跡は直径30cm強ある。北側柱と南側柱の外方には小柱穴が付属している。南側柱から約1m南には幅0.5m前後の浅い東西溝SD3502が断続的に残っていて、埋土には焼壁が混入している。

内裏西面回廊SC803は第8次・第9次調査で存在が明らかになっているが、桁行2.92m(10尺)・梁間2.05m(8尺)1間分を検出している。

西八角殿院東面回廊SC3501は内裏南面西回廊と接続個所から北へは、内々5間までの柱

間距離は桁行約2.76m(9.45尺)・梁間2.34mで、6・7間目は桁行が2.34m(8尺)で梁間と同じになり、7間目の東側柱に当たる所に掘立柱は検出されていない。接続箇所から南へは、今回の調査で3間分確認しているが、第17次調査(CL地区)の柱跡に繋がるので、あわせて5間まで確認したことになる。

回廊の東側柱・西側柱からそれぞれ0.5m外方には小柱穴が付いている。東側柱から約1m東の内庭側には幅0.5m前後の浅い溝SD3503が約11.5mにわたって残っている。この溝は八角殿東面回廊と内裏西面回廊に接続し、梁間が8尺から7尺に変わる所で0.4m西へ湾曲した後消失している。溝底(掘形)は北端よりも南端が約20cm低くなっている。東側柱と小柱穴と溝との関係は、東側柱と溝の切合いはみられず、小柱穴掘形が東側柱掘形と溝を切っている。従って東側柱・溝・小柱穴の順に工事が行われたことは推測できるが、解体時の良好な資料は得られなかった。

内裏南面回廊中央柱から北へ約18.4mの7間目の柱を中央柱として、枝分れをして西行する複廊・西八角殿北面回廊SC3504の2間分を調査した。回廊の柱間距離は桁行が2.92m(10尺)・梁間は2.34m(8尺)である。北側柱の外方には小柱穴があり、東面回廊上の西側柱と中央柱にも付いている。南側の小柱穴は入隅の本柱から約1.3m南西に1箇所あるが、ほかでは確認できなかった。

前期難波宮の内裏前殿には前面脇に東長殿と西長殿SB1101(第1次)・SB1102(第2次)を配している。西長殿は第8次・第12次西地区調査[藤原光輝1960・澤村仁1961]で北半の一部を検出しており、今回南端の4間分を明らかにした(図面2)。第10次西地区の東長殿の結果[澤村1961]と合わせてみると、東・西長殿は建替えがあり、第1次SB1101は桁行16間で梁行2間の長い南北棟で、北から5間目に間仕切りがある。第2次の建物SB1102は間仕切りから南の11間で、柱位置は初めの掘立柱抜き穴を拡大して約1m(3.5尺)南に移している。再建した建物の柱抜き穴に焼壁が混入して被災していることがわかる。西長殿の柱間距離は第1次・第2次とも桁行約2.92m(10尺)・梁間約2.8m(9.6尺)である。西長殿は東側柱が中軸線から約40m西にあり、内裏南門から8間目の南面回廊と柱筋がほぼ揃う。SB1101南妻柱は南面回廊中央柱から約10.1m、SB1102のそれは約9.1m北にある。

前期難波宮の遺構は現在使われている後期難波宮中軸線に対して北で西に少し振れている。内裏西面回廊・西八角殿東回廊では発掘した南北約30m間で約10cmの振れがみられ、南面回廊や西長殿でも同様の傾向が認められる。

(2)後期難波宮北面西回廊

後期難波宮大極殿院の北面西回廊SC3324は礎石建物の複廊で、北と南の雨落溝を伴って後殿から西行し、北雨落溝SD3326は中軸線から西55.20mで、南雨落溝SD3325は西45.85mで南折する。

回廊は前期難波宮内裏南回廊と重複しているが、後期北面北回廊SC3324の基壇築成は、まず地山まで削平して北と南に雨落溝を掘下げ、外方の地表は土壇よりもさらに削平している。土壇は後世に削平されており、柱跡は北面西回廊の中央部に掘形と礎石抜き跡の底部が7箇所検出されている。雨落溝は凝灰岩切石づくりで、凝灰岩の抜き跡は段掘りで埋土には多くの瓦片と凝灰岩片が混入していた。

回廊の柱間距離は当初後殿取付きの柱から桁行3.75m(12.5尺)・梁間2.40m(8尺)の等間と考えていたが、この復元では北西隅になると南北柱列の東側柱と東雨落溝との距離が1.95m、西側柱と西雨落溝との間が2.6mとなり、雨落溝との間隔が合わない。そこで西面回廊の東と西の雨落溝の中央を中央柱位置と仮定し、梁間も2.40mよりも広いので復元をやり直した。すると北西隅の中央柱は中軸線から西50.525mに比定され、北面西回廊は東西が約38.7mあって桁行は10間、柱間距離は桁行3.77mに割付けることができる(註2)。梁間は本報告第V章第5節の1尺=29.58cmとすると、2.51m(8.5尺)×2間である。回廊の幅は雨落溝の心々間が9.35m(31.5尺)である。

西面回廊SC3524は真隅の北西入隅柱から1本南の東側柱跡が1箇所出土している。柱跡の北には北面西回廊南雨落溝から西行して西回廊を横切る溝SD3521がある。溝は凝灰岩切石の底石が4枚原位置にあり、仕口から溝の内法は53～54cmで雨落溝部分より大きくなり、底面は雨落溝より約15cm低い。この部分の溝は暗渠となり、西雨落溝と交差して回廊西方では幅の狭い溝SD3522となって西行する。

北面西回廊から西面回廊にかけて足場穴SS3527がある。足場穴は基壇上と雨落溝の外方にあって、基壇上では回廊柱の中間にあり、回廊外では基壇上の足場穴の延長上で雨落溝の外1～1.5mの所に並ぶ。回廊出隅には出隅外方のほか2・3の補強用の足場穴もみられる。北面西回廊外にある足場穴は、北側が前期難波宮回廊の北側柱および小柱穴と重複して見分けが難しく、南側は後世の攪乱が多くて見つからない。回廊の西側に並ぶ足場穴には瓦片が混入しており回廊解体時のものであろう。

調査地区東端にある南北溝SD3581は東肩が調査区外で、その上後世の複数の溝に切られて部分的にしか残っていない。埋土からは重圈文軒丸瓦・新型式唐草文軒平瓦(6673)が出土するので後期難波宮の可能性もあったが、北面回廊と交差した溝底が回廊雨落溝とほぼ

同じ深さで暗渠にはならず、回廊と同時に存在したとは考えられず、それ以降の溝である。

(3) その他の遺構

前期・後期難波宮の遺構のほかに、難波宮と方位の異なるいわゆる難波宮下層遺跡と、単独で年代・性格のわからない柱穴などがある。

難波宮下層遺跡では欄が2列、建物が2棟ある。欄はSA3541、SA3542で、東で南に約21°振れ、柱間距離は約1.9mで7間分が南北に1.9m離れて2列みつがっている。一つの建物となる可能性もある。建物SB3543は欄SA3541に切られた大きな掘形をもつ建物で、北側の柱列は3間で約6.7mある。約7.3m南に同様の掘形が4個あり、その間に柱はみつがっていないが一応建物としておきたい。調査地の北西にある建物SB3544は桁行約2.5mで4間分、梁間約5mで妻柱はみつがっていない。北で東に約20°振れている。SD3545はB-F23区にある幅50cmほどの南北方向の溝である。ほぼ難波宮の方位なので、前期難波宮に属する可能性もある。

(八木久栄)

註)

- (1) 内裏南面西回廊SC3302と接続する南北回廊SC3501は、調査時点では内裏西面回廊と考えていた。しかしその後の第36次・第42次調査によって内裏南門の西方に八角殿院の一郭が存在することが明らかになった。八角殿院の呼称は1972年第42次調査以降に採られたものである。その後NW87-54次調査では、内裏南門の東方でも八角殿院が確認された。従って本報告に関わるものを、西八角殿院とし、東方の東八角殿院とは区別することにした。南北回廊SC3501は西八角殿院東面回廊、北方で西行する回廊SC3504は同北面回廊である。また、E-F28・29区の西拉張区隙際にその一部が検出されていた2箇所の柱掘形が、西八角形建物の外周柱であることも第42次調査で明らかになった。
- (2) 北面西回廊の柱位置、桁行・梁間については、回廊東端から2本目の柱跡と考えられる2箇所のうち東寄りをとって桁行を3mとするか西側をとって3.77mとするか、今回は後者を採用したが第34次調査と第35次調査の未掘部分6mの柱跡の確認が必要であろう。

第3節 第36次調査（図面6、図版29～32）

1. 調査の目的

第36次調査は環境整備事業に伴う発掘調査として第33・34次調査、第35次調査の後を承け、後期（聖武朝）難波宮大極殿の真西で大極殿院西回廊を調査した。この箇所を調査地を選んだ理由は、西面回廊のこの部分に門または戸口の施設があれば、それが確認できると考えたからである。さらに、第33・34次、第35次調査で検出した前期（天武朝）難波宮跡の内裏南門に取付く内裏南面西回廊SC3304が、門の跡から中央柱まで14間で南北方向の回廊SC3501と接続しているのを、それと朝堂院西回廊とがどのように接続するのか、その途中の形態・構造を知ることにも目的とした調査であった。

2. 調査の経過

調査区域の設定 調査箇所は近畿矯正管区研修所が立退いた跡地で、上記の目的に合うよう場所を選んだ。そして、大極殿院回廊に門または戸口の施設があれば、その延長上に通路が存在するはずなので、それをできるだけ確実に把握したいとの理由で、東西幅を21mにとり、南北は大極殿の南北中心線から9mずつの18mで、面積は当初約378㎡に設定した。

調査の方針 第33・34次調査で述べたように、史跡整備の事前調査として実施するもので、遺跡の破壊や難波宮以前の遺構調査は極力避けることとした。

調査の経過 第35次調査と並行して1970年2月12日から調査区の縄張りを行い、翌13日に調査地の現状写真を撮影し、14日から重機による掘削をはじめた。粗掘りは2日で終え、16日からは人力による残土処理にかかった。3月2日には遺構が検出されてきた。

3日には前期難波宮の回廊は南進せず、調査区の西北部で西へ折曲がることがわかった。そして、5日には回廊の屈折部の掘立柱穴に前期の建物の特徴である小柱穴が付属していることがわかった。調査区の中央に南北に通る後期の回廊跡には、埋土に瓦を含んだ溝が付属し、大極殿後殿や大極殿院北回廊と同様に雨落溝の石が抜かれていることもわかった。

そして、回廊の基壇上では、後期の柱跡と考えられる礎石を支える根石の抜き取り穴が認められた。

また調査区の南辺で幅約50cm・深さ約10cmの溝1条が東西に存在した。この溝を切って、南北回廊の溝がつくられているので、前期の遺跡かとみられた。

そこで、第33・34次、第35次と同じ手法で溝と柱跡の検出を行い、さらに、前期回廊の柱抜取り穴を掘上げ、実測・写真撮影ののち、埋戻しを行い、3月31日調査を完了した。

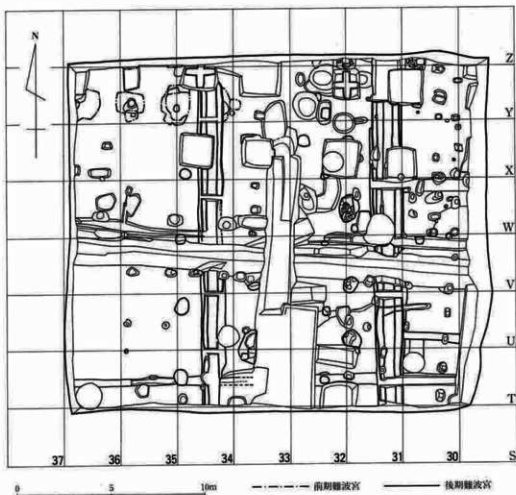


Fig.9: 第36次調査(CL地区)地区割図

3. 遺構の概要

(1) 前期難波宮

第36次の調査区における前期の遺構は、調査区北西隅で検出された6個所の掘立柱跡である。壁際に2個所、その南に4個所の柱穴が東西に並ぶ。この4個所の柱穴の東3個所

の柱穴は、北方の第35次調査で検出された前期の回廊SC3501の延長上に位置し、内裏南面西回廊SC3304の南側柱列から7本目に当たる。これより南に柱穴が続かないので、ここで回廊が西へ曲がることになる。

したがってこの遺構は内裏南面西回廊SC3304の中央柱を中心にSC3504と対称に西へ曲がる回廊SC3601となる。

東端の柱穴は後期大極殿院西面回廊の西側雨落溝SD3526の掘形によってそのほとんどが壊されているが、南北回廊の東側柱と同様に東外方に小柱穴が存在した。また、回廊の南端に位置するので、南外方にも小柱穴が付いていることが確認された。この小柱穴は西へ続く3個所の柱穴にも付属している。柱間は南北回廊の梁行にあたる東の2間分が約2.4mで、つぎの3間目からは、桁行の柱間である2.92mを測る。

(2) 後期難波宮

調査区の東端から西へ5.3mと14.6mの位置に南北方向の溝SD3525・SD3526が検出された。この間が後期大極殿院の西面回廊SC3524である。回廊幅は溝の心々間で約9.3mである。中軸線からの距離は東雨落溝の中心までが45.78mである。東雨落溝の中心から西に2mの位置に南北に並ぶ。

回廊基壇上では8個所の礎石の抜き跡が確認された。東雨落溝から西約2mの位置で南北に4個所、約5mで1個所、約7mで3個所の3列に柱跡が検出された。柱跡の間隔は桁行が約3～4m、梁間が2.5～3mで、一定しない。

南から2本目と3本目の柱間が約4mを測り、他の柱間より広い。この柱間のほぼ中央が大極殿の南北の中央列の延長上に位置するので、門あるいは戸口の可能性がある。

回廊の両側の溝は後殿東回廊の南雨落溝とほぼ同じ構造をもつと推定されている。すなわち、50cmの底石の上に幅約40cmの側石をのせたもので、調査区全域で採取された痕跡が認められた。また基壇も東回廊と同じく基壇側の側石を地覆石として兼用したと推測される。

この他、回廊の上と回廊の東西の両外側に1列ずつ足場穴とみられるピットが存在する。ピットの間隔は柱跡ほどの規則性はなく、大きさもまちまちである。ピットは柱列のほぼ

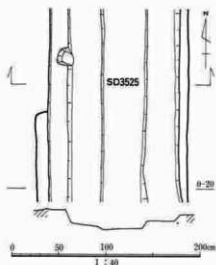


Fig.10 後期大極殿院西面回廊東雨落溝

中間に東西にも並ぶので、回廊上には中央柱との間にもう1列あった可能性がある。

(3) その他の遺構

調査地南部で検出した東西方向の溝SD3681は、幅約50cm・深さ約10cmで、後期西面回廊雨落溝・足場穴によって切られている。瓦が出土したので概報[大阪市教育委員会1970]では後期の溝として報告したが、再検討の結果瓦は上層からの混入と判断した。なお、埋土は部分的にしか掘っておらず年代を決定するには至っていない。SD3682はY・Z32区・調査地壁際とその南約1.5mの所にある、幅約50cmの溝状遺構である。SD3582と繋がる可能性がある。

(長山)

第4節 第37次調査 (図面7、図版33～60)

1. 調査の目的

第37次調査は、1968年度の第33次調査から1969年度に実施された第33～36次調査に引き続いて後期(聖武朝)難波宮大極殿周辺部の史跡公園としての環境整備に先立つ学術調査として実施したものである。

第37次調査地区については、すでに1961年春の第13次調査によって一部が発掘され、後期難波宮大極殿の大体の規模と、それに重複する前期(天武朝)大極殿相当建物の存在が推定されていた[澤村仁1964] (Fig.11・12)。

第37次調査は第13次調査と第33～36次調査の成果を承けて、後期大極殿跡の全貌を明らかにすること、および前期大極殿相当建物の存在を確認することを主目的に実施した。

2. 調査の経過

第13次調査の結果、聖武朝(後期)大極殿基壇の規模は、大極殿が桁行9間の場合、東西長41.82m(138尺)、南北長約21.2m(70尺)と復元されていた。

第37次調査当時、平城宮・長岡宮大極殿は共に9×4間に復元されていたので、難波宮大極殿も9×4間と考え、その基壇(41.8×21.2m)の全体を発掘調査することを企図したが、基壇東端部は道路下になっていて発掘が不可能であったために、結局基壇東端部を除く東西42m(3m×14区)、南北33m(3m×11区)の範囲に1,386㎡の調査区域を設定し地区割を行った(Fig.13、図版33-1)。

第13次調査では現地地表下40cmほどで大極殿土壇が、約90cmで基壇外の旧地表を示す小石敷が検出されたほか、基壇北面東階段の東入隅部では凝灰岩切石が原位置で発見されており、後世の攪乱を受けてはいるものの大極殿土壇が良好な状態で遺存していることが予測できた。

調査の方針 当時、難波宮跡の発掘調査では表土層の掘削に重機を使用していたが、第37次調査では機械掘削による大極殿土壇の損傷を避けるために、全て人力で発掘するとともに、大極殿跡がすでに国史跡に指定され保存されている地域にあることを考え、発掘調査に当っては調査による遺構破壊を極力避け、遺構を保存することに努めることを調査の基本方針とした。

トレンチ調査 そこで第37次調査区域における大極殿土壇の遺存状況をまず把握することにし、調査区域に東西トレンチ(U11～25区)、南北東トレンチ(P15～Z15区)、南北西トレンチ(P～Z19区)の3本のトレンチを設定し、7月7日から調査を開始した(Fig.13、図版33-1)。

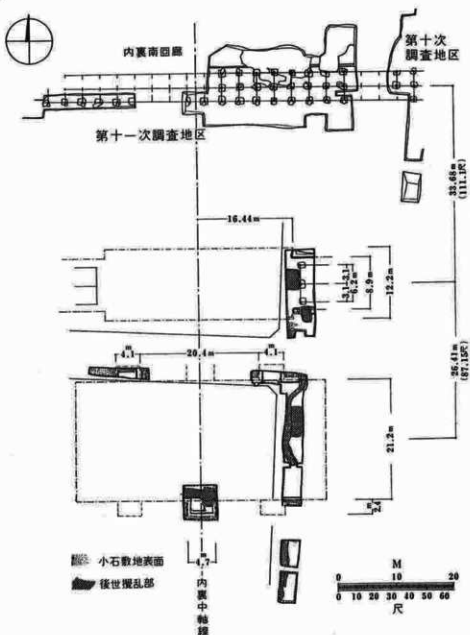


Fig.11 第13次発掘調査成果主要部略図(『難波宮址の研究』第5-1 1964年)

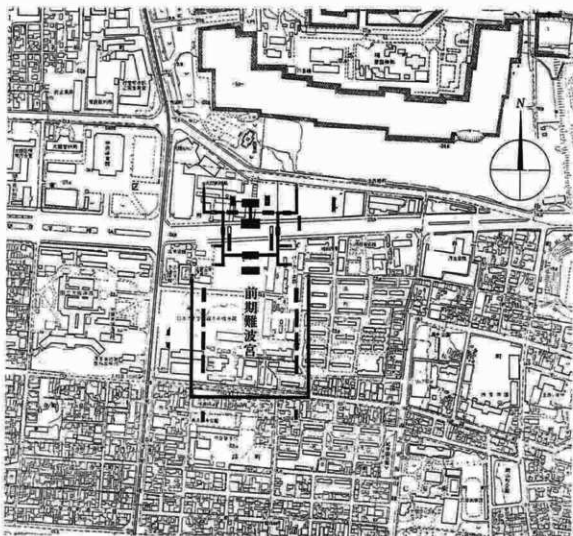


Fig.12 前期難波宮復元図(『難波宮址の研究』第6、1970年)

東西トレンチの北壁土層の所見によると、保存のよいU12・13区では、地表下約40cmで版築された大極殿土壇と思われる整地層が検出され、U14～16区の攪乱破壊面では、この版築土壇の下層の地上上層に土師・須恵器の包含層が観察された。また、U23区では大極殿土壇の西側に旧地表を示す小石敷が検出され、第13次調査では不明であった大極殿土壇の西端がほぼ23ラインに位置することが推測できた。南北東トレンチでもW・X15区で、大極殿土壇がよく残っていたほか、第13次調査で検出済みの南面中央階段部分(Q15・16区)で土壇整地層の下層に遺物包含層、階段南側では地表下約90cmで旧地表を示す小石敷が検

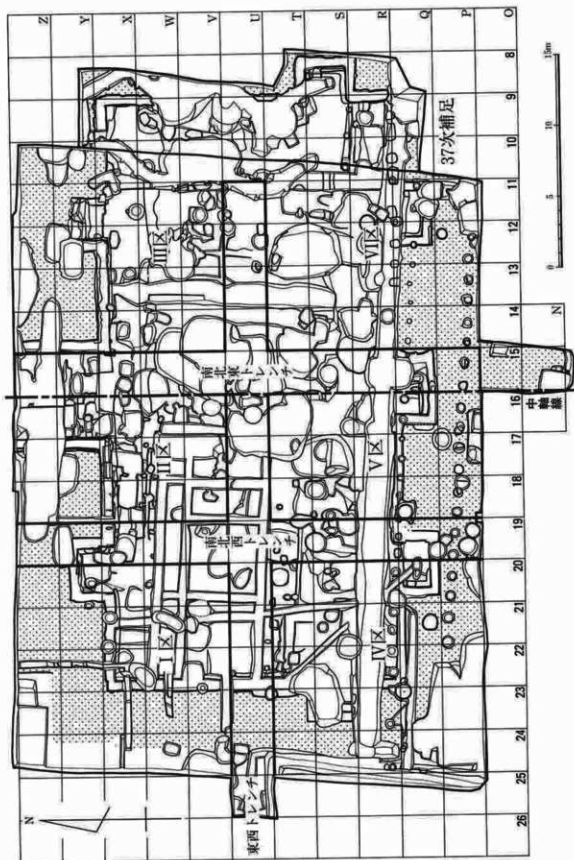


Fig.13 第37次・同補足調査 (CL地区) 地区別図

出された。南北西トレンチでもU～W19区で大極殿土壇がよく残っており、Q19区とY19区で南・北面西階段土壇やその周囲の凝灰岩片、小石敷が検出されたほか、R19区では土壇下層に遺物包含層があることがわかった。

この最初のトレンチ調査で難波宮遺構面の検出に努めた結果、大極殿土壇が東西トレンチ以北部分でよく残っていることや、南面中央・西階段、北面西階段の土壇やその周囲の旧地表を示す小石敷を検出するなど第37次調査区域における大極殿土壇の大体の遺存状況をつかむことができた。

基本層序 各所に残る攪乱壊壁面の所見から、第37次発掘区域の基本層序として、下層から

黄褐色地山

灰色粘質土の土師・須恵器包含層(難波宮下層遺跡遺物包含層)

大極殿版築土壇および整地層

その上に堆積する大極殿廃絶後の暗褐色粘質土の瓦包含層

後世堆積層

を想定することができた(Fig.19・20)。

そこで東西トレンチ北壁、南北東・西トレンチ西壁の土層図作成と並行して、南北東・西トレンチに挟まれたV～Z16～18区の大極殿遺構面の全面的な検出に着手した(7月23日)。第37次調査区域の全面発掘に際しては、Vライン上、16・20ライン上に幅50cmの土層観察用のアゼをキ字形に残し、アゼによって区画された区域をⅠ～Ⅵ区と呼称することにした(Fig.13)。

V～Z16～18区(Ⅱ区)の大極殿土壇の検出をすすめる過程で注目されたのは、Xライン南1mで大極殿土壇積土が大きく変化することと、大極殿土壇内に位置するX16～18区の攪乱壊から土壇周辺の小石敷とは異なる小石敷が検出されたことである。

8月1日からⅡ区の遺構検出と並行して、Ⅲ区のV～Z12～14区の遺構検出に着手した。V～X13区を南北に縦断して幅約2mの溝状の攪乱壊があり、その壁面を清掃すると、Ⅱ区と同じくXラインの南1mのところで大極殿土壇の積土が大きく変わっており、南の版築土壇に対し、北側は土壇北端まで暗褐色土をあたかも継足したように積んでいることがわかった(Fig.24・25、図版50・51)。

小石敷 この継足された土壇北端部の積土の下からは土壇周辺の大極殿旧地表を示す小石敷とは異なる小石敷が検出された(図版49・50)。すなわち、土壇北端部下層の石敷は、土壇周辺の石敷より明らかに時期の古いもので、約12～15cmレベルが高くなっている。

このⅡ・Ⅲ区で検出されたこの2種の小石数は、土壇周辺部の小石数が大極殿基壇周辺に敷かれた後期小石数で、土壇北端下層から検出された小石数は、大極殿土壇築成以前に存した古い時期、恐らく朱鳥元年正月焼失時のいわゆる前期小石数ではないかと推測された。

いずれにしても大極殿土壇の築成が単純なものでないことが明らかにされた。

一方Ⅰ～Ⅲ区の遺構検出を進める過程で、Y13～24区をほぼ東西に横断する形で側石をもつ近世の溝が発見され、その検出・実測・写真撮影に8月初から9月22日までのほぼ1か月半を要した。

8月8日からはⅣ区の粗掘りに着手するとともにⅠ～Ⅲ区では要所に土層観察用のアゼを適宜残しながら大極殿土壇築成状況の精査、土壇周辺の基壇化粧痕跡や小石数の検出をすすめた。

9月3日からはⅤ・Ⅵ区の粗掘りに着手し、第37次調査区域の全面に発掘調査が及ぶことになった。

Ⅳ区の大極殿土壇南西部と周囲の小石数の検出を進める過程で、大きく攪乱されているものの、S23区に西面階段の存在が予測されていたが、9月8日には、その存在が確実視されるに到り、大極殿基壇の南・北面だけでなく東・西面にも階段が存在するという新知見を得ることができた(図版41)。

発掘調査が発掘区域全面に及んだのを機に、Ⅰ区～Ⅳ区〔Ⅰ区(宮本郁雄・木原克司)、Ⅱ区(八木久栄)、Ⅲ区(中川信作)、Ⅳ区(長山雅一)、Ⅴ区(近藤滋)、Ⅵ区(中尾芳治)]の遺構検出・精査担当者を定めることにし、中尾が全体を総括するという体制で以後の調査を進めることにした。

前期大極殿相当建物 第37次調査の主目的の一つは、第13次調査で推測されている前期大極殿相当建物を解明することであったが、その調査を容易にするために、第13次調査トレンチ部分を再発掘することにし、P～Z10区部分を道路いっばいまで拡張して粗掘りを開始した(9月16日)。

第13次調査で前期大極殿相当建物の掘立柱穴と考えた柱穴を再検出するとともに、もしそれが前期大極殿相当建物の柱穴であれば当然それと組合って存在するはずの柱穴の探索に努めたが検出されず、前期大極殿相当建物の存在は次第に疑問視されるようになった(10月5日)。

凝灰岩地覆石 これまでの調査で大極殿土壇周辺の基壇化粧石は、ほとんどすべてが丁寧に抜取られていることがわかっていたが、9月30日、Ⅱ区の大極殿と同後殿をつなぐ軒廊の

南西入隅部分(X17区)に、大極殿基壇の地覆石と思われる凝灰岩切石が原位置に遺存していることを発見し、その検出を怠いだ(Fig.27・28、図版45)。

その後、大安寺・薬師寺などの墳正積基壇の資料を収集して検討した結果、Ⅱ区X17区で出土した凝灰岩切石は、大極殿基壇の地覆石で、羽目石が直接組合うものと復元した(10月10日)。

この頃、南面基壇周辺の小石敷の分布範囲を調べるために南面中央階段南方に枝トレンチ(N・O15区)を入れ、一部攪乱されていたものの小石敷がO15区まで存在することを明らかにした(9月12日)。またこの日、Y22区の大極殿土壇北西部外方の小石敷上より、高さ40cmの大きな重圓文鬼板(右半)が出土し、10月23日にX・Y23区の重圓文鬼板を含む瓦堆積の状況を写真撮影した(図版54)。

先にX17区で出土した軒廊南西入隅部の凝灰岩地覆石を精査していたが、10月30日に写真撮影を行った(図版45～49)。

11月1日(日)に「難波宮址を守る会」主催の第37次調査現地見学会が開かれたほか、11月5日(木)の朝日新聞朝刊大阪版に出た第37次調査の記事の反響が大きく、見学者が絶えない。また、11月11日には大淀区豊島小学校の生徒250人が見学に訪れるなど、第37次調査の成果に市民の関心が寄せられ、以後多数の見学者が調査現場を訪れた。

11月以後も各区の遺構検出と精査をすすめたが、Ⅲ・Ⅳ区のP11～19区では後期小石敷の下から大型の掘立柱掘形が検出され、注目を集めた(図版57)。近世の柱穴や攪乱墳の壁面で掘形を検出したもので、その全貌は小石敷の下になっているために明らかにすることができなかったが、一辺1.8m、深さ2mに達する巨大な掘形が柱間約4.5～8.0m前後で少なくとも5箇所、4間分存在することが推測できた。掘形が大きく、ほぼ東西方向に1列に並ぶことからみて後期(聖武朝)以前の難波宮に属する柱穴であると思われたが、P11区の攪乱墳壁面に検出された掘形の精査の結果では、柱抜き穴に焼壁・焼土を含むようにみえず、前期遺構ではないと考えられた。また、P20区以西には明らかに存在せず、大極殿中軸線に関して対称に位置していない。その精査には後期小石敷の除去が必要で、大極殿遺構保存の見地からその存在を確認するに止めた。

11月中頃にはほぼ全域の遺構検出を終えて実測のための遺り方設置作業に入り、12月22日より実測を開始した。

その間12月5日の難波宮址顕彰会専門委員会で、第37次調査結果について報告するとともに、浅野清、有光教一、黒板晶夫、斉藤忠、関野克、平山敏次郎、望月信成、山根徳太郎

の各委員に調査現場を視察していただき、多くのご教示・ご助言を得た。

そして12月17日には調査結果について新聞発表を行い、12月19日(土)に現地説明会を開催した(Fig.14)。また12月24日の難波宮跡整備計画審議会でも報告を行った。

第37次調査開始以来、澤村仁氏など適宜各分野の研究者の視察・見学を得てご教示やご助言を仰いだ、新聞発



Fig.14 現地説明会

表以後は奈良国立文化財研究所所員をはじめとする多くの研究者が見学に訪れた。

12月13日、難波宮址顕彰会専門委員として長らく調査を指導していただいた榎本亀次郎先生が急逝された。

年末より開始した実測作業は、面積が大きく出土遺構の状況が複雑な上に、精査を並行しながら進めたこともあって多くの時間を要し、翌年、1971年1月末にようやく終えることができた。

2月からは、出土遺構の全景・部分の写真撮影を進めるとともに、攪乱壊壁面や各所に残した土層観察用アゼの土層図作成や、大極殿土壇下層から検出された難波宮下層遺跡の遺物包含層の調査に助んだ。

こうした第37次調査と並行して、1971年1月中頃から法門坂住宅内の第38次調査の準備にかかり、2月12日から発掘調査を開始した。

3月に入ると、大極殿土壇各細部の精査・調査区域各所の土層図作成・写真撮影・難波宮下層遺跡遺物包含層の調査や遺物取上げなど、全域にわたって細部の調査を進めた。

大極殿土壇は後世の遺構や攪乱によって破壊を受けて著しい凹凸の状を呈しているが、(図版33~35)、3月に入るとこの凹所の穴埋めをして土壇を修復し写真撮影を行った(図版59・60)。3月8日には、遺構実測の新しい試みとして奈良国立文化財研究所によって写真測量のためのクレーンによる写真撮影が行われた(Fig.15)。

以上のような経過を経て、3月31日に、昨年7月以来の長期にわたる大極殿跡の調査を終えた。

当初大極殿基壇の全面発掘を企図しながら、道路下にあるために第37次調査で調査でき

なかった基壇東端部については、第37次調査の補足調査として近い将来実施することを計画することになった。

3. 遺構の概要

(1) 後期大極殿跡 SB1321

基壇東端部は道路となっていたため発掘できなかったが、大極殿全体の約9割を全面発掘した。難波宮廃絶後から中世・近世を経て現代におよぶ各時代の遺構や擾乱のために多くの部分が破壊されていたが、基壇の遺存状況は予想外に良好で、南端部を除くと当時の旧地表面を示す小石敷面より最高0.8mの高さまで土壇の積土が残っていた。土壇は周辺の前期難波宮旧地表面や地山を削平して土壇下部を削り残し、その上に黄褐色土を厚さ約10cm前後に版築して土壇を築成していた。

ただ、その築成状況は必ずしも単純ではなく、土壇西南部では土壇(土壇A)を斜めに掘込んで版築が行われるのに対して、土壇北部では版築土壇(土壇B)の外側に暗褐色土が堆積されたような形で積土されていたり(土壇C)、前期旧地表面を示すと思われる小石敷を掘込んだ部分を朱鳥元年(686)火災時のものと思われる焼土・焼壁で整地し、その上に版築するなどきわめて複雑な状況を呈している(Fig.24・25、図版38・50・51)。

こうして築成された東西約40m、南北約19.5mの土壇の周囲を凝灰岩切石で化粧して壇正積基壇を形成している。基壇化粧石はほとんど大部分を抜取られていたが、大極殿と同後殿をつなぐ軒廊取付き部の南西入隅部分で、凝灰岩地覆石が3個連続して残存していて、そのうち2個は原位置を止めていた(Fig.27・28、図版45・49)。

基壇化粧は地覆石の上に羽目石がのるものと思われ、地覆石の外方に布石(延石)がめぐっ



Fig.15 奈良国立文化財研究所による写真測量(上)と写真測量用カメラ(下)

ていた痕跡や雨落溝などは認められなかった。

階段は基壇南面に3個所、北面は中央の軒廊の東・西に2個所を発掘したほか、攪乱を受けてはいたものの基壇南寄りに西面階段跡の存在を確認することができた。東面にも同様の階段が存在したものと認められる(図版36~41)。

大極殿の基壇の高さは現状では旧地表面から0.8m残っているに過ぎないが、各面階段の張り出しの長さが約2.4m(8尺)であること、階段の勾配が45°よりゆるやかであったとみられることなどから約2.1m(7尺)ほどと推定できる。

大極殿の柱位置は、基壇の大部分が削平されていたために礎石や礎石据付け痕跡から知ることはできなかったが、階段の幅が柱間に一致していたと仮定すると大極殿の建物規模は桁行9間、梁間4間に復元できる。柱間寸法は、西面階段や建物軒出との関係を考慮して隅間11尺(天平尺—以下同じ)と仮定すると、桁行は35.15m(118尺)で、中央間が4.47m(15尺)、次の両脇3間が4.02m(13.5尺)等間、両隅間が3.28m(11尺)となる。梁間は14.60m(49尺)で、中の2間が4.02m(13.5尺)、両隅間が3.28m(11尺)となる。

したがって基壇の出(隅柱から地覆石外面まで)は11尺となり、大極殿基壇東西長(地覆石外面間距離)は、41.71m(140尺)、南北長は21.16m(71尺)と復元できる(註1)。

なお、基壇周辺の小石敷の範囲が基壇周辺部に止まるものか、大極殿院内全面にわたるものかについては現状ではいずれとも判断できなかった。

出土遺物としては、重圓文系軒瓦を中心に蓮華・唐草文系軒瓦を含む多量の屋瓦のほか、大極殿基壇北西角からは高さ40cmの大型の重圓文鬼板が出土した(図面15、図版54・84)。

(2) 前期大極殿相当建物

第13次調査の際、後期大極殿基壇積土より下に焼土面と、同じレベルの小石敷面が認められ、この焼土面の下に3個所の掘立柱穴と1個所のやや不明瞭な掘形が発見されていた。その状況からみて、焼土面は聖武朝以前に火災にあった建物の床面またはそれを整地した面で、小石敷は最も北にある掘立柱より北約3mより北方だけに残っているのもので、焼亡した建物の雨落を兼ねる基壇外地表と推定された。

そして発見された柱穴から、梁間は13.5mほどで2間の身舎の南北に廂があったものと考え、桁行は四面廂の建物であれば後期大極殿に似た規模になるとして、この建物を前期大極殿相当建物であると推定したのであった[澤村1964](Fig.16)。

調査の初期の段階では、第13次調査で発見された柱位置に対応して、その西方に掘立柱列が検出されることを期待していた。後期大極殿基壇の下に隠されているという検出に因

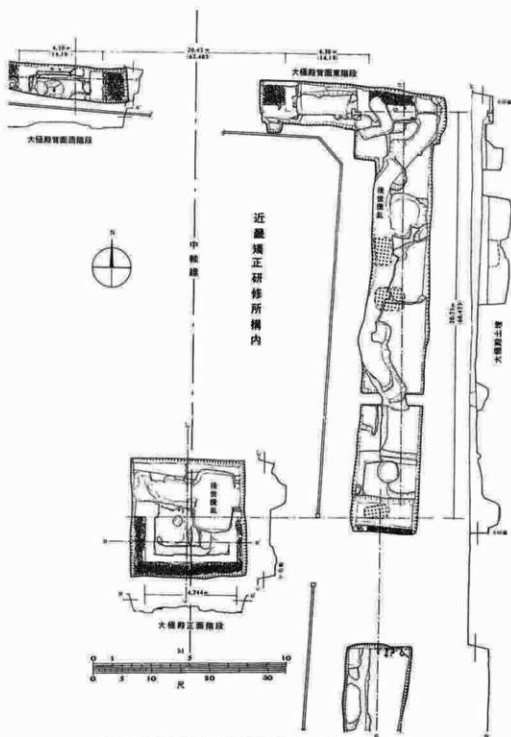


Fig.16 第13次調査道路実測図(『難波宮址の研究』第5-1 1964年)

難な事情があるにせよ、もし柱穴があれば多くの部分に存在する擾乱層の壁面にその痕跡が認められるはずである。ところが相当綿密に精査してもその痕跡すら発見されないことから、第13次調査の結果による推定に疑問がもたれることになった。

そこで第13次調査部分を改めて再発掘するとともに、当時は後期大極殿土壇の破壊を避けるために、当然存在するはずだという推定の下に発掘しなかった推定身舎柱の部分にトレンチを入れて精査したところ、第13次調査当時の推定に立つ限り当然存在しなければならない柱穴が発見されなかった。

また、その後の調査で、前期大極殿相当建物の南端柱穴と考えていた柱穴が全然別の系列の柱列(図版58)のものであることや、北側柱に比定していた柱穴掘形(図版56)の方位が難波宮造営前のいわゆる難波宮下層遺跡のそれと一致することが判明した結果、少なくとも第13次調査当時に推定したような形での前期大極殿相当建物の存在は否定せざるを得ないとの結論に達した。

したがって、これまでの「内裏前殿」と仮称してきた建物SB1801が、むしろ前期難波宮「大極殿」になる可能性が一層高まる結果となった。

(3) その他の遺構

後期大極殿基壇下層および後期難波宮の旧地表を示す小石敷の下層から溝や多くの掘立柱穴が検出されているが、後期難波宮の遺構が後世の擾乱によって削平されている個所に部分的に発見されているにすぎないので、1つの遺構としてまとめられるものは少ない。そのうちの1つは、後期大極殿南面東階段付近から検出された柱間1.5m前後、5間分の東西柱列SA3741である(図版58)。後期小石敷下層から検出されること、柱列の方位が難波宮の方位とはほぼ一致することからみて後期難波宮以前の難波宮に關係する遺構ではないかと思われたが、掘形の大きさや形からみて難波宮下層遺跡に属する可能性もあり、所屬時期は明らかにし難い。

また、この柱列の約4.7m北に東西方向の小溝SD3681が検出されている。この小溝は後期難波宮大極殿下層の難波宮下層遺跡遺物包含層や地山を切ってつくられており、その西延長部が第37次調査地域西端部で検出されている。第36次調査地域の南端部でも東西に走る幅40cmの小溝が検出されており、その位置関係からみて同一溝と考えられる。第36次調査地域南端部で検出された溝は、後期難波宮西面回廊の雨落溝と足場穴で切られており、瓦を含むことから後期難波宮と同時期のものと考えられている。ほぼ東西に走る長さ80m以上の小溝がいつの時期の、いかなる性格のものか確定し難いが、難波宮の地割に關係する

ものであろうか。

次に、第37次調査地域の南東隅で一辺1.8m前後、深さ2mほどの巨大な掘形をもつ柱穴SB3781が検出されている。後期小石敷の下層になっているために詳細は不明であるが、同系列のものと思われる掘形痕跡がその西方の攪乱墳や近世柱穴の壁面に認められ、一応柱間約4.5～8.0m前後で少なくとも4間分の存在が推定できる。掘形が非常に大きいこと、その方位が難波宮のそれと一致することなどからみて、後期以前の難波宮に関係するものと思われる。ただ、先の小柱穴列SB3741同様、柱抜き穴に焼壁・焼土を含まないようにみえること、前期・後期難波宮に共通する中軸線に関して対称でないことが注意されるが、その所属時期や規模・性格については明らかにすることができなかった。

また、後期大極殿土壇の下層には、地山を切って幅20m、厚さ50cmの難波宮下層遺跡の遺物包含層が発掘地域の北東～南西方向に存在していて、部分的に検出された炭化物を含む有機質土層中からは多量の土師器・須恵器が出土した。

このほか、中世・近世の柱穴や溝、瓦溜などが多数検出されており、瓦溜からは桐文・巴文金箔押瓦が多く出土していることが注目される。

以上第37次調査によって後期大極殿の全貌を明らかにして、その正確な復元を可能にしたほか、前期難波宮の殿舎比定や性格解明の上で大きなカギとなっていた大極殿相当建物の存在の有無を明らかにしたことは、前期建物の造営が孝徳期の難波長柄豊碕宮にまで遡る可能性が高まっていることとともに、その後の難波宮跡の調査・研究を進める上で大きな成果となった〔大阪市教育委員会1971〕。

(中尾)

註)

- (1) 第37次調査当時は、後期難波宮の造営基準尺を1尺=29.8cmと考えていた。本書第Ⅲ章第3節の註(3)を参照。

第5節 第37次補足調査 (図面7、図版61～63)

1. 調査の目的

第37次調査によって後期(聖武朝)大極殿跡の全貌をほぼ明らかにしたが、基壇東端部は当時道路下にあったために調査できなかった。

ところが1971年度より後期大極殿跡を中心とする大阪市有地(9,130㎡)を史跡公園として整備することになり、1972年度には後期大極殿基壇の復元工事に着手することになった。復元工事が行われれば、第37次調査で未調査のまま残されている基壇東端部の調査の機会が半永久的に失われることでもあり、まだ基壇復元に正確を期するためにも発掘調査を行うことにした。

そこで、第37次調査ではその存在を確認しながらも、攪乱のためにその詳細を明らかにすることができなかった西面階段跡に対し、東面階段の状況を明らかにすることを主目的に補足調査を行った。

2. 調査の結果

基壇東端部の北東角部分では、土壇および地覆石裏込めの外側に幅60～65cmの地覆石抜取り跡が溝状にまわり、その外側に当時の地表を示す小石敷が残っていた。基壇地覆石はすべて抜取られているが、その抜取り跡には凝灰岩片や瓦片が散布していたほか、小石敷面上には重圓文軒瓦を含む屋瓦片が遺存していた。

東面階段跡は一部が防空壕で破壊されていたほかは遺存状況は良好で、小石敷に囲まれた東西約2.4m、南北約3.9mの土壇が基壇東端線より東に張り出し、周囲には凝灰岩地覆石抜取り跡が溝状にまわっていた。

出土遺物としては、地覆石抜取り跡や小石敷面上から重圓文軒瓦を含む屋瓦片が出土している[難波宮址顕彰会1973]。

(中尾)

第6節 第39次調査（図面8、図版64～71）

1. 調査の目的

第39次調査の目的は後期（聖武朝）難波宮大極殿院南部の閤門と南面回廊を明らかにして大極殿院の規模や性格をより確実なものにすることである。また第37次調査で判明した大極殿の前庭と前面小石敷下にある大型掘立柱列の関連遺構についての調査である。

2. 調査の経過

前半と後半の調査 第13次調査で大極殿前庭と閤門に推定される所に南北トレンチを入れているが、成果は得られていない〔澤村仁1964〕。今回の閤門と南面回廊跡で発掘が可能なところは、中軸線から西の部分で、しかも回廊の北半部である。第15次調査で大極殿院南西隅から朝堂院回廊北西部を検出している〔澤村1964〕が、そこは日赤法円坂分院とその北側道路にまたがっている。今回は環境整備との関係で南面西回廊の北半部に当たる道路部分の発掘を計画した。しかし、道路は供用されており、東郵便局仮庁舎が旧兵舎から転出する6月以降でないと掘削できないことがわかった。そこで大極殿前庭の調査を先に行って第39次前半とし、閤門と南回廊の調査を後半とした（Fig.17）。

調査の方針や遺構の検討は調査員・補助員で討議し、日曜には交替の日直をおいて、見学者への応対、場合によっては現場作業も行うことにする。

調査区域の設定 大極殿前庭の調査は第37次調査区のすぐ南に、南北9m東西30mの東西トレンチと、中軸線をはさんで東西10m南北12mの南北トレンチとを合わせて、T字状に発掘調査区域を設定した。面積は約385㎡である。閤門と南面回廊西側の調査範囲は日赤法円坂分院の金網に沿って南北12～13m・東西約75mをとり、東端は分院東側道路にかかるため、一型に約950㎡を設定した。東端部では第13次調査の一部、西端部では第15次調査凝灰岩切石溝の再掘が含まれている。

第39次前半の調査 5月12日（水）に測量基準点を第37次調査から移し、17日に発掘予定地を白線で囲み、事前の写真撮影をした。18日から重機掘削を始め20日に終わった。旧地表である小石敷が残る所もあるが、大きな攪乱層が目立つ状態である。21日から残土処理を行い31日に終わった。

6月は土層の調査や遺構・小石敷の検出を行った。10日に小地区杭を設置し、11日に略図

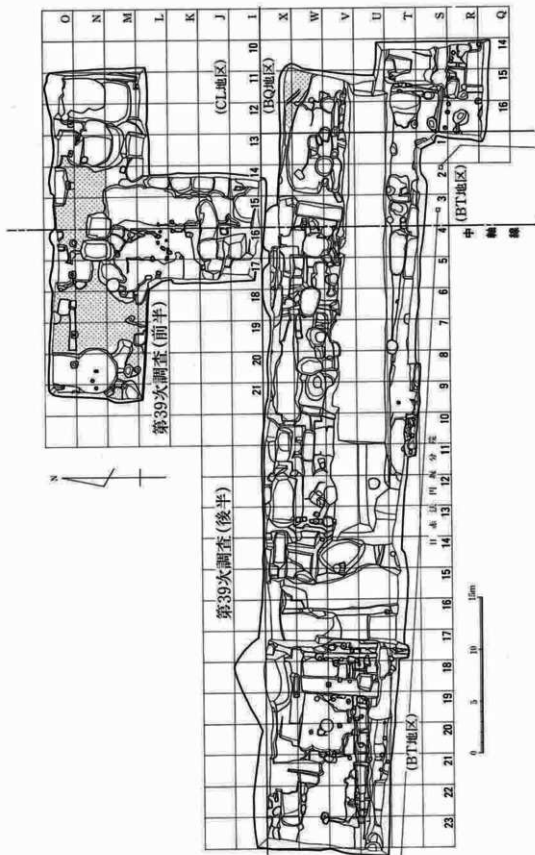


Fig.17 第39次調査(BQ・BT・CL地区)地区地図

を作成した。調査区の北部には小石敷が残っていたが、中部以南は難波宮のほとんどの遺構が削平されていた。雨が多くて作業は進まなかったが、市民の関心が高まって難波宮跡の見学者が増えてきたので、立看板や足場の整備・説明等々も意欲的に行った。

6月30日(水)に小石敷をほぼ検出し終えた。小石敷には密な所と粗な所があるため、小石敷の範囲や粗密の理由について考えた。第37次調査大極殿前面にある、小石敷下の掘立柱列に関連する遺構を攪乱層の壁面で探すがみつからなかった。別にOラインの小石敷下に掘立柱が東西に並んでいることがわかった。

7月には西壁・北壁の土層図を作成し、実測原点を日赤構内から移して遣り方をつくり、遺構実測をした。4日・14日写真撮影。

8月17日から補足調査とため押しにはいる。小石敷の範囲と小石の密な所、粗な所を図にいった。小石敷下にあるOライン上の小掘形を確認するためにO18・19区で幅70cmのトレンチを設けるほか、東方では攪乱層の壁面で探した。O12～21区の間には9個所の柱跡があり、柱間距離は約2.9mであることがわかった。N～P20・21区大攪乱層の壁で小石敷下の層位をみた。O19区小石敷下から四天王寺式軒丸瓦が後期難波宮の平瓦とともに出土。瓦器片が所々で出土し、難波宮廃絶後もこの地域が利用されていたと考えられた。8月27日(金)、遺構の保護砂をいれて埋戻し、前半の調査を終了した。

第39次後半の調査 8月24日(火)の夕刻に調査予定地の道路に車両が進入しないように封鎖する。26日発掘区域を設定し、29日から重機で東から掘削を始めた。30・31日は台風とその名残の雨で作業は中止。9月1日から掘削を再開し、中軸線上にアゼを残して4日に終了した。調査地の中央に東西に長い大きな溝跡があり、西回廊推定地のすぐ東には石が大量に埋まった南北の大きな掘込みが検出された。難波宮の遺構の残りは良くなかった。

9月3日から残土処理を始める。作業員7～8名とベルトコンベアー4台を投入したが、大溝や近世以降の深い土壌群の掘削に時間がかかり、さらに雨天・雨量が多く、台風(9月26日、10月14日)や光化学スモッグ(9月13～15日)の追い打ちもあって9月26日までかかった。大極殿跡一帯が更地になった後、元の排水溝が埋まって機能しなくなったために、調査地内や周辺が何度か水浸しになることがあった。

9月17日～25日はアゼから東の遺構検出を行った。北西隅と北壁際に小石敷がわずかに残っていた。東壁際の2個所に難波宮の溝らしい所があった。

つづいてアゼ以西の遺構検出を2班で東と西から進めた。アゼからBT17ラインまでの約40m間は、北壁際のごく一部に小石敷がある以外、難波宮関係の遺構は見当たらなかった。

調査地東端から続く東西の大溝は幅が5~6mもあるV字溝である。土量が多いために20~30cm周囲より掘下げるだけにして西へ進めた。9月20日、BT13ラインで南折することがなかった。当初予想したとおり第15次調査の中世大溝につながるとみられた。11ライン以西は底まで掘った。深さは2m余りであった(Fig.18)。埋土は砂が多く、底部には滞水の跡があった。位置的には後期回廊の北雨落溝や北側柱列と重なっていた。



Fig.18 中世大溝(北西から)

大溝の周辺には主に近世以降とみられる大小の遺構が数多く存在した。BTV14区には約3×3.5mで深さ1m以上の階段がつく土壇があり、輪の羽口が出土するものもあった。その西には幅2.5~3mで壁は垂直に近く、深さは2m以上もある南北方向の土壇が2箇所並び、人頭大の河原石が詰まっていた。近世の遺構であるが規模や性格はわからず、上面の掃除にとどめた。Xラインには中軸線から西端まで南北1.5~3m東西5~6mの大小の長方形土壇が肩を接して並んでいた。

BT17ライン以西には南部に第15次調査の東西溝とその続きがあり、北側には瓦が散布し小堀形がみられた。10月12日には15日の難波宮専門委員会に備えて東西溝を再掘した。

聖武朝大極殿院回廊の検討のため、略測図に第35次・第36次調査の西面回廊の位置をいれ、雨落溝とその周辺のレベルもいれた。東雨落溝は19ラインのすぐ西、西雨落溝は22ラインのすぐ西に位置し、西雨落溝はU・V22区の凝灰岩切石溝の底幅が57cmから45cmに変化する点の西側に取付くとみられた(第15次調査ではこの地点を回廊中央柱筋と考えている)。

10月19日(火)の調査打合せでは、①大極殿院西回廊は現在の地山高では雨落溝も削平されたとみられる。②U・V17・18区に東西の雨落溝跡があり、大極殿院の前面に回廊は確実にあったと考えられる。③大極殿の南門はまだ見つからない。④BQT15区調査区東壁にある瓦・凝灰岩の入った遺構(当初は溝と考えていた)は、南面回廊が複廊と仮定するとその中央柱筋に当り、門の取付きに近いことなどが討議の上確認されて、門より東に柱跡や溝の遺構が残っていないか拡張して調べることになった。

BQR~T区を4.5m東まで40.5m²を拡張した結果、BQT15区の遺構は南北に約180cmある

が、拡張したすぐ東も攪乱層で削られており東西は50cm位しか残っていなかった。掘形の中に瓦・凝灰岩片の入った埋土があり、礎石抜き跡の可能性がある。R14・15区には地山の落込みには瓦片が混入する所があり、当初雨落溝と考えていたが、小掘形が2箇所と南北方向の小溝であることがわかった。

難波宮の遺構の状態がわかってきたので、10月中旬からは土層の検討と実測・遺構の平面実測を遺構検出作業と並行して進めた。

宮中軸線上のアゼは断面土層図を作成して除去した。調査地区東壁土層図・南壁土層図を作成し、各壁の堆積状況を検討した。この地区では地山直上には厚い近世層が堆積し、一部に幕末～明治初期と推定される焼土層があり、その上に薄い旧地表層が重なる現代層がみられた。北壁土層は12月23日～1月に実測した。小石数の残る所では地山上に整地層(暗褐色粘質土)があり、その上には小石数・褐色土層・近世の土層がある。

遺構の実測に当たり、10月23日から改めて実測基準点を日赤構内の第22次調査基準点から移動した。この際基準杭(Dライン北2m)が腐食していることがわかり測量をやり直した(その結果、第39次前半の実測ポイントも1m南に寄っていたので訂正した)。

10月29日に水系配置図を作成し、遣り方をつくり、11月12日から遺構の実測を始めた。

全景写真撮影のために12月3日から掃除を始め、12月16日にシュノーケル車に出動を依頼し、高所(最高15m位)からの写真撮影を行った。17日にはやぐら(4間丸太組)から、19日は東西溝などの部分写真を撮った。

実測の終わる12月下旬から、問題のある個所について再度の精査・補足調査を行った。

①南面東回廊に関しては、BQR14・15区は地山が高いので回廊南辺の遺構が残っていないか精査したがわからなかった。南北溝は瓦が混入しており、聖武朝以降の溝である。②BTU～W17・18区、V19～21区の遺構面の高いところにある小掘形群を検討したが、特に建物としてはまとまらなかった。③西面回廊に関しても、V・W19区で西回廊の雨落溝痕跡を探すがわからず、東西溝の凝灰岩痕跡や抜き跡から、南北方向の雨落溝の落込み箇所を比定して検討した。④南面回廊の柱跡についても、BT15区の柱跡を基準にして、北面・西面回廊と同様の桁行3.75m梁間2.4mの複廊と仮定し、回廊中央柱跡を中軸線から西で探すことにした。まず、攪乱の少ない所を中軸線から西へ14.25m、18.00m、21.75mと、西40.5mの4箇所選んで、東西幅約1.5mを日赤金網近くまで南へ拡張した。西18mの所でBQT15区と同様の土を確認したため、その東・西の拡張区も繋いで調べたが、攪乱のため柱跡らしいものはこの1箇所だけであった。西40.5mでは地山が高いにもかかわらず遺構はなかった。次に

BQT15区の遺構と新しくみつかったものとを比較しながら精査をした。前者は柱跡とみているが後者は四周を削られているのに東西が2mもあり、溝の可能性もあると思われた。補足調査の結果を写真や図面に記録した。

1月17日から保護砂を東部より入れ、埋戻しにかかった。その後土砂の不足などの問題もあったが、2月26日によりやく埋戻すことができた。

なお、第39次調査の成果については、朝堂院東回廊の第40次調査と合わせて「難波宮跡昭和46年度調査結果報告」として、3月24日大阪市教育青年センター7階で発表した。

3. 遺構の概要

(1) 大極殿前庭

大極殿前庭の小石敷SX1322は大極殿の近くは密で、離れると疎になりやがてなくなる。大極殿から南へ9～11mまで東西は12～14.5mの範囲が密で、南14～15m・東西23～25mの範囲は疎である。しかし39次後半調査北壁ではかなり広い範囲に小石敷とその下層の整地層が認められ、大極殿前庭には広く小石が敷かれていたことがわかった。

小石敷下には整地層があり、後期難波宮の造営工事には削平と整地を実施したことがわかる。大極殿南8.5mには東西横SA3926があり、柱径30cm柱間距離2.92mで9間分を検出した。柱穴は小石敷の下で整地層上面にあり、後期難波宮造営期間中の構と考える(図版65)。

(2) 後期難波宮閤門と南面回廊

第39次後半調査は閤門と南面回廊の確認のため、大極殿院の南西隅部を対象に実施したが、閤門と西面回廊の遺構は削平されて検出できなかった。南面回廊の遺構は東回廊SC3921と西回廊SC3924で各1個所の柱跡(図版68)と、大極殿院南西隅で第15次調査箇所を再掘した、凝灰岩切石溝の残る部分と、その東につづく南面回廊北雨落溝SD3925のごく一部分を検出した(図版69～71)。

大極殿院回廊南西隅にある凝灰岩切石づくりの溝SD1523は、中軸線より西53.9～56.2mの間に底石4個、北側石1個が残っており、それより東の西45.3mまでは同じ切石溝の抜取り跡となっている。中軸線からの距離と溝のつくり方は第35次調査で検出した暗渠SD3521と同じである。凝灰岩底石の幅が57cmから54cmに変わる中軸線西54.58mまでが暗渠SD1523で、西回廊の西雨落溝は素掘り溝SD1524へつながり、東雨落溝は底石抜取り跡の東端に接続していたとみられる。

暗渠の東で検出した南面回廊北側の雨落溝SD3925は、底石抜取り跡で比べると暗渠より

約25cm高い。北面西回廊北雨落溝との距離は心々で77.95mである。中軸線の東約13.7mと西約19mで検出された礎石拔取り跡は、暗渠と北雨落溝から約4.7mの位置にあり、南面回廊が北面・西面回廊と同規模ならば中央柱の位置に当たる。

大極殿院南面には雨落溝と柱跡がわずかに残っているので複廊の存在を推定することができる。一方、大極殿院回廊南西隅から朝堂院北西隅の一带では、第15次調査の結果「この築地塀(朝堂院西面施設のこと)がそのまま北に延長し折れ曲がって大極殿回廊に取付くのではなく、北西隅のところは幅のせまい建物が取付き、それが折れ曲がって大極殿回廊にとりつくことを発見」している[澤村1964]。この幅のせまい建物と第33～39次で調査した大極殿院回廊との繋がりについてみると、幅のせまい建物の東端にある2個所の柱は西面回廊の中央柱筋より約1m西にあり、南面回廊中央柱と推定した柱位置とも合わず、その北と南に約2mの間隔に位置する。従って大極殿回廊と幅のせまい建物とは同じ回廊南西隅にありながら柱筋をそろえず、構造の異なる建物が南西隅の中央付近で接続していたといえよう。この地区からは回廊でみられる瓦の他に、後殿南の軒窓と同じ小型の軒平瓦6572Fが6点、この地区だけで出土している小型鬼板6923が3点、小型鵝尾珠文1点があり、瓦類の出土からも注目すべきであろう。

(3)その他の遺構

第39次調査前半の地域では北東部の小石敷が削平された所に小堀形が2個所SZ3983、SZ3984、南東部では溝状遺構SD3982があり、瓦片を混入しているので後期難波宮以降のものと思われる。しかしSB3781に関連する遺構は見つからなかった。

また後半調査地域では北壁際に小堀形が2個所、南東部に小堀形2個所と南北の小溝SD3981がある。時期は整地層をきっており後期難波宮以降のものが多くみられる。西部の暗渠から雨落溝にかけての北辺には小堀形が11個所あるが建物としてまとまらない。赤褐色粘質土系の埋土で難波宮下層遺跡に属する可能性が強い。(八木)

第三章 遺構

第1節 層序

1. 第37次調査

後期大極殿跡の所在する第37次調査地区は、かつての法務省近畿矯正研究所の敷地に位置し、当時の難波宮跡の地区表示ではCL地区に当る(Fig.3)。

後期大極殿跡の発掘調査に当っては、当時道路として供用されていたために発掘できなかった大極殿基壇東端部を除き全面発掘することにし、3m方眼に分割された大極殿院地域の地区割にしたがって東西42m(3m×14区)、南北33m(3m×11区)の範囲に1386㎡の調査区域を設定し、地区割を行った(Fig.13)。

大極殿跡の全面発掘に先立ち、まず全体的な遺構の遺存状況を確認するために、3m幅の東西トレンチ・南北東トレンチ・南北西トレンチの3本のトレンチを設定し発掘に着手した。

Fig.19・20はこのトレンチ調査の段階で作成した土層図を整理したものである。土層は大別すると次の7層に分かれる。

第1層 表土層。近畿矯正研究所の建物を撤去して更地にした時の整地層である。

第2層 黒色石炭ガラ層。旧歩兵八連隊練兵場に全面に敷かれていた整地層と思われる。

第3層 黄褐色砂質土層。江戸時代の瓦溜の上に整地されていること、攪乱されていないところでは第2層の黒色石炭ガラ層と伴出することからみて、第2層と同時期とみられ、旧歩兵八連隊の造営に関わる整地層と思われる。

第4層 中世・近世の整地層および攪乱層。

第5層 大極殿遺構層。後期難波宮大極殿土壇・周囲の小石敷・大極殿廃絶後の瓦包含層など。

第6層 大極殿土壇下層(難波宮下層遺跡)の遺物包含層。

第7層 地山。黄色砂質の洪積層。

この土層図は大極殿土壇検出以前のもので、第5層は土壇版築層や土壇周囲の小石敷面

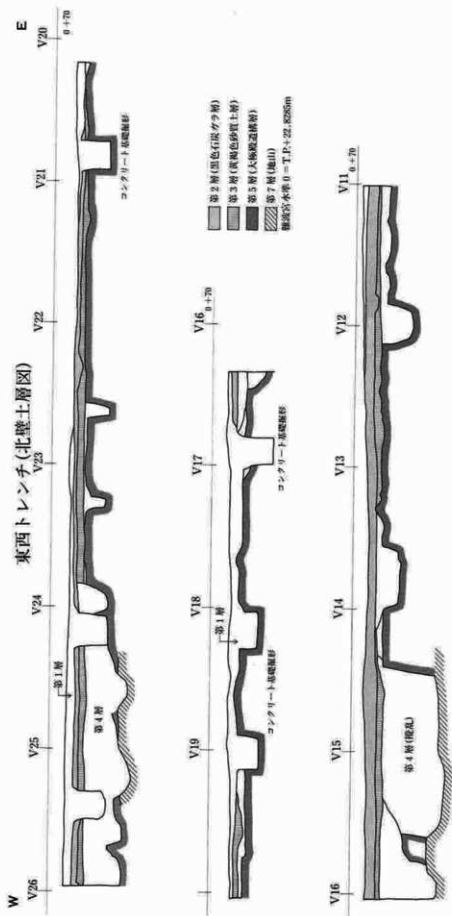
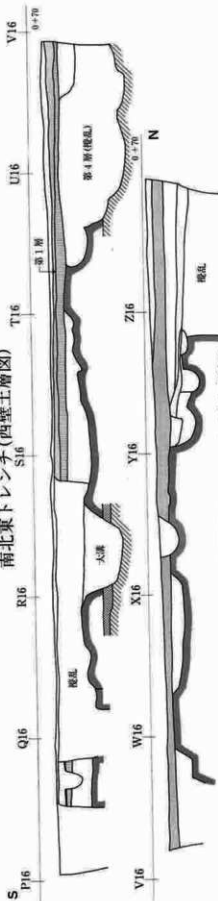
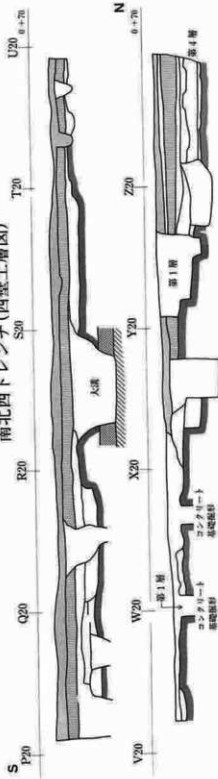


Fig.19 第37次調査基本断面(東西トレンチ) 1:80

南北東トレンチ(西壁土層図)



南北西トレンチ(西壁土層図)



第6層(細流宮下層遺物包含層)

第7層(堀山)

細流宮水準 0 = T, P, + Z2.425m

第2層(黒色石灰グラ層)

第3層(黄褐色砂質土層)

第5層(大板段遺構層)

0 3m

Fig.20 第37次調査基本層序(南北トレンチ) 1:80

など大極殿に関わる遺構のほか、大極殿廃絶後に基壇地覆石採取跡や旧地表面を示す小石敷面上に堆積した土壇崩壊土や瓦包含層を含むものである。

第4層は大極殿廃絶後の中世から近世(江戸時代)にかけての堆積層や瓦溜穴や土取り穴と思われる遺構に堆積した層であるが、この層位の時期については明らかでない。

これを概観すると、大極殿遺構層は近世に大きく攪乱を受けながらも、保存の良い部分では現地表下20cmの部分に遺存していることがわかった。

このトレンチ調査を基に、大極殿遺構層の全面検出を行うことにした。大極殿土壇の築成状況や前期難波宮に伴う整地層小石敷、難波宮下層遺跡に属する遺物包含層の状況については後述の後期難波宮の遺構解説とFig.24・25の土層図を参照していただきたい。

(中尾)

2. 大極殿院地域の層序

後期難波宮大極殿院地域で遺構が良く残っている大極殿跡の層序については、前出の本章第1節1、第37次調査と第3節1、大極殿の項で詳述している。ここではそのほかの層序について5箇所を選んで柱状図に示し、その概要を述べる(Fig.3・21)。現代・近代・近世・中世・古代の各層序が色調や様相に差異はあっても削平や大きな攪乱のない所では認められた。難波宮を中心に難波宮の遺構を破壊しないように調査を行ったので、各地層の具体的な年代が判明してない所もあり、柱状図には上層から順に番号をつけ、時代の標示はⅠ：近・現代、Ⅱ：近世、Ⅲ：中世、Ⅳ：後期難波宮、Ⅴ：前期難波宮、Ⅵ：難波宮下層遺跡、Ⅶ：地山とした。

№1 大極殿の層序である(本章第1節-1)。別に報告があるので省く。

№2 大極殿後殿地区の層序である。最上層は行政監察局のコンクリート床で基礎も残っている。①の下面からは防空壕の掘込みが認められる。②③は明治以降の近代防空壕より古い。④～⑧は近世の層とみられる。⑨以深の難波宮整地層には後期と前期があるが、2期の層が存在する所、どちらか1期のみの所、全く残らず地山になる所がある。上面からだけの調査なので前期と後期の判別のできない所もある。柱状図の辺では⑨後期の整地層があり、その下に⑩前期内裏南門の柱穴と⑪前期の整地層が存在する。後期の整地層には焼土・焼壁が混入する薄層や土壇北辺に帯状に広がる橙褐色土、黄褐色砂質土などが前期難波宮遺構面上に堆積する。整地層の下位には部分的に灰色粘土層があり土師器・須恵器を包含しており難波宮下層遺跡に属するものであろう。柱状図の西方には5世紀代の壺状

遺構も存在している。

後殿土壇の周辺の地覆石抜き跡から小石敷にかけては、後期難波宮解体に関わる土層が下位から黄褐色粘質土・褐色粘質土・暗褐色粘質土とあって、土壇上に厚く外方には薄く堆積し、後期の瓦や凝灰岩片を多量に包含している。⑬地山は上部には粘質の赤褐色土層があり、下位になると黄褐色砂質土層に変わる。

No3 第35次調査区西壁である。最上層には黒色石炭ガラ層があり、②淡黄色砂質土は薄い旧地表が数層重なり合ったものである。③焼土を含む灰色土層は調査地南壁では約10cmの厚さがあり、幕末か明治初期の頃のものと思われる。④⑤はピットをはじめ大小の掘込みがあって土地活用がさかんな様相を示す。江戸時代である。⑥は30～40cmもある厚い層で、瓦器を包含する。中世である。西壁では⑥の下は黄褐色砂質の地山になり、前期難波宮回廊の掘立柱穴や難波宮下層の掘立柱穴が掘込まれている。

南壁では⑥の下に後期難波宮解体に関わる暗褐色粘質土層や難波宮整地層である茶褐色土層が認められる。

No4 第39次調査前半の西壁である。①～③は現代、④～⑦は近代～近世とみられる。⑧⑨は中世の層で、⑩⑪は後期難波宮期の層である。宮中軸線一帯の小石敷は⑨と⑩の間にあって、レベルはNo1のように高く、小石敷の下には土師器・須恵器・瓦を包含し、黄色地山を混入する暗褐色粘質土層があって小石を敷くための整地をしている。⑪の後期難波宮造営時の整地は広範囲に認められる。柱穴⑫は後期難波宮造中の建物である。⑬はこの調査地区南西部に堆積する土器包含層で難波宮下層遺跡に属する。

No5 閤門の北方第39次調査後半の北壁である。①黒色石炭ガラはこの地区まで広がっている。①～③は現代～中世、④は中世の層になる。⑤⑥は後期難波宮の小石敷と整地層である。

No6 第36次調査南壁、西面回廊東雨落溝部分である。①～④は現代から近世層、⑤は中世層である。⑥は後期難波宮解体時かその後の堆積層である。⑧⑦は回廊東雨落溝の掘形埋土と凝灰岩切石を抜き取った後の埋土である。⑦には後期難波宮の瓦が多く、⑧には凝灰岩の破片や粉が含まれている。⑨は後期難波宮の整地層で、No6では回廊上にあるが、部分的には雨落溝の東の内庭にもみられるものである。(八木)

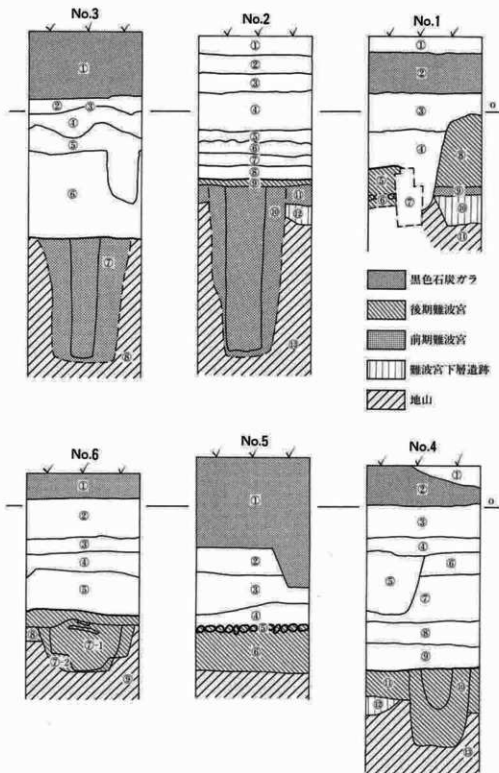


Fig.21 大領殿院地域の柱状断面模式図
(No1～No6の位置はFig.3に★で示す)

No 3 (35次)

- I ① 黒色石炭ガラ
- II ② 淡黄色砂質土
- III ③ 灰色土(含焼土)
- IV ④ 茶褐色砂質土
- V ⑤ 褐色砂質土(含粘土)
- VI ⑥ 茶褐色土
- VII ⑦ 前期柱穴
- VIII ⑧ 黄褐色砂質土(地山)

No 2 (33・34次)

- I ① コンクリート床
- II ② 茶褐色土
- III ③ 淡黒色土
- IV ④ 暗黄色土
- V ⑤ 暗灰色土
- VI ⑥ 黒色土
- VII ⑦ 灰色土
- VIII ⑧ 灰褐色砂質土
- IX ⑨ 橙褐色土(整地)
- X ⑩ 前期柱穴
- XI ⑪ 茶褐色土(整地)
- XII ⑫ 灰色粘土
- XIII ⑬ 赤褐色土(地山)

No 1 (37次)

- I ① 表土
- II ② 黒色石炭ガラ
- III ③ 茶褐色砂
- IV ④ 暗褐色土
- V ⑤ 暗褐色粘質土
- VI ⑥ 小石散
- VII ⑦ [地覆石]
- VIII ⑧ 版築
- IX ⑨ 褐色粘土(整地)
- X ⑩ 暗褐色土
- XI ⑪ 黄色砂質土(地山)

No 6 (36次)

- I ① 黒色石炭ガラ
- II ② 淡褐色砂質土
- III ③ 灰白色砂質土
- IV ④ 灰色砂質土
- V ⑤ 褐色細砂
- VI ⑥ 暗褐色粘質土
- VII ⑦ 雨落溝
- VIII ⑧ 黄褐色粘質土
- IX ⑨ 褐色砂質土
- X ⑩ 茶褐色粘質土(整地)
- XI ⑪ 黄褐色土(地山)

No 5 (39次後半)

- I ① 黒色石炭ガラ
- II ② 黒色土
- III ③ 黒褐色土
- IV ④ 褐色土
- V ⑤ 小石散
- VI ⑥ 暗褐色土(整地)
- VII ⑦ 黄褐色土(地山)

No 4 (39次前半)

- I ① 表土
- II ② 黒色石炭ガラ
- III ③ 褐色土(含焼土)
- IV ④ 淡灰褐色土
- V ⑤ 濃灰色土
- VI ⑥ 灰色細土
- VII ⑦ 淡黄褐色土
- VIII ⑧ 褐色土
- IX ⑨ 暗褐色土
- X ⑩ 暗茶褐色土(柱穴)
- XI ⑪ 灰色土(整地)
- XII ⑫ 暗褐色粘質土
- XIII ⑬ 黄色土(地山)

I : 近・現代

II : 近世

III : 中世

IV : 後期難波宮

V : 前期難波宮

VI : 難波宮下層遺跡

VII : 地山

※層名については調査当時のものをそのまま用いた。

第2節 前期難波宮の遺構

- 1 内裏南門 SB3301
- 2 内裏南面回廊 SC1301、SC3304
 - (1) 内裏南面東回廊 SC1301
 - (2) 内裏南面西回廊 SC3304
- 3 内裏西面回廊 SC803
- 4 内裏西長殿 SB1101、SB1102
- 5 西八角殿院東面回廊 SC3501
- 6 西八角殿院北面回廊 SC3504
- 7 西八角殿院南面回廊 SC3601

1. 内裏南門 SB3301(図面2・4、図版I-9)

桁行総長32.68m(112尺)×梁行総長12.26m(42尺)の7間×2間の巨大な門である。7間等間で桁行の柱間は4.67m(16尺)、梁間は6.13m(21尺)である。妻柱列から外側約1.5mのところ幅約60～80cmの溝状遺構SD3302・SD3303が存在した。これらを基壇拔取り跡と仮定し、心々の距離を測ると約35.64m、内々で測ると35.45mである。前期難波宮の基準尺=29.2cmを使うと心々では122尺で、内々で121.5尺となり、高麗尺あるいは大尺の100尺に近い[澤村仁1964]。

溝状遺構を掘上げていないため、基壇であるかどうか、基壇とすれば基壇の端がどこか、その形状はどうかなど具体的なことはわかっていない。さらに門の正面と背面にこの痕跡を求めたが、2.4mまでは小柱穴があって溝は確認されていない。存在しなかったのか削られたのか明らかではない。

第13次調査からの予測では、前期難波宮の遺構は柱間2.25mで4間の建物=長柄豊碕宮の小安殿とそれに取付く単面と予想していた[澤村1964]。今回の調査結果は予想と違って、柱穴は遺構検出面で南北250cm、東西200cmの隅丸長方形を呈し、東西方向の柱列が南北に3列存在することがわかった。柱の拔取り跡を掘りあげて確認した柱の径は60～75cmの巨大なものである。柱の拔取り跡の埋土には焼壁や木炭が顕著に見られた。

柱の拔取り方向は側柱ではおのおの建物の外側に抜き、中央の柱列では西から3本目と

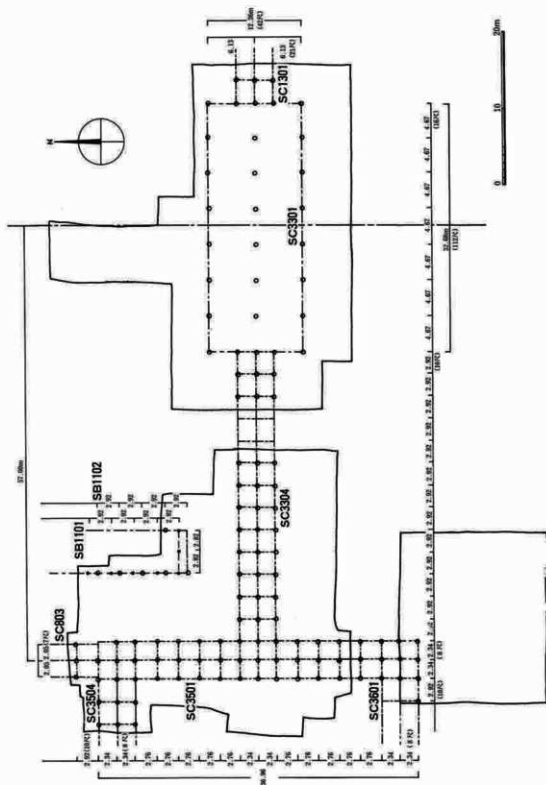
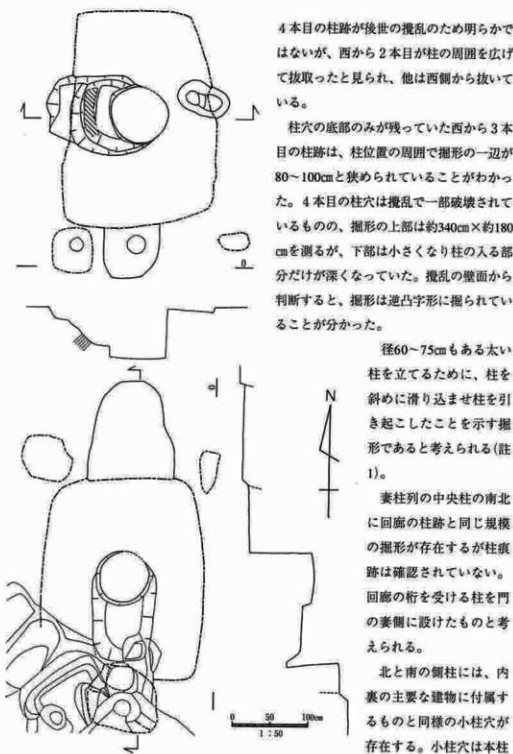


Fig.22 前期難波宮第33~36次遺構配置図



4本目の柱跡が後世の擾乱のため明らかではないが、西から2本目が柱の周囲を広げて抜取ったと見られ、他は西側から抜いている。

柱穴の底部のみが残っていた西から3本目の柱跡は、柱位置の周囲で掘形の一边が80~100cmと狭められていることがわかった。4本目の柱穴は擾乱で一部破壊されているものの、掘形の上部は約340cm×約180cmを測るが、下部は小さくなり柱の入る部分だけが深くなっていた。擾乱の壁面から判断すると、掘形は凹凸字形に掘られていることが分かった。

径60~75cmもある太い柱を立てるために、柱を斜めに滑り込ませ柱を引き起こしたことを示す掘形であると考えられる(註1)。

妻柱列の中央柱の南北に回廊の柱跡と同じ規模の掘形が存在するが柱痕跡は確認されていない。回廊の桁を受ける柱を門の妻側に設けたものと考えられる。

北と南の側柱には、内裏の主要な建物に付属するものと同様の小柱穴が存在する。小柱穴は本柱

Fig.23 前期内裏南門柱穴と先行する柱穴
東から4本目の中央柱(上)と、3本目の南側柱(下)

から外方1.4mのところにあり、本柱の掘形を切って作られ、本柱の抜取り穴で壊されている。柱穴からは焼壁・木炭が検出される。ここでの掘形の大きさは、一辺が約80cmで柱の太さのわかるものは約30cmである。小柱穴の性格については、当初は長柄豊碕宮の建物を補修した軒支柱説[中尾芳治1972]が主であったが、近年では基壇説も存在する[中尾1986、植木久1991]。

さらに、前述の小柱穴の北および南の外方1mに一辺60～100cmの柱穴が存在する。小柱穴が二重に付属するのか、前期難波宮跡に先行するものなのか断定はできない。先の小柱穴と合わせて二重に存在するとすれば、内側のものは基壇でその外に裳階か土庇が付くと考えるのか現状では不明である。ほとんどが攪乱を受け、柱抜取り跡の焼壁や木炭の確認もできていないが、南門に関係する柱穴の可能性あることを指摘するに止める。

基壇の積土は明確にはできなかったが、基壇内に前期難波宮の工事に伴う足場穴が、中央柱と南側柱のそれぞれ南と北にある。足場穴は掘形の隅外方に一辺30～50cmに約20cmの柱穴がある小掘形が2箇所ずつ9個所の柱跡で確認された。柱穴からは焼壁や木炭は出土せず、建設途中の足場穴で、建物完成時には撤去されていたことがわかる。

さらに、中央柱列と北側列の南と南側列の北に本柱に切られた掘形が存在する。掘形の方が門と一致している。調査時に遺構の切合い関係を慎重に検討した結果、本柱によって切られていることが判明している。しかし、この遺構はSB3301より古いことは間違いないが、方位が難波宮跡に近いことから、長柄豊碕宮の造営前ではなく、前期難波宮に関係する可能性も残されている(註2)。

門の柱の抜取り跡を掘下げたとき、タタキメをスリ消した瓦の小片が数片出土した。それらは、後期難波宮の瓦ではなく、前期難波宮に並行するものと考えられた。しかし、内裏南門を瓦葺きと考えるには出土数があまりにも少く、他からの混入かあるいは部分的に瓦を使用していたものと考えられる。また、柱の抜き穴からは土器の小片が検出されているが、7世紀中葉を下るものではなく、前期難波宮＝長柄豊碕宮説を否定する結果は出していない(第IV章第1節)。

2. 内裏南面回廊 SC1301・SC3304

(1) 内裏南面東回廊 SC1301(図面4、図版5)

第13次調査地区を再度調査した。第13次調査では、この回廊は柱間2.4mの単廊と考えられていた。ところが、回廊の北側柱と考えていた柱より北2.4mに、後期大極殿回廊の雨落

溝に切られて、抜取り跡に焼壁や木炭を含んだ柱跡が存在し、梁行約2.4m(8尺)2間の複廊であることがわかった。桁行は回廊と門の妻側柱の距離で約2.92mと考えられるが、約5mの調査区の範囲では桁行方向の柱は確認されていない。

この部分は地山の上に整地層があり、その上に回廊がつくられている。回廊の中央柱の下には、木の礎板が据えられていた。また、その両側の柱跡埋土内には小石が敷き詰められている面があった。いずれも、地盤が弱い整地層上に柱を立てるために施された補強と考えられる。

(2) 内裏南面西回廊 SC3304(図面4・5、図版6・7・21~23)

内裏南面西回廊は第33・34次調査と第35次調査の2回の発掘調査で柱跡2箇所約5mの部分が未調査であるが、ほぼ全貌を明らかにした。後期の大極殿院回廊と重複する部分は柱位置などの確認は困難で、北側の柱列は雨落溝石の抜取り跡で一部が壊されてはいたが、柱位置を確認することができた。

確認された回廊の規模は、南門との取付き部を含めて西八角殿院(註3)の東回廊に接するまで13間分、総延長37.96mである。柱間は東回廊の柱間と同じ桁行の2.92m(10尺)、梁間は2.34m(8尺)である。柱の抜取り跡は東回廊と同じように北側から抜いている。柱穴の直径はほぼ約40cmの比較的大いものである。

回廊の南側柱筋の南70cmのところに、幅約50cmの焼壁や木炭を含んだ埋土の溝跡SD3502が存在する。回廊の雨落溝とすれば、柱位置から考えてあまりにも軒の出が短かすぎると考えられる。また、南側柱の外方約70cmに存在する小柱穴は、上記の溝を切るようにして存在している。小柱穴の掘形の大きさは一辺50cmで、柱の抜取り穴には焼壁や木炭が含まれている。

南門の西妻側柱の中央柱から南北おのおの2.34mのところに柱穴が存在する。その位置は回廊の側柱の延長上にある。南門の東妻と同じ構造で門と回廊が接続するものであろう。

3. 内裏西面回廊 SC803(図面5、図版22・24-1・25-1)

西八角殿院東回廊SC3501に続き内裏の西面を画する回廊で、第35次の発掘調査では柱穴1列分が検出された。すでに1958年第8次調査のM地点、1959年第9次調査、1975~1977年第75・112次調査[藤原光輝1960・中尾芳治1981]でも回廊とそれにつづく内裏の門が検出されている。この回廊は桁行2.92m(10尺)、梁間2.05m(7尺)×2間の複廊である。桁行2.92m×

7間、延長20.44mで門跡SB801に至る。

4. 内裏西長殿 SB1101・SB1102(図面5、図版21・25)

第35次調査で西側柱5間分と東側柱1間分を検出した。この建物の北部は1958年第8次M地点の調査[藤原光輝1960]と1960年の第11次調査[澤村仁1961]で知られていた。1959年に行われた第10次調査で、西長殿と対称の位置に存在する東長殿の北端が検出され、建替えの状況も明らかにされている[澤村1961]。

それによると、この建物は当初東西2間、南北13間以上の細殿風建物SB1101で、北から5間目に間仕切りあることがわかっていて、桁行は2.92m(10尺)で、梁間は2.82m(9.65尺)×2間の建物であった。この建物には建替えが認められた。建替え後の建物SB1102はSB1102の間仕切りより北を廃し、間仕切りより南の柱位置を約1m南へずらして建替えが行われていた。建物の総長は32.12m、桁行寸法は2.92m(10尺)の11間である。建替え後の建物の柱の抜き取り穴からは、焼壁や木炭が出土し、天武朱鳥元年(686)の火災により焼失したことがわかる。間仕切りより北部を廃したのは、門SB801の目隠しになるような配置であったので、見通しを良くしたためと考えられている[澤村1961]。そして、最初の建物SB1101の桁行総長が16間の46.72mであることが確認された。

建替えは最初の建物の柱の抜き取り穴をそのまま利用し、南に1mずらして建てていることも確認された。この建物の発見は難波宮跡の調査において、火災痕跡のある掘立柱の建物が、長柄豊碕宮まで遡る可能性が高いことを想定するきっかけになった記念すべき遺構である(註4)。

5. 西八角殿院東面回廊 SC3501(図面5・6、図版21・22・24・29)

この回廊は内裏南門から西に延びる回廊SC3304の西端に直角に取付くもので、北端から内裏・西回廊SC803が北に延びる。南半部は内裏南門前面の朝堂院の内庭西側を囲む回廊をなす。1972年にこの回廊の西に八角殿が検出されたので、西八角殿院の東回廊と呼ぶことになった(註5)。

第17次と第35次、第36次の発掘調査においてこの回廊の全貌は明らかにされた。回廊の全長は43.24mで、その間の柱間は16間分である。そのうち北・中央・南の各2間は、おのおの回廊SC3504・SC3304・SC3601と交わり真隅をなし、柱間はそれぞれ2.34mである。SC3304から北5間と南5間の合わせて10間分の柱間は、2.76m(約9.5尺)である。回廊

の柱の径は約40～45cmで内裏南面回廊と同じく太い。

この回廊の外側には、側柱から約70cmのところの小柱穴と溝SD3503が付属している。小柱穴は前期の建物に共通するもので、いずれの小柱穴も本柱を切り、本柱の抜き穴で切られるという関係にある。掘形の一边は40～50cmで、柱穴がわかるものは直径が約20cm程度である。

溝SD3503は幅約50cmを測り内裏南面西回廊の溝SD3502と同様に小柱穴に切られている。溝と小柱穴がともに焼壁、木炭を埋土中を含んでいるので、同時に撤去・整地されたとすると、遺構の性格の判断に苦しむ。小柱穴を木製基壇の杭と見る考えがあるが[植木久1991]、その考え方の方が雨落溝説より理解しやすい。

この回廊最北端の東側柱が1本確認されていない。他の柱の根入れの深さが、調査時点の地表から1m程度あるものが多いなかで、ここだけが確認されないことは理解しがたいことである。しかし、柱穴の深さが20cmほどのものも存在するので、この部分が非常に浅い柱穴であったということも考えられる。

6. 西八角殿院北面回廊 SC3504 (図面5、図版21・22・24-1・25-1)

内裏南面西回廊SC3304の中央柱から北へ7間目を中央柱として西へ延びる回廊である。第35次調査で検出したものは2間分で、桁行は2.92m(10尺)、梁間2.34m(8尺)2間の複廊である。SC3304とSC3501の側柱に付属する小柱穴は、ここでも北側柱に付属している。本柱からの小柱穴までは、約1mである。SC3501の北端の2本、すなわちSC3504との真隔部の北側柱に小柱穴が付属している。ここから北は梁行が2.05m(7尺)と狭い内裏西面回廊SC803がはじまるが、回廊内に小柱穴があることは理解しがたい。

一方、内裏南門SB3301と内裏南面東回廊SC1301・内裏南面西回廊SC3304との接続に小柱穴は存在しない。このような建物の接続部の小柱穴の存在をどう理解したらよいのか。この地点で回廊の規模に変化があるのは、八角殿を取巻く回廊が特殊な存在で、内裏南門とそれに取付く回廊および八角殿院回廊を荘厳化するために何らかの施設＝木製基壇が設けられたためと理解することも可能である(註6)。しかしながら、ここでは結論は差し控える。

7. 西八角殿院南面回廊 SC3601 (図面6、図版29～31)

西八角殿院東面回廊SC3501の南端から西へ延びる回廊で東面・北面回廊SC3504と同様に複廊である。第36次調査でSC3501の南端の4個所の柱と西へ折れ曲がる1個所を検出し

た。SC3501の2間分の柱間は、2.34m(8尺)で、SC3601と変わる回廊の真隅の部分である。次の1間は2.92m(10尺)で桁行寸法と同じで、西八角殿南面回廊の側柱をなす。この外側にも小柱穴が付属している。側柱と小柱穴との距離は、他の部分ほどははっきりしていないが、本柱の外ほぼ70cmのところが存在する。(長山)

註)

- (1) NW87-45次調査の成果から植木久氏によって「斜路」と理解されている掘形の構造と同じものと考ええる。ただし、植木氏はこの調査で検出され、門の柱で切られた南北方向の方位をもつやや小さい掘形を含めて斜路と考えているが、それらの柱の間に切合い関係がある。掘形の規模は大きく、逆凸形を呈する掘形が斜路の機能もあわせ持ったと考えている。
- (2) 前期難波宮＝長柄豊碕宮説にたてば、それ以前の建物は造営前で6～7世紀の建物群として考えられるが、西長殿のように、前期に造営されたものが建替えられている例もあり、ここでもその可能性についても保留しておきたい。
- (3) 八角殿の発見は1972年の第42次調査のことで、この調査時点では未検出であった。東八角殿も未発掘であったので、ここで西八角殿と称することにはできないが、現状からの理解をすすめるために西八角殿院と称した。
- (4) 前期難波宮の遺構の中で、焼失した建物と重複して、それ以前の遺構が確認されているのは現在のところ、この東・西の長殿のみである。初期の調査では、この重複する遺構を古い方を第Ⅰ期、焼けたものを第Ⅱ期と呼び、焼失した第Ⅱ期は天武朝と考えられた。したがって、第Ⅰ期を長柄豊碕宮の遺構と推定し、今日の研究の方向性を示したものである。
- (5) 1987年難波宮跡の整備事業に伴うNW87-45次調査で東八角殿院が確認されたため西側のものを西八角殿院と呼ぶ。
- (6) 木製基壇説は[植木1991]で一部を発表されているが、1995年1月に開催された「前期難波宮建造物研究会(仮称)」で植木氏がその全容について報告・発表された。未刊行。

第3節 後期難波宮の遺構

後期難波宮大極殿院に属する主要建物は次の通りである。

- 1 大極殿 SB1321
- 2 軒廊 SC3321
- 3 大極殿後殿 SB1326
- 4 北面回廊 SC1323、SC3324
 - (1) 北面東回廊 SC1323
 - (2) 北面西回廊 SC3324
- 5 西面回廊 SC3524
- 6 閤門と南面回廊 SB3922、SC3921、SC3924
- 7 その他の遺構

1. 大極殿 SB1321 (図面2・3・7、図版33～63)

後期難波宮の大極殿である。遺構は後世の攪乱・削平を受け、土壇は保存の良い部分で旧地表より0.8mほどが残存するに止まり、礎石や礎石据付け痕などは全く残っていない。

しかし、大極殿基壇周囲は小石敷や地覆石抜き跡・階段跡がよく残っており、一部には地覆石が原位置を保っていることから、ほぼ正確に基壇輪郭とその規模を復元することができる。

基壇の築成 (Fig.24・25、図版38・51・52) まず最初に土壇基部北端から約2.5m以南の前期旧地表を約15cmほど浅く掘込み、その上に黄褐色土を8～15cmの厚さで南北約17mにわたって版築している(土壇B)。次いで東西約40m、南北約19mの平面の南北面に各3箇所、東・西面南寄りに各1箇所の階段張出し部をもつ大極殿土壇の輪郭に合わせて、周囲の前期難波宮旧地表を約15cm掘下げ、大極殿土壇基部を削り出す。

版築土壇の最下部には朱鳥元年正月の火災によるものと思われる焼土や炭化物が、土壇盛土内には前期旧地表の小石敷のものと思われる小礫が混在する。この版築土壇築成後、その北側に約3m土壇を継足す形で南北幅約20mの大極殿土壇を築成している(土壇C)。

一方、大極殿土壇南西部の東西断面の所見によると(Fig.24・25、図版38)、上記の版築土壇は、大極殿西辺土壇(土壇A)を切込んで築成されており、きわめて複雑な築成過程を示

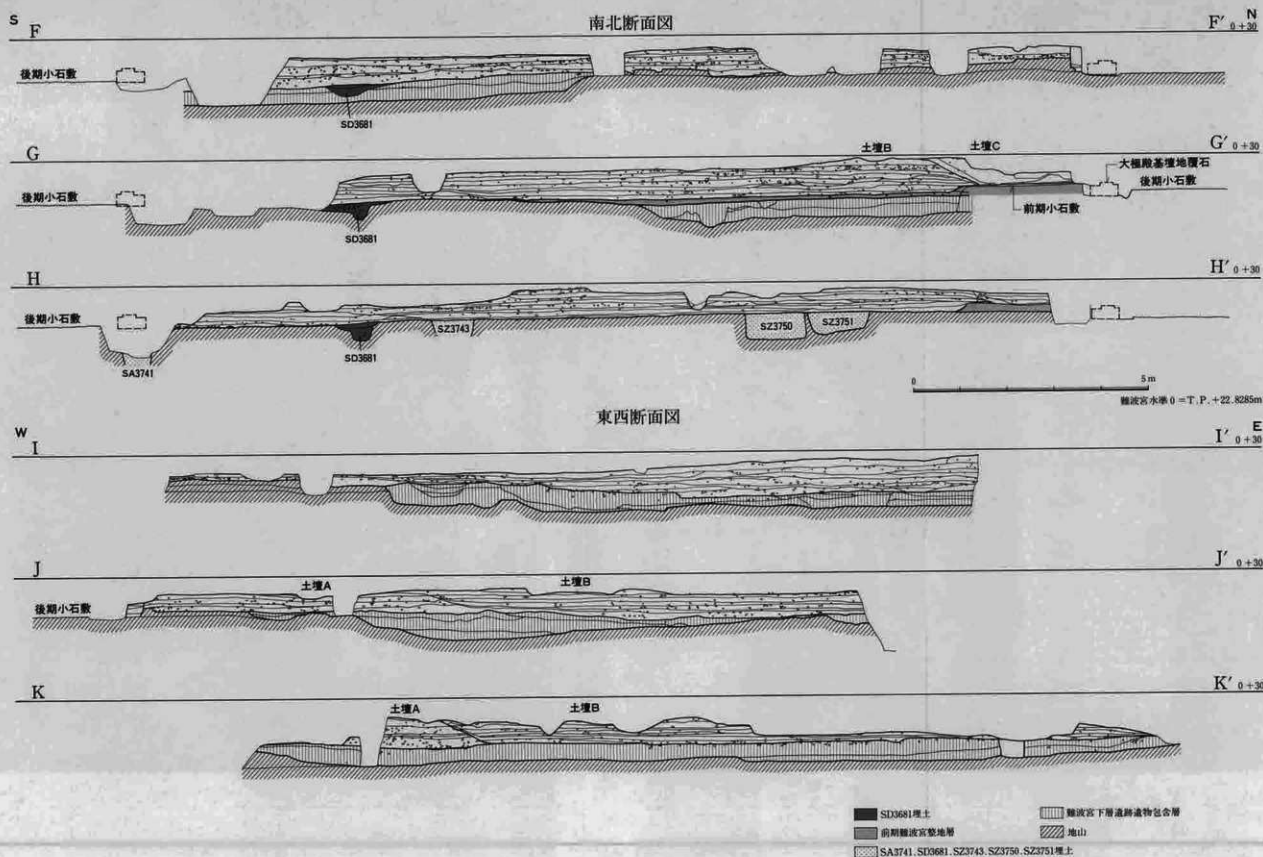


Fig.24 後期大極殿土壇南北・東西断面図(断面位置は図面7参照)



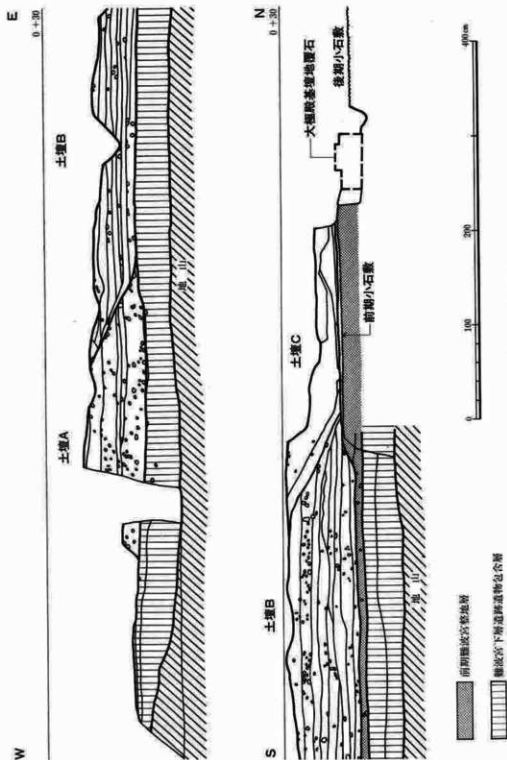


Fig. 25 後期大極殿土壇東西(K~K')・南北(G~G')断面図(部分) 1:40

している(註1)。

階段 (図面7、図版36～41・61・63) 階段は7個所ある。基壇南面では中央間に幅約4.44m (15尺)、出2.37m (8尺)の中央階段、その東・西それぞれ3間目の位置に幅3.99m (13.5尺)、出2.37m (8尺)の東・西階段が取付き、北面では南面の東・西階段に対応する位置に階段が取付く。北面中央間には大極殿土壇築成当初に削り出された階段土壇の上に大極殿と同後殿を接続する軒廊SC3321の土壇が築成されている。

東・西の側面階段のうち西面階段は後世の擾乱を受けていたが東面階段はよく残っていて、大極殿建物の南底の位置に幅3.25m (11尺)、出2.37m (8尺)の階段が復元できる。

階段は大極殿土壇基部と同時に周囲の旧地表を削平して削り出されているが、その築成状況はよく分からない。

基壇化粧 (図面7、図版45～49) 基壇化粧は凝灰岩切石製の壇正積基壇である。基壇化粧の凝灰岩切石はほとんど全てが抜取られていて、その抜取り跡が幅50～70cmの溝状になって建物・階段土壇の周囲を巡っている。ただ、北面東階段の東入隅部分と、大極殿と同後殿SB1326を結ぶ軒廊SC3321の西入隅部に大極殿北面の凝灰岩地覆石が一部残存していた。

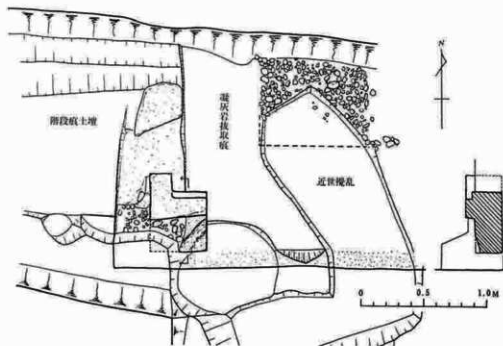


Fig.26 後期大極殿北面東階段入隅部地覆石(『難波宮址の研究』第5-1 1964年)

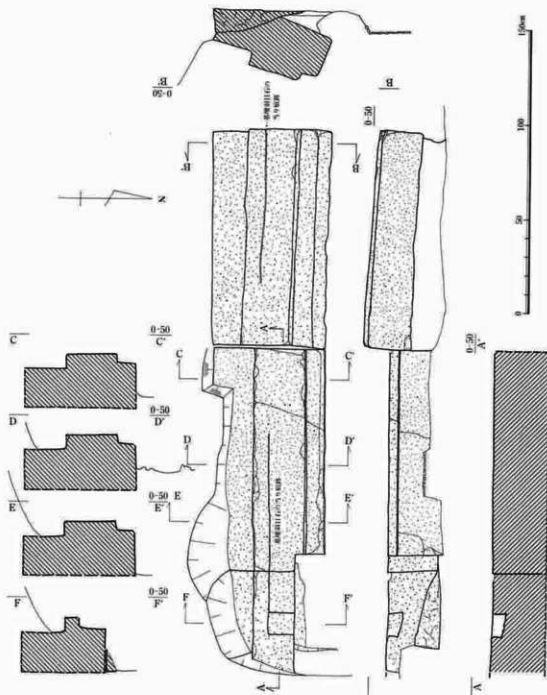


Fig.28 後期古墳群地蔵石表圖 1:20

北面階段東入隅部に原位置を保っていた凝灰岩地覆石は第13次調査で検出し、第37次調査で再発掘したものである。平面はL字状、東側断面は凸字状を呈し、西長辺62cm、東短辺約47cm、厚さ29.8cmを計る。前面に幅5.2cm、高さ5.3cmの上角を切欠き、後部には深さ7.0cm、長さ26.5cm、幅45.0cmの仕口をもつ(Fig.26)。

軒廊取付き部西に残る地覆石は3個で、西端の1個は抜取り途中で放置された状態で出土したが、後の2個は原位置に残存していた(Fig.27・28)。

現位置で残る2個の地覆石のうち西側のものは、幅58.8cm(抜取り途中で放置された同型式の地覆石による推定)、長さ117.1cm、厚さ29.5cmである。外側上方の切欠きは、幅10.5cm、高さ4.5cmあり、羽目石の組み合わせる後部の仕口は、幅18.0cm、深さ7.0cmという立派なものである。その北東角は軒廊西側地覆石との組合せのために幅9.0cm、長さ15.0cmが切欠かれている。また、上面には後部切欠きから8.5~9.0cmの位置に羽目石の当り痕跡が残っていた。

東側の地覆石は軒廊SC3321西側に接する位置にあり、西端から21.5cmには軒廊の羽目石を受ける幅11.8cm、長さ13.2cmの南北方向の溝状仕口を穿っている。

基壇化粧は原位置に残された凝灰岩地覆石や各所から出土した化粧石の断片からみて、東を用いない古式の塼正積基壇であったと推定されるが、地覆石の外方には布石(延石)がめぐっていた痕跡や雨落溝などは認められなかった。

小石敷 SX1322 (図面7、図版34~50) 後期大極殿土壇の周辺には、旧地表を示すと思われる小石敷が攪乱を受けながらもよく残っていた。直径3.0~8.0cmの礫を敷きつめたもので、上面には大極殿解体時の瓦片が堆積している。大極殿土壇の地覆石と小石敷が原状で残る軒廊取付部南西入隅部(X・Y17区)の所見では、小石敷は大極殿基壇地覆石上面より約15cm下にはほぼ平坦に敷かれている。小石敷は元来は地覆石に接していたと思われるが、長岡宮への移建に伴う基壇解体時の地覆石抜取りのために、地覆石外面に沿って約25cm幅で小石敷面が掘込まれていて、その部分の小石敷は欠失している(Fig.27、図版47)。

小石敷は大極殿基壇周辺部はよく残っているが、基壇から離れるに従って後世の攪乱のために残存状況が悪くなる。第37次調査区域では基壇南面より約11m離れたN・O15区の範囲まで小石敷の遺存が認められた(図版37-1)。

第39次調査では大極殿基壇南面より約15m南の前半調査区域や、約30m南の大極殿院回廊に近接した後半調査区域で同様の小石敷面が検出されていること、大極殿と同後殿の間には全面に小石敷が存在していることなどから考えると、大極殿を囲む大極殿回廊内庭部分

は全面が小石敷になっていたと思われる。

小石敷面の高さが、大極殿南面基壇周囲とその約10m南辺で約6cmの比高差があることからすると、小石敷面は大極殿基壇周辺部を最高所として周辺へゆるやかに下降しながら大極殿院回廊にいたっていたものであろう。

大極殿基壇の復元 大極殿基壇の規模は残存していた土壇の規模・周囲に残る地覆石採取り跡・原位に残る地覆石の形状・階段の幅と出の寸法などから、東西長(地覆石外面間距離)が41.71m(141尺)・南北長21.16m(71.5尺)と復元できる。

基壇高さは各面階段の長さが2.37m(8尺)であるので、階段の勾配が45°であると基壇高さも2.37m(8尺)となるが、奈良時代の凝灰岩基壇に伴う階段で正面中央の階段の勾配がややゆるやかな例があるので(註2)、難波宮の場合も2.10m(7尺)ほどと推定しておきたい。

建物の柱位置は基壇が削平されているために全く不明であるが、壇正積基壇では柱筋が階段耳石と一致し、かつ柱間寸法が尺の完数または5寸の端数程度で割付けられていたと仮定すると、桁行9間、梁間4間で、正面の柱間は中央15尺(4.44m)、両脇1間14尺(4.14m)、次の間2間13.5尺(3.99m)、隅間11尺(3.25m)、側面は中央2間14尺(4.14m)、隅間11尺(3.25m)と推定できる。桁行総長は119尺(35.20m)、梁間総長50尺(14.79m)となる(註3)。

2. 軒廊 SC3321 (図面4・7、図版2・3-2・42)

大極殿SB1321と同後殿SB1326を繋ぐ軒廊で、第33・34次調査でその北半部、第37次調査で南半部を検出した。大きく後世の攪乱を受けているが、地覆石の採取り痕跡から土壇の南北長9.5m、東西幅6.0mに復元できる。礎石痕跡などは全く残っていなかった。

(中尾)

3. 大極殿後殿 SB1326 (Fig.29、図面4、図版1・7・10~18)

基壇の築成 後殿SB1326の基壇は土壇の基底部を残して消失している。基壇築成の第1段階としては基壇周囲の地覆石設置部分を掘下げ、背面の雨落溝はさらに溝状に掘って、地表面である外方も広く削平している。後殿は前期難波宮内裏南門と重複しているが、後殿基壇は地覆石底面から約20~30cm上まで全面が削平されている。地山が露呈している所もあるが、下位には5世紀代の窠状遺構の底面が残り、前期の整地層や部分的に50~60cmもある前期か後期時期を決めがたい厚い整地層がある(註4)。後殿土壇は削平後改めて盛土を

しており、土壇北部では幅2.5m、南半部では幅約1mの東西に帯状に長い、薄層が残っている。そして土壇の縁辺部は丁寧に築いたあとがみられる。

階段 階段の跡が明確にわかる所はない。平城宮第二次大極殿院後殿跡では7個所に階段があり、それを参考にしてみると背面の中央と東面の南半には階段がついていた可能性もある。背面の階段は雨落溝の幅が同じなので、平城宮後殿のように内側石を広くして階段をつけたとは考えられない。溝側石に板石(橋)を架けた痕跡に似た凝灰岩粉の散布する個所が中央部外側石の外にある。だが範囲は不明確で側石上端よりも低い位置に散布しているなど、十分な資料とはいえない。大極殿のように基壇の外側につく状態ではない。

次に後殿基壇東縁で回廊と接続する所に南北幅約1.3mのに基壇化粧石の抜き取り跡がある。平城宮では後殿に取付く回廊の内側に階段跡があり、難波宮では凝灰岩切石の階段脇羽目石断片が回廊南雨落溝内から出土していることが階段跡の傍証となろう。

大極殿後殿の規模 基壇の化粧石は全部抜取られている。凝灰岩小塊が抜き取り穴埋土に混り、裏込めや抜き取り面に凝灰岩粉が散布することや、また大極殿に残された地覆石からみて大極殿後殿SB1326は凝灰岩切石を用いた壇正積基壇であったといえる。

地覆石については溝状の抜き取り跡や凝灰岩底面の痕跡がある。後殿前面には地覆石抜き取り跡が土壇と地表である小石敷との間に幅50～60cmの溝状に残る。溝状底面の深さは難波宮基準高から58～60cm下である。大極殿SB1321から軒廊入隅には地覆石が原位置を保っており、その幅は約60cm、厚さは約30cmで上端は難波宮基準高から30cm低い。後殿に用いられた地覆石は、抜き取り跡から地覆石の幅は50～60cmで、上端を難波宮基準高から30cm下に合わせると石の厚さは28～30cmと推定できる。

後殿SB1326の背面から東・西の回廊SC1323・SC3324に接続する所までは、雨落溝の内側石の内側に難波宮基準高から53cm下で幅50～60cmの平坦な面が帯状にめぐっており、地覆石の設置された跡と考えられる。

後殿南西隅から西回廊SC3324との接続部についてみると、後殿南面の地覆石溝状抜き取り痕跡は中軸線から西16.28mで北折し、回廊南雨落溝SD3325の東端を越えて出隅から約3.3mまで同様の状態がつづく。それより北は凝灰岩の抜き取り痕跡が約20cm浅くなる。一方南西出隅から約2m西へは難波宮基準高からの深さ約53cmで回廊部分の抜き取り跡につながる(Fig.29)。西方へつづく抜き取り痕跡は回廊南縁の地覆石にあたり、北方の後殿と西回廊の接続部分は後殿前面とは基壇築成の構造が異なり簡略化されていると思われる。

後殿基壇の南東隅辺は攪乱を受けて、南西隅で確認した部分は消失している。原位置に

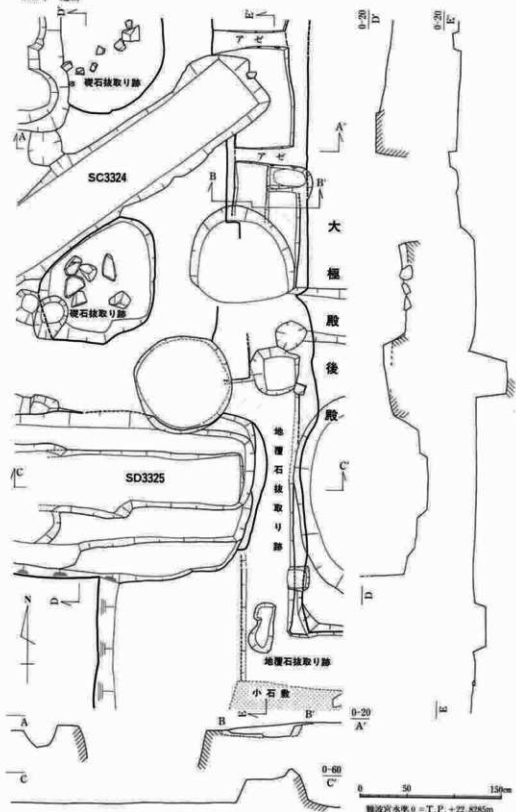


Fig.29 後期大極殿後殿南西部から回廊取付き部

残る北面東回廊南雨落溝SD1324は、溝の西端が中軸線から東16.20mで、側石は難波宮基準高より61.3cm低く、溝小口留側石の上に地覆石をのせると南西隅の状態と同様に考えることができる。なお、北雨落溝の小口留側石は中軸線から東16.15mの位置にある。

以上のことから、後殿基壇の規模は東西約32.5m、南北約13.7mが考えられる。

雨落溝 SD3323 大極殿後殿の北側には雨落溝がある。溝は後殿北背面から南折して東縁・西縁に沿い、各々大極殿院北面の東回廊・西回廊の北雨落溝へと繋がる。

溝石はすべて抜取られている。抜取り跡は北辺の小石敷の残る所でみると幅が120cm前後でかなり整然とした作業をしている。小石敷側から深さ約15～20cm斜めに掘込み、幅10～20cmの平坦面に達す。平坦面は難波宮基準高からの深さが60cmで、北側石の抜取り痕とみられる。その南には幅約20cmで北辺と南辺が平行し、長さが50～60cmから100cmの浅いU字状の凹みが東西に連続して並んでおり、北東隅では東辺約1mの所までつづく。その内側には南北の幅約40cm難波宮基準高からの深さ71～72cmから74～75cmの平坦面が東西に長く帯状にある。この面は溝底石の据付け痕で、北側に連なる凹みは底石を北側から抜取るために一段深く掘った穴とみられる。内側石の据付け痕は難波宮基準高から61～66cmの深さに残る。同じ内側石の位置でも後殿西北隅から2～4mの間は北側と同様の凹みが連続していた。後殿北西隅から西縁にかけては幅約90cm、難波宮基準高からの深さ73～78cmの浅いU字状の抜取り跡がある。

小石敷 SX3322 後殿の前・背面には小石を敷いて舗装している。前面の軒廊脇では上面が難波宮基準高より43～45cm低く、2～3重に敷いている。東・西方に行くとき次第に小石は薄く疎らになり、後殿基壇の東・西端付近では難波宮基準高より60～65cm低くなって消失する。背面は雨落溝から北へ約5m中軸線に近い所では6～7mまで残っており、東は雨落溝よりも約1.5m、西は約1m外方までの範囲で、後殿に近い所が密で離れると疎らになる。

4. 北面回廊 SC1323、SC3324

(1) 北面東回廊 SC1323(図面4、図版5)

第13次トレンチ調査では後殿取付き部での回廊の掘立柱3個所と回廊の南と北の雨落溝SD1324・SD1325を検出している。柱穴径32～36cmの3本の柱は中軸線から東約17.5mに梁間3.1mで並び、北側柱と南側柱には腐食した柱根が残存していた。南の雨落溝の西端には凝灰岩切石が外側石・底石・回廊地覆石を兼ねる内側石に構築された状態で原位置に約1m残っていた。溝幅44.5cm(1.5尺)溝の深さ14.5cm(5寸)で、高さは側石上端が基準高より

61.3cm低く、溝底が77cm低くなる。溝西端には小口留石があり、中軸線からは東へ16.2mに位置する。北雨落溝の小口留石は東16.15mにあり、約5cmの食い違いがみられる。

大極殿院北面西回廊は第33・34次・第35次調査の結果、礎石建物で梁間は2.51m(8.5尺)×2間であることがわかった。そこで東回廊の柱跡を再検討してみると、南側掘立柱の北に東西160cm、南北100cm位の掘形が重複している。切合い関係がいま一つ明らかでないが、根石とみられる石も掘わって礎石据付け跡とみえなくもない。中央柱や北側柱にはこのような跡はみられないが、西側回廊が礎石建物であることから考えると、東側回廊も礎石建物で、梁間も8.5尺に設計が統一されていたのではないだろうか。当初梁間3.1mの掘立柱が誤りか設計変更されたかはわからないが、掘立柱の根元を切って礎石建物に改めた可能性がある。

(2) 北面西回廊 SC3324 (Fig.29・30、図面4・5、図版6・7・21~23)

北面西回廊は後殿取付き部分を第33・34次調査で、西半部を第35次調査で調査し、取付き部で5箇所、西半部で8箇所の柱跡と、南と北の雨落溝SD3325・SD3326、工事用足場穴SS3527が検出された。複廊の礎石建物で雨落溝心々距離は9.35mあり、後殿地覆石の西端から北面西回廊の出隅までの長さは約38.7mになる。

柱跡 礎石はすべて抜取られている。掘形の多くは一辺約120cmの隅丸方形で浅く、根石が残っているものもある。礎石抜き穴には瓦片が混入しており、底面に20~30cm大に凹んだ根石の抜き跡のあるものもある(図版27)。

南雨落溝 SD3325 南雨落溝は攪乱された所が多い。中軸線西44mの畦断面では底石抜き幅が約50cmで、内側石底面平坦部は36cmである。溝の構造は南・北とも基本的には同じであろう。底石抜き跡の位置は回廊中央柱から南4.7mである。溝底石抜き跡の底面は北雨落溝のそれより3~6cm低い。

この雨落溝は中軸線西45.85mで南折して西面回廊の東雨落溝SD3525となる一方、そこで分岐し西へ直進して西回廊を暗渠SD3521となって横切り、回廊西方ではU字状の溝SD3522となって大極殿院内の排水をしている(Fig.30)。

暗渠 SD3521 北面回廊南側の雨落溝は雨水の排水のために中軸線から西46~55mの約9m間は西面回廊を溝が横断している。溝には東部で底石が1枚と連続した3枚が原位置に残っている。底石は幅約30cm、長さ60~65cm、厚さは約18cmの凝灰岩切石で、横に並べたあと側石との接合部を2cm程切欠いて溝底内法を53~54cmにつくっている。底石の抜き跡は雨落

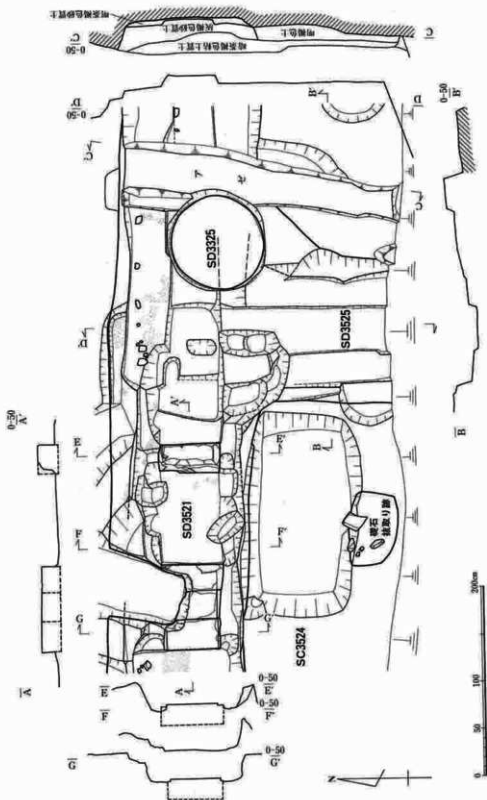


Fig. 30 後期大佛殿院回廊北西入隅部

断頭高水準 0 = T.P. + 22.825m

溝部に比べて約15cm低く、溝幅は約10cm広くなる。掘形は北側の幅を約20cm広くしている（Fig.30、図版28）。

溝 SD3522 暗渠は西面回廊から出て西雨落溝と交差したあとは、上幅70～90cm、底幅約40cm、深さ約20cmのU字状の溝に変わる。開口した素掘り溝が木樋などの施設があったかは不明である。

北雨落溝 SD3326 掘形は幅135cmで広いところは約150cmあり、浅いU字状である。凝灰岩拔取り跡の埋土は、下部は瓦片・凝灰岩片を含む灰褐色土層で、上部は暗褐色～暗茶褐色粘質土層で表層に瓦が多い。溝石は全く残っておらず、側石・底石の拔取り跡が段状に凹んでいる。中軸線から西40.4mの地点で溝石拔取り跡をみると、底石は底面の幅40cmで、それより5～7cm高い掘込みの上端では約45cmあり、外側石の拔取り跡は約30cm、内側石は約20cmの平坦な面が残っている。北西出隅底石の中心は回廊中心から北4.65mで、中軸線からは西55.20mになる。溝底石拔取り跡の底面は中軸線西32mから北西隅までの23.2m間で、約3cm西が低い。

回廊の規模 回廊は南と北の雨落溝の心々距離が9.35mで、土壇の幅は約8.85mである。溝は凝灰岩切石が残存する北面東回廊南雨落溝と同じ構造で、内法は44.5cm、深さは14.5cmあり、内側石は地覆石を兼ねていると考え、回廊の基壇幅は地覆石外面間で約8.9mになる。

中軸線から回廊北西出隅西雨落溝の中心までの距離は55.20m、回廊基壇地覆石西端までは54.98mである。回廊の東西規模は、後殿基壇地覆石西端から北西出隅の西雨落溝心までの距離は約38.9m、回廊基壇地覆石端までは38.68mになり、同様に後殿と回廊入隅間は、雨落溝中心までが29.55m、回廊基壇地覆石までが29.77mであると考えられる。

梁行は柱跡から2.51m（8.5尺）×2間である。

桁行についてはいくつかの問題がある。まず柱跡は後殿西端から1本目の礎石拔取り跡が、中軸線西17.2～18.4mに南北3箇所並び、2本目の柱跡は西20～21mに3箇所ある。その西には未調査地区が6mあって、柱跡は中軸線から西に約33m、36.6m、40.3mと、約3.7m間隔で残っている。2本目と約33m西にある柱との間を4間として割付けると3m強、3間として割付けると4.1mになり、門などで柱間が広くなったり狭くなったりする所があったとしてもうまく割付けられない。

先の2本目の南側柱には、これを切る柱跡が中軸線から西20.8～22.0mにあり、中央・北側柱は明らかでないが、ここが柱位置とすると後殿西妻から1本目の柱間が約3mで次からは約3.8mの等間で割付けられる。従って2本目の柱は西寄りの柱跡を採っておきたい。

次に北面西回廊の桁行柱間は、後殿に取付く1間を約3m(10尺)とし、回廊北西隅の2.51m(8.5尺)×2間とその間の約3.8m×8間と合わせて11間になる。柱跡は礎石の抜取り穴で正確な柱位置は不明で、また北西隅の柱跡は消失しているので、次のような割付けを試みた。

発掘調査時点では桁行3.75m(12.5尺)、梁間2.40m(8尺)と考えていた。後殿に取付く1本目の柱位置を礎石抜取り跡から中軸線西約17.8mとして、回廊北西隅の柱位置を求めると、中央柱は中軸線西約50.20mになる。一方西面回廊の東・西雨落溝である入隅・出隅の溝心が中軸線西45.65m・55.20mである。両者の中間が中央柱と仮定するとその位置は中軸線西50.525mになる。従って先の中央柱の位置は西面回廊の中心よりも0.3m以上東に寄っていることになる。梁間を8.5尺約2.5mと修正してもなお片寄りはある。結局桁行3.75mではうまく割付けられない上、1尺が30cmでは長すぎるという問題もある。

そこで、中心部の建物から得られる1尺=29.58cmを用いて、後殿から1本目の柱は中軸線西17.75m(60尺)、北西隅は東西の雨落溝間の中心50.525m(170.5尺)を中央柱位置と仮定して、北西隅柱2.51m(8.5尺)×2間との中間の8間は3.78m等間と考えた。この数値と礎石抜取り穴とはほぼ合致する。

桁行3.78mは12.78尺で、12.75尺より約1cm大きくなるが、回廊桁行の復元案としては後殿取付きから1間目は10尺、それから西へは12.75尺×8間、北西隅では8.5尺×2間が妥当とおもわれる。

足場穴 SS3527 回廊北西隅雨落溝の北西約1.4mに瓦片を含む50×40cm大の掘形があり、西雨落溝に沿って2.0m、2.2m、2.4m、6.8mの間隔で大小はあるが掘形が続く。第36次調査でもこの延長線上に検出されている。第36次調査の成果と合わせてみると、西列一番北の掘形から4.5m東の、回廊北雨落溝外方にも掘形があり、その掘形の南には基壇上に西列3・4本目に対応する位置にやや小形の掘形が並ぶ。次に西列北から3本目の掘形の東9.4m、13.3m、17.0m、20.8mの所にも同様のものが並び、13.3m東の掘形には径18cmの柱穴がみられる。西列北から4本目は東約13mに1箇所みられる。これらの掘形は前期難波宮柱穴を切っていること、基壇上のは回廊柱跡の中間に位置すること、回廊外方のはそれらに並ぶか、その中間や外方にあって補強する所にあることなどから後期回廊の作業用足場の痕跡であろう。東西回廊の南外方は攪乱で消失してしまい、北外方は前期・難波宮下層遺跡の柱穴との重複で確認されていない可能性もある。これらの足場穴のうち、回廊雨落溝外方のものには埋土に瓦を包含することから回廊解体時のものといえよう。

5. 西面回廊 SC3524 (図面5・6、図版22・23・29～32)

西面回廊は第35次調査で北西隅を、第36次調査では門の有無の確認をするために大極殿西方の位置で、第15次・第39次調査で南西隅を発掘した。基壇痕跡・柱跡・雨落溝・暗渠・足場穴などが見つかったが、南西隅の遺構はあまり残っていない。

基壇の築成 基壇内と西雨落溝の西外方は地山で、東雨落溝の東方内庭部分は地山上に暗褐色粘質土の薄層があり、礫の混入する所もある。回廊基壇内を掘残して雨落溝部分を掘下げ、さらに回廊の外方は基準高から約70cmの深さまで削平している。

東雨落溝 SD3525 東雨落溝は幅150～160cm、深さ約15cmのゆるい段掘りの掘形と、幅140cm～150cmで段掘りの溝石抜き取り跡が残っている。凝灰岩小塊や粉が残る所もあって大極殿後殿東取付き部の南雨落溝と同様の凝灰岩切石作りの溝である。下段の溝底石抜き取り跡の底面は平坦で、幅は約45cm、深さは難波宮基準高から約85cm低くなる。内側石抜き取り跡は底面から5～6cm高くなり、20～30cmの平坦な面となる。裏込めは7～17cmの高さがある。基壇がよく残っている所では地覆石の据付け跡の幅は10～15cm、溝心から約80cmで端に達し、平坦な面となる。凝灰岩粉の散布する箇所もある。外側石の抜き取り跡は底面から9～10cm高く、幅が約30cmの平坦面と裏込めの高さ17cmの垂直に近い面がある。この底石から外側石の抜き取り跡は後殿取付き部南雨落溝の底石と外側石をはずした形に非常に近い。

西雨落溝 SD3526 西面回廊西雨落溝は基本的には東雨落溝と同じとみられるが、掘形の幅は130～140cm、溝石抜き取り跡の幅は約110cmである。底石抜き取り面は難波宮基準高から77～79cm下で東雨落溝よりも約5cm浅い。西外方旧地表面(現存していないが)からは6～12cm低いとおもわれる。

回廊の規模 北面回廊北雨落溝から南面回廊北雨落溝までの心々距離は、77.95m(263.5尺)である。西面回廊の東・西雨落溝は心々で9.35mあり、北面回廊と同じである。

第36次調査で検出した柱跡は礎石の抜き取り跡で根石抜き取り跡を残しており、東側柱が3箇所、中央柱が1箇所、西側柱が3箇所ある。北端で検出した柱跡は北面回廊中柱筋から南20.15mにあって、その間は3間分であろう。梁間は約2.51mで(8.5尺)×2間であるが、桁行は北端の柱跡から3.65m・3.85m・3.10mと間隔が不揃いである。大極殿西方に当る所に柱間の広い門があったと考えることもできる。一方、柱位置を根石跡の状態や後世に削られた所を補って見直すと12尺等間に割付けられないこともない。北回廊からも3.553m(12尺)等間とすると第36次出土の柱跡は5～8間目に当る。しかし、北回廊の桁行寸法が3.77m(12.75尺)で西回廊と異なる理由や、西回廊の南部がどうなるかについてはわからない。

南面回廊も北面回廊と同じ規模・構造とするならば西面回廊の中央柱間の距離も雨落溝心々間と同じ77.95mと考えられる。

足場穴 SS3621 足場穴は西面回廊の東雨落溝の約1.5m東と西雨落溝の約1.5m西に1列と、回廊上では東側柱筋と中央柱筋の間に1列、中央柱筋と西側柱筋の間に1列の合計4列があり、南北には桁行各柱の中間に位置して存在する。方形に近いものから円形のものもあり、40～50cm大のものが多いが、回廊の西側のものは大きくて瓦片を含んでいる。柱穴は見つかっていない。瓦片を含む回廊の西側のものは解体時の足場穴であろう。

小石敷 SX3622 西面回廊の東側の内庭には宮造営時の削平があり、その上に整地層がひろがり整地層内には小石が混じる。整地層上には小石敷の舗装があったとおもわれる。回廊の西方は地山で難波宮基準高下70cm前後である。

6. 閤門と南面回廊 (Fig.31、図面8、図版66～71)

閤門 SB3922と小石敷 SX3923 閤門と推定される所は北半分が中世大溝とその周辺の中世・近世の遺構によって削平されており閤門の遺構はわからない。門の南東部は地山が高く、第13次調査のトレンチ再掘も合わせて探索したが、門および回廊の遺構は見つからなかった。門の中心から12～13m北方のトレンチ壁際で、小石敷が難波宮基準高から約61～62cm下で部分的に認められる。中軸線から西方約18mと東方約10mには小石がまばらに残っている。門の東南方では北方の小石敷とほぼ同じ高さで地山が検出される。

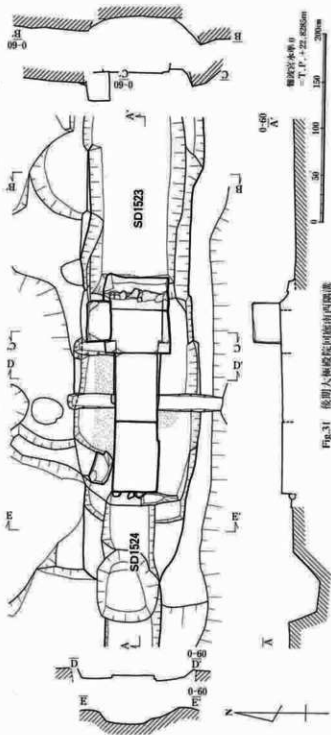
南面回廊 SC3921・SC3924 宮中軸線に近い所では、推定南面回廊中柱筋(北面西回廊中央柱から南へ77.95m)上に東へ13.5～14mと、西へ約19mの所に礎石跡とみられる遺構がある。東の柱跡は東西が切られていて約50cmが残り、南北は約190cmで、瓦の混入した抜取り跡も認められる。西の柱跡は周囲が削平されて東西は220cm、南北は100cm残る。

南面回廊北雨落溝 SD3925 雨落溝が残っていたのは中軸線から西41.0～43.7mの間である。掘形の幅は160cm位と広く、凝灰岩片や粉状のものが付着した溝石の抜取り跡があった。底石抜取り跡は80cmと広く、北と南側には平坦面をもっている。中軸線43.7m地点で擾乱によって切断されるが、西側では暗渠SD1523につながる。

暗渠 SD1523 南面回廊北雨落溝SD3925の西方、中軸線西45.30m以西には底石抜取り面が雨落溝より20～25cm低い暗渠が検出される。掘形は幅140cm前後で、溝石抜取り跡は130～160cmの単位で幅が数cm～10cm広くなったり狭くなったりして中軸線から西57m付近まで続く。57m以西は幅約55cmの浅い溝SD1524になる(Fig.31)。

中軸線西53.9～56.2mの間には凝灰岩切石の底石4個、北側石1個が原位置にあり、動いているがもう1個北側石が残っている。底石4個は長さ70～75cm、幅45～50cm、厚さ約12.5cmの板石で東の2個は横に並べ西の2個は縦に並べて敷いている。横並びの2個は溝底幅を約57cmとして石の北・南両縁を約1cm低く切欠き、さらに西側の石の西両隅は約12cm四方を3～4cm低く切欠いて溝底幅を約45cmにつくり、西の縦並びの底石と溝幅をそろえている。縦並びの石にも切欠きがある。北側石は長さ40cm幅24cm高さ30cmの大きさで、側石の西端と溝幅57cmの西端をそろえている。溝幅の変わる位置は中軸線西54.58mである。

大極殿院回廊北西隅の調査では、西面回廊の西雨落溝SD3526は溝心が中軸線から西55.20mで、溝幅は44.5cmと推定できるから、その数値を南西隅にも当てはめてみると西雨落溝が東西溝SD1524に流れ込むのは溝幅が狭くなって約40



cm西になる。この間に南北の西雨落溝の東側石が入り底石・西側石が据えられていたであろうか。同様に西面回廊の東雨落溝SD3525は中軸線から西45.85mにあり、暗渠東端としたところに当たる。暗渠の北方では西面回廊SC3524や東雨落溝SD3525は明らかでなく、地山上に堆積する薄層が溝掘形の痕跡かとみられるだけであった。東雨落溝と南面回廊北雨落溝の合流地点は間溝部底石拔取り跡よりも25cm低くなっている。

7. その他の遺構 (図面5・8、図版65)

土壌 SK3528 回廊北西隅の北に東西4.4m、南北5.4m、深さ約10cm～20cmの浅い土壌がある。埋土は2層あり、下層は瓦片を含んだ褐色粘質土層で、瓦片の一部は下位の前期難波宮柱穴にめり込んでいた。上層は暗褐色粘質土層で上部には回廊雨落溝と同様に多くの瓦がみられた。須恵器や凝灰岩も混入している。瓦には丸・平瓦の他に重圓文軒丸瓦(6015A)や重圓文軒平瓦(6574B)、鏤面戸瓦(6979)がある。位置・出土遺物からみて後期回廊の解体に関連するものであろう。

橋 SA3926 大極殿の基壇南約8.5mの所で一辺が70cm前後の隅丸方形の掘形に直径が30cm位の柱穴が東西に並ぶ。柱間距離は2.92mで中軸線から西に6個所、東に3個所で9間分が検出されている。難波宮の方位に比べて東でわずかに北に振れる。小石敷層(暗褐色土層)の下層で灰色整地層の上面から掘込まれている。小石敷は後期難波宮の旧地表であるから、これよりも古い。整地層には土師器・須恵器・瓦を包含しており、後期難波宮造営にあたってまず行われた整地である。従ってこの掘立柱橋は後期難波宮の造営期間中の短期のものと考えられる。(八木)

註)

- (1) 本報告書第V章第5節1(2)の澤村仁氏の考察を参照されたい。
- (2) 1962年に大阪府教育委員会が調査した鳥坂寺など。
- (3) 従来後期難波宮の造営基準尺については内裏南面回廊の柱間寸法などから1尺=29.8cmに復元して使用した。

大極殿建物の柱間寸法も桁行中央間が15尺(4.47m)、次間3間13.5尺(4.02m)、隅間11尺(3.28m)で、梁間は中央2間が13.5尺(4.02m)、隅間11尺(3.28m)として復元してきた。

本報告書では澤村仁氏の考察(本書第V章第5節3)に基づいて、復元尺を1尺=29.58cmとして柱間寸法を復元し、その数値を訂正した。

- (4) 基壇内外の階平・整地や整地層については、攪乱順の壁面による調査が主で、年代を決める資料が

十分とはいえない。しかし、旧地表面である小石数が前期よりも後期が低くて大極殿院地域では後期の造営時には盛土ではなく、削平による整地が行われていること。また基壇外方の整地層は大極殿・後殿・回廊の外辺部に広範囲にみられることから判断すると、これらの削平や整地は後期難波宮造営時とみるのが妥当であろう。

第4節 難波宮下層遺跡

難波宮下層遺跡をはじめ難波宮より古い遺構は第33～39次調査でも多く検出されている。しかし既に述べてきたように難波宮跡大極殿院地域の発掘調査は前期・後期難波宮について明らかにし、難波宮の中心部の遺構を保存・整備していくことを目的に実施されたので、下層遺跡は難波宮と同一面でもしかもちり合い関係のわかるものや後世の攪乱域内でみつかったものだけで、難波宮の遺構を掘下げて面的に下層遺構を広げたり層位的に詳細な調査は行っていない。従って遺構の規模や性格・年代が確実にわかるものが少なく、この報告もその範囲内に限られる(註1)。

遺構は柱穴・溝があるが、難波宮よりもやや小さな隅丸方形の掘立柱が圧倒的に多い。方位は明らかに難波宮とはちがうものと、ほとんど難波宮の方位に近いものがある。

欄 SA3541・SA3542 (図面5、図版21-2) SA3541は前期難波宮内裏南回廊掘立柱に切られている掘立柱列で7間分が検出されている。掘形は一辺が75～100cmの隅丸方形で柱穴径は約30cm、柱間距離は平均して約1.9mである。柱筋は東で南に約21°振れている。欄SA3541の約1.9m北に同規模の欄SA3542がある。この欄列と組合う遺構が見当らないので性格が不明な点もあるが、二つの柱列が建物になる可能性もある。

建物 SB3543 (図面5、図版21-2) 欄SA3541、SA3542に切られた一辺が約130cmの掘形が4個並び、それより約7.5m南に同様の掘形が4個ある。東西は約6.5mで、二つの柱列の間は防空壕による攪乱のため柱跡がみつからないので各々別の欄とすることもできるが建物としておく。東で南に約12°振れている。

建物 SB3544 (図面5、図版24-1・25-1) 前期内裏西回廊・西八角殿院東面回廊と重複し、北で東に約20°振れて約5mの間隔で並行する掘立柱列である。柱掘形は一辺が70～100cmの隅丸方形で、柱穴は径25～40cmある。柱間距離は平均約2.5mで4間分が検出されている。妻柱はみつからないので桁行はさらに大きくなるだろう。

欄 SA3741 (図面7、図版58・61-2) 後期大極殿南面東階段付近から検出された柱間1.5m前後、9間分の東西柱列である。第37次調査地域で5間分、第37次補足調査地域で4間分を検出した。掘形は直径0.5～0.7mの不整円あるいは短径0.7m、長径1.2mの長方形を呈す。後期小石敷の下層から検出されること、第37次調査地域ではほぼ難波宮の方位に一致するものの第37次補足地域を含めた9間分全体で見ると方位が東でやや北に振れること、掘形

が難波宮柱穴に比すと小さいことなどから確証は欠くが難波宮下層遺跡の柱列と考えた。
SA3753 (図面7) 第37次調査地区南西部の検出された東西方向で柱間約1.5mの5個の小柱穴である。柱穴の形状から見て難波宮下層遺跡に属するものと思われ、第37次調査地区南東部で検出された東西方向の柱列**SA3741**のほぼ西延長線上に位置することが注意される。
柱穴 SZ3750 (Fig.16、図版56) 第13次調査の際、防空壕の壁面に検出され、**SZ3747**や**SA3741**の柱穴の一つとともに前期難波宮大極殿相当建物の掘立柱穴と推定したものである。

第37次調査の目的の一つは、この前期大極殿相当建物の存否を確認にすることであった。防空壕壁面の所見では一辺約1.3mの掘形で、難波宮柱穴にふさわしい大きさをもつと考えられたが、第37次調査の結果、北で約30°西に振れる一辺約1.05mの下層柱穴の対角線の断面が防空壕の壁面で検出されたものであること、前期大極殿相当建物の南庇柱穴と推測したもの、難波宮下層遺跡の柱列と思われる**SA3741**の柱穴であることが判明した。

柱穴 SZ3742・3749・3751・3752・3754・3755 (図面7) いずれも難波宮下層遺跡に属すると思われる柱穴であるが、難波宮整地層の下層から断片的に検出されているに過ぎないので、その組合せや性格などは不明である。ただ、難波宮下層遺跡の柱穴が後期大極殿東部および南西部下層に集中して検出されていることが注意される。

第39次地域の難波宮下層遺跡 (図面8) 調査地区西部で暗渠**SD1523**、回廊北雨落溝**SD3925**の北辺に、一辺が50cm前後、柱穴のわかるものの径約10cmの柱穴をもつ小掘形が11箇所あり、埋土が赤褐色粘土質系で難波宮下層遺跡と考えられる。雨落溝の北には東西に並ぶものもあるがどのような建物かはわからない。削平や攪乱のために掘形の一部が残っているであろう。

(中尾・八木)

註)

- (1) 難波宮下層遺跡については、すでに多くの報告がある。次のものは主な論考といえよう。
 南秀雄1992、「難波宮下層遺跡の土器と集落」；『難波宮址の研究』第9 大阪市文化財協会
 黒田慶一1988、「熊襲考—難波都と難波下層遺跡—」；『歴史学と考古学』高井佛三郎先生喜寿記念論文集

第5節 その他の遺構

東西溝 SD3382 (図面4)後殿の中心より28.5m北に東西方向の溝がある。幅約90～100cm、深さ25～30cmで、埋土は暗黄褐色粘質土で小石が混じる。調査時には後期難波宮内裏南面回廊の南雨落溝であると考えたが、位置的にみると、第11次調査東地区で内裏南面回廊の南で検出した東西溝の続きである可能性が強く、回廊雨落溝である根拠は今回も得られなかった[澤村仁1961]。

南北溝 SD3581 (図面5、図版21-2)中軸線西30.8mを西端とする南北溝がある。聖武朝大極殿院北面回廊を切っているが、回廊南半では攪乱層等で、東半分は後世の小溝や現代の埋設管掘形に切られていて、溝の規模はわからない。埋土には重圓文軒丸瓦や瓦片を包含している。溝底は北よりも南が低く、回廊部分が暗渠にはならないなどから後期難波宮よりも後世のものとする。

南北溝 SD3582 (図面5) B～F23区にある幅が約50cmの溝状遺構である。F23区では底部に小石が散布している状態で、後期回廊部分のD23区では整地層の下から、B23区ではわずかに痕跡が検出されている。ほぼ宮の方位であること、前期内裏南面回廊の柱の中間にあることから前期の可能性もある。

東西溝 SD3681 (図面6・7、図版31・55) 第36次調査において後期難波宮西面回廊SC3524の東・西雨落溝SD3525・3526と足場穴SS3621に切られる形で検出した幅約50cmの東西溝である。第37次調査地区東端部では後期難波宮大極殿土壇下層の地山を切る東西溝として検出されている。両者は第37次調査地区西端部で検出された溝痕跡を介して東西線上一直線につながる一連の溝と思われ、総延長は約80m以上になる。

検出状況は、大極殿土壇下層から検出した難波宮下層遺跡の柱穴SZ3743と全く異ならないが、延長約80m以上で難波宮の方位と一致することから考えると難波宮の遺構にかかわるものである可能性が考えられる。焼土などは出土していないので、前期・後期いずれの時期のものとも決め難い。

南北溝 SD3682 (図面6) 幅約50cmの南北方向の溝の一部が残存している。SD3582のちょうど南にあるので同一の溝の可能性はある。

東西柱列 SA3781 (図面7、図版57) 第37次調査地区の南東端で検出された5個の大型掘立柱穴と思われるものである。後期難波宮大極殿の小石敷下層から出土し、近世柱穴列

や井戸、擾乱墳の壁面や底面で部分的に検出されているに過ぎないのでその詳細は不明である。

ただ掘形が一辺200cm前後ときわめて大きく、ほぼ東西に並ぶことから難波宮に関わる柱穴ではないかと思われるが、掘形内に焼土などはなく、また前期・後期難波宮中軸線に関して対称の配置を取らない。柱穴の巨大さからみて注目すべき遺構ではあるが、その所属時期や性格については不明とせざるを得ない。

溝 SD3981 (図面8) 第39次調査地区南東部は地山が高く赤褐色砂質粘土の整地層と考える薄層もある。これを切った南北の小溝(BQR14区)である。上幅45cm底幅33cmで深さは20cm位、防空壕や後世溝に切られて約1.5mが残っていた。北で少し東に振れている。

溝状遺構 SD3982 (図面8) CL114区に南にゆるやかに低くなる遺構がある。東西約2m南北2m弱の範囲だけが残り、西と南は削平されている。埋土は暗褐色粘質土で後期難波宮の瓦が含まれている。一応溝状遺構としておく。難波宮廃絶後のものであろう。

小掘形 SZ3983・SZ3984 (図面8) SZ3983はCLM12区にある小掘形で、小石敷層を切っている。SZ3984はCLN13区にあり、掘形の一辺は約40cm、柱穴は径18cmで埋土には凝灰岩片や瓦が混入している。これらは後期難波宮以降の柱穴とみられる。

(中尾・八木)

第Ⅳ章 遺物

第1節 前期難波宮

1. 土器 (Fig.32、図版72)

前期難波宮内裏南門SB3301の柱穴および、整地層などから出土した土器について報告する。細片が多いが、20点あまりが図化できた。

まず内裏南門SB3301から出土した土器は、1・3・5・15・17・22である。どの柱穴から出土したかはTab.2に示した。柱採取穴とことわっていないものは掘形から出土したものを含んでいる。「その他」を付した柱穴は、それに伴う

小柱穴やほかの柱穴の可能性もある。それ以外の4・23は整地層、16は特定できない柱穴から出土したものである。この整地層は層序からは前期のものか、後期のものかは判断しにくい、後述するように、出土した遺物には7世紀中ごろを下るものはない。以下ではこれらをまとめて、土師器、須恵器、その他の順に述べる。杯類の名称は奈良国立文化財研究所の分類[奈良国立文化財研究所1978]を用いる。

土師器は細片が多く、器表面の残りも悪いため、図化できたのは高杯1のみである。内面には斜放射状の暗文がみられる。ほかに竈や底部外面に木の葉の圧痕のある台付鉢の破片がある。

須恵器には、杯H16・23と同蓋8・12・杯G4と同蓋13・15・高杯3・甕5・7がある。杯H蓋は口縁部径9.8～12.4cm、杯Hは口縁部径8.9～12.2cmである。回転ヘラケズリが確認できるものは16・20・21で、11・12・23はヘラ切りののち不調整である。3は短

Tab.2 内裏南門の柱穴と土器

番号	柱穴	備考
1	中央柱-2	
2	北側柱-4	柱採取穴
3	南側柱-5	
5	中央柱-2	柱採取穴
6	南側柱-2 その他	
7	中央柱-3	
8	中央柱-2	
9	中央柱-4	
10	中央柱-3	
11	中央柱-3	
12	中央柱-3	
13	中央柱-3	
14	南側柱-2	柱採取穴
15	南側柱-4 その他	
17	中央柱-2	柱採取穴
18	北側柱-3	柱採取穴
19	南側柱-2	柱採取穴
20	南側柱-2 その他	
21	北側柱-5	
22	中央柱-4	

※柱穴番号は東端の柱から数えたものである。

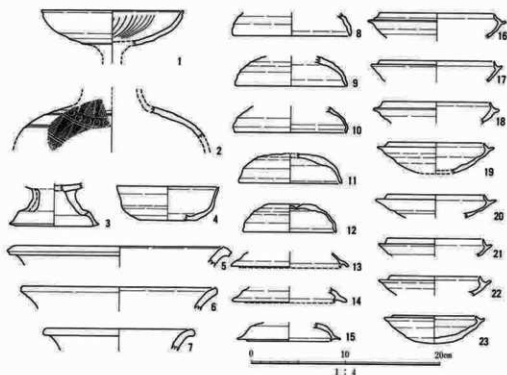


Fig.32 前期難波宮の土器

脚の高杯で、三方あるいは四方に長方形の1段スカシがある。

新羅土器2は長頸壺の肩部の破片である。肩部外面を1~2条の沈線で区画し、交互にヘラ描きによる三角形文とスタンプ円弧文とで埋めている。外面には薄く自然釉がかかっている。焼成は堅緻である。器形・文様構成は奈良県石神遺跡例[奈良国立文化財研究所1985]や、大阪府大坂城跡下層例[伊藤純1991]によく似ているが、これらは三角形文がスタンプによる施文である点が本例と異なっている。難波宮周辺ではこのような新羅からもたらされたと思われる土器が、先の大坂城跡下層例の他にも6点ほどあり、藤原京周辺地域に次いで出土例が多い(註1)。

以上の土器の様相は総じて、後で報告する難波宮造営以前の包含層から出土する土器群のうち、比較的新しい時期のものによく似ている。多くは同層に含まれていて、造営時あるいは廃絶時に柱穴に混入したものと考えられる。近年、難波宮を含む難波地域の土器編年はより詳細に研究され、大和の飛鳥地域の土器編年との比較から歴年代も明らかになってきている[南秀雄1992、京嶋寛1994]。その成果から、これらには7世紀前半~中ごろの年代が与えられる。柱穴は基本的に断割りを行っていないため、確実に掘形から出土した

といえるものではなく、厳密には前期難波宮の造営年代を示すものではない。しかし、柱抜き穴を含めて柱穴から出土したすべての土器の中に7世紀後半に下るものが1点もみられなかったことは重要である。[南1992]では前期難波宮西方倉庫群地域の下層遺跡の廃絶と難波宮の造営を土器の年代観から7世紀中ごろとし、[京嶋1994]でも難波地域の土器の変遷の画期を読み取り、やはり前期難波宮の造営を同様の時期としている。上で述べた柱穴出土土器の年代はそれらと矛盾しておらず、前期難波宮が7世紀中ごろに造営された難波長柄豊碕宮であるという説を有利にしている。(佐藤)

2. 瓦埴類

(1) 瓦 (Fig.33)

前期難波宮内裏南門の掘立柱穴からごくわずかが瓦片の出土がある。(24)の平瓦は東から3番目の南側柱の柱抜き穴から出土したもので、端部の残欠である。厚さ1.5cmで凹面は布目痕を少し残して凸面は全面をヘラケズリしている。やや硬質である。

(2) 埴 (Fig.33)

前期難波宮内裏南門の掘立柱掘形と柱抜き穴から各1点出土している。いずれも小片で厚さが4.5cm(25)と4.7cmのものである。(八木)



Fig.33 平瓦と埴

註)

- (1) 江浦洋氏によって集成されているもののほかにも未報告だが類例がある[江浦1994]。

第2節 後期難波宮

1. 土器 (Fig.34、図版72)

後期難波宮に関連する土器として、地覆石拔取り痕跡や雨落溝、および大極殿周辺の小石敷上や、遺構面の上位に堆積する包含層などで出土したものを報告する。層序から後期難波宮の整地層と判断された地層からは奈良時代に下る遺物は出土していない。大極殿基壇の版築土からは土師器甕の細片が出土したのみである。大極殿の地覆石拔取り跡、または拔取り後に堆積した地層から出土したものには102・105があり、大極殿後殿や回廊の雨落溝から出土したものには108～110がある。小石敷の直上、あるいはその上位の包含層からは101・103・104・106・107・111が出土している。ただし、小石敷上の堆積土には中近世の遺物が少なからず含まれており、地層としての年代は新しいと考えられる。

土師器は高杯の脚軸部101と皿102とが出土した。101はヘラケズリによって12面の面取りを行っている。内面は平滑で、心棒に粘土を巻き付ける技法で作られている。102は口縁端部を肥厚させず、内面に沈線がめぐる。暗文は施されない。

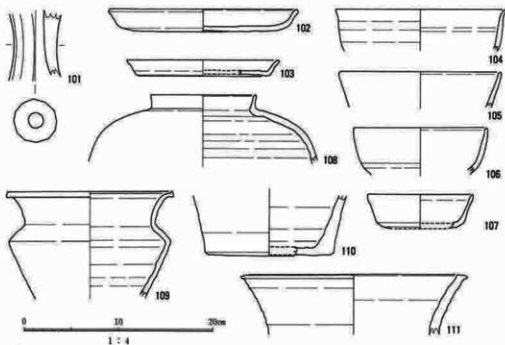


Fig.34 後期難波宮の土器

須恵器は杯104・107・皿103・壺108・110・甕111がある。104は口縁部がやや外反する。後碗と考えられる。105の体部は凹凸がなく、平滑に仕上げられている。107は高台をもたない。103は口縁端部にやや外傾する面をもつ。壺には「葉壺」と呼ばれる短頸壺108や広口壺109があり、110は底部のみで高台をもたない。

これらの土器の年代について検討する。土師器の101は脚部があまり長くないと考えられ、奈良時代中ごろのものであろう。102は口縁部径19.7cmで、暗文がないことから、奈良時代後半～平安時代初期のものと考えられる。須恵器はおおむね奈良時代中ごろ以後のもので、103は奈良時代を通じてみられる器種ではあるが、形態や出土例が多くなるのが奈良時代末期～平安時代初期であることから年代が下る可能性がある。しかし、これらのほかには型式変化が顕著な食器類が少ないため、量的な検討からそれ以上の細かい年代付けをすることができない。

以上、後期大極殿地域には難波宮が機能していた奈良時代中ごろ以後の土器が散布していることがわかったが、大極殿院の造営および廃絶の確実な年代を土器から特定することは困難であると思われる。(佐藤)

2. 瓦埴類

第33～37・第39次調査から瓦埴類はコンテナパッドに約650箱出土している。瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鴟尾・鬼板・雙斗瓦・面戸瓦・隅平瓦がある。軒丸瓦は重圏文が13型式111点、蓮華文が2型式2点あり、軒平瓦は重圏文が14型式100点、唐草文は2型式4点である。新型式は重圏文の軒丸瓦・軒平瓦各1と唐草文1である。鬼板は4型式11点である。瓦類は大極殿・後殿・軒廊の縁辺である地覆石拔取り跡や小石敷上や、後殿・回廊の雨落溝の跡から多くが出土している(Fig.40・41、Tab3～7)。

なお、第13次・15次調査出土の瓦類は[喜谷美宣1965]ですでに報告しているが、第13次調査のものは全て、第15次調査は大極殿院南西隅のものに限って再び報告する。第17次調査CL地区は後期難波宮関係の遺物は出土していない。

(1) 軒丸瓦 (Fig.35・36、図面9、図版74・75・78・79)

6009 直径が15.5cmの重圏文軒丸瓦(112)である。圏線は厚く、厚さ0.6～0.7cm高さ0.3～0.5cmのものが、第1圏から第3圏へと外側がより厚く高くなる。圏線の断面は内径がわは直立し、外径がわは内傾して先端は丸い。第1圏の径は小さく、第1～第2圏間・第2～

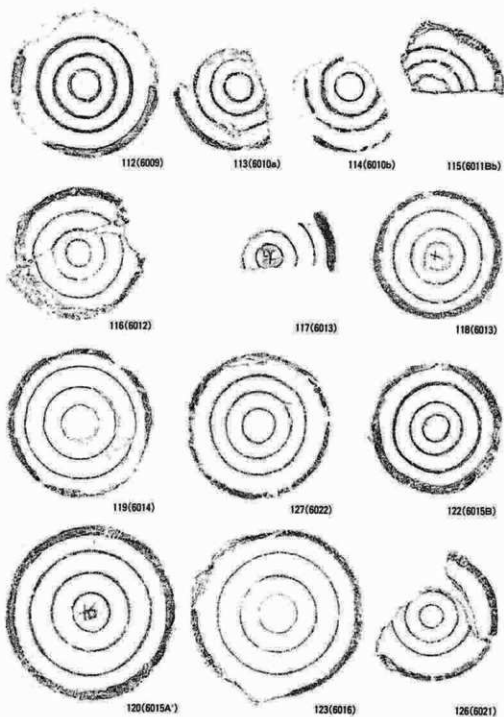


Fig.35 後期難波宮軒瓦拓影

第3圈間・第3圈～外縁間とわずかずつ間隔が大きくなる。外縁は直立してあまり高くなく、圏線と外縁との差が少ない。丸瓦は瓦当に対してやや鈍角につけ、范端を側面に残している。灰白色を呈しやや硬質の1点が後殿東取付き回廊の南雨落溝から出土している。

6010a・b 直径13cm余の小型の軒丸瓦である。6010a(113)の圏線は6012などよりやや太くて高く断面は台形状をし、第2圈が一番太く第3圈は細い。6010b(114)は第1圈の形状はaとほぼ同じであるが、台形状の第2・第3圏線は6010aよりもbが0.5～1mm太い。内径の数値はa・bとも殆ど変わらずbの外径が大きいことから、6010aの范型の第2・第3圏線の外径がわに沿って彫り広げて太い線にしていることがわかる。丸瓦との接合は円弧状に溝をつけ丸瓦を瓦当に対して鈍角につける。接合部の内面には粘土を多量に補い、瓦当表面は顎部よりも中央から上部が厚くなっている。表面のくずれの少ない1点(第15次朝堂院回廊北西部BTO29区出土)は接合部から瓦当表面を横方向にハケメで整えている。顎部や丸瓦部凸面はタテケズリを施す。軟質で圏線が丸くなったり調整痕を残していないものが多い。

大極殿院回廊北西出隅から6010bが1点、同回廊南西隅から6010aとbが各1点出土している。

6011B 6011Bは瓦当径14cm大の三重圏文軒丸瓦である。圏線間隔がほぼ等しく、外縁は高く内行斜縁である。大極殿院西回廊から6011Bb(115)(註1)が2点出土している。

6012 難波宮跡から数多く出土する小型の重圏文軒丸瓦であるが、後殿南で軒廊東側の小石敷から1点、大極殿院回廊南西隅から4点出土した。保

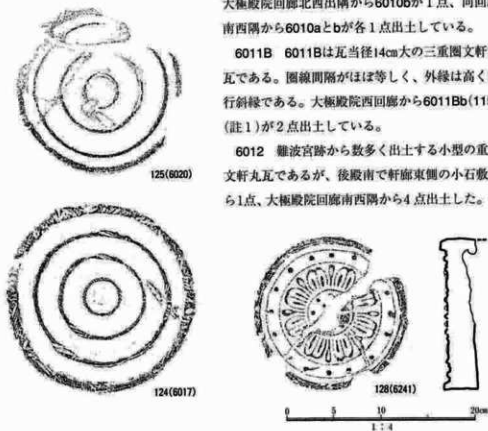


Fig. 36 後期難波宮軒丸瓦拓影と実測図

存の良好なものは少なかったが、第21次調査出土のものも見直して、軒九瓦計測表の第3圈内径、内区径を修正した(116)。外縁は本来直立縁であるが、部分的にナデを行い内行斜縁状にしたものもみられる。

6013 直径が13.4cmと小型で6012と圏線や瓦当全体が似ているが、6013は第1圏線内に「右」字陽文があって、第1・第2・第3圏線の各径や瓦当直径がやや大きい。「右」字陽文について大極殿院南西隅出土の(117)は上下が逆になっている。大極殿後殿出土の(118)は「右」字の「口」の部分が磨滅しているが「レ」の位置や大きさ、圏線の形状から6013とみられる。この瓦の場合、瓦当は「右」字を左へ90°回転して丸瓦にとりつけている。

6014 直径15.4cmの三重圏文軒九瓦である。第1圏の直径が大きく第1～第2圏間よりも第2～第3圏間が広く、第3圏と外縁間は狭い。圏線は細く断面は半円形である。外縁は形のわかる8点のうち5点は1cm前後の高い直立縁(119)(a)で、1点は高さ0.7～0.8cmのやや内行する斜縁(b)、2点が0.6～0.7cmの低い直立縁(c)である。6014はこれまでやや内行する斜縁とされてきたが、范型は直立縁で、型取りのあとナデやケズリを加えて(b)となっているのであろう。また瓦当厚は①4cm前後と、②2.4cm位のものが報告されている[岡田茂弘1961]。(a)、(b)が①に当たり、(c)が②に当たる。(c)は外縁が低いだけでなく、瓦当全体が①より1cm強余り薄くつくられている。丸瓦は瓦当裏面に円弧状の溝をつけて挿入し、丸瓦の凸面と凹面に粘土を補って接合する。補強粘土の上面は縦方向にヘラケズリをして整える。丸瓦の側面もヘラケズリをし、玉縁は凹面の側縁がわを面取りする。

6015A 直径が約18cmの三重圏文軒九瓦で、第1圏内に「右」字陽文を配する。「右」字が右に約90°振れるものを第14次調査でA、左へのものをA'としてきた[喜谷1965]が、上下がほぼ逆になるものをA''とすると、大極殿から出土した2点と後殿からの5点はA'である(120)。大極殿院北面西回廊の第35次調査からはAが3点(121)、A'が1点、A''が1点で、同回廊南西隅からはAとA'が各1点出土している。「右」字は細く、瓦表面に小さなシワがあってややのびやかさに欠けるものが多い。圏線は断面が半円形で突出して高く、第1圏は厚さ0.4cm高さ0.3cm、第2圏は厚さ0.5cm高さ0.4cm、第3圏は厚さ0.6cm高さ0.5cmあり、外の圏線程厚く高くなる。圏線の間隔は第1～第2圏間よりも第2～第3圏間が広くなり、第3圏と外縁間は少し狭くなる。外縁は厚さ0.9cm、高さ1.2cmと高い直立縁である。文様は簡素だが力強く整っている。

6015B 小型の三重圏文軒九瓦で6012と似ているが、第3圏線の太いこと、内区径の大きいことなどに差異が明らかである。直立した外縁上には縄目や植物の茎や葉の圧痕など

があり、乾燥時についた凹凸がある(122)。

6016 直径が18cm弱の三重圓文軒丸瓦(123)である。6015Aとよく似ており、第1圈内径も3.7cmと同じだが素文である。大極殿と後殿の調査で11点出土しており、それらは6015Aに比べて第2～第3圈間が広く第3圈～外縁間も1.1cmと広い。圈線の厚さは6015Aと変わらないが高さは0.1cm位低く、外縁もやや低いので、文様は全体としてやや平板な印象を受ける。范端痕を側面に残すものが多い。

6017 直径が19.8cmの難波宮では最大の軒丸瓦(124)である。第1圈は径・厚さとも比較的小さく第2・第3圈と丸い圈線が厚く高く力強くなっていく。外縁は直立するが部分的にナデでやや内行斜縁にみえる所もある。丸瓦は瓦当表面の低い位置に円弧状に溝をつけて接合する。丸瓦前幅は17.5～18cmある。丸瓦の上には厚い粘土を補って、斜目に細かく何回も叩いて接合部を強化しているものもある。内側は粘土上に指押えとナデをし、瓦当裏面はタテ方向にナデている。頸部は斜め方向に細かくケズったあと横方向にナデている。[喜谷1970]にも瓦当中央に円弧状の亀裂のある瓦が報告されているが、今回も棒状の先端で点々とおさえて亀裂を防いだものが1点ある。大極殿北辺の軒廊東側の小石敷とその上層から4点出土している。

6020 後殿北西出隅から1点(125)出土した。各圈線の間隔が広く、その分第3圈と外縁との間が狭い。細くて高い直立縁とのバランスもいい。丸瓦の接合位置はやや低く、瓦当裏面の粘土補強を多めにして接合部分を台形状に整えるのが6020の特徴である。

6021 第1圈の径を小さくし第2・第3圈を内区間にほぼ等間隔に配して、各圈線の厚さ高さもほとんど差がない小型の三重圓文軒丸瓦である。圈線の太さや間隔が第1圈よりも第2・第3圈と少しずつ大きくなる6012や6013・6015Bとは趣をやや異にする。大極殿北辺軒廊西から1点(126)出土。

6022 直径が15.2cmの三重圓文軒丸瓦(127)で新形式である。第1圈の直径は大きくなく第2圈・第3圈・外縁の各々の間隔はほぼ等しいが外側がわずかに小さくなる。圈線の厚さ高さは第1圈よりも第2・第3圈と外側がほんのわずかに大きくなる。外縁はやや内行斜縁に仕上がっている。丸瓦は瓦当裏面の第3圈辺に円弧状に溝をつけて接合する。内側はやや多目に粘土を補って接合面の形が台形状になるものと、普通にみられる円弧状のものがある。丸瓦上面は粘土を補給したあと筒部全体を縦に細かくケズって整える。側面はヘラケズリをし、凹面がわに幅1cm弱の面取りをする。玉縁も側縁を斜めに切り落したあと、凹面がわに面取りをする。胎土は細かく焼成は軟質である。色調は灰色から灰白色の

ものまである。大極殿北側と後殿南半の間に7点、大極殿院北面の西回廊から1点出土している。

6241 複弁八葉蓮華文軒丸瓦(128)である。大きな中房に1+4+8の蓮子を配し、蓮弁は先端がやや細くなって反り返る。間弁は杓子状で、先端がやや反り返る。外縁は低い直立縁で、外縁の内側には不明瞭ながら細線が巡る。内縁は細い内外界線の間に16個の珠文が弁端と間弁の外に配される。左下の弁端外の珠文を横切る2cm弱の線状の范キズがあり、それから右へ4・5番目の珠文には外界線に接する范キズがある。頸部は瓦当に直角の方向に大きくケズったあと外縁がわをかるくケズって整えている。丸瓦は瓦当裏面に円弧状に溝をつけて低い位置に接合した痕がある。瓦当裏面には丸瓦接合時の指圧痕が多く、そこから剥離している。丸瓦の上部につけた粘土は縦方向にケズる。外縁側には范型痕があり、かるくケズる。胎土は細かく外表は灰色、内部は淡褐色を呈する。焼成はやや軟質で瓦当表面の磨耗は激しい。四天王寺・叡福寺に同范瓦がある[藤沢一夫1965]。

(2) 軒平瓦 (Fig.37・38・56、図面10、図版76～79)

6572A 軒平瓦6572は直立する比較的高い外縁に、断面が半円形の2本の弧線を配し、弧線は両端でつながっている。6572の弧線は中央部が厚く高く左右の脇にいくに従って次第に低く小さくなり、内区厚・圏外厚・圏内厚も同様に中央が大きく両脇で小さくなる。瓦当は四角く高い外縁と丸い弧線とを対置し、弧線は中央部を重厚にして反り上がる脇部を小さく軽やかに設計している。6572A(129)は圏内の中心からやや左寄りに陽字で「+」を配する。横線の長さは10.5mmで厚さは3mm高さは2mmあり、縦線はやや細く上と下の弧線に接する。瓦当は平瓦広端の凹凸両面に粘土を加えてつくり、板状工具で整えたあと横方向のヘラケズリで仕上げる。平瓦部は凹面には模骨痕と布目痕が、凸面には縄タキ痕が認められるが大部分は縦方向のヘラケズリである。縄タキは斜め方向が縦方向よりわずかに多く、頸部に横方向のものが残る場合もある。側面は垂直に切落として面取りはしないが、瓦当がわには1cm位のヘラケズリをして整えているものがある。凹面側縁にかかる面取りをするもの、打欠いて使用したものもある。大半は軟質で表皮が残っていないが、灰白色で胎土は細かい。

6572B 6572Bは第8次調査出土の1点だけが報告されており[喜谷1965]、6572Aとほぼ同形同大で上下の弧線の間に「+」の陽字がないものと考えられてきた。今回は第37次調査で6点、第35次調査で2点出土しており、改めてみると6572B(130)は6572Aよりも瓦当の

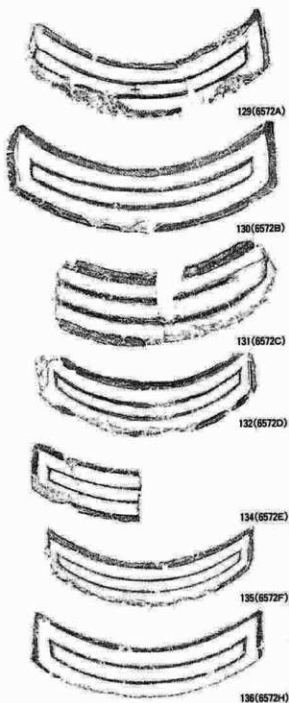
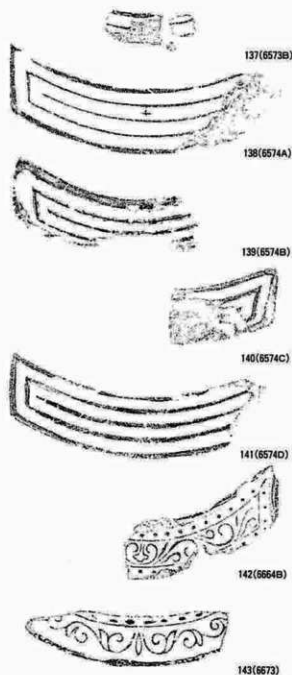


Fig.37 後期難波宮軒平瓦拓影

厚さ、弧線など全体にやや大きい作りであることがわかった。文様を細かくみると、中央部は下の弧線が少し大きく、右半部では上の弧線が脇による程下の弧線よりも大きくなっている。瓦当は平瓦の凹凸両面に粘土を補って形づくる。瓦当がわの凹・凸・側面は板状工具で整えたあと横方向のヘラケズリをする。顎にかかる面取りをするものもある。平瓦部は狭端部寄りには布目や縦位の縄タタキが一部残るが、瓦当から中央にかけてはほぼ全面に縦方向のヘラケズリを施す。凹面の側縁か側面に幅1cm位の面取りをする。大型のために調整痕が多い。淡青灰色をした硬質・やや硬質のものが5点ある。3点には顎部に朱が付着している。

6572C 6572型式では最も大型(131)である。外縁は厚く高く、2本の弧線は半円状に力強く突出し、文様の中心部は大きく、脇は漸次小さくなって両端で結合する。凹面の瓦当がわと顎部は板状工具で横方向にし、そのあとヘラケズリを縦方向と横方向にして整える。平瓦部は凹凸両面とも縦方向のヘラケズリを全面に施し、布目痕・タタキメ痕は残っていない。凹面側縁がわには面取りがある。



6572D 軒廊の東で2点、大極殿院回廊北西出隅の雨落溝から軒隅平瓦2点が出土している。前者のうち1点(132)は通常の6572Dよりも瓦当幅で約1cm、全体に小型であるが硬質なので焼成時の収縮の差であろうと考えた。縄目は縦位で凹面側縁と端部を打欠いて使用している。

第35次調査出土の2点は左側か又は右側を残した1組の軒隅平瓦である。左側に残る(133)は瓦当から約40°の角度で平瓦部が残り、凹凸両面からの打欠きがある。残存する長さは18.1cmである。側面は瓦当がわにかるい面取り状のケズリがある。この2点には瓦当右下隅から上外縁にかけて斜めに范が割れた痕が付いている。3mm位のすき間からはみ出た粘土や2本の弧線

Fig.38 後期難波宮軒平瓦拓影と実測図

にできたズレたあとを、ヘラで少しだけケズって整えようとしている。この地点からは塼面戸も出ており、回廊北西出隅に使われた軒瓦であることがわかる。

6572E 6572DやHより少し大きい軒平瓦であるが、弧線は細く低く、6572の瓦当の特徴はもっているが全体におとなしい感じがする。軒廊西の大極殿北辺から1点(134)出土している。

6572F 瓦当幅が22cm弱の6572型式では最も小さい軒平瓦(135)である。弧線は断面が半円形で文様の中心部が脇よりも厚く高い。その差は圈内厚が0.5cmと0.45cm、圏外厚が1.7cmと1.4cmで、内区厚と瓦当厚も0.4cm位ある。瓦当全体が中央部が大きく、脇部が小さめにつくられている。直立した高い外縁とのびやかなまろい弧線との均衡もとれている。軒平瓦6572Fは大極殿後殿前、軒廊の両脇から左または右を欠いた隅軒平瓦が各1点、第36次調査大極殿院西回廊の東雨落溝から1点、大極殿院南西隅辺から隅瓦1点を含む6点が出土している。軒隅平瓦は右側面を1cmほど残して平瓦部を瓦当面に対して約45°の角度で垂直に切落としたものが1点、片側面を2~3cm残して約45°の角度で平瓦部を凹凸両面から打ち欠いているものが5点ある。軟質で表面が残っていないものが多いが、縄タタキは斜めで、横方向と重ねるものもある。凹・凸面ともに瓦当がわは横方向に、平瓦部は縦方向にはほぼ全面をヘラケズリして整えている。焼成の良い1点には瓦当がわの凹面と側面の一部にヘラケズリ前の板状工具による調整痕が認められる。

6572H 6572Dとほぼ同じ大きさの軒平瓦で新型式(136)である。特徴は弧線が6572Dよりも厚さ高さともに小さくて中央部と脇部との差も少ないこと、瓦当を平瓦の凸面寄りにつけて曲線顎に近いことである。平瓦部は凹面には模骨痕・布目痕が認められ、凸面には交差する斜め方向の縄タタキ痕があるが、両面とも大半にヘラケズリを施す。凹面側縁は狭端寄りで弧高を減らすかのように狭端近くを大きく面取りする。側面は垂直につくが、凹面側縁との瓦当がわの側面には幅1cm位のかのい面取りを施すものがある。胎土には砂粒を少し含み、焼成は悪く遺存状態は脆弱である。従って瓦の表面はほとんど残っておらず、色調は灰白色かそれに近いものであったろうと推測する。内部はにぶい褐色又は黄褐色を呈している。

大極殿と後殿の間の小石敷上とその上層から出土している。CLY17区からは軒隅平瓦が1点出土している。瓦当から約40°の角度で平瓦部を残し斜めに打ち欠いている。残存する側の長さは18.8cmである。当初から軒隅平瓦につくられたものか、軒平瓦を葺く時に打ち欠いたものかはわからない。また、CLY20~21区からも軒隅平瓦の可能性のあるものが1点出

土している。

6573 6573は内区に2本の弧線を配するもので、6573Aが2点、6573Bが2点、6573Cが1点出土している。小片が多い。

6573B 弧線が細く褐色をした長さ31.2cm、平瓦端部幅21.5cmの軒平瓦(137)である。平瓦部凸面は縦位の縄タタキを一部残して縦方向のヘラケズリを施す。凹面には模骨痕はなく細線の幅1.5~2cmの面取りを除いて全面に布目が残る。布目は端面につづき、側面にも凹面がわにみられる。側面凸面がわはヘラケズリをする。

6574 6574はほぼ平行する上下2本の弧線を両端でつなぎ、その内側にもう1本の弧線を配するもので、軒丸瓦と組合わせると外縁と3本の弧線とにみえる軒平瓦である。6572は外縁と弧線の形や配置・大きさが基本的に似ているが6574はABとCDとではちがった特徴をもっている。

6574A 瓦当厚・内区厚が大きく、弧線は断面が半円状で細く弧線と弧線の間が広いものである。外縁は直立するがあまり高くない。瓦当中心から2mm位右寄りで上と中の弧線の間に陽字で「+」を配する。「+」の左右は約11.5mmで上下端は上と中の弧線に接する。出土した3点のうち後殿北西隅の1点は軒隅平瓦(138)である。軒隅平瓦は瓦当に対して約45°で斜めに平瓦を切落とす左側を残している。長さは28.0cmで軟質である。左側面と凹面との間にかかる面取りが認められる。斜辺凸面には打欠き痕がある。他の瓦は小片である。

6574B 厚く高い直立した外縁と細くて丸く整った3本の弧線の対比が美しい軒平瓦(139)である。瓦当は平瓦のほぼ中央につけ、凹面は瓦当がわの補給した粘土から平瓦凹面までがへこんでいることやヘラケズリを多用することなど基本的な製作・調整は6572Aと同じである。弧深が大きいせいか側面には凹面がわに小さな面取りをする場合が多い。平瓦部の縄タタキは斜め方向が多いが頸部に横方向にタタくものが1点認められた。焼成は軟質が多い。硬質のものの中に弧線のやや太いものがあり、范を使用している間に太くなったせいか或いは別の范型で分離すべきものかわからないものが含まれる。15点出土し、大極殿後殿地域からやや多いほかは全域で平均的に出土している。

6574C 外縁と弧線の厚さ・高さがほとんど変わらず、6574CとDはよく似ていて断片では分類ができず、今回はCが1点(140)、Dは2点で、C或るいはDとしたものが5点出土している。(140)は硬質で凹凸両面ともほぼ全面にヘラケズリをしている。

6574D 弧線は断面が台形状に突出してその上面には筋状の凹凸がある。外縁と弧線の厚さ高さがほぼ同じで5重弧文のようである。瓦当部分は凸面の頸に粘土を補ってつくる

ので曲線顎状である。凹面は瓦当側を板状工具で整えたあと横方向のヘラケズリをし、側縁がわには顕著なヘラケズリか面取りをする。平瓦部には模骨痕があり布目上にタテ方向のヘラケズリを施している。凸面は縄タタキをしたあとほぼ全面をスリ消している。(141)は頸部に朱痕が認められる。

6664B 均整唐草文である。中心飾りは上向きのC字形中心葉のなかに花頭形の垂飾りをおき、花頭形の基部先端はごくわずかに開いて上外区界線にはほとんど接するように近づく。唐草文は3葉構成で、上下外区界線に接するように派生して連続的に3回転し、唐草の第3単位は主葉が脇区界線につき小型の第1子葉は巻き込んでいる。外区は上下区とも21個の珠文を配し、上外区と脇区の間にはやや長い杏仁形珠文を、下外区と脇区の間にはほとんど円に近い杏仁形珠文をおく。左脇区の珠文の一つに范キズがあることを指摘されている[網伸也1992]。段頸で頸の長さは6.5~7.5cm。(142)の平瓦部は凸面には縦位の縄タタキを施し、凹面はヘラケズリをして布目を殆ど残さない。大極殿院からは大極殿北西辺から1点、回廊北西入隅から2点出土している。軒平瓦6664Bは軒丸瓦6303と組合わせとなり、吹田市七尾瓦窯で生産されていることがわかっている[大阪市文化財協会1981]。

6673 均整唐草文軒平瓦で瓦当中央部が残っている。瓦当厚5.1cm、内区厚3.1cm、上外区厚0.6cmで高さ0.3cm、下外区厚0.6cmで高さ0.3cmを測る。上外区には上下の突線がありその中に丸みのある杏仁形連珠文を、下外区には上下の突線に接する線鋸歯文を配する(143)。朝堂院から同型式軒平瓦が1点出土しており(註2)、合わせて文様をみると、脇区にも杏仁形珠文帯があり、内区は中心飾りが木葉状の垂飾りで、特色のある唐草文を配している。唐草は巻き込みのある主葉と、垂飾りと同様に輪郭を線で表わした木葉とからなる。第1単位は中心飾りに沿ってはじまり、主葉は中心飾りの方に大きく巻き込み、上向きで先が外に伸びた木葉の外縁から第2単位が伸びて反転するが、主葉と木葉の先は中心向きにおかれる。第3単位は主葉のみが反転し木葉は第2単位と同じ下向きだが葉先を外向きとする。さらに上向きの主葉のみを一番端に配する。文様は木葉の形や向き、主葉の大きさと意匠を凝らし端正で繊細なものである。平瓦部は大半を失っている。凹面の瓦当がわは横方向にヘラケズリをし、凸面は縦方向にケズった曲線状の顎である。顎部の整形のために下外区の鋸歯文が半分近く失われている(143)。胎土は細かく、色調は外表は残っておらず内部は明橙褐色である。軟質で表面は殆ど磨滅している。外区は興福寺式の系譜だが形式化しており、内区は大きく変化して類例をみないものである[八木久栄1973]。

(3) 丸瓦・平瓦

(i) 丸瓦 (図面11、図版80)

大極殿地域出土の丸瓦は約900片、重量は約917kgである。大半が破片であるばかりでなく、もとの形状に接合できない位に割れている。大極殿と後殿の間の出土が多い(Fig.40)。大きさや技法は多様で、厚さでは1.5~1.8cmが一般的だが2cmを超えるものが大極殿の周辺にある一方で、1cm前後の薄手もみられる。技法では、分割後、側面をそのまま残すもの、玉縁のみにヘラケズリや面取りをするもの、胴部の凹面がわに面取りをするものなどがみられる。全長あるいは筒部長のわかる10点余りを中心に分類した。

6161B 全長36.3cm、筒部長30.2cm、幅約16cmで、凸面には縦位に縄目タタキをしたあと全面をスリ消し、側端には分割時の破面が残る。内裏西方外郭築垣所用の丸瓦と同じ作りだが、この瓦は玉縁が6.5cmと長く、全体に歪んでいる(144)。大極殿西北方から出土した。

6262A・6262B 6262Aは厚さ1.1cmの薄手で全長33.4cm、筒部長28.7cm、幅14cmの丸瓦である。玉縁は両側縁を切落として先端幅を小さくし、凹面の両側縁・端縁を面取りする。軟質である。軒廊西辺で出土した。6262Bは厚さ1.1cm全長30.0cm、筒部長26.4cm、幅約13cmで、6262Aよりひとまわり小さく、つくり方は同じで、(145)の重さは約1300gである。

6361 全長27.4cm、筒部長22.8cm、幅約14cmの小型の丸瓦(146)。分割後端縁はヘラケズリをし、凹面は側縁がわを玉縁から筒部にかけて面取りをする。玉縁端部も凹面はかるく面取りをする。一部欠損しているが重さは1380gである。

6362 全長38.0cm、筒部長33.7cm、厚さ1.3cmの茶褐色を呈する丸瓦(147)である。幅は約16cmあるが高さは7cm余りしかなく、本来はもう少し幅が狭くなるだろう。凹面の面取りは玉縁と側縁にみられるが広端にはない。布継目痕があり布端はかがっておさえている。

6369A 6369として[喜谷1965]で報告した棟瓦(148)である。玉縁は打欠いた可能性がある。幅は広く厚さがあって筒部長が24.2cmしかない。凹面のヘラケズリが顕著である。大極殿前面中央階段付近から出土した。

6369B 幅18cm以上厚さ2cm以上あって6369Aと同じ幅・厚さの瓦(149)である。玉縁は長さ6.2~6.5cmあり、側縁を切落として先端を細くしたあと凹面に面取りをするほか、凸面にも先端にヘラケズリを連続して施し丁寧に仕上げている。玉縁の残るものは筒部が18.5cmまでしか残らないが、筒部の長さ35.6cmの丸瓦があるので両者を合わせて復元ができれば。

6369Aと同じ棟瓦と考えられる。一方大きさから軒丸瓦6017の原体とみられる。

(ii) 平瓦 (図面12~14、図版81~83)

平瓦の出土は約23,700片で約2,952kgあり、大極殿と後殿の間からが特に多い(Fig.41)。平瓦の大きさは長さは30.4~41.8cmの間で、幅は22~24cmのものと26~28cmのものが多く、長さのわかるのは約50点で主にそれを基にして9型式に分類した。新しいものは4型式である。全体としては6561型式が最も多く難波宮平瓦の主流をなすことがわかる。

6561A~D・G・H 平瓦6561の基本的な技法は、凹面は縄タタキを縦位に施したあと、狭端と広端側を数cm~10cm横方向にスリ消しそのほかについても部分的に消している。消し方はごくかるいものから縄目が残らないものまである。凹面には布目痕・模骨痕があり、縦方向にヘラケズリを部分的に施し、四周はかるくケズって整える。側縁は垂直に切落としている。色調は灰色が多く、焼成は軟質で脆弱である。

6561Aは長さ41.5cm前後で幅は約30cmの最も大きい平瓦(150)である。上記のような特徴に加えて凸面の広端よりの側縁近くに作業台の圧痕があり、側縁の角を面取りしておいたものがある。大極殿周辺から5点出土している。縄タタキ原体の縄の撚りは圧痕が右下がりであるが、タタキ板に巻いた縄の1本のみが右下がりの撚りのものが2点にみられる。右下がりの縄の圧痕は約6cm間隔にあり、タタキ板の幅は4.3cm・17本の縄までしか数えられず、右から10本目が右下がりの縄である。

6561B 長さ39.5cmで6561Aに次ぐ大型の平瓦である。2点認められたが今回幅のわかるものは出土していないので図・写真は省いた。

6561C 長さ37cm前後、最大幅27~28cmの平瓦(151)で第33~37次調査のどの地区からも出土している。17点のうち、粘土継目痕の残るものが2点ある。

6561D 長さが35cm前後、最大幅24~25cmの平瓦(152)である。凸面の縄タタキメのスリ消しや凹面の縦方向のヘラケズリを丁寧に施すものがあり、凹面の側縁を連続して打欠いたものが多い。大極殿と後殿の間から6点、大極殿の西方から1点出土している。

6561G 長さ31.5cm、最大幅23.9cmで新しく設定した小型平瓦(153)である。軒廊の両脇から6点と後殿背面から1点出土。

6561H 長さ30.5cm、幅21~22cmの最も小型の平瓦である。凹面は模骨痕をかるくヘラケズリして、凸面は縦位縄タタキメ上を広狭両端のみ横方向にスリ消す。(154)は幅が狭くより小型であるが厚さは他型式とあまり変わらない。

6563 長さ35.4cm、最大幅約27cmの平瓦(155)で模骨痕は明瞭なものとわかりにくいもの

がある。凹面の布目痕はそのまま凸面の縄タタキ痕は全面スリ消す。側面は垂直に切落としたあと凹面側との角を面取りする。布目痕のあるもの2点、粘土継目痕のあるもの1点が認められた。大極殿院北面西回廊と西面回廊の雨落溝から6点出土している。

6565 長さ36.4cmの新出平瓦(156)である。凸面は縦位縄タタキメをきれいにスリ消している。凹面に模骨痕は顕著でなく、布目痕が全体にあり、布のたるみが認められるものもある。布継目痕があり、粘土継目痕らしいものもある。側縁がわは面取りをするものではないものがある。側面は凹面に対して直角に近く切落とす。やや硬質で灰白色、濃灰色を呈し胎土には砂粒を含む。凹面側縁がわは片側か両側を連続して打欠いて使用しており、残存する瓦幅は最大24cmである。大極殿と後殿の間、軒廊の東側から4点出土しており、軒廊所用の瓦であろう。

6761 長さ30.8cm、現在する最大幅21.7cmの小型の新しい平瓦(157)である。凸面は縦位の縄タタキメだが斜めのものがまじり、かるくスリ消す。凹面は一面布目痕で模骨痕はなく、四周はかるく面取りする。側面は垂直に切落とす。色調は灰色か濃灰色で内部は褐色を呈する。6761は一枚作りの軒平瓦6573Bの原体である。軒廊の東と西から各1点出土している。

(4) 道具瓦

(i) 鵜尾 (図面15、図版84)

径約3cm、厚さ1.4cmの珠文が1点、底部は本体から剥離して出土している(158)。胎土には粗い砂粒を含み、焼成は軟質で表面の損傷がはげしい。大極殿院回廊南西入隅の雨落溝から出土。

難波宮の鵜尾は鰭の内側に二条の突帯があり、その間に珠文が配される。かつて直径6cm余と5cmの2種類の珠文が報告されている[喜谷1970]が、それらに比べてかなり小さく、小型の鵜尾が想定される。

(ii) 鬼板 (図面15、図版84)

大極殿院の調査で11点出土している。文様は基本的に同じで、范型でつくられている。周囲に三重の凸線を巡らし、中央にも同じ3本の凸線を上下に配し、顎部から両下端にかけては一条の凸線で縁取りをしている。大きさと形の差異によって分類し4型式とした。番号は大きいものから付し、[喜谷1970]に6920とあるものは6923に変更した。

6920 高さ39.4cm、最大幅約44cmの難波宮では最大の鬼板(159)である。形は円い頂部が

ら下部に緩やかに広がり、下端部はやや内側が短くなるが直線である。凸線は中央の3本と周囲の内側2本が同じ高さで断面は突出した半円形になり、外周はそれよりも数mm高くなる。范型で成形したあと、側面は横方向のヘラケズリで整える。顎部も同様に調整するが、挟りをケズって大きくして凸線は半分以上失われている。表面には木目痕、裏面には指圧痕の上に主に斜め方向のヘラケズリをしている。釘孔は中央真ん中の凸線上に上下2箇所、方形の孔を表・裏面から穿っている。灰白色を呈しやや硬質である。大極殿院北西隅辺と、後殿の東回廊南雨落溝から出土している。

6921 復元値で高さは約30cm、最大幅約35cmの6920に次いで大きい型(160)である。全体の形は6920に近いが、中央部凸線の間隔が広く、3本の凸線帯の幅は6920は約7.7cm、6921は約9.6cmである。顎部・下端部を打欠いている。軟質で表皮は残っていない。後殿の周辺部から3点、大極殿院回廊北西部から1点出土している。

6922 製作時の大きさはわからないが、顎から両下端部を全面的に打欠いており使用時の大きさは高さ17cm、最大幅26.5cm(161)である。難波宮鬼板では最小のものである。凸線が太くて高いのが特徴で、内部と外周の凸線はほとんど同じである。頂部の2本と3本目の間に幅2mmの縦線があり、范キズであろう。裏面は外周のみからいへラケズリをする。後殿と軒廊の入隅の東と西で各1点出土している。

6923 大極殿院回廊南西隅から第15次調査で3点出土して6920としたものである。今回番号を変更した。大きさは高さ24.6cm、最大幅28cmで、6922よりやや大きい。形は6920・6921と異なり、下端が斜めであることや凸線が細くて低いので優しい感じがする。表面には木目痕があり、側面外周は板状工具で縦・横に調整したあとヘラケズリで仕上げている(162)。

出土地点から見ると、6920は大極殿、6921は後殿、6922は軒廊、6923は大極殿院回廊南西隅と朝堂院との接続点に使用されていたことがわかる。

(iii) 鬘斗瓦

整形された鬘斗瓦はみつからなかったが、平瓦が縦に割れて破面に火のとおったものが1点あり鬘斗瓦として使われたものと考え。狭幅から24.7cmまでが残っており、最大幅14.1cm、厚さ1.5cmである。凸面は縦縄タタキメの一部スリ消し、凹面は表皮が残っていないが布目痕と模骨痕が認められ、側縁は垂直に切落としている。後殿南西隅の南方から出土している。

(iv) 面戸瓦 (図面16、図版85)

大極殿院の調査で面戸瓦は100点余り出土している。そのうち大極殿と後殿の両地区からが全体の7割である。多くが破片で、形がわかり分類できたものは60点余である。

6970A 最大幅は19cm前後で高さ14cm位厚さは1.5cmあり左右側端の上半部の幅が最も大きい形の面戸瓦(163)である。上端から側端上半部にかけて鈍角に切落として、下半部にかけては小さくケズって丸くつくる。下半部の上半は直線か少し挟りをいれて、下半はやや弧状にふくらみをもたせている。舌部下端の両脇は角を落としてやや丸みを帯び、下端は直線か、2～3回ヘラケズリをして僅かに弧状につくる。凹面の面取りは上端はかるく、側縁と下端は1～1.5cmの幅で厚さの半分位まで斜めに施す。濃灰～灰色を呈し焼成はやや硬質からごく軟質のものまでである。11点が後殿地区、西面回廊で7点出土しており、破片の中にもこの形は多く認められて、後殿及び回廊所用の面戸瓦であろう。

6971A 最大幅18cm、高さ12.5cm、厚さは1.1cmの薄手の面戸瓦(164)である。上端から側縁端へは直角に、側縁端の下半部は円弧状に挟って切落としている。下端は直線で両脇の角をケズる。凹面は各端縁をかるく面取りする。灰色で軟質、後殿の東に取付く回廊の北雨落溝から1点出土している。

6972 最大幅が25～28cmで残存する下端部幅13～16cm、高さは17cm位で厚さは1.5～1.9cmもある特別大きな面戸瓦である。形は(A)上端から側端上半部へは直角に、側端下半部はほぼ直線で下端とは約45°の角度で切落とすもの(165)、(B)上端から側端部上半部へは鋭角につくるもの、(C)上端から側端上半部へは鈍角に切落として6970に似たもの[喜谷1965]など様々な形がみられる。どの面戸瓦も凹面の側端は幅広い面取りをする。また側縁と下端とを打欠いており原形や大きさはわかりにくい。大極殿の周辺で西半部から5点出土している。

6973 形は上端に対して側縁端上半部をほぼ直角に切落とし、下半部は直線状かわずかに挟りこんで下端部に達する。大きさによってA・B・Cに分けた。

6973Aは、最大幅22.0cm高さ13.8cm、厚さ1.5cmで、下端部が9.8cmのやや大型の面戸瓦である。凹面は幅1～2.5cmの広い面取りを上下・両側縁に施す。灰白色を呈しやや硬質のものが1点(166)大極殿地区から出土している。破片で同型とみられるものが大極殿南辺の小石敷に3点、後殿の北西外方から1点出土している。

6973Bは、後殿南東隅の外方から1点出土して既に報告している[喜谷1965]。Aよりも小振りで凹面の面取りはかるく施している。

6973Cは、最大幅15cm、高さ13.6cm、厚さ1.3cmありBよりもさらに小さい。凹面の周辺部

面取りはごくかるく施す。灰色で軟質である。大極殿院回廊北西入隅の雨落溝から1点(167)出土している。

6975 上端の幅が最も大きく20~21cmで、下端幅は5~7cm、その間を斜めにほぼ直線に切ってつき、下端の両脇は1~2回小さくケズって少し丸みをもたせる。高さ13.8cm厚さは1.5cmで、凹面の上下・両側端縁を面取りする。凸面も側縁部をわずかに面取りする(168)。淡灰色でやや硬質なものと同質なものがある。後殿の東南部から3点、北東部から1点出土している。

6976B・C 本来面戸瓦につくられているが葺く時に打欠いたために元の形がわからなくなった割面戸瓦を6976とした。6976Bは高さ13.2cmで両側縁のほとんどを打欠いて最大幅は15.8cmとなり、形は6970に近い。6976Cは高さ13.3cmで打欠き後の最大幅は13.5cm、形は6970に近いが、左側下半部は挟られ右側下半部は少し弧状にふくらみ左右の形が異なる(169)。軒廊の両脇から出土している。

ほかにも割面戸或いは割面戸の可能性のあるものが軒廊の近くから出土している。いずれも幅を小さくして軒廊に合わせた面戸瓦であろう。

6979 最大幅21.5cm、高さ約13cm、厚さ1.5cm前後あって、左側端の形は6970に近く右側は左側よりも5cm位大きく突出した形の鑿面戸瓦(170)である。凹面の上下端は幅0.5~1cm、左右両側は幅1.2~1.5cmの面取りをして丁寧に仕上げている。淡灰色でやや硬質のものが多い。大極殿院回廊北西出隅の雨落溝とその北方にある浅い土壌とから6点出土している。

(v) 隅平瓦 (図面14、図版83)

隅平瓦は大極殿周辺から7点、後殿の前面から3点、多くは小石敷上や地覆石拔取り跡から出土している。

(1) 平瓦広端部の右隅を少し残して左上部を約45°の角度で切落している(171)。凹面は右側がわを縦に2回、斜辺に幅1cmのヘラケズリをし、根骨痕の凹凸も部分的にケズって平らにしている。厚さは2cm前後で黒色に近い。また、左隅を残して右上を60°に近い角度で切落した小片がある。厚さ、色調、調整は(1)と殆ど同じである。平瓦左側から4~5cmにZ状の粘土継目痕が認められる。現存長約12cm。

(2) 厚さ2~2.5cmの厚手平瓦の右上を切落した隅平瓦(173)で、右下部の1/4位が残っている。狭端から約18cm右側を残して、左上に60°余の角度で弧状に切取っている。後殿前面小石敷上出土。

(3) 上右端部を約9cm残して、平瓦左上を約70°の角度で切落して、凹面には斜辺、端

部にヘラケズリを施したものが後殿前面小石敷上出土している(172)。

ほかに小片のためにもとの大きさ、形は不明だが、左上方を切落したものや、右上方を切落したものがある。

難波宮跡では、(A)広端部を約 45° の角度で切落すものと、(B)端部を7~8cm残して約 60° を切落すものがある。(1)は(A)、平瓦右上を約 70° の角度で切落としたものは(B)の型であることはわかる。(2)は(A)・(B)とは別の型ともみられるが、切落した斜辺は弧状に挟り込む傾向があるので(A)の型に属すると考える。

(5) 塼 (Fig.39、図面16)

第33・34次調査で6点、第36次調査で1点、第37次調査で3点出土している。そのうち後期難波宮の遺構からは3点である。いずれも小片で原形のわかるものはなく厚さで分類した。残りの7点は出土層が後期難波宮よりも上層や攪乱層であるが、つくり方や厚さからみて後期難波宮の塼とみられること、中世以降の出土品、例えば上層の大坂城跡からは厚さ4cm以上の塼はみられないことから後期難波宮に伴う遺物として報告する。

(1)厚さ6.4cmで、隅の部分が最長で10cm残っている(174)。側面はヘラケズリで整えるが、残存する表面は未調整で外縁の1cm位をヘラケズリしている。灰白色でやや硬

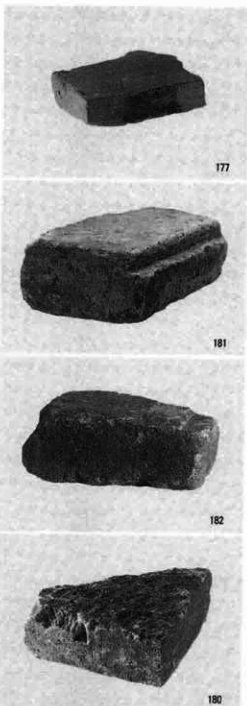


Fig.39 後期難波宮塼と凝灰岩

質。大極殿北面西回廊後殿取付き部の南雨落溝出土。

(2)厚さ5.4cm、いたみが激しく調整痕などは残っていない。大極殿南面の小石敷上から1点(175)、第36次調査で1点出土。

(3)厚さが約4.5cmのもの。大極殿北西方の小石敷出土の小片(176)は灰白色で硬質、胎土に砂を多く含み、表面はヘラケズリで仕上げている。ほかに大極殿北西方の上層と後殿表採がある。

(4)厚さ約4cmのもの。両表面ともヘラケズリで仕上げるが、上面はやや凹んで裏面は外縁に沿ってかるくケズる。いずれも上層からの出土で、後殿と軒廊の入隅部分から2点、後殿北東部から1点である。残片が15.5×12cmのものは方壇の可能性もある(177)。

3. 凝灰岩 (Fig.39、図面17)

後期難波宮大極殿院の建物は凝灰岩切石による壇正積基壇であるが、基壇は解体されたために原位置に残る凝灰岩はごくわずかである。大極殿北辺からの軒廊の入隅や階段に地覆石が数個、後殿の東回廊取付き部の南雨落溝や、回廊北西隅と南西隅の暗渠にほんの一部がみられる。

遺物としてとりあげたものは、コンテナパッドに約30箱、そのうち原形のわかるもの1点、厚さのわかるもの16点、厚さともう一辺の長さのわかるものは数点で、多くは小塊である。

(178)は既報告で、原形は残るが「基壇化粧材であろうが使用法は不明である。」「[喜谷1965]と報告したものである。

(179)は同じ報告書で「平面形が二等辺三角形であつたらしく、おそらく階段の羽目石に使われたものであろう。」とされている。一面は平らにつくられたあと風化されて小さな凹凸がで、その裏面と二等辺三角形の底辺の面は粗く、斜辺の面はていねいに仕上げている。

(180)は厚さ10cm、一辺が30cm位の二等辺三角形に割れている(180)。上面は平らに調整されていたらしいが現在は荒れている。下面は粗いままで、刀先3.5cmの工具を約3cm間隔で斜めに打込んだ痕がある。側面はいずれもきれいな仕上げに見えるが、一辺数cmの平らな面が連続した状態である。上面は外表のために風化で荒れ、下面は内面であるから粗割りに近い状態で、側面は他の石材との接触部分なのである程度まできれいにしたものと考えられる。大極殿後殿に取付く東回廊の中央柱の掘立柱抜き穴から出土している。

(181)は厚さ14cm、幅24cmで長さは47.7cm以上あって、上面の長辺の片側に幅約2.1cm、深さ約3.7cmに切欠く。加工は平らでいてねいな仕上げの上面に対して、下面と切欠いた側面は粗く、短側面はやや平らで、切欠いていない側面はやや粗い。切欠いた所は荒れている。第35次COB20区攪乱土壌から出土しているが、回廊基壇南側地覆石(雨落溝内側石)の可能性はある。しかし、第13次東回廊取付きの南雨落溝では、側石は厚さ約18cm、幅約30cmあり、この凝灰岩の厚さ、幅は小ぶりである。

後殿COG13区でも幅3.2cm、深さ4cmの切欠きをした小塊が出土している。

第39次BTW19区残土処理中に凝灰岩が19個出土し、そのうちの4個は浅く切欠いている。そのうちの1個(182)は厚さ14.4cmで、幅34.8cm以上、長さ22cm以上の切石で、上面の一辺を深さ1.1cm、幅5.1cmに切欠いている。上面と切欠いた部分は荒れており、下面は粗く、切欠いた側面もやや粗く、短辺の側面は平らに仕上げています。他の3個も似たようなつくりであるが、厚さは15cmと17.5cm、不明のものである。溝の底石である可能性が高い。

ほかに板状かとおもわれる凝灰岩には、厚さが9.3～12cm位のものがある。15cm前後の厚さで幅が26～29cmあるものの2種類がある。

上面の一辺を切欠く凝灰岩は、原位置に残るものでは、①大極殿地覆石の外側(内側には羽目石との組合せのためにさらに大きな切込みがある)、②後殿に取付く回廊の雨落溝の内側石(回廊地覆石)、③溝及び暗渠の底石がある。①と②は4～8cm、6cmに深く切欠き、③は2cm以下と浅く切欠く。とり上げた凝灰岩でみると②および③である可能性が高いので、切欠きの深さと、加工痕や荒れの状態も合わせて(181)は②、(182)は③と考えた。

また、現存する溝石をみると、各所で石の大きさはほぼそろえているが、同じ底石でも後殿東回廊雨落溝、回廊北西隅暗渠、同南西隅暗渠、朝堂院北東隅部暗渠[植本久1986]では厚さが、およそ12.5cm、18cm、12.5cm、21cmと異なっていて必ずしも同じにはつくられていないことがわかる。

加工痕については、a表面が非常に平らにきれいなもの、b一見平らにきれいにみえるがさわってみると数cm単位の平面の集まり、つまり、aよりはやや雑な仕上げのもの、cはやや粗いもの、d粗いもので、これは工具痕がそのままの凹凸のあるものや溝状の凹みの残るものもある4つに分けられる。aは表面、bは他の石と合わせる所、cとdは裏面で土に接する面の加工である。

風化というか使用痕というか、表面の荒れについては、単に風化しただけでなく第13次

調査溝底石のように中央が凹んでいるものもある。

瓦類の整理には奈良国立文化財研究所考古第三室長山崎信二氏をはじめ佐川正敏氏・小澤 毅氏のご教示を受けた。また唐草文軒平瓦6673の型式決定には同研究所岸本直文氏にお世話になった。深謝しお礼を申し上げたい。

(八木)

註)

- (1) 軒丸瓦6011Bについて第15次調査朝堂院北西隅から出土したものを6011Baとし、6011Baの范を改刻したと認めるものを6011Bbとした。
- (2) NW85-22次調査、第5トレンチから出土。遺構は〔植本久1986〕参照。

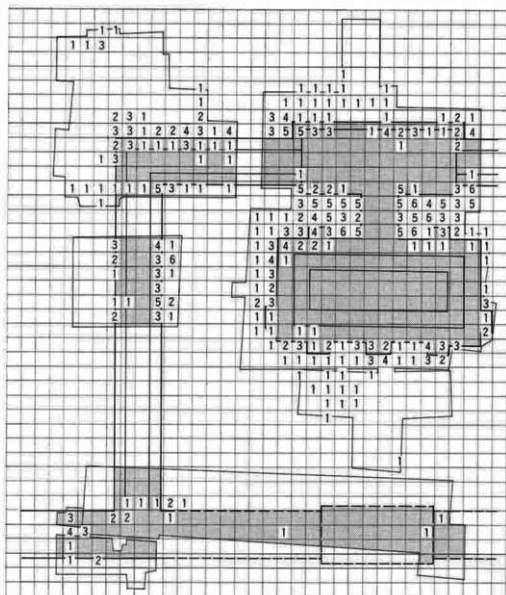


Fig.40 後期難波宮大極殿院出土土瓦分布図(方眼：1辺3m)

- | 度数 | 重量 |
|----|-----------|
| なし | 0kg |
| 1 | 1kg未満 |
| 2 | 1～2kg未満 |
| 3 | 2～5kg未満 |
| 4 | 5～10kg未満 |
| 5 | 10～25kg未満 |
| 6 | 25～50kg未満 |
| 7 | 50kg以上 |

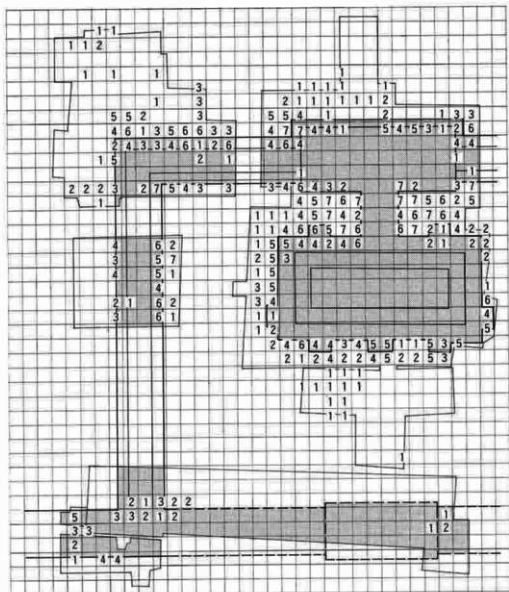


Fig.41 後期難波宮大極殿出土平瓦分布図(方眼:1辺3m)

度数	重量
なし	0kg
1	1kg未満
2	1~3kg未満
3	3~5kg未満
4	5~10kg未満
5	10~25kg未満
6	25~50kg未満
7	50kg以上

(補注)

- ① 明らかに後世の土層・擾乱層から出土したものは除いた。
- ② 取上げた瓦が複数の小地区にわたる場合は、重量を均等に割付けた。
- ③ 難波宮跡は、後の大坂城や軍隊などによる擾乱を受けている。因みに大極殿・後殿の周囲の地覆石・雨落溝の抜き取り跡の遺構面では40%弱の擾乱層があった。

Tab.3 後期彌波宮大極殿院瓦類地区別出土一覧表

単位: cm

表数	型式/地区	33・34次(瓦殿・回廊)					37次(大極殿)					35	36	38	計(%)
		北東	北西	南東	南西	その他	北東	北西	南東	南西	その他	院北西隅	院西回廊	院南西隅	
軒瓦凡	直径														
6017	19.8						4								4(3.3)
6013A	18.2		6		2			4	1			3	1	3	24(21.1)
6013Aor6016			4					1	1			6	1		16(14.2)
6016	17.9	4	1	4			1	1							11(9.7)
6020	117.0)		1												1(0.9)
6014	15.4				1		2	2		1		1		2	9(8.0)
6022	15.2			3			3	1				1			8(7.1)
6013B	13.7			1											1(0.9)
6013	13.4					1								1	2(1.8)
6021	(13.6)							1							1(0.9)
6012	13.2			1											1(0.9)
6009	13.3			1										4	5(4.4)
6011Bb	14.3											2			1(0.9)
6018a	13.1													1	1(0.9)
6010b	13.1											1		1	2(1.8)
葺瓦文			5	3	1	1	1	2	2	1		4	2	1	23(20.2)
6241	16.6						1								1(0.9)
葺瓦文	16.1			1											1(0.9)
計		4	17	14	5	2	12	12	4	2		20	4	1	113(100.0)
軒平瓦	最大幅														
6372C						1								1	1(1.0)
6372A	28.2	1	3	1		1		2				3	2		16(15.5)
6372B	28.0						1	1	4			2			8(7.8)
6374A			2											1	3(2.9)
6374B	27.8		4	1		1		2				3	2	1	15(14.6)
6374C	27.4											1			1(1.0)
6374Cord												1		1	3(2.9)
6374D	27.2	1		1	1							1			2(1.9)
6372D	24.3			1			1					2			4(3.9)
6372E	(25.1)							1							1(1.0)
6372H	24.0			3			4	3							10(9.7)
6372F	21.6			2	2								1		6(5.7)
6373A	27.4			1					1						2(1.9)
6373B	22.7			1		1									2(1.9)
6373C	27.7								1						1(1.0)
6072		1	2	2		1						1	1		8(7.8)
葺瓦文			3	1			1	1		1				2	9(8.7)
6664B	28							1				2			3(2.9)
6673												1			1(1.0)
計		3	16	16	3	2	10	11	5	2		16	4	2	111(100.0)
瓦	高さ														
6029	39.4			1				1							2
6021		1	2									1			4
6022	(17.0)			1	1										2
6023	24.6													3	3
計		1	2	2	1			1				1		3	11
面平瓦	最大幅														
6970A	19.0		3	4	6			2		2		1	6	1	27
6970B	13.8							1							1
6971A	18.0	1													1
6972	23~28							4		1					5
6973A	22.0		1				1	1	2	2	1				8
6973B				1											1
6973C	15.0											1			1
6973	(21.0)	1		3											4
6976			2				1	3				2			8
6976B	13.8			1											1
6976C	13.5						1	1							2
6979	21.5											6			6
不明		2	4	3	2		2	4	2	6		2	2	6	26
計		4	10	14	8		5	16	4	11	1	13	8	7	101

(): 復原値。(): 使用時の大きさ

Table 4 後期建設宮出土軒瓦計測表

単位: cm

型式番号	底 径	内 区				外 区				瓦 当 厚	全 長	瓦 部			色 澤	備 考
		第一内区内径	第二内区内径	第三内区内径	内 径 幅	内 径 幅	内 径 幅	外 径 幅	外 径 幅			外 径 幅	外 径 幅			
《東国文庫》																
6008	15.5	2.8	6.1		9.5	13.3		1.2	1.0	直立縁	4.3				灰褐色	中々硬
6009																
6010	13.1	2.3	5.3		8.1	11.7		0.8	0.6	"	3.2				灰色	"
6011A	17.3	3.6	7.1		10.6	14.4		0.7	0.6	"	3.3				黄褐色	中々軟
6011B	14.3	3.0	6.2		8.9	12.3		1.5	1.0	中々内面斜縁	4.5				黄褐色	中々硬
6012	13.2	2.4	5.2		9.0	10.7		0.8	1.2	内面斜縁	2.9				"	"
6013	13.4	2.5	5.3		9.1	11.0		0.8	1.2	直立縁	3.4	12.1	5.1	9.6	灰色	"
6014	15.4	3.6	7.3		11.5	13.5		1.0	1.2	"					黄褐色	中々軟
6015A	18.2	3.7	7.9		12.4	15.6		0.9	1.0	"	{ 2.4 4.0	14.6	3.2	11.8	灰色	"
6015B	13.7	2.4	5.1		8.7	11.4		1.1	1.2	"	4.3	13.5	5.2	11.9	灰色	"
6016	17.9	3.7	7.5		12.3	15.6		1.1	1.0	"	3.8				"	中々硬
6017	19.8	3.4	8.7		13.7	17.6		1.0	1.0	"	5.0				"	"
6018	18.7	2.5	8.1		13.0	16.9		0.4	0.9	中々内面斜縁	4.8	19.5	5.3	5.2	"	軟
6019								0.9		直立縁	3.7				黄褐色	中々硬
6020	(17.0)	3.0	8.0		13.1	15.1		0.7	0.7	中々内面斜縁					灰色	中々軟
6021	(13.6)	2.2	5.3		8.2	(11.6)		0.7	1.0	直立縁	4.0				灰色	中々硬
6022	15.2	3.2	6.6		9.9	12.9		0.8	1.0	"	3.1				"	軟
								0.6	1.3		4.4	14.1	4.2		"	中々軟
《東国文庫》																
6241	16.6	3.1	1+4+8		P8	11.0	1.6	1.2	0.7	直立縁	2.9				褐色	中々硬
6203	16.1	3.7	1+6		P8	8.7	2.0	0.9	0.8	内面斜縁V	4.5	13.5	3.2	9.4	黄褐色	"

(P—横穴、S—直穴、V—内面斜縁) () は測定値を示す。

Tab5 後期離波宮出上軒平瓦計測表

型 式 番 号	《中国文様》	瓦						当			上 外 縁			下 外 縁			平 瓦 量			色 源	硬 度
		上 位 幅	下 位 幅	厚 深	厚	中 心 厚	内 外 厚	内 厚	幅	高	幅	高	全 長	幅	高	幅	高	厚			
6571		27.5	28.2	5.9	5.6	(1.0)	0.7	2.2	(1.8)	0.8	0.2	0.8	0.5	26.8 {25.8 27.9	24.1	5.4	2.5	原色 褐色	軟 中々軟		
6572A		27.3	28.0	5.7	6.1		0.8	2.3	2.1	0.8	0.7	0.8	0.7					灰色	硬		
6572B					7.2		0.7	3.0	4.8	1.0	0.6	1.2	0.6					褐色	中々硬		
6572C		23.6	24.3	4.4	4.8		0.5	2.2	2.9	0.9	0.6	1.0	0.5	22.2	21.6	3.5	1.9	褐色	軟		
6572D		(24.9)	(25.1)	(3.1)	5.3		0.6	2.1	(3.3)	1.0	0.5	1.0	0.3		24.4		2.3	原色 褐色	中々軟		
6572E		21.6		3.7	4.1		0.5	1.7	2.7	0.5	0.5							原色 褐色	中々軟		
6572F		27.0	28.2	4.6	5.6		0.9	2.0	3.8	0.7	0.6	0.7	0.6	35.0 (17.6)	(2.3)	1.9	1.9	褐色	中々硬		
6572G		25.0	24.0	4.8	4.7		0.6	2.0	3.2	0.6	0.5	0.6		33.4		2.2		褐色	中々軟		
6572H		27.4	27.3	5.1	5.7		1.0	2.6	4.0	1.0	0.5	0.7	0.3	37.1	24.6	4.2	1.7	褐色	硬		
6573B		22.3	22.7	3.7	4.9		1.0	1.9	3.5	0.7	0.1	0.7	0.2	31.4	21.4	4.1	1.9	褐色	中々軟		
6573C		27.7	27.2	3.3	5.0		0.7	2.1	3.7	0.6	0.3	0.7	0.5					褐色	中々軟		
6573D		27.4	27.3	5.1	5.7		1.0	2.6	4.0	1.0	0.5	0.7	0.3					褐色	中々軟		
6574A					7.0	0.5	2.3	3.4	5.0	1.0	0.5	0.8	0.4					褐色	中々軟		
6574B		27.2	27.8	6.9	6.4	0.5	1.6	2.7	4.0	1.1	0.7	1.3	0.8	36.5			2.0	褐色	中々軟		
6574C		27.4	27.4	3.8	6.2	0.8	2.0	3.4	4.6	0.7	0.4	0.7	0.5					褐色	中々軟		
6574D		27.7	27.2	4.4	5.9	0.9	2.0	2.7	4.7	0.6	0.3	0.4	0.4	39.5			2.6	褐色	中々軟		
6576A		30.7	30.0	7.4	5.7	0.7	1.7	3.0	4.0	1.0	0.3	0.8	0.3					褐色	中々軟		
《中国文様》							上外縁幅	下外縁幅											軟		
6662					5.8		3.1	0.6	0.3	1.2	0.8							褐色	硬		
6664A		30.7	30.2		6.1		4.5	0.5	0.6	0.6				40.5				褐色	中々軟		
6664B		27.4	28.0		6.9		4.7	0.8	0.5	0.8	0.4			38.0				褐色	中々軟		
6673					5.1		3.1	0.6	0.3	0.6	0.3							褐色	中々軟		

()は換元値を示す。

Tab.6 後期彌渡宮出土瓦・平瓦計測表

種類	型式番号	製作法	成彩文	計測値						色調	硬度
				前幅	後幅	全長	側高	後低	厚さ	玉縁長	玉縁高
丸	6161A	玉縁付・面取せず	横目印文・上磨消	13.8	34.8	7.4	7.0	1.0	11.7	4.7	6.2
	6161B	"	"	16.4	15.8	36.5	8.2	8.5	1.8	4.7	7.1
	6161C	"	"	16.0	15.6	39.6	8.0	7.7	1.5	4.6	5.9
	6162A	"	"	12.9	14.2	33.9	6.5	6.8	0.8~1.2	4.2	4.5
	6162B	"	"	15.3	15.7	10.1	8.3	1.3	1.3		
	6162C	"	"		(16.7)	(6.1)	9.6	1.8			
	6281A	玉縁付・面取	"	17.6	16.6	38.9	8.6	8.0	1.4	5.7	6.3
	6281B	"	"	13.4	12.9	6.6	6.2	1.3			
	6281C	"	"	12.6	12.2	27.1	6.5	6.2	1.1	5.2	3.9
	6282A	"	"	14.0		33.4	6.6	6.0	1.1	5.1	4.9
瓦	6282B	"	"	13.2	13.0	39.0	6.7	6.9	1.5	3.6	5.2
	6301	玉縁付・全方面面取	"	13.7		27.4	6.7	7.4	1.3	4.7	4.4
	6302	"	"		18.6	38.0	8.7	8.7	2.5	4.3	5.8
	6309A	"	"	18.1							
	6309B	"	"	18.5			9.1		2.0	6.2	6.4
	6511	輪巻收作	横目印文・上磨消	21.7	32.0	32.0	6.2	7.1	1.4		
	6531A	"	横目印文	21.4	23.2	30.3	6.2	6.5	1.4		
	6531B	"	"	23.5		34.4	4.1		1.7		
	6532	"	"		42.0		8.6	8.9	2.1		
	6561A	"	"	25.0	28.0	39.5	7.6	7.4	2.2		
平	6561B	"	"	24.8	26.9	37.0	6.0	6.3	1.7		
	6561C	"	"	22.8	24.7	34.9	5.8	6.3	1.7		
	6561D	"	"	25.3		38.5	9.0	8.1	2.0		
	6561E	"	"	(22.5)	(23.3)	36.0	(7.0)	(8.5)	2.4		
	6561F	"	"	23.9	31.5				2.0		
	6561G	"	"		30.5				1.8		
	6561H	"	"	(23.2)	25.6	35.4	7.5	7.8	1.4		
	6562A	"	"	(21.0)	(23.1)	32.5	(6.0)	(5.5)	1.8		
	6562B	"	"		36.0			7.8	1.9		
	6563	"	"	29.3		35.2	6.6	7.4	1.9		
瓦	6564	"	"		36.4				1.5		
	6565	1段作	"		30.0				1.8		
	6761	"	"								

()は推定値を示す。

Tab.7 後期難波宮瓦類出土数表

調査年度 型式番号	調査年度																						73 83 100 112 121	97 122 133	中 央 体 有 限 公 司	33 34	35	36	37	38	不明	合計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22										
6008													1								1	1								3		
6009		1																	2	1						1				5		
6010															1	1	1										1	2		6		
6011A				1																	3									3		
6011B		2	1	1							3		1	1	1		5	2								2				1		
6012						2	1	2	6	2	1	1	13	28	2							1	1					4	2	66		
6013																									1				1	2		
6014		2	1	1	8					7	14	2					1	12				1			2	1	1	3	2	2	42	
6015A											1	2	31	1					1	2			4	1	9	5	1	5	4		68	
6015B																	2					1	1							5		
6015AorB						1				3	6	3	2	1	1	7					2			3	4	6	1	2	3	3	48	
6016		22	5	4	1	1				2									1		5	2			2	9		2	12	47		
6017			1																1	3					2			4		11		
6018																														1		
6019																													2	2		
6020																						1			2	1				4		
6021																									1	1			1	3		
6022																										3	1	4		8		
6241										1									4	3									1	2	9	
6303		1	2							3									3	5	10	25	2	3	34		1	29	1		110	
6371																							1	1	1					3		
6572A													25	3							1	2		3	8	3	2	2	1		50	
6572B								1																			2	6			9	
6572AorB		1								3	19										1			2							27	
6572C																					1								1	2		
6572D										1	1	2					6	8	1	2				3	1	2	1				28	
6572E																						3							1	6		
6572F																									2					2		
6572G																											4		1	6	11	
6572H																											4				4	
6572I																												3		7	10	
6573																											5	1	1	1	8	
6573A		2	1	2	15								1	2	2	2	6	3							1		1	1	5		43	
6573B		2	1	1						3																	1		1		9	
6573C																						1							1		3	
6573D																							3	1							4	
6574A		1	1								3		2														2			3	11	
6574B				1	2					3								19	1	2	5				8	6	3	2	2		47	
6574C		5			1						3	1		2					12			1	1								26	
6574C or D																											3	1		1	5	
6574D		13	2	1	2						2											3			1	2				3	29	
6576												12																			12	
6662											1																				1	
6664A																								7		1					10	
6664B		7								1	2					2	3	8	3	20					9	2	1				38	
6673																												1			1	
清水庵6490							1																								1	
6491																															1	
熊尾6901		1																													1	
その他熊尾		1																											1		2	
宝和6920																													1		2	
6921				1																		1				3	1				6	
6922																										2					2	
6923																													3		3	
瀬戸瓦		5			2					5	23	5						2			19	25					26	13	8	37	7	128
瓦平瓦					1					7	1											4	5		2		1				21	
調平瓦										2																1	3		7		14	
磚						1	1				12							18	2			20	4	2			7	1	3		40	

(型式の明らかなものに限る・斜線は未整理)

第3節 難波宮下層遺跡

1. 土器 (Fig.42・43・44・45・46、図版72・73)

土器を焼成したとされる遺構から出土した須恵器甕201のほかは、難波宮が造営される以前の包含層から出土したものである。

201は頸部上半に波状文を施し、下半をカキメ調整する。体部外面は平行タタキメ調整ののち1~2cmおきに幅1.0~1.5cm前後のカキメ調整を施す。内面の同心円文当て具痕は、一部ナデ消されずに残されている。田辺昭氏の編年によるON46型式前後に当たると考えられ、5世紀後半の年代を与えることができる。

包含層の大半は後期難波宮大極殿基壇など、難波宮の遺構を保存するために調査されていない。出土した土器はほとんどが近世の遺構や攪乱を利用して設定したトレンチのものである。232のみが第33次調査で出土し、ほかは第37次調査で出土した。杯類の名称は第1節第1項pp.93-95と同様に奈良国立文化財研究所の分類を用いる。

土師器には杯C202・杯203・204・高杯205・206・鉢210・甕207・羽釜208・甕209・211~214・甕215がある。202・205は内面に斜放射状暗文が施される。精良な胎土で、赤褐色を呈する。202の体部下半と底部はヘラケズリ調整である。203・204のような杯は、杯Cの影響を受けて成立したものと考えられるが、胎土はやや粗く、にぶい黄褐色を呈する。暗文はなく、粗いユビオサエ・ナデ・ヘラケズリなどによって仕上げられている。206の脚軸部はヘラケズリによって面取りされているが、粗雑である。207は断面楕円形の太い把手をもつ甕で、ユビオサエおよびナデ調整である。口縁部はヨコナデが施されていないため、水平にならず、凹凸がある。208は生駒山西麓産の粘土で作られた羽釜である。210は口縁部径19.4cmの鉢で、調整は207と同様で、やはり口縁部に凹凸がある。甕209・211

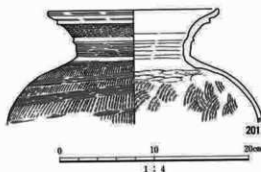


Fig.42 窯状遺構出土土器

~214のうち、209は器表面の残りが悪いが、口縁部内面にハケメがみられる。体部は板ナデあるいはヘラケズリによって調整する。211・214は体部外面をハケメ調整する。212は器表面の残りが悪く、調整が観察できない。213は器壁が厚く、体部下半を雑なヘラケズリによって調整する。215は付け底の甕である。口縁部径

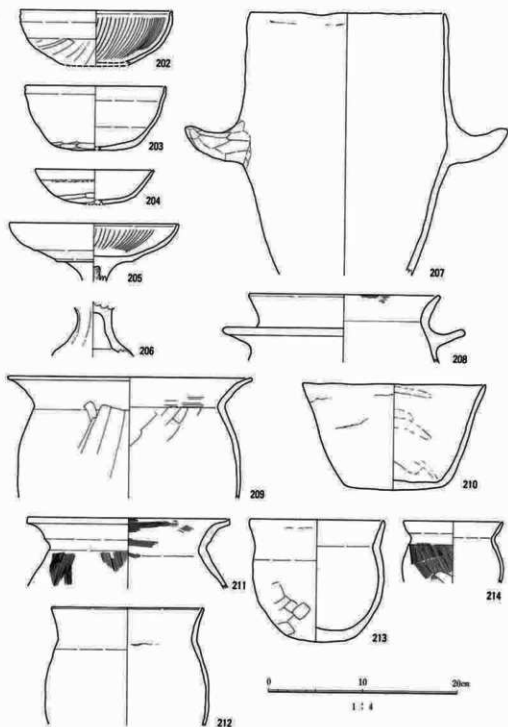


Fig43 遺物包含層出土土器

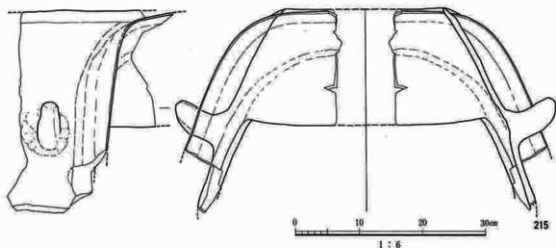


Fig.44 遺物包含層出土土器

25cm前後に復元できる。ナデ・ユビオサエによって仕上げられている。把手の断面はほぼ円形である。体部に内側から挿入している。

上で述べた土師器のうち、203・204・207・209・210・213・215は基本的にユビオサエ・ナデ・ヘラケズリなどによって調整され、外面に粘土ひもの接合痕がみられるものが多く、粗製であるというように共通する点が多い。京嶋覚氏によって「難波型」とされた土器群である[京嶋覚1989]。なお、図示したもの以外には精製の把手付碗や、内外面にハケメを多く残す甕の底部などがある。

須恵器には杯H229～236・同蓋216～224・杯G225～228・同蓋237・高杯242～244・同蓋239～241・皿238・鉢245・246・甕247～249がある。杯Hの口縁部径は12.4～8.9cm、同蓋は14.2～10.6cmである。回転ヘラケズリの確認できるものは216～221・229～234で、ほかはヘラキリののち不調整である。221・229・235にはヘラ記号がある。杯Gは口縁部径11.6～9.9cmである。225・226は底部外面を回転ケズリを施し、227・228はヘラキリののち不調整である。同蓋237はいわゆる乳頭状のつまみをもつ。239～241は偏平なつまみもち、天井部を回転ヘラケズリ調整する。243・244は蓋を伴わない高杯である。244の脚部には円形のスカシがある。245の底部は厚い円盤状で、中央付近には数個所に穴が穿たれている。246は口縁部径37.7cmの大きな鉢で、体部には回転ナデによって消された外面のタタキメと内面の同心円文の当て具痕とがわずかに観察できる。247は口縁部内面から肩部外面にかけて自然軸が厚くかかっている。ほかには、横瓶や平瓶がある。

なお、本層から出土したものではないが、同時期に属すると考えられる土製品として、

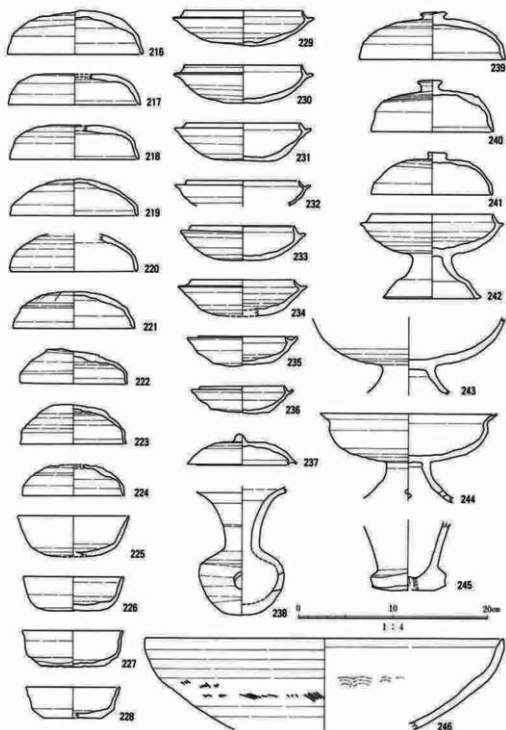


Fig.45 遺物包含層出土土器

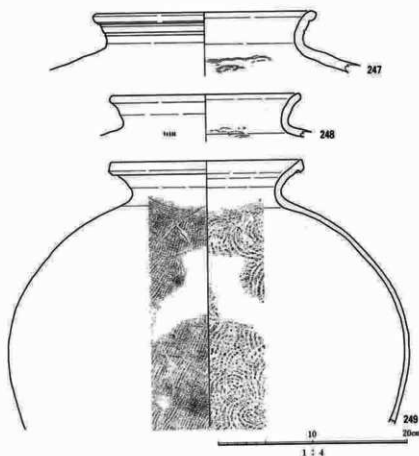


Fig.46 遺物包含層出土土器

土錘が3点あるのでここでふれておきたい。新しい時期の地層に混入して出土した。いずれも長さ6~7cm程度の円柱形で、両端付近に長軸と直交する方向の孔をもつタイプである。

以上に示した土器の年代は6世紀後半~7世紀中ごろで、時期にかなり幅のある資料である。本層の分布域や形成の過程は明らかではないが、完形に近い状態の土器が少なくなく、甗・竈などの大きな破片もみられることから、付近に堅穴式住居や土壇などの遺構が存在した可能性が高い。7世紀後半にまで下るものが1点もないことは、第1節第1項で得られた成果と同様である。(佐藤)

2. 瓦類 (Fig.47、図版78)

素弁八葉蓮華文軒丸瓦(250)の瓦当の直径は復原値で16.8cmある。軟質で損傷がひどく、また大きく型崩れもしている。中房は輪郭が残らず、1+6の蓮子は2個所で2つの蓮子が結合している。蓮弁はいわゆる円点珠で、高い間弁を配し、外縁は細くて低い。瓦当は薄手で瓦当裏面の頸側には面取りがある。丸瓦は高い位置に円弧状に接合した痕がみられる。外表は残っておらず内部は黄色味を帯びた灰白色を呈し、胎土は細かいが、鉄雑物が多い。四天王寺創建時の范型が大破した軒丸瓦と同范である〔藤沢一夫1965・1967〕。大極殿前庭の小石敷下の整地層から後期難波宮の瓦片と共に出土している〔八木久栄1973・大阪市文化財協会1984〕。

(八木)

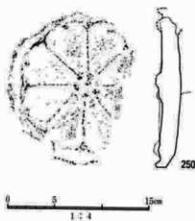


Fig.47 蓮華文軒丸瓦

3. その他

第37次調査W19区の難波宮下層の遺物包含層から鉄片1が出土している。残存長は約12cmあり、全面錆に覆われて3個に折れている。折れた断面は、1.4×1.2cmと1.1×0.8cmの隅丸長方形を呈している。釘の可能性もあるが決めがたい。

(八木)

第V章 考 察

第1節 難波宮大極殿の成立

直 木 孝 次 郎

はじめに

戦後における都城(宮都)の発掘調査およびそれにとまなう研究の発展・深化はめざましいものがある。難波宮・近江大津宮・飛鳥諸宮(板蓋宮・浄御原宮等)・藤原宮・平城宮・恭仁宮・長岡宮・平安宮等々の研究が進み、ひとつの大きな学問領域を形成している。しばらく都城研究から離れていた者がその大体に通ずることは容易ではない。私もまた亡羊の嘆を味わうものの一人である。

しかしまだ手を着けられていない問題もあるようである。たとえば推古天皇の小墾田宮の朝廷が、南に門を開き、なかに庁と庭とがある一郭より成り、ここで大臣と大夫らによって政務が処理され、その一郭(朝廷)の北に接して天皇(正しくは大王)の居所があり、朝廷とは大門を以て通じているという構造であることは、『日本書紀』推古16年(以下推古16年紀と略す)8月条および同18年紀10月条によって察せられる。そしてこのことは岸俊男氏の研究(註1)以来、ほぼ学界の承認するところとなっている。

ところがこの構造は、小郡宮と推定される孝徳天皇の難波宮に形を変えて踏襲されていることが大化紀5年2月条に見えるが、明日香村大字岡の板蓋宮伝承地宮跡の第Ⅲ-B期遺構(伝承地宮跡の上層遺構で、天武天皇浄御原宮跡とするのが通説)には、この構造が見えない。庁(または朝堂)のある一郭と天皇の居所(大極または大極殿がある)とが、門によって接続するという構造が存しないのである。それは何故であろうか。

こうした問題を手がかりとして、以下私見を開陳する。

1. 小墾田宮から前期難波宮までの「大極殿(大殿)」

小墾田宮についての『日本書紀』の記述では大門のむこうにあるはずの天皇の居所(内裏)のようすは分らないが、皇極4年紀6月戊申(12日)条に見える蘇我入鹿暗殺事件—いわゆ

る乙巳の変の発端一は、飛鳥板蓋宮の内裏で起こった変であろう。

『書紀』によれば6月12日は「三韓の調を進むる日」である。しかしそれを受けるために皇極天皇が出御した「大極殿」(『日本書紀』はこう記すが、それは文飾で、正しくは内裏の大殿であろう)には「三韓」の使人の姿はなく、そこに待る者は古人大兄皇子と蘇我入鹿と、「三韓の表文を読唱す」蘇我倉山田石川麻呂だけであるように『書紀』は記している。中大兄皇子でさえ、「自ら長槍を執りて、殿の側に隠れたり」とあるくらいだから、正式の出席メンバーは、天皇のほかは皇太子に准ずる地位にある古人大兄と、大臣である蘇我入鹿と、表文を読む蘇我倉山田石川麻呂の三人だけであったと思われる。

従来「三韓」の使人の姿が見えないのを不審とし、三韓の進調云々は入鹿を大殿に出席させるための謀略とする説などがあつたが、政治の中核にいる入鹿にそのような詐術は通用しないであろう。推古16年紀にみえるように、隋使でさえ信物を「庭中」に置き、阿部臣鳥が隋使の「書」を承け「大門の前の机に置き奏」したのであって、隋使は大門の中にはいない。皇極4年における「三韓」の使人も内裏の大門をくぐることはできなかったであろう。しかし考えてみれば、内裏は同時に後宮でもあるのだから、外国の男性使人がはいれないというのは不思議ではない。政務に関連して内裏にはいれる者は、古人大兄や入鹿など、有力な皇子や少数の最高級官人に限られていたのであろう。しかし内裏の中には政務一儀礼的な性格が強いであろうが一を処理するための大殿が存したことを、皇極4年6月条から読み取ってよいであろう。この条は入鹿暗殺の物語として調色が多いが、基本的な部分は事実を大きくははずれていないと思う。

乙巳の変後、周知のように都は難波へ遷るが、宮の構造のわかる記事は、大化3年紀は歳条と白雉元年紀2月甲申(15日)条とである。つぎの通りである。

(A) 大化3年は歳条

天皇、小郡宮に処りて礼法を定む。その制に曰はく、「凡そ位を有つ者は、¹⁵⁵要ず寅時に、南門の外に、左右羅列し、日の初めて出づるを候ひて、庭に就きて再拝し、乃ち序に待れ。(中略)午の時に至るに臨みて、鐘を聴きて罷れ。(中略)其の鐘の台は中庭に起てよ」と。

(B) 白雉元年2月甲申条

朝廷の隊仗、元会の儀の如し。左右大臣・百官人等四列を紫門の外に為す。粟田臣飯虫等四人を以て、雉の輿を執らしめ、¹⁵⁶在前ちて去く。左右大臣、乃ち百官及び百済の君豊璋、其の弟塞城・忠勝、高麗の侍医毛治、新羅の侍学士等を率ゐて、中

庭に至る。三国公麻呂・猪名公高見・三輪君薨徳・紀臣乎麻呂岐太、四人をして代りて雉の輿を執りて、殿の前に進ましむ。時に左右大臣、就きて輿の前頭を執り、伊勢王・三国公麻呂・倉臣小屎、輿の後頭を執りて、御座の前に置く。天皇、即ち皇太子を召して、共に執りて觀る。皇太子、退りて再拜す。(下略)

(A)の宮が小郡宮であることは明瞭である。(B)の宮は、大郡宮とする説もあるが、大郡宮が『書紀』に初見するのは白雉3年正月条であるから、小郡宮とするのが妥当であろう(註2)。この2つの記事から推定される小郡宮の構造は別稿で論じたことがある(註3)ので、ここでは簡略に述べる。

(A)にみえる南門は前期の小懸田宮の南門に相応し、南門をはいて庁と庭とがあるのも同じである。そうすると(B)にみえる紫門は、庁と庭とから成る一郭(朝廷)の北にあって内裏に通ずる大門に相当することになる。白雉元年2月の場合は、左右大臣などの高級官僚だけではなく、それ以下の百官人も内裏の門である紫門の前で待機し、雉の輿とともに門をくぐって内裏の中庭に入る。その中には百済の王族の豊璋兄弟、高句麗の侍医、新羅の待学士ら外国人もまじっている。彼らの入場した内裏の中庭は(A)に鐘を起てたとある中庭に相当するであろう。そしてそこには天皇の出御する殿がある。「殿」はすなわち「大殿」であろう。

白雉元年の推定小郡宮では、天皇は内裏の「殿」で皇太子や最高級官僚だけでなく、それ以下の多数の官人や外国人と会っているのである。それは内裏の殿の機能が変わったことを意味する。ただし多数の百官人や外国の王族・医師・学士まで内裏にはいったのは、瑞鳥出現の祝賀の儀式が行われたからであって、つねにそれほど内裏が解放されていたのではあるまい。しかし大化改新後の天皇は、それ以前の天皇とはちがう。つねに内裏の中にあり皇太子や二・三の高級官人を介して政治を見る体制は改革され、内裏の大殿に從來より多くの官人—おそらく大夫クラス—をも呼び入れて政務を処理する体制が取られるようになったのではあるまいか。

かつての天皇は内裏の奥にしずまり、大臣・大連が政治の実務を取っていたが、大化新政期の天皇は左右大臣の補佐を受けるにしても、みずから政務を取るようになる。その場所が内裏の大殿であって、内裏大殿は従来の天皇の私的な場から公的な場に転換する。こうして成立するのが、前期難波宮の内裏前殿と呼ばれる一郭である。

すでに明らかになっているように、前期難波宮で内裏前殿と呼ばれている建物SB1801は、内裏後殿と呼ばれる建物SB1603と回廊で結ばれ、しかも回廊のほぼ中ほどのところに

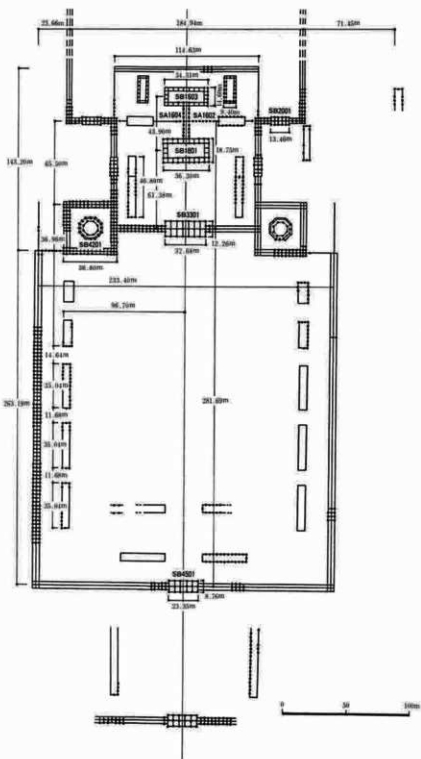


Fig.48 前期雞液宮

東西に連なる欄列SA1602があり、内裏前殿は北はこの欄列、東西と南は回廊で囲まれており、南の回廊の中央に門がある。この区画は南北84.66m、東西114.63mあり、藤原宮の大極殿を囲む区画(大極殿院)と比較すると、南北の長さは藤原宮のそれが約230.3mで長い、東西の幅は約116.5mであって近似する。またその南方に展開する朝堂院部分との関係位置も、難波の内裏前殿と藤原の大極殿とは酷似する。これらの諸点から、内裏前殿が大極殿の前身をなすという推定も、学界の通説となっていると思われる。

ここで改めて前期難波宮の内裏前殿の成立をまとめると、もと内裏の内部にあった大殿または殿と呼ばれる建物が、大化の新政の開始以後、天皇の政治性の高揚強化とともに公的な性格を増し、天皇の政務を処理する場となって内裏から突出し、独立した一区画の中心建物となった。それは後の藤原宮大極殿の前身となるのであるが、前期難波宮の段階では、内裏の主要部との境界が欄列で区画されているだけで、完全に分離した区画を形成しておらず、また建物自体も内裏の主要建物である後殿と回廊で結ばれている点でも独立しているとはいえない。内裏前殿と呼ばれる所以である。

内裏前殿一郭のもう

一つの特色は南に開く門(推古16年紀の大門、白雉元年紀の紫門の後身)の大きいことである。Tab.8に示すように面積において前期難波宮の朝堂院南門の約2

Tab.8 宮殿諸門比較表

宮名	門の名称	桁行総長	梁行総長	備考
前期難波宮	内裏前殿南門	32.68m(112尺)	12.26m(42尺)	尺は復原尺
	朝堂院南門	23.35m(80尺)	8.76m(30尺)	尺は復原尺
藤原宮	大極殿門	<80尺>	<30尺>	推定復原
	朝堂院南門	80.5尺	33.4尺	尺は曲尺

(長山雅一「前期難波宮朝堂院の二つの門をめぐって」：『難波宮跡研究調査年報』1973年、中尾芳治「前期難波宮内裏前殿SB1801をめぐって」：『難波宮址の研究』第7 1981年による)

倍あり、藤原宮の大極殿門・朝堂院南門より大きい。それは別に述べたように官人や蕃客を宴するなどの儀礼のために必要でもあったのであろうが(註4)、新政の進行とともに高まった天皇の権威の高さを示すためでもあったであろう。

朝堂院については詳論するといとまがないが、さきにもふれたように、推古朝の小懇田宮における庁と庭とよりなる一郭が、大化期には小郡宮の庁と庭よりなる一郭となり、それがさらに発展して、前期難波宮の十四の朝堂から成る一郭となったと考えられる。かなり大きな発展といわねばならないが、大化改新はそれだけ大きな改革であったと理解したい。

ではこうした宮の構造が孝徳朝のつぎの段階ではどうなったかを、つぎに考える。

2. 天武朝の政情と飛鳥浄御原宮の構造

孝徳朝のつぎの斉明朝には後岡本宮が営まれる。飛鳥板蓋宮伝承地の第Ⅲ-A期遺構をこの後岡本宮にあてる説は有力であるが、この時期おそらく実際に政治を執っていた中大兄皇子がここで母帝斉明と同居していたかどうかは明らかでない。また斉明がその7年に筑紫の朝倉宮で死去して以後、中大兄皇子は称制6年に近江に遷都するまで、どこに宮を置いたかも明らかでない。『扶桑略記』や『帝王編年記』によって岡本宮にいたとする説(註5)があるが、姑く保留しておく。近江大津に遷都した天智(中大兄)の大津宮の遺構は近年発掘が進んでいるが、その全貌はもちろん、主要部の構造を論ずるだけの成果が上がっていない(註6)。

いま前期難波宮のつぎに、実権を持つ天皇の宮として、宮の構造を論ずることのできる遺跡は、天武天皇の飛鳥浄御原宮跡であろう。この宮については天武元年紀9月癸卯(15日)条に「鶴宮より岡本宮に移る」、同年是歳条に「宮室を岡本宮の南に営る。即冬に、遷居す」とあり、「岡本宮」は斉明天皇の後岡本宮、「宮室を岡本宮の南に営る」というのは、板蓋宮伝承地遺跡の東南に在るエビノコ郭をさし、浄御原宮はエビノコ郭を含めた板蓋宮伝承地宮跡の上層の第Ⅲ-B期遺構とする小澤毅氏らの説が有力かつ妥当と思われる(註7)。以下この説にもとづいて浄御原宮の構造を考える。

このように考えて第Ⅲ-B期遺構を見ると、その内郭の南約4分の1を占める一郭の主殿SB7910は、回廊様遺構を以て内郭の約4分の3を占める内裏地域に連絡している。これによりSB7910を内裏前殿とみることができる。エビノコ郭の中心建物SB7701はそれをひとまわり大きくして独立させたもので、大極殿前身といってよいであろう。

しかし遺構全体の規模や平面配置を比較すると、第Ⅲ-B期遺構は前期難波宮とはどうも同列には考えられない。内裏の大きさ(前期難波宮の東西幅184.9m、第Ⅲ-B期遺構152～158m)もそうだが、とくに前期難波宮に存する十四堂から成る広大な朝堂院に対応するものが、第Ⅲ-B期遺構には存しない。これにより、前期難波宮を孝徳朝成立の長柄豊碕宮に比定し、そのつぎに浄御原宮である第Ⅲ-B期遺構が営まれたとする説に疑問を抱く人が少なくない。その立場では、第Ⅲ-B期遺構(浄御原宮)は天武朝初年に築造され、前期難波宮は天武12年以後に造営され、その遺構の示す構造が藤原宮へ継承されると考える。この場合、長柄豊碕宮の遺構は不明とする。

その考えによれば、前期難波宮の構造と藤原宮のそれとはスムーズにつながるが、第Ⅲ-B期遺構から前期難波宮への展開があまりに急激で、同じ天皇の宮としては理解できないのではなかろうか。第1項で述べたように、推古朝小墾田宮から孝徳朝小郡宮を経て宮室の

形態が発展し、さらに長柄豊碕宮が成立したと解すれば、前期難波宮の構造は理解できるが、第Ⅲ-B期遺構からの発展とは考えられないと思うのである。

あとへの展開の問題だけではない。「はじめに」で触れたように同じ広義の飛鳥(註8)の地域に営まれた小墾田宮の構造—「庁」のある一郭の北に門があり、天皇の居所すなわち内裏に接続する形態—も、第Ⅲ-B期遺構では継承されていない。換言すると、天皇の出御する大殿のある内裏の南に、庁のある一郭つまり朝堂院の前身区画が存するという構造が、第Ⅲ-B期遺構には見られないのである。一時期、エビノコ郭の南を限る回廊の中央に南門があり、その南に朝堂がならぶのではないかと考えられたこともあったが(Fig.49)、その後の発掘調査で南門のないことが明らかになり、この推定は崩れた。

このように見てくると、
 浄御原宮は小墾田宮—小郡宮—前期難波宮(長柄豊碕宮およびこれを踏襲した天武朝難波宮)—藤原宮へと発展する宮とは、ことなる原則にもとづいて築かれた

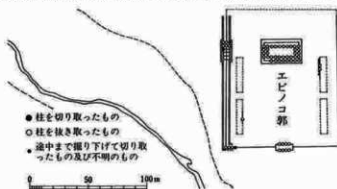


Fig.49 エビノコ郭

(小澤 毅「伝承板蓋宮跡の発掘と飛鳥の諸宮」：『橿原考古学研究所論集』第9 1988年)

宮と考えられる。天皇が住み、政治の中心ともなる宮の構造は、その時々々の政治理念や政情に影響されることが大きいはずで、つねに同じ原則にもとづいて一方向に展開すると考えるべきではあるまい。私は浄御原宮はこの観点から再考する必要があると思う。

浄御原宮の主・天武天皇の政治の特色は、やはり天武による独裁政治であろう。天武の兄天智も独裁政治を志向したようだが、長いあいだの氏姓制度の伝統はたやすくは改まらない。長柄豊碕宮で広大な朝堂院が設けられたのは、そのことと関係があろう(註9)。天智が治世の末期に太政大臣の他に左右大臣および三人の御史大夫を置き、それぞれに有力氏族の長を任じたのは、後継者と定めた大友皇子を補佐させるという事情があったが、同時に氏族の勢力がまだ衰えていなかったためでもあろう。

天智朝の二大臣三御史大夫体制は一方で大海人皇子に対抗する意味がある。壬申の乱を起して近江朝を亡ぼし、天武天皇となった大海人は、もちろん天智朝の官制を否定して新たな官制を造った。その官制の主脳部は太政官と大弁官とであるが、早川庄八氏によれば、

太政官を構成する官職は納言だけで、大納言・中納言等の別はなく、また天皇の政治を助ける輔政官・執政官でもなく、秘書官ともいうべき侍奉官である(註10)。大弁官は唐の尚書省をまねて、のちの大宝令制の八省の前身となる天武朝の六官を統括する組織として新設されたが、国や評などの地方行政機関をも統轄して、天皇に直属する。これ以外、天武は天皇の政治を助け補う左右大臣のような輔政・執政の官を置かなかった。天武はこうして独裁政治の体制を造りあげたのである。

このようなことが可能であったのは、天武が實力を以て近江朝廷を打倒して天皇の地位に就き、戦乱の間に多くの権勢を誇った貴・豪族が没落して、かつてのように有力氏族の代表を集めて意見を聞き、それによって政治を行なう必要がなくなったためでもある。大和朝廷は豪族連合の体制を脱皮して、天皇専政の時代に移った。大殿のある内裏の一郭に接して、氏族代表が集まって政務を議する庁のある区画を設ける必要はなくなった。しかし公務としての国政を天皇が決裁する場としては、内裏の内部の一郭では不便も多いし、天皇の威厳も保ちがたい。そのため天武は即位に際し、国政を処理、裁決する場として新設したのがエビノコ郭の主殿SB7701と考えられる。

このエビノコ郭をめぐる回廊は西面に桁行5間梁間2間と推定される門SB7402を開く。天武は必要に応じて内裏(内郭)の南門SB8010を出て、エビノコ郭の西門をくぐり、主殿に姿を現わしたのであろう。この主殿が大極殿の前身をなすことはいうまでもあるまい。

では宮内官や膳職など後の宮内省や中務省の被官の前身の部局は内裏の内部にあったであろうが、それ以外の法官・理官・民官等6官の政務を処理する庁はどこにあったのであろうか。その正確な所在地は今後の調査にまたねばならないが、朱鳥元年紀7月戊申(10日)条に、或いは曰うとして「忍壁皇子宫の失火、延びて民部省を焼く」とあり、(民部省は潤色、正しくは民官)、これら部局の庁舎が浄御原宮の周辺の地に散在していたことが想像される。そこには大化以前の政務処理の状態を踏襲した面もあったであろう。

しかしこうして成立した浄御原宮は、小澤毅氏の言うように「必要最小限のものであって、到底天武朝の政治機構にとって充分なものではなかった」ろう(註11)。「天武紀に多出する宮都探索の動き」は小澤氏の指摘のようにこれと関係する。天武5年紀は年条に「新城」造都の計画がみえ、11年3月にも三野王らを遣して新城の地形を見させ、12年7月にはみずから京師を巡行し、13年2月に広瀬王らを畿内に遣して都の地を見させ、また三野王らには信濃の地形を見させ、翌3月にもみずから京師を巡行し、宮室の地を定めた、とある。このうち信濃の地形云々は、国防上の必要からの遷都計画ではないかと思うが(註12)、他の地

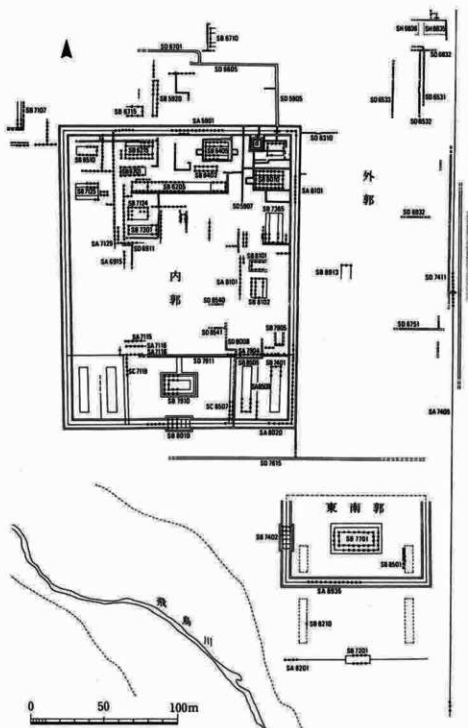


Fig.50 板蓋宮伝承地宮跡 第Ⅲ-B期

(小澤 毅「小墾田宮・飛鳥宮・鵜宮」；奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集「文化財論叢」Ⅱ 1995年)

形視察や京師巡行は、天武が浄御原宮に満足していなかったことを示すものであろう。

この動きのなかで天武12年12月、「凡そ都城・宮室は一處に非ず。必ず兩參を造らむ(下略)」の有名な詔が発せられて、難波に副都としての難波宮が造られる。私たちが前期難波宮と呼んでいる宮がこの時はじめて建造されたとする説があるが、板蓋宮伝承地第Ⅲ-B期遺構と前期難波宮遺構との隔差があまりに大きく、天武朝難波宮が浄御原宮の発展としては理解できないことは前述した。もし、前期難波宮が板蓋宮伝承地第Ⅲ-B期遺構の発展ならば、第Ⅲ-B期においてすでに内裏から独立した大極殿前身の一郭(エビノコ郭)を、なぜ内裏のなかにもどし、主殿を内裏前殿に後退させたかも不可解である。天武は難波に副都を造ることが必要になったので、とりあえず孝徳朝以来存在していた前期難波宮を修復して、天武朝難波宮としたのであろう(註13)。

3. 持統朝の政情と藤原宮の大極殿

難波宮再興の詔が出た天武12年(683)12月から2年10か月後の朱鳥元年(686)9月に天武天皇は没し、その2年9か月後の持統3年(689)6月に飛鳥浄御原令の施行が開始され、さらに7か月後の持統4年正月に持統天皇が正式に即位する。そのころから政治のありかたは、ふたたび変わってくる。

浄御原令には太政大臣の他に執政官である左右大臣が置かれ、その下に納言が大納言・中納言・少納言に分かれて置かれる。早川庄八氏によれば、左右大臣が執政官であるのは大宝令制と同じだが、大・中・少納言は大宝令制の大納言が国政参議官、少納言が侍奉官の事務官僚であるのと違って(大宝令制では中納言は無い)、官職の性格に明確な区別はなく、いずれも天武朝の納言と同じく、侍奉官的性格の強いものであったらしい、という(註14)。しかし早川氏はさらに付け加えて、性格としては侍奉官だが、「現実にはやはり朝堂の政治になにほどか参加していたのであろう」という。

事実、持統天皇が持統6年3月に伊勢に行幸しようとした時、中納言三輪朝臣高市麻呂は農繁期の行幸は農作の妨げになるという理由で、天皇の出幸を上表して諫争し、ついに職を辞したことが『日本書紀』に記されている。高市麻呂のこの行動は侍奉官の範囲を超える。執政官でなくても、実際には天皇を補佐する職であったと考えられる。このころ左右大臣および大・中納言の地位にあった者は、左大臣は欠員、右大臣は丹比真人嶋、大納言は阿倍朝臣御主人・大伴宿祢御行、中納言は前記の三輪高市麻呂、また石上朝臣麻呂と藤原朝臣不比等も中納言であったと推定される(註15)。

いずれも畿内の有力豪族の族長たちである。それらが持統即位の前後から天皇の側近に姿をあらわし、太政官の首脳部を形成して、天皇の政治を助け、政務の執行に当たっているのである。天武朝における天皇独裁の体制は崩れ、有力氏族は朝廷に進出して来たといわなければならない。もちろん早川氏も注意するように、浄御原令制下の氏族はかつての孝徳・天智朝の氏族ではなく、土地・人民を私有する特権を失い、朝廷に出仕する族長たちは俸祿としての食封を支給され、官僚化が進行しているのであるが、「旧来の豪族としての性格が一挙にぬぐい去られたわけでは」ない。天皇対氏族の関係に限っていえば、持統朝は天武朝より孝徳朝に近いと考えられる。持統朝に造営される藤原宮の中心部の構造が浄御原宮のそれより、長柄豊碕宮の遺構と推定される前期難波宮に近いのは、そのためであろう。

しかしまた、藤原宮大極殿が前期難波宮の内裏前殿と同じでないことはいうまでもない。内裏前殿一郭は内裏と欄列で区別されながら、内裏前殿は回廊によって内裏後殿と結ばれ、内裏との分離が不十分である。これに対し藤原宮の大極殿一郭(大極殿院)は南北に門を設け、内裏からは独立した区画をなす。内裏と大極殿を結ぶ回廊などの施設はない。この点は内裏から分かれてエビノコ郭が造営された浄御原宮の構造を採用したといっていよい。その上、藤原宮大極殿が獨立柱形式の従来の建築様式ではなく、礎石をすえ、瓦を葺く大陸風建築様式を採用したことは、大極殿の権威を高めるとともに、その新しさを官人層に強く印象づけたであろう。

とはいえ、藤原宮大極殿も完全に内裏から分離・独立したとはいえない面を持つ。今までの発掘調査に基づいてえがかれている多くの藤原宮復原図に明らかなように、大極殿院は内裏外郭の塙の中に包みこまれている。その構造は平城宮第二次大極殿院の場合も変わらないし、いっそう明瞭である。それは大極殿がもと内裏の大殿に由来し、内裏大殿が前殿と後殿に分かれ、前殿が内裏の前方に突出して一郭を構成し、さらに発展して大極殿院となったという経過によると思われる。

ここで大極殿をオホアムトノと読む『日本書紀』の古訓について述べておく。国史大系本によると、この古訓は皇極4年6月戊申(12日)条と天武10年2月甲子(25日)条とに見え、一方、オホアムトノと読める大安殿の語は、天武14年9月辛酉(18日)・朱鳥元年正月丁巳(16日)・朱鳥元年2月甲戌(4日)の諸条に見える。早く本居宣長はこのことに注意して大安殿と大極殿とは同一であるとし、以後関野貞氏や福山敏男氏の研究がある(註16)。私もかつてこのことを論じたことがあるが(註17)、結論のみを述べるとつぎのようである。

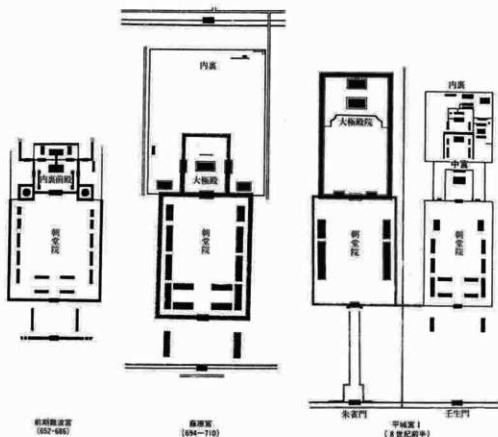


Fig.51 難波・藤原・平城宮の比較 (第V章第3節Fig.55による)

内裏の大殿は天皇の休息の場であるので、ヤスミドノまたは安殿と呼ばれた。大化以前から安殿(大殿)は政治の場ともなったが、大化以後は政治に関係することが多くなったので、内安殿と大安殿とに分けた。大安殿が前期難波宮の内裏前殿、内安殿が内裏後殿に当る。註17の論文ではエビノコ郭にはふれていないが浄御原宮(板蓋宮伝承地宮跡第Ⅲ-B期)ではエビノコ郭の主殿が大安殿と呼ばれたであろう。そしてこの主殿が発展して藤原宮の大極殿になるのである。一般に言われているように、大極殿の名称は浄御原宮が始まる可能性は高いであろう。しかしその起源をいえば内裏のアムトノに発し、直接には大安殿の後身であるので、オホアムトノの訓が付せられたと考えたい。

内安殿の語は天武10年正月丁丑(7日条)に見えるが、同日条には内安殿と対応する形で外安殿の語がある。この外安殿は大安殿と同じ殿舎を指すのであろう。なぜなら律令用語で

は、内蔵寮と大蔵省、内膳司と大膳職、内舍人と大舍人のように内と大とを対応させる他に、中務省の内記に対して太政官の外記、内薬司に対して外薬寮(ただし養老令には見えない。天武4年紀正月条所見)があるように、「内」に対する「大」と同様の意味で、「外」の語が用いられているからである。内裏を中心にして見れば、エビノコ郭主殿は外安殿と呼ぶにふさわしい。

大極殿が内裏と密接な関係にあることは、『続日本紀』の天平元年6月癸未(24日)条や延暦2年正月癸巳(16日)条に「大極殿開門」とあって、大極殿の門が平城宮においても開門と呼ばれていることから察せられる。周知のように宮城の門は、大宝令では外側から外門・中門・内門、養老令では宮城門・宮門・開門と呼ばれ、開門＝内門で、内裏の門を指すと考えられるからである(註18)。また兵衛府が内門の守衛に当ることは、『令集解』宮衛令開門条所引の古記にみえ、開門を守ることは職員令左兵衛府条にみえ、兵衛が内裏の警備の当たったことが知られるが、『令集解』宮衛令奉勅夜開門条所引の古記に「大極殿門者、兵衛開門」とある。これからも大極殿の門が内裏の門と同様に見なされていたことが分かる。

大極殿は天皇出座の建物であるから、内裏の一部とする考えは後まで続くのはもっともであるが、成立の由来からいってももっともである。

4. 後期難波宮大極殿の成立と平城宮との関係

都が藤原から平城に遷ると、大極殿を含む宮の中心部の構造は大きく変化する。平城宮の発掘調査の初期、宮城の中央に第一次大極殿を含む朝堂院が設置され、のちにその東に第二次の大極殿と朝堂院が造営されたと考えられていた。その後調査の進行にともない、中央区の建物群と東区の建物群との性格・機能や造営時期について種々の見解が提示された。両区とも奈良時代を通じて同一の建物が存在したのではなく、種々の改築・改造があり、とくに東区の創建時の建物は掘立柱形式で、のち礎石建ち瓦葺きの建物となったことが判明した。その変遷の過程やさまざまな解釈については省略するが、即位儀・元正朝賀や外交使節の饗宴など重要な儀式・儀礼に関することは中央区で行い、告朔・選叙や百官の上表、宣命宣布など直接朝政にかかわることは東区で行ったという理解が定着しつつあると思われる(註19)。また東区の掘立柱形式の建物群と、のちそれを改造して建てられた礎石建ち形式の建物群は、大極殿と推定される建物を含めてほぼ同型で同じ位置関係にあり、ともに藤原宮の大極殿・十二朝堂の形式を引きついでいること、掘立柱形式の建物の建立は平城宮造営の初期、礎石建ち形式の建物の建立は聖武天皇が恭仁・紫香楽への遷都

から平城へ帰還した天平17年にはじまることなども、ほぼ諸家の一致した見解と言ってよい(註20)。

これらの見解に従って創建期の平城宮を考えると、中央区には重要な儀式・儀礼・宴宴を行う一郭、東区に政務執行に関した一郭があり、東区の建物は掘立柱形式であるが、殿舎の配置等は藤原宮の大極殿・朝堂院を引きつぎ、中央区の一郭は儀式・儀礼にかかわる所から、平安宮の豊楽殿に引きつがれると考えられる。ここで問題になるのは、藤原宮で礎石建ち・瓦葺きであった大極殿がなぜ平城宮では掘立柱形式に逆もどりしたかであるが、それについて考える前に、やや本題からずれるが、それまで宮のなかになかった儀礼を行う区画がなぜ平城宮で造られたかについて、私見を記しておく。

特に論ずるまでもないと思うが、主としては国家体制が整うにつれて儀礼を行う機会がふえたことと、中国から伝えられた礼楽を重んずる思想が儀礼をいっそう盛んにしたことによるであろう。もう一つは飛鳥・藤原の地域には、宮の近傍に宴遊などの儀礼を行う設備を持つ場所があったが、平城宮の置かれた地にはそのような場所がなかったことも影響したと思われる。詳しく述べるいとまはない

が、たとえば斉明3年7月に須弥山の像を飛鳥寺の西に作って観貨羅の人を饗したこと、同5年3月に甘藷丘の東の川上に須弥山を造って蝦夷を饗したこと、天武5年正月に天皇が鴨宮に幸して宴を催したこと、天武6年2月に多禰島の人らを飛鳥寺の西の榎の木の下で饗したことなどが『日本書紀』に見える。また近年の発掘調査で、飛鳥寺の北の石神の地に7世紀後半の時期の庭園遺跡が発見されたことは有名である。そういう場所を持たない平城の地では、宮内に儀礼の場を造ることは、何をおいても必要だったのである。

ではなぜ平城宮の東区の大極殿前建建物(中央区の大極殿に対し、「大安殿」と呼んでおく)は最初掘立柱形式で造られたのか。この疑問に対して私は、中央区で大規模な大陸様式の建築が開始されたために、その方面の技術者が不足していたのではないか、また「大安殿」は本来内裏の一部であるという伝統的な考えに引かれて、内裏の建築様式を採用したのではないか、という平凡な解答しか持っていない。「大安殿」を掘立柱形式で建てると、それに従属する十二朝堂も同じ形式を採らざるを得ないことはいうまでもない。

実際、藤原宮よりひとまわり大きい平城宮および平城京を短期間に造営することは、当

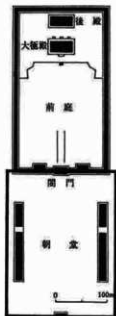


Fig.52 平城宮中央区の大極殿・朝堂(神亀前後～天平12年)(直木孝次郎編『古代を考える 奈良』)

時の国力から見てかなり困難な事業である。中央区の建築には礎石をすえる大陸様式の建築をしても、東区には費用の節約できる在来の建築方法をとるのはやむを得なかったことであろう。

さていよいよ神龜3年10月、式部卿従三位藤原朝臣宇合が知造難波宮事に任ぜられて、後期難波宮の造営がはじまる。彼が宮の中心となる大極殿を含む朝堂院を建設しようとした時、モデルとしたのは当然平城宮東区に存在する朝堂院であったにちがいない。それは藤原宮の朝堂院同様、大極殿(「大安殿」)と大極殿門(「大安殿門」)と十二朝堂によって構成されていたが、くりかえし述べるように掘立柱形式であった。ただし創建当初のものではなく、養老年間に改作されているが(第V章第3節4参照)、掘立柱形式であることは同じである。何故に後期難波宮がこれをモデルにしながら、十二朝堂を八朝堂に縮減するとともに、建築様式に礎石建ち瓦葺きの様式を採用したか。これがつぎの問題である。

大陸の建築様式を採ったことについては、前記の第V章第3節4で述べられているように、平城宮の中央区の礎石建ち瓦葺きで儀礼・饗宴のための朝堂院と、東区の政務のための朝堂院との二つを一つにまとめたためであろう。政務のための建物なら、実用に便な掘立柱建物でよいが、儀礼を行い外客を迎えて饗宴を行う建物は、そういうわけにはいかない。造営の中心をなす人々の頭には、前期難波宮の系譜を引く藤原宮の朝堂院の再興という意識もあったであろうが、儀礼の場ということが大陸様式を採った主要な理由であろう。

藤原宮朝堂院にならいうが、後期難波宮の大極殿は北面回廊の中央に設けられた後殿と軒廊で結ばれている点が、藤原宮大極殿とことなっている。私はこれを前期難波宮の内裏前殿が軒廊で内裏の中心にある内裏後殿と結ばれていた名残りとみたい。

朝堂の数が平城宮東区の十二堂に対して八堂であるのは、「首都の平城宮に対する副都の八堂」という解釈を私は持っているが(註21)、現実的に考えても、平城宮で政治を掌どっている二官八省一台五衛府の文武官人が、そっくり難波宮に移動することは、遷都の場合以外にはありえない。十二堂より少なくてもよいはずである。儀礼・饗宴の場合も、平城宮中央区の朝堂院の状態から考えて、十二もの堂は不必要である。それではなぜ十堂でもなく六堂でもなく、八堂かという問題がある。八堂の八が「八咫し」「大八嶋国」「八百萬」など日本人に親しい嘉数から来たのか、他の思想または実際の必要にもとづくのかは、私には定見がない。後考を待つこととする。

それはともあれ、後期難波宮の大極殿は知造難波宮事藤原宇合のもとで造営されたと考えられる。これよりさき宇合の長兄藤原武智麻呂は養老5年9月造宮卿に任じられた。近い

将来に即位の予想される首親王(聖武)のために朝堂院を修復・整備することが、造宮卿となった武智麻呂に課せられた任務の主要なものであったろう。奈良時代前期の平城宮朝堂院、ひとあし遅れて着工された難波宮朝堂(いずれも大極殿あるいは大極殿に準ずる「大安殿」を含む)の完成には、ともに藤原氏が大きく関与しているのである。

付論 太政官院と朝堂院

以上に述べた文中では、通例に従って大極殿(「大安殿」)と十二堂または八堂の朝堂を含む区画(前期難波宮では内裏前殿を除いた十四朝堂の区画)を朝堂院と称したが、近年論ぜられているように「朝堂院」という語は続日本紀には見えない(註22)。六国史における初出は延暦11年11月甲寅(3日)(『日本後紀』。ただし『類聚国史』所引)で、引きつづき延暦16年正月甲辰(17日)・大同3年8月乙丑(16日)条(ともに『日本後紀』)に見える。

それ以前この朝堂のある地区は太政官院と称されていたことが諸家によって明らかにされている(註23)。それは次の理由による。

1984・85両年度の調査で(註24)、平城宮東区の大極殿間門前の広場に、「儀式」の大嘗宮の記事に合致する柱穴群が存することが明らかにされ、間門前の広場、すなわち十二朝堂の区画の庭に大嘗宮が設けられたことが判明した(奈良時代後期では、中央区の主殿を中宮、東区の朝堂院の主殿を大極殿と呼ぶこととする)。他方、『続日本紀』によれば次に記すように大嘗祭が太政官院で行われたとある。

宝龜二年十一月二十一日 御太政官院行大嘗之事。

天応元年十一月十三日 御太政官院行大嘗之事。

また天平宝字2年11月23日条に「御乾政官院行大嘗祭之事」とあるのも、乾政官は大政官の改名であるから、太政官院で大嘗祭が行われたことを示す例となる。

この二つの事象を重ねあわすと、朝堂院のことを奈良時代後期には太政官院と称したといわなければならない。ただし注意しなければならないのは、大嘗宮の遺構が大極殿間門の南の十二朝堂院の庭に存したことで、間門で十二朝堂院から区画された大極殿院まで含めて太政官院と言ったのではあるまい。大極殿間門が廃され、大極殿と十二朝堂とが一体化した平安宮においては、朝堂院に大極殿が含まれるであろうが、その段階の朝堂院と平城宮の太政官院とを同等に見ることはできない。都が長岡から平安に移る以前の延暦11年に見える朝堂院の語が何を意味するか疑問に思えるが、日本後紀編者の修文と一応見ておきたい。なお、太政官院の例は、上記のほか天平宝字元年7月庚戌(4日)条にも見え、これ

が『続日本紀』における初出である。これを併せても太政官院の語は奈良時代後期になって現れるのである。

なぜ十二朝堂の区画を太政官院と称するようになったかをつぎに考える。そもそも十二朝堂は平安宮朝堂院の例から推して、奈良時代でも親王・太政大臣をはじめとして、左右大臣以下の太政官首脳部と左・右弁官、二官八省彈正台の官人が出座して政務を処理したと考えられる。しかし天平7年に新田部・舍人の両親王が相次いで没し、天平16年に安積親王が逝去してからは有力な親王はいなくなり、太政大臣に代る知太政官事も鈴鹿王が天平17年に世を去ってからは置かれなかった。五位以上の官人の中に若干の諸王がいるものの、その勢力は大きいとはいえず、十二朝堂の政務は藤原氏など主として非皇族の氏族を以て構成される太政官首脳部によって主導されたと思われる。十二朝堂の区画が太政官院と呼ばれたのは、そのためであろう。

奈良朝中期の天平13年3月辛丑(20日)に鶴の大群が難波宮に来て、「或は太政官之庭に止る」という記事が『続日本紀』に見えるが、太政官院とは記していない。十二朝堂院とは別の建物の庭と見ておきたい。

なお、本稿をなすに当たり、中尾芳治氏より多くの教示と助言を得たことを付記する。

(なおき こうじろう：大阪市立大学名誉教授・甲子圖学院短期大学教授)

註

- (1) 岸俊男「朝堂の初歩的考察」：岸『日本古代宮都の研究』岩波書店 1988年 初出1975年
- (2) 直木孝次郎「難波小部宮と長柄豊碕宮」：『孝徳朝の難波宮』と改題。直木『難波宮と難波津の研究』吉川弘文館 1994年 初出1977年 ともに補注(2)
- (3) 直木孝次郎「大化改新私見」：直木『難波宮と難波津の研究』前出。註(2) 初出1978年
- (4) 直木孝次郎「大極殿の門」：直木『飛鳥奈良時代の研究』塙書房 1975年 初出1967年
- (5) 小澤毅「伝承板蓋宮跡の発掘と飛鳥の諸宮」：『橿原考古学研究所論集』第9 吉川弘文館 1988年
- (6) 亀田博「7世紀後半における宮殿の形態」：横田健一先生古稀記念会編『文化史論叢』上 創元社 1986年 ただし、復原は林博道「天津京」ニュー・サイエンス社1974年などで試みられている。
- (7) 小澤毅「小墾田宮・飛鳥宮・嶋宮」：奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集『文化財論叢』Ⅱ 同朋社 1995年。同「伝承板蓋宮跡の発掘と飛鳥の諸宮」註(5)論文
- (8) 古代の飛鳥の地は、現在の明日香村の鶴・橘以北、雷・豊浦以南で飛鳥川兩岸の狭小な地域をさすらしい。仮にこれを狭義の飛鳥とし、その北方や西方の地も含めて広義の飛鳥とする。註(7)の小澤論文参照
- (9) 鬼頭清明「日本における朝堂院の成立」：狩野久彌『日本古代の郡域と国家』塙書房 1984年
- (10) 早川庄八「律令国家」：『日本の歴史』4 小学館 1974年 特に「天武天皇」の章

- (11) 小澤毅「伝承板蓋宮跡の発掘と飛鳥の諸宮」註(5)論文
- (12) 「国防上の必要」というのは、新羅に対する警戒である。直木孝次郎「古代難波史論」；『相愛大学研究論集』11号 1995年
- (13) 外交上、国際的な港津である難波に壮麗な宮殿を営み、国家の体面を飾ることを必要としたのであろう。註(12)の直木論文参照
- (14) 早川庄八「律令国家」(註(10)参照)
- (15) 早川庄八「律令国家」(註(10)参照)
- (16) 関野貞「平城京及大内裏考」；東京帝国大学 1907年、福田敏男「大極殿の研究」；吉川弘文館 1957年、寺崎保広「平城京大極殿」；『仏教芸術』154、1984年
- (17) 直木孝次郎「大極殿の起原についての一考察」；直木「飛鳥奈良時代の研究」註(4)参照 初出1973年
- (18) 直木「大極殿の門」註(4)論文
- (19) 今泉隆雄「律令制都城の成立と展開」；今泉「古代宮都の研究」吉川弘文館 1993年 初出1984年、同「平城宮大極殿朝堂再論」同上書 初出1989年
- (20) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告」XIV〈第二次大極殿院の調査〉 1993年
- (21) 直木孝次郎「難波宮の十二朝堂と八朝堂」；『難波宮址を守る会ニュース』100号 1987年、同「難波長柄豊碇宮と前期難波宮—その異同をめぐって—」；直木「難波宮と難波津の研究」註(4)参照 初出1987年
- (22) 保坂佳男「朝堂院の変換について」；『国史研究会年報』5、1984年、山中章「8世紀の宮都研究」；考古学研究会40周年記念論集「展覧考古学」考古学研究会 1995年
- (23) 註(22)に同じ
- (24) 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所年報」1985年度、同1986年度

第2節 前期難波宮の内裏南門

長 山 雅 一

内裏の南に開く7間×2間の巨大な門が、第33・34次発掘調査で発見された。柱の太さは約60～75cmもあり、門としては異常に大きな規模であることが注目された。しかし、内裏前殿と後殿の柱はそれ以上に太く、建物の床面積でもおよばなかった[中尾芳治1970]。

その後、第45次調査で朝堂院の南門の西半分が出土し、朝堂院南門の規模は内裏南門より小さいことがわかった[長山雅一1973A]。平城宮など他の宮都と比較すると、内裏の門が大きく、朝堂院や宮城の外郭に開く朱雀門の方が、小さい例がないことに気がついた[長山1973B](註1)。また、1983年の発掘調査では朝堂院南門の東半分が確認された[大阪市文化財協会1983]。さらに1993年の夏には市立華学校構内の宮中軸線の延長上で朱雀門と推定される門の跡が発見された[佐藤隆1993・中尾芳治1993]。

検出された門の規模は朝堂院南門と同じで、内裏南門の規模にはおおよそ、内裏南門は宮の諸門の中で最も大きな規模であることがほぼ確定した(Tab.9)。そこで、その事実に着目し、南門とその前面に展開する朝堂の庭の性格と機能について考えることとした。

その際、問題となるのは、前期難波宮の造営時期の問題である。故山根徳太郎博士をはじめ、発掘調査関係者のほぼ共通した認識は、前期難波宮が孝徳朝に造営された難波長柄豊崎宮であるとするものである[中尾1972]。しかし、前期難波宮を天武朝の造営とみる説

Tab.9 前期難波宮跡の門

	門の名称	桁行総長 復元尺	梁間総長 復元尺	桁行 復元尺	梁間 復元尺
①	内裏南門	32.68m 112 尺	12.26m 42 尺	4.67m×7間(等間) 16 尺	6.13m×2間 21 尺
②	内裏西門	14.60m 50 尺	(5.97m) (2 尺)	2.92m×5間(等間) 10 尺	
③	内裏東 外郭南門	14.60m 50 尺	5.97m 20 尺	2.7m+2.7m+3.8m+2.7m+2.7m 9 尺 9 尺 13 尺 9 尺 9 尺	2.97m×2間 10 尺
④	内裏西 外郭南門	(14.50m) 50 尺	5.94m 20 尺	同上	2.97m×2間 10 尺
⑤	朝堂院 南門	23.35m 80 尺	8.76m 30 尺	4.67m×5間(等間)	4.38m×2間
⑥	「朱雀門」	23.3m 80 尺	8.8m 30 尺	4.67m×5間(等間)	4.38m×2間

や、長柄豊碕宮はかつての下町説で唱えられた北区の長柄や豊碕地域に求め、前期難波宮は小郡宮であるという考えも存在する[押部佳周1979]。

今回の発掘調査でこのことが解決した訳ではないが、土器など出土遺物から前期難波宮の長柄豊碕宮説に否定的な資料は出ていない(IV章1節)。また、近年の研究動向でも長柄豊碕宮説が支持される傾向にある[南秀雄1992・京嶋覚1994]。そこで、あえて前期難波宮＝長柄豊碕宮を証明する作業は行わず、論を進めることとしたい。ただ、前期難波宮＝長柄豊碕宮説の立場にたつが、その造営時期を大化元年としたり、長柄豊碕宮を改新詔發布の舞台と考えているのではない[長山1977]。

1. 問題の所在

内裏南門と朝堂院南門が明らかにされた時、①2つの門が相似形であること、②内裏地域と朝堂院地域が同じ設計基準で造営されていること、などから前期難波宮跡とされる遺構は、すべて長柄豊碕宮の遺構であると論じた。そこでは、具体的な意義づけはできなかったが、内裏南門が異常に大きく、その全面に広がる朝堂院の庭の広さにも注目した[長山1973B]。

この前期難波宮内裏南門の大きさと朝庭に注目し、その構造を藤原宮や中国の都城と比較する研究[狩野久1975]や内裏南門が大極殿門となつてしだいに規模が縮小し、消失することは「天皇の権力の拡大・宮の発展・さらに京の成立」の問題に深く関わるとの見解がもたらされた[橋本義則1986]。

一方、早川庄八氏は前期難波宮の内裏南門の巨大さと門の前に広がる朝庭を、口答での朝儀の場として官制が未発達段階では相応しいものとの評価をされた[早川庄八1983]。

さらに、門とは区画を分けるだけの目的ではなく、門前に人々を集め、王権の強大さを演出する場でもあるとして、7世紀の朝鮮半島の諸国との外交関係を背景にそこは「大国」の権威を示す外交儀礼の場であるとの解釈が提議された[佐竹昭1988]。この説は、『続日本紀』大宝元年(701)11月17日条の敕有儀礼廃止記事から、それ以前の大極殿門と門外のこの機能について論じたものである。

敕有の儀礼は唐から我が国へ白雉年間に伝わったとされるが、実際の運用は藤原宮が完成後の持統朝であったとされた。日唐都城を比較すると、唐の長安城では宮城の門である承天門の前面は、開放された横街とよばれる広場であるのに対し、藤原宮の大極殿の門前は閉ざされた官人執務の場である朝堂院の庭である。この違いが大宝元年の敕有儀礼の廃

止と関わるとするものであった。

一方、中尾芳治氏は発掘調査の成果をもとに、内裏南門が北の内裏と南の「朝堂院」を二分するのは、唐の太極宮の承天門が北の宮城と南の皇城を分ける配置に倣ったもので、前期難波宮の構造は5世紀以来の豪族居館の制を受継ぐ小墾田宮の構造を継承したと理解された[中尾1992]。また、内裏南門の巨大性は「内裏南門・内裏前殿・後殿は承天門(外朝)、太極宮(中朝)、兩儀殿(内朝)」という唐の三朝制を移した「ためと解された[中尾1994]。

唐の敕宥儀礼を藤原宮との関連で理解していた佐竹氏は、中尾説を受け敕宥儀礼の受容を前期難波宮段階まで波及させることを認めた。そこでは、内裏南門前の広場に朝堂が建ち並び、政務の場であると共に、儀式の場であるという二面性は唐制を模倣しただけでなく、前期難波宮は中国の伝統的な思想の影響下に内政と外交の場を統一する空間として創出されたと意義づけられた[佐竹1993]。

以上のことからわが国の宮室の原形は大王の居館で、そこに中国の都城思想の影響が加わったものと考えられてきた。そこで、7世紀後半の宮都における殿舎の利用状況を具体的に検討するが、その前に前期難波宮の実態について見ておく。

2. 前期難波宮の計画

前期難波宮の遺構については、改めて解説するまでもないが、植木久氏が整理した計画図に従い規模を概観する(Fig.52)。使用された尺は29.2cmを基準に1, 2倍の大尺で復元されている。推定朱雀門から朝堂院まで300尺である。内裏地区は、八角殿院南面回廊から内裏後殿の背後の回廊までは400尺で、朝堂院南門までは750尺となる。東西幅は、朝堂院が650尺。内裏前殿と後殿を囲む内郭は朝堂院幅の2分の1の325尺。内裏の外郭幅は525尺。八角殿院は100尺である(註2)。このような結果を見ると、前期難波宮跡は大尺の50尺あるいは100尺単位で地割りが行われていたと推定される。そして宮殿全域は同じ設計思想で行われているにも関わらず、建物の配置状況は内裏南門を境に内裏地域は密に、朝堂院地域は粗い状態である。すなわち内裏と朝堂院地域の空間利用目的の違いが指摘できる。

3. 前期難波宮の小柱穴

前期の建物で外方に小柱穴が付属する建物は、今回報告のSC1301・SB3301・SC3304・SC3501・SC3504・SC3601をはじめ、SB1801・SB1603・SB2001・SB2101・SB4201・SC1701、それに朝堂院の東西の第一・第二堂と東八角殿院である。小柱穴が付

属する建物は、朝堂院の東西第一・二堂を除くと内裏地域の建物に特徴的である。

小柱穴には、従来から基壇説、縁束説、裳階説、足場説、軒支柱説、木製基壇説などが

ある。小柱穴が発見された当初の考えは、焼けた痕跡のある建物に付属し、焼けていない建物SB1101には付属しておらず、小柱穴は本柱の後から建てられ同時に焼失していることなどから、軒支柱説が採られ、前期の建物が長柄豊碕宮に遡ることの有力な根拠とされてきた[中尾1970]。

その後中尾氏は朝鮮三国の寺院址の基壇を参考に、小柱穴を外観を荘厳化するか、建物を強化するためのもので建設当初から存在したものと解釈を改められた[中尾1981・1986]。さらに近年では、小柱穴に角柱があることから、木製基壇の支柱説が有力視されている[植木久1991]。

4. 内裏南門の規模・構造

今までに前期難波宮で発見された門の跡はTab.9の通りである。この表からわかることは、内裏南門以外の門は建物総長の復元尺が桁行・梁行ともに整数値になるのに、内裏南門では整数値にならず、基壇の推定復元規模が整数値になることである。内裏南門

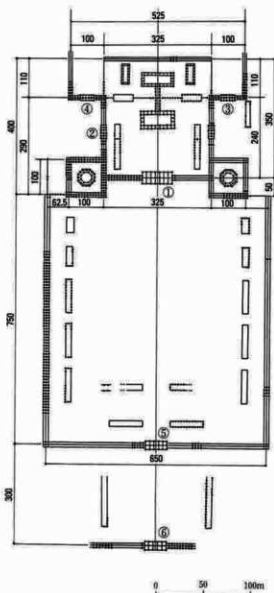


Fig.53 前期難波宮計画図(単位は大尺)
(復元は植木久氏による。①～⑥はTab.9に対応する。)

SB3301の東西両側に存在する溝状遺構を基壇痕跡と考えると、東西120尺の基壇に復元できる。また、側柱の外1.4mで検出される小柱穴を植木説に従って木製基壇の支柱と考えると、基壇の南北幅は50尺に復元される。すなわち、内裏南門は東西120尺・南北50尺の基壇の上に建っていたことになる。

これまで、朝堂院南門と推定朱雀門では小柱穴は発見されていない。小柱穴が発見されないのは、後世に削平されたとする考えがある。しかし、小柱穴の深さは内裏南門では門の本柱と比べて劣るものではなく、削平されたとは考えにくい。小柱穴を木製基壇の支柱と考え、その有無で基壇の存在を推定すると、朝堂院南門と推定朱雀門には内裏南門と同じ形式の基壇は存在しなかったことになる。従って、同じ宮殿の中に基壇を持つ建物と持たない建物が存在したことを意味する。これは、同時に設計され、機能していた前期難波宮の中で建物の位置付けや用途の違いに応じて建物の構造が明確に区別されていたことを示している。

たとえば、朝堂院では第一・第二堂とそれ以下の建物規模に差がある[中尾芳治1995]。また、回廊の桁行寸法は、ほとんどが10尺であるのに、梁間は微妙に異なり、推定朱雀門に取付く回廊と朝堂院回廊から内裏南面回廊・八角殿院回廊、内裏回廊の順に9尺、8尺、7尺と梁間が短くなる。宋代に著された「营造方式」に、建物の重要度で建物の規模に轻重をつけているのと同様の意識であることを指摘される植木氏の考えに従いたい(註3)。

また、内裏南門と朝堂院南門・推定朱雀門の桁行・梁間の長さの比はともに1.4倍になる。長さの比が $\sqrt{2}:1$ で、面積は約2倍に設定されていることになる。内裏南門では梁間を2間のままで面積を朝堂院南門の2倍にしたため、梁間の4.38mが6.13mに伸び、桁行の4.67mより長い梁間の建物になった[長山雅一1973B](註4)。規模の大きさに加えて、土庇がつく可能性も考えられるので(註5)、高さ約1mと推定される(註6)基壇を持つ内裏南門は「宮殿の状彈く論ふべからず」といわれるほど荘重なものであったと考えたい。

この遺構の状態は内裏南門前の約3万 m^2 の広場に立つと、北方の基壇の上に立つ南門に回廊が取付き、その左右に八角殿院が鳥が翼を広げたようにそびえ立つ状況は天皇の權威を誇示するのに有効な装置であったと考えられる。内裏の南門は天皇(大王)と臣下を分ける門であり、前面の広場は臣下や外国使節を並ばせる場で、この南門の規模と内裏前面の構造は天皇(大王)の權威を誇示するにふさわしい。

5. 内裏南門の機能と役割

『日本書紀』に長柄豊碓宮のことを記したと史料を求めると次のとおりである。(読み下しは、『岩波古典文学大系』による。下線は筆者による。)

- A、白雉元年10月 将作大匠荒田井直比羅夫を遣して、宮の塙標を立つ。
- B、 2年12月晦 味経宮に二千百余人の僧尼を請せて、一切経を読ましむ。是の夕に二千七百余の燈を朝の庭内に燃して、安宅・土御等の経を読ましむ。是に天皇大郡より還りて新宮に居す。号けて難波長柄豊碓宮と曰ふ。
- C、 3年正月 元日礼訖りて車駕大郡宮に幸す。
- D、 4月 沙門惠聰を内裏に請せて、無量寿経を講かしむ。
- E、 9月 宮造ること已に訖りぬ。其の宮殿の状理く論ふべからず。
- F、 12月晦 天下の僧尼を内裏に請せて、設斎して大捨てて燈燃す。
- G、 5年10月 天皇、正寝に崩りましぬ。仍りて殯を南庭に起つ。

この中で、具体的な位置のわかるものはBの朝の庭内、DとFの内裏、Gの正寝と南庭である。このように見てくると、いずれも内裏地域にかかわるものと考えられる。

周知の事実であるが、大化3年の小郡宮の礼法制の資料から、小郡宮の構造が復元されている。

凡そ位有ちあらむ者は、要ず寅の時に、南門の外に、左右の羅列りて、日の初めて出づるときを候ひて、庭に就きて再拝みて、乃ち廳に侍れ。(中略)午の時に到るに臨みて鐘を聴きて罷れ。(中略)其の鐘の台は、中庭に起てよ。

また、白雉元年の2月の白雉献上の記事は、

朝庭の隊仗、元會儀の如し、左右大臣・百官人等、四列を紫門の外に為す。粟田臣飯虫等四人を以て、雉の輿を執らしめて、在前ちて去く。左右大臣、乃ち百官及び百濟君豊璋其の弟塞城、忠勝、高麗の侍医毛治、新羅の侍学士等を率て、中庭に至る。三国公麻呂、猪名公高見、三輪君薨徳、紀臣乎麻岐太四人をして代わりて雉の輿を執りて、庭の前に進ましむ。時に左右大臣、就きて輿の前頭を執き、伊勢王、三国公麻呂、倉臣小屎輿を後頭を執き、御座の前に置く。天皇、即ち皇太子を召して、共に執りて観す(後略)

前の記事は、官人の出動についての制で、官人は、南門外で待機する。この場合の南門は、内裏の門ではなく、朝堂院の南門に相当し、庁は朝堂にあたる。

次の雉献上の儀式は元会儀＝元旦朝賀の儀式と同じ要領で行われたとある。まず、紫門

外の朝庭に大臣・官人が整列して待つ。そこへ運ばれてきた雉は、大臣・官人等と共に、紫門を通過して中庭に入る。そして左右大臣等によって天皇の前へ運ばれた。

二つの宮廷内の動きから、北方に天皇の玉座のある内裏があり、その前に内裏南門＝紫門が置かれ、門の南には官人が執務をする庁＝朝堂が存在すると復元される[岸俊男1981]。そして、内裏地域には、左右大臣など高官しか出入りできなかったことがわかる。

大化3年正月15日に朝庭で大射の礼が行われていたことがわかる(Fig.10)。正月に大射が行われた最初の例である。調色の疑いがないわけではないが、その前年には朝賀の儀式が始まっているので、難波に都を遷した孝徳朝で新しく始められた儀式であるとされる[和田萃1984]。

したがって、大射の礼も難波で始まった宮廷儀式の一つであった可能性がある。

そこで、大射の儀式がどのように行われていたのか。大目方克司氏の研究から必要なところを拾うとTab.10の通りである。実施された日は正月の7・15・16・17・18・23日で、令制の規定にはほぼ一致している。大射の場所がわかるものは、南門3回、西門3回、宮門内1回と、朝庭2回と東庭1回の併せて10回で、いずれも朝庭がかかわっている。

ここで取上げた表中の大射の礼は、清寧紀と持統紀を除

Tab.10 「日本書紀」にみえる射礼

天皇	年 月・日	場	出御 事項	出典
清寧	清寧4 9・1	射殿		書紀
孝徳	大化3(647)正・15	朝廷		〃
天智	天智9(670)正・7	宮門内	大射	〃
天武	天武4(675)正・17	西門庭		〃
	5(676)正・16	西門庭		〃
	6(677)正・17	南門		〃
	7(678)正・17	南門		〃
	8(679)正・18	西門		〃
	9(680)正・17	南門		〃
	10(681)正・17	朝廷		〃
	13(684)正・23	東庭	○	〃
持統	持統3(691)8・23			〃
	8(694)正・17			〃
	8(694)正・17			〃
	正・18			〃
	9(695)正・17			〃
	10(696)正・18	南門		〃

(大目方克司「射礼・厩宮・弓場始」表2より抜粋)

いて前期難波宮が置かれていた時代と並行し、天武紀の記事は天武天皇の宮殿である飛鳥浄御原宮が舞台であると考えられる。浄御原宮は飛鳥宮上層遺跡に比定され、飛鳥宮跡の内郭と東南郭がそれにあたるとすれば、内郭部には南門が開き、東南郭には南門がなく西門が開く。南門と西門が開く先は同じ広場とみられるので、上記の記事は矛盾しないものであろう(Fig.50)。

それでは大射の礼はどこで行われたのか、具体的に場所がわかる例を求めると時代は下るが、『続日本紀』に次の記事がある。(読み下しは『岩波新古典文学大系本』による)

① 雲亀元年(715)正月庚子(17日)条

大射を南園に賜ふ。新羅使も亦、射の列に在り。綈賜ふこと各差有り。

② 神亀五年(728)正月甲寅(17日)条

天皇中宮に御します。高斉徳ら、その王の書、并せて方物を上る。(中略)是に高斉徳ら八人に並に正六位上を授け、当色の服を賜ふ。仍て五位以上と高斉徳らとを宴す。大射と雅楽寮の楽とを賜ふ。宴訖りて祿賜ふこと差有り。

③ 天平十二年(740)正月甲辰(17日)条

天皇、大極殿の南門に御しまして、大射を観す。五位已上射了りて、乃ち渤海使己珍蒙らに命せて射しむ。

③では天皇が大極殿南門に出御して行われ、①の南園とは南門のかたわらの小門をさすので、③の大極殿南門と同じ場所である。

また②の中宮は平城宮の第2次大極殿地区にあてられる[奈良国立文化財研究所1993]。神亀5年当時は中宮には大極殿はなく、第一次大極殿地区と機能を分け合い大極殿的な機能を果たした施設に相当するといので、②と①③とは場所は異なるが機能的には矛盾しない。

これらの例から平城宮では大極殿南門に全官人と外国の使人が参列して大射の礼が行われたことがわかる[大目方克司1993]。大極殿南門を藤原宮以前の宮殿配置に対比すると、大射の礼が行われた場所は、前期難波宮の内裏南門とその前面の庭にあてられる。

しかしながら、前期難波宮での大射の礼については具体的なことはわからないが、中国の制に倣った大射の礼が孝徳朝にはじまったとされる。同じ頃に新羅でもこの制が採用・整備されているので、大射の礼に外国使節を参加させていることから、この儀式は国際的にも重要な儀式との認識がされていたのであろう。このような情勢化で前期難波宮の内裏南門とその前面の朝庭が巨大であることは、儀礼の場として重要な場であったことが明らかである。

また、孝徳が白雉5年に長柄豊碕宮で崩じると、長柄豊碕宮の南庭で殯が行われた。孝徳以外に宮室の南庭で殯を行った例に、推古と天武がある。和田萃氏は、殯が行われた南庭を内裏の庭とされる[和田1995]。ところが、中国では三国から隋の時代にかけて、朝堂において葬送儀礼が実施されている(註7)。朝堂は宮城の門外の宮城部分にあたる。藤原宮では大極殿門の南で前期難波宮では内裏南門前と推定される。和田説に従えば、中国と我が

国とでは殯の場所に違いがあったことになるが、宮室内で殯を行った三人の天皇がいずれも中国に深い関心を示した人物であることを考慮すれば、南庭は内裏の庭ではなく、内裏南門外の朝堂にかかわる広場＝朝庭ではなかったかと推測させられる。

以上のように見てくると、内裏南門についての具体的な機能や性格について判断する新しい資料を得られた訳ではないが、中国都城からの影響、対朝鮮諸国との外交関係に加えて[門脇植二1972]、内裏南門とその前庭での行事を通して、前期難波宮の内裏南門の実態に少しは近づけたのではないだろうか。

以上の通り、中国都城の影響を強く受け複雑化したことも間違いない内裏の殿舎配置や構造は、古墳時代以来の伝統的な豪族の居館の延長上にあることを忘れるわけにはいかない[澤村1967、中尾1995]。しかし、7世紀の中葉に前期難波宮が古代京都制度の中で突出したかのような形で出現したことについては、彼我のこのような国際情勢が微妙に反映したものと考えてみてはいかがであろうか。

本稿の中で、遺構を考えるにあたって、植木久氏が行った作業の成果を多く使わせていただいた。記して感謝の意を表するものである。

(ながやま まさかず：流通科学大学教授)

註)

- (1) 1973年当時、大極殿門ないし、大極殿南門と称していたものは、現在では内裏南門と改称されている。
- (2) データは難波宮建造物復元研究会(仮称)[1995年1月]の植木久氏の資料による。
筆者は[1973B]において、その時点での復元尺の整理をし、[中尾1886]がその後の整理を行っているが、どちらも1尺=29.2cmでの換算に止めた。今回の植木久氏の整理はその後の成果を含めて大尺に換算しているので、ここではそれにしたがった。
- (3) 難波宮建造物復元研究会(仮称)における植木氏の口答発表による。
- (4) 浅野清氏は『日本建築の構造』(『日本の美術』245)で「梁間をあまり離すと太い梁をかけなくてはならず、そうなると構造のバランスが崩れるので、梁間の大きさには限度があった」とされる。内裏南門の梁間はどの程度が過度かはわからないが、大きな梁かけられた建物で桁行7間の建物から考えると、軒高の高い門とであったことが想像できる。
- (5) SB3301の南北側柱の2.4m外方にある柱穴を土庇と考えた場合にこうなる。
- (6) 諏訪神社の「建御柱」で知られる神事で建てられる御柱は直径が60～80cmの巨大なもので、前期難波宮の柱と大差がない。御柱の長さは約17mといわれ、埋めるための掘形の深さは約2mである(諏訪市立博物館の資料による)。内裏南門の柱を同規模の長さと考え、現状の柱抜き跡の深さ約1mから推測すると基壇の高さは少なくとも1mはあったと考えられる。

- (7) 山崎直治氏1992年9月第56回都城制研究会における「中国三朝制について」の口答発表による。

参考文献

- 植木 久1991、「大和への玄関—難波津」：『新版古代の日本』6
大阪市文化財協会1983、「難波宮跡(NW83-6次)発掘調査説明会資料」
大目方克司1993、「謝礼・贈弓・弓場始」：『古代国家と年中行事』
押部佳周1979、「難波小郡宮について」：『続日本紀研究』173号
狩野 久1975、「律令国家と都市」：『体系日本国家史』I 古代
門脇植二1972、「いわゆる難波遷都について」：赤松俊秀教授退官記念『国史編集』
岸 俊男1975、「都城と律令国家」：『岩波講座 日本歴史』古代2
* 1981、「日本の古代宮都」 NHK市民大学講座テキスト
京嶋 寛1994、「難波宮下層土器の再検討」：『大阪市文化財論集』
佐竹 昭1988、「藤原宮と朝廷の秩序儀礼」：『日本歴史』478
* 1993、「古代宮室における「朝庭」の系譜」：『日本歴史』547
佐藤 隆1993、「前期難波宮朱雀門(?)跡の調査」：『華火』47号
澤村 仁1967、「奈良時代以前の古京」：『日本の考古学Ⅶ 歴史時代』下
中尾芳治1970、「難波宮址第16次・17次・18次・21次・31次発掘調査報告」：『難波宮址の研究』6
* 1972、「前期難波宮をめぐる諸問題」：『考古学雑誌』58-1
* 1981、「前期難波宮の内裏前殿SB1801をめぐる」：『難波宮址の研究』7
* 1986、『難波京』 ニューサイエンス社
* 1992、「難波宮発掘」：『古代を考える 難波』
* 1993、「前期難波宮「朱雀門」跡発見とその意義」：『大阪人』47巻10号
* 1994、「難波宮」：『岩波講座日本通史』第3 古代2
* 1995、「前期難波宮と唐長安城の宮・皇城」：『難波宮の研究』
長山雅一1973A、「難波宮跡第45次発掘調査概要」：『難波宮跡研究調査年報』
* 1973B、「前期難波宮の二つの門をめぐる」：『難波宮跡研究調査年報』
* 1977、「前期難波宮と京の建設をめぐる」：『難波宮と日本古代国家』
奈良国立文化財研究所1993、「平城宮発掘調査報告XIV」
橋本義則1986、「朝政・朝儀の展開」：『古代の日本まつりごとの展開』
早川庄八1983、「前期難波宮と古代官僚制」：『思想』703号
和田 孝1984、「タカミクラ—朝賀・即位式をめぐる」：『日本政治社会史研究』
* 1995、「難波宮儀礼の再分析—服属と儀礼—」：『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』上

第3節 後期難波宮大極殿院の規模と構造について

中 尾 芳 治

はじめに

後期難波宮の遺構の規模や殿舎配置を大極殿院にとどまらず内裏や朝堂院の部分も含めて、他の宮跡の中核部のそれと比較した場合、後期難波宮と平城宮(第二次)・長岡宮に多くの類似点があることは明らかである。

ここでは上記三宮跡の大極殿院の規模と構造を整理するとともに、それぞれの比較と検討を通じて若干の問題点を提示しておきたい。

1. 後期難波宮大極殿院の規模と構造 (Fig.54-1)

四面を回廊(複廊)で囲し、その中央北寄りに大極殿を置く。軒廊で大極殿と結ばれる後殿に北面回廊が取付き、南面回廊中央に閤門が開かれていた。

大極殿 SB1321 基壇の規模は地覆石外面間距離で東西41.71m(141尺)、南北21.16m(71.5尺)である。基壇高は、四面の階段の出が2.4m(8尺)であることと階段の勾配を考慮して2.1m(7尺)ほどと復元している(註1)。

階段は基壇の南面に3箇所、北面に2箇所、側面に各1箇所、計7箇所ある。階段の出はいずれも2.4m(8尺)、幅は中央間が4.5m(15尺)と広く、その他は4m(13.5尺)である。

建物の柱位置は基壇が削平されているために全く不明であるが、壇正積基壇では柱筋が階段耳石と一致し、かつ柱間寸法が尺の単位の完数または5寸の端数程度で割付けられていたと仮定すると、桁行9間、梁間4間で、正面柱間は中央間15尺(4.44m)、両脇間1間14尺(4.14m)、次の間2間13.5尺(3.99m)、隅間11尺(3.25m)、側面は中央2間14尺(4.14m)、隅間11尺(3.25m)と推定できる。桁行総長は119尺(35.20m)、梁間総長は50尺(14.79m)となる。

基壇化粧は、原位置に残された凝灰岩地覆石や各所から出土した化粧石からみて、束を用いない古式の壇正積基壇であったと思われる。地覆石の外方に布石(延石)がめぐっていた痕跡や雨落溝は認められなかった。

基壇周囲には地覆石上面より約15cm下に直径3~8cmの礫を全面に敷きつめて地表の舗装としている。

Tab.11 大極殿院基壇・建物比較表

		後期難波宮			平城宮(第二次)			長岡宮			備考
		規模(間)	m	尺(29.58m)	規模(間)	m	尺(29.6m)	規模(間)	m	尺(29.6m)	
大極殿基壇	東西		41.7	141		45.9	155		41.4	140	
	南北		21.2	71.5		23.7	80		21.6	73	
大極殿建物	東西	9	35.2	119	9	38.0	129	9	35.8	121	
	南北	4	14.8	50	4	15.9	54	4	16.3	55	
大極殿後殿基壇	東西		32.5	110		41.3	140		31.2	105	
	南北		13.7	46.5		13.6	46		13.5	46	
大極殿後殿建物	東西	A案 7	28.7	97				7	29.0	98	
	南北	2	8.9	30				2	8.3	28	
	東西	9	29.8	100	9	38.0	129				
	南北	B案 2	8.3	28	2	9.4	32				
大極殿閤門基壇	東西	?	?	?		26.1	87	?	?	?	
	南北	?	?	?		13.8	46	?	?	?	
大極殿閤門建物	東西	?	?	?	5	22.1	75	?	?	?	
	南北	?	?	?	2	8.9	30	?	?	?	
大極殿院回廊	東西		101.1	342		112.4	380		100.4	339	中柱間距離
	南北		78.0	263		79.0	267		117.0	395	*
	東西		106.2	359		118.3	400		105.2	355	外側柱間距離
	南北		83.0	280	23	84.7	287	33	121.8	411	*

大極殿後殿 SB1326 基壇の規模は、基壇周囲に残る地覆石据付け痕や背面の雨落溝、大極殿と同後殿をつなぐ軒廊SC3321の南西入隅部に残る大極殿地覆石の形状などを参考にすると、東西約32.5m(110尺)、南北約13.7m(46.5尺)と復元できる。

建物の柱位置は全く不明であるが、A・B二案の復元が試みられている。A案は後期難波宮中枢部が移建されたと考えられる長岡宮の大極殿後殿が7×2間であるので、それと一致させる案である。B案は平城宮(第二次)と同じ9×2間に復元する案である(Fig.54)。A案の場合、柱間寸法は桁行が中央間15尺、両脇間14尺、次間2間13.5尺の総長97尺、梁間が15尺2間で総長30尺になる。B案では桁行が中央間14尺、両脇間3間11尺、隅間10尺の総長100尺、梁間が14尺2間で総長28尺となる(註2)。

軒廊 SC3321 大極殿と同後殿をつなぐ軒廊で、基壇は大きく後世の攪乱を受けていたが、地覆石の抜取り痕跡から、土壇の東西幅は約6m(約20尺)、基壇東西幅は7.2m(24尺)に復元できる。南北長は、大極殿と同後殿の地覆石外面間距離で9.5m(32尺)である。

柱位置は不明であるが、桁行3間、梁間1間に復元されている。

大極殿閤門 大極殿院の南面回廊の存在は明らかなので、当然大極殿閤門も存在したはずであるが、後世の攪乱を受けて遺構は全く残っていなかった。

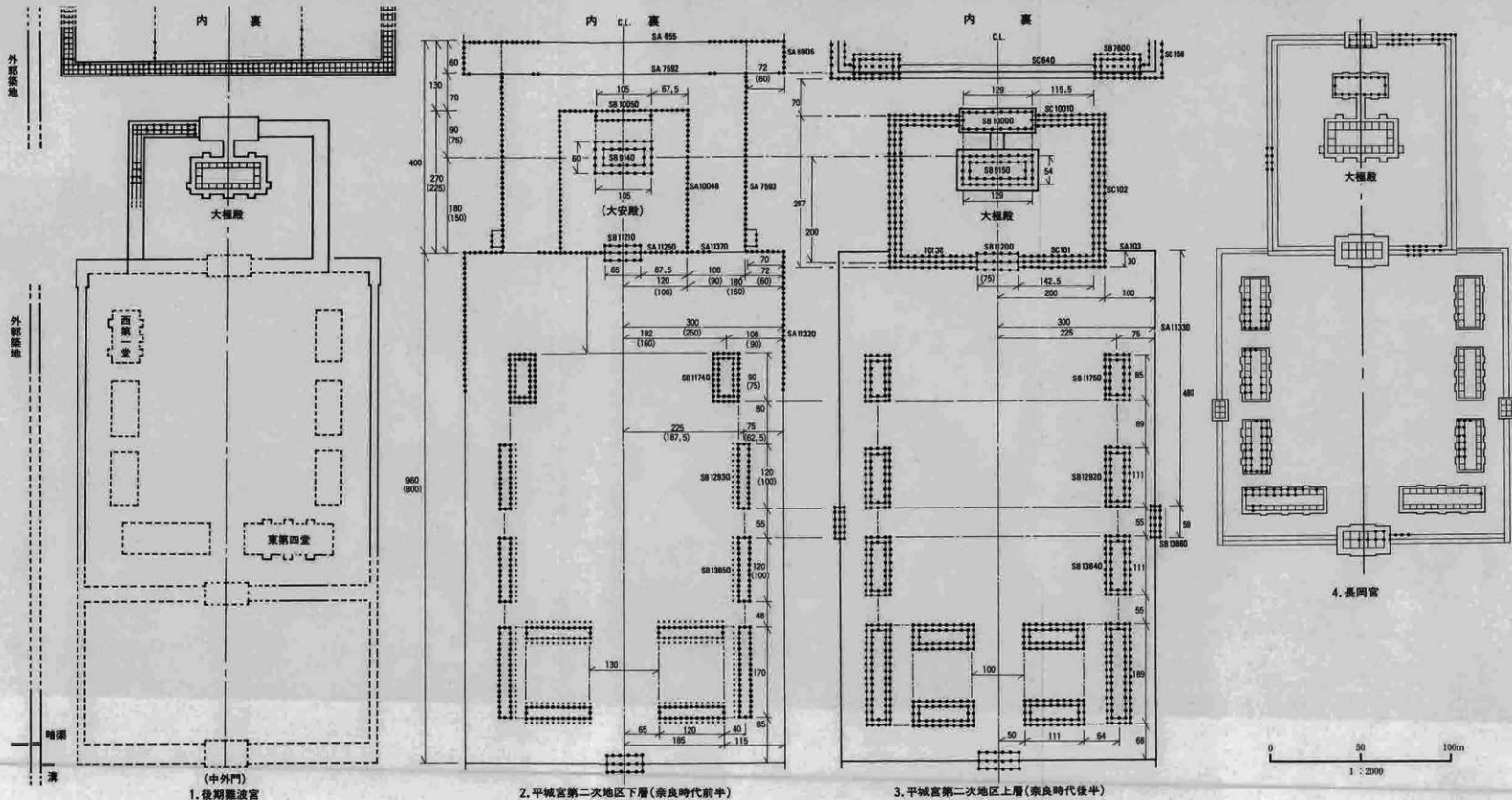
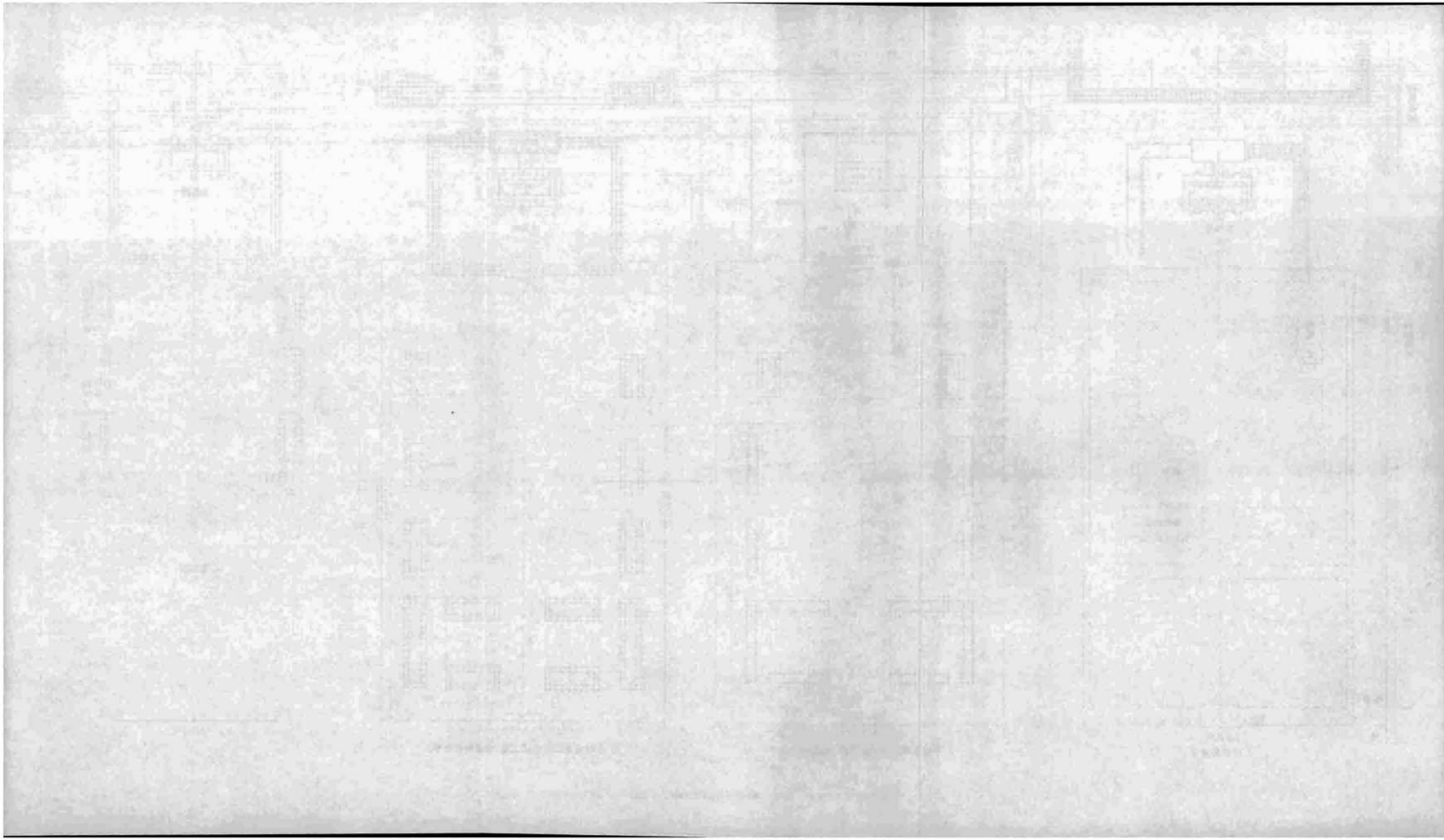


Fig.54 後期難波宮・平城宮・長岡宮大極殿院・朝堂院比較図 (2・3図は「平城宮復原調査報告 XIV」Fig.87より作成。単位尺)



大極殿院回廊 これまでの調査で、北面東回廊の後殿取付き部、北面西回廊、西面回廊北半部、大極殿院回廊南西隅の暗渠部分などが発掘されている。南面西回廊北半部も調査されたが、中世の東西大溝や後世の削平により攪乱されていて、回廊の明らかな遺構は検出されていない。

北面西回廊では、13個所の礎石据付け跡、北・南側の雨落溝、北面西回廊と西面回廊の交差部の暗渠SD3521が検出されている。

これらの遺構や北面東回廊の北・南側の雨落溝および北面東回廊南側雨落溝西端に原位に残る凝灰岩切石溝の形状から、回廊基壇幅は8.91m(30尺)に復元できる。

柱間寸法は、桁行が12.5尺×8間+8.5尺×2間、梁間は8.5尺×2間に復元できる。大極殿後殿中軸線から西面回廊中央柱線までの実測値は50.525m(171尺)になることから復元すると、大極殿院回廊の東西幅は中央柱間距離で101.1m(342尺)、外側柱間距離で106.2m(359尺)になる。

西面回廊では、その北端になる北面回廊北雨落溝から南面回廊北雨落溝(暗渠SD1523)までの心々距離が77.95m(263尺)、北面回廊北雨落溝心から北面回廊中央柱筋までの距離が4.65mなので、南面回廊の規模が北面回廊と同じであるとする、南・北両面回廊の心々距離は77.95m(263尺)に復元でき、外側柱間距離は83.0m(280尺)となる。

大極殿院内庭には全面に小石敷の舗装がされているが、大極殿周囲の小石敷と南面回廊北側に残る小石敷との間には17~18cmの比高差があることからみると、大極殿から南面回廊にかけてゆるやかに傾斜する形で舗装されていたものであろう。

2. 平城宮第二次大極殿院の遺構 (Fig.54-3) (註3)

四面を回廊(複廊)で囲み、中に大極殿と後殿を置き、南に閤門を開く。

大極殿 SB9150 第二次大極殿で、基壇上に建つ9×4間の四面庇付東西棟の礎石建物である。基壇の規模は45.9m(155尺)×23.7m(80尺)で、建物の柱間寸法は、土壇上に残る44個所の礎石据付け位置から、身舎が4.4m(15尺)等間、庇柱間が3.5m(12尺)、基壇の出が3.8m(13尺)で、桁行総長が38.0m(129尺)、梁間総長が15.9m(54尺)とわかる。

階段は南面に3箇所、北面に2箇所、東・西面の各1箇所に、幅4.45m(15尺)、出3.55m(12尺)の階段がとりつく。北面中央間には後殿に接続する軒廊SC9144がある。

基壇化粧は凝灰岩切石による壇正積基壇である。基壇周囲には直径5~15cmの礫を敷詰め、上層の小石敷SX9145Bと、直径1cm前後の小礫を敷詰めた下層の小石敷SX9145Aの二時

期の小石敷が存在する。

大極殿後殿 SB10000 基壇規模が東西41.3m(140尺)、南北13.6m(46尺)の建物である。建物の柱間寸法は2個所の礎石据付け跡と基壇規模から、9×2間で桁行が15尺(両端間12尺)、梁間が16尺で、桁行総長38.0m(129尺)、梁間総長9.4m(32尺)に復元されている。基壇の出は南・北面が2.1m(7尺)、側面が1.6m(5.5尺)で、屋根は切妻造である。基壇外装は凝灰岩切石による壇正積基壇である。

階段は北面に3箇所、南面に2箇所が推定されるが、通常の階段とは異なって基壇の外側に張出さず、基壇の内側に入込む構造をとる。基壇高4尺で階段は3級、基壇に約4尺入込む構造に復元できる。

基壇南側には大極殿周辺と同じく上下二層の小石敷があるが、北側には礎敷きはない。
軒廊 SC9144AB 大極殿と後殿をつなぐ軒廊である。当初のSC9144Aは、南北長10.0m(34尺)、東西幅3.8mで、凝灰岩切石で基壇化粧する。SC9144Bは9144A基壇の両側を拡張し、基壇幅を約8.0m(27尺)としたものである。

SC9144B基壇上には、大極殿基壇北端から北約3.2m(11尺)に一对の礎石抜き取り穴があり、柱間寸法は大極殿の桁行寸法と同じ4.4m(15尺)である。これらの柱位置からSC9144Bは桁行2間、梁間1間に復元できる。SC9144Aの礎石位置は不明で、基壇幅が3.8mと極端に狭いことから考えると、この時期には基壇のみで屋根はなかった可能性がある。
大極殿間門 SB11200 東西26.1m(87尺)、南北13.8m(46尺)の基壇をもつ礎石建物である。建物規模は5×2間で、柱間寸法は桁行・梁間ともに4.4m(15尺)等間で、桁行総長は22.1m(75尺)、梁間総長は8.9m(30尺)である。

基壇の出は南北が2.4m(8尺)、東西の竈羽の出が1.8m(6尺)となり、屋根は入母屋造でなく切妻造である。外装は凝灰岩切石による壇正積基壇である。

基壇の南と北の階段は、桁行中央間の3間分13.3m(45尺)の長大なものである。東西側面には、南面回廊の外側廊に通じる部分に階段が想定できる。

間門基壇の南北面には、門に付随する二時期の仮設庇(土庇)がある。

大極殿院回廊 南面東回廊SC101は複廊で、12間あり、延長は柱心々で44.3mである。柱間寸法は桁行は3.8m(13尺)を基本とし、間門との取り付けでは12.5尺と狭くする。梁間は3.0m(10尺)である。基壇幅は9.1m(31尺)で基壇の出は5尺5寸となる。間門から東へ4間目の基壇南縁に階段幅が回廊の桁行1間分(13尺)に当たる階段SX11297がある。

南面西回廊SC11246は、2間分を発掘しているが、近世の削平により柱穴などは遺存し

ていない。

東面回廊SC102は桁行23間、延長は84.7m(287尺)で、柱間寸法は南面回廊と同じ桁行が13尺等間、梁間10尺×2間の複廊である。回廊基壇築成の上限を考える資料として、回廊南端部の基壇土から出土した土器編年「平城宮Ⅲ中～新」の須恵器杯Bの蓋がある。また、SC102の発掘区東南隅の礎石抜き取り穴から「平城宮Ⅳ」の土師器皿が出土している。

北面東回廊SC10100、北面西回廊SC10090は、基壇の構造・柱間などは東面・南面回廊と同じであるが、大極殿後殿との取付きでは11.5尺となる。規模は桁行総延長でSC10100・10090が36.6m(124尺)である。

SC10100上の西から4間目に扉口があり、大極殿後殿に昇る階段は回廊の内側にあった。回廊の雨落溝も凝灰岩切石製で、造り・寸法は大極殿後殿の雨落溝と同じである。ただし、内側石はやや幅・厚さが大きく、回廊の羽目石を兼ねている。

以上、南面東回廊SC101の桁行総長が150尺(44.3m)、閤門との取付き部12.5尺、閤門桁行総長75尺(22.1m)から復元すると大極殿院南面回廊の東西幅(外側柱間距離)は400尺(「平城宮発掘調査報告 XⅣ」Tab.13第Ⅱ期遺構各点間距離実測値のL-M点間距離59.15m×2=118.3m)となる。

同様に、北面東回廊SC10100の桁行総長が124尺(36.6m)、後殿との取付き部11.5尺、後殿桁行総長129尺(38.0m)から復元すると大極殿北面回廊の東西幅(外側柱間距離)は400尺(「平城宮発掘調査報告 XⅣ」Tab.13第Ⅱ期遺構各点間距離実測値のO-N点間距離59.18m×2=118.36m)となる。

大極殿院回廊南北幅(外側柱間距離)は、東面回廊SC102から287尺(84.7m)となる。

3. 長岡宮大極殿院の遺構 (Fig.54-4) (註4)

四面を回廊(複廊)で囲し、その中央北寄りに軒廊で結ばれた大極殿と後殿を置く。回廊の北に北門、南に閤門を開く。

大極殿 1961年に発掘された基壇の規模は、周囲に残る小石敷の輪郭から、東西41.4m(140尺)、南北21.6m(73尺)と計測されている。基壇南面に3箇所、北面に2箇所、幅4.6～4.9m(15～16尺)、奥行き2.7m(9尺)の階段跡があり、東西両側面南端にも階段があった可能性がある。階段の出の寸法から基壇高は2.1～2.7m(7～9尺)と考えられている。基壇化粧は大極殿の基壇の線に残る凝灰岩片の列や大極殿後殿の凝灰岩地覆石の存在から、凝灰岩切石による壇正積基壇と考えられる。

礎石・根石等は全く失われていて大極殿建物の正確な規模は不明であるが、階段の位置や寸法から桁行7間、梁間2間の身舎に四面庇のつく9×4間に復元されている。柱間寸法は桁行が $13+14+13+13+15+13+13+14+13=121$ 尺、梁間は $13+14.5+14.5+13=55$ 尺、基壇の出は9.5尺となる。屋根は寄棟造か入母屋造である。

大極殿後殿 1960年に発掘された基壇の規模は、東西31.2m(105尺)、南北13.5m(46尺)を測り、基壇周辺には小石敷がある。南面2個所と北面3個所に、幅4.25m(14尺)、出0.6m(2尺)の階段があり、南面中央に幅3.6m(12尺)、長さ9m(30尺)の軒廊が復元されている。階段の出から推測される基壇の高さは2尺前後である。

大極殿後殿では、礫と土を互層につき固めた礎石の基礎地業がよく残っていたことから、建物の規模は7×2間とわかる。柱間寸法は桁行・梁間ともに4.25m(14尺)等間で、桁行全長は98尺、梁間は28尺に復元されている(註5)。基壇の出が南面と北面で9尺、東西側面で3.5尺となることから、屋根は切妻造とわかる。

大極殿院北門 1959年に発掘された北門の基壇の規模は、東西15.3m(51尺)、南北10.8m(36尺)を測り、周囲には小石敷がある。建物の規模は3×2間で、柱間寸法は桁行3.9m(13尺)、梁間3.0m(10尺)である。屋根は切妻造であろう。

大極殿閤門 大極殿の前方は平安宮と同様に竜尾壇によって画されると考えられていたが、1979年の調査によって南面回廊が存在することが明らかにされた。当然南面回廊の中央に大極殿閤門が存在するはずであるが未調査で規模などは不明である。

大極殿院回廊 大極殿と同後殿の四周を桁行3.6m(12尺)、梁間2.4m(8尺)×2間の複廊で囲み、南面に大極殿閤門、北面に3×2間の門を配する。

大極殿院回廊の規模は回廊中央柱心々距離で東西幅100.4m(339尺)、南北長117.0m(395尺)、回廊外側柱心々距離で東西幅105.2m(355尺)、南北長121.8m(411尺)を測る。

4. 後期難波宮大極殿院と平城宮第二次大極殿院の比較

後期難波宮大極殿院と平城宮第二次大極殿院の規模と構造を比較してみると、両者の間に次のようないくつかの共通点が認められる。

- (1) 大極殿院回廊の平面が、藤原宮・平城宮(第一次)・長岡宮大極殿院とは異なり横長になっている。南北・東西心々距離の比は、難波宮が $78.0\text{m}:101.1\text{m}\approx 1:1.3$ 、平城宮第二次が $79.0\text{m}:112.4\text{m}\approx 1:1.4$ となり、平城宮(第二次)の方がやや横長であるが、近似する。

- (2) 後殿に北面回廊が取付く。即ち後殿が北面回廊の一郭にある。
- (3) 後殿の階段が基壇の外に張り出さず、基壇の内側に入り込む構造をとる。
- (4) 大極殿と後殿が軒廊で結ばれる。
- (5) 南面回廊心と大極殿心との距離が共に173尺で同じになっている。
- (6) 大極殿院を構成する大極殿・後殿・軒廊・間門・回廊はいずれも凝灰岩切石による壇正積基壇を備えた礎石建ち建物で、本瓦葺きである。
- (7) 内裏の南側に大極殿院・朝堂院を配置する。

ただ、建物の規模はいずれも平城宮(第二次)の方がひとまわり大きくなっている。一方、後期難波宮内裏においても平城宮第二次内裏との間に殿舎配置や規模に共通する事実や簡略化がみられる点に着目したことがある[中尾芳治1970]。

ところで、1986年の調査で、それまで平城宮第二次朝堂院に準じて十二堂型式に復元していた後期難波宮朝堂院が、長岡宮と同じ八堂型式であることが判明した[植木久1987A・B]。

後期難波宮の朝堂院がなぜ八堂型式であるのかという理由についてはまだ定説をみないが、有力視されている説に直木孝次郎氏の「首都十二堂、副都八堂」説がある。後期難波宮の内裏・朝堂院の殿舎配置や規模・構造を平城宮第二次内裏・朝堂院のそれと比較すると、そこに小規模化・簡略化がみられること、藤原・平安各宮など当時の首都の朝堂院が十二堂型式であることから、複都制下の首都平城宮に対して副都難波宮を八堂型式にしたのではないかとする説である[直木孝次郎1987]。

以上のような後期難波宮と平城宮(第二次)とを比較して、両者の間に共通点を認めるとともに、難波宮に小規模化・簡略化をみる考えは、平城宮(第二次)の造営年代を養老末年から神亀初年とする説を承けて、神亀3年から造営が開始され、天平4年ごろに造営が一段落したと考えられる後期難波宮は、首都平城宮(第二次)をモデルに、副都としてやや簡略化された体裁で造営されたものとする考えが前提になっていた[植木久1991]。

いわゆる平城宮第二次内裏・朝堂院(詳しくは第Ⅲ期内裏と第Ⅱ期大極殿院・朝堂院)の造営年代については、養老末年から神亀初年とする考えと、天平17年の平城遷都後とする意見があって論議が続けられたが、最新刊の「平城宮発掘調査報告 XIV」(1993)では、これまでの研究史を検討・整理した上で、第Ⅱ期大極殿院・朝堂院殿舎の瓦(6225-6663型式軒瓦)の製作技法が恭仁宮所用瓦のそれよりも後出のものであるということと、大極殿院回廊(SC102)出土の須恵器杯蓋の型式が平城宮土器編年の「平城宮Ⅲ中-新」で、天平17年

の平城遷都以後に属することなどを根拠に第Ⅱ期遺構は恭仁宮からの遷都後ほどなく建設したのであり、それは天平18・19年(746・747)頃とみるべきであると結論している(註6)。

一方、後期難波宮は坪出屋瓦や土器、造営尺、平城宮との近似性からみて奈良時代の難波宮に当たることは確実であり、その造営年代は『続日本紀』の造営記事から神亀3年(726)10月に造営に着手し、天平4年(732)頃にほぼ完成したものと考えて誤りないであろう。

即ち、後期難波宮内裏・朝堂院は、首都である平城宮第二次内裏・朝堂院をモデルにしてそれを小規模化・簡略化して副都難波宮を造営したのではなく、後期難波宮が平城宮(第二次)に先行して造営されたことになる。

もし後期難波宮の造営に当たって平城宮をモデルにしたとすれば、そのモデルになったのは、第二次大極殿・朝堂院地区では聖武の即位を目指して養老5年頃に始まった養老の改作による第1-2・3期の下層遺構であり、内裏では第Ⅱ期内裏になる。

一方、第一次大極殿地区では、神亀~天平初年の時期に当てられる第Ⅰ-2期の遺構、第一次朝堂院地区ではその建造時期が養老から天平初年頃に下るD1期(東第一・二堂、朝堂院南門造営)の遺構であり、全体としてはFig.55に示されるような奈良時代前半の平城宮の姿であったことになる。

後期難波宮の内裏中樞部を奈良時代前半の平城宮内裏中樞部と比較すると、一見して前者の殿舎配置は後者のそれに近似していることは明らかであろう。

内裏の外郭区画が平城宮では掘立柱塀で東西幅が600尺(177.3m)であるのに対し、難波宮では掘立柱複廊で東西幅(外側柱間距離)が602尺(179.3m)と近似する。内裏内郭南半の中央の内裏正殿を中心とする区画も、平城宮が東・西面が単廊、北面が複廊であるのに対し、難波宮では掘立柱塀と複廊になっており、その寸法も平城宮ではその内法寸法が東西75.0m(約250尺)、南北が73.509m(250尺)であるのに対し、難波宮では東西が80.46m(270尺)、南北(内裏南面回廊と回廊SC1745の中央柱間距離)が73.71m(250尺)でほぼ等しい。

また、第Ⅱ期内裏の殿舎配置に当たっては10尺方眼地割が利用されているが、後期難波宮でも同様の事実が指摘でき、後期難波宮内裏の造営に当たって平城宮第Ⅱ期内裏の規模や殿舎配置が参考にされたことは想像に難くない。

一方、平城宮第Ⅲ期内裏の改修に当たっては内裏を囲う塀を掘立柱塀から築地回廊に改築し、南面築地回廊に樓閣を構えて外観を壮麗にしているが、築地回廊で囲まれた内部の地割計画についてはほとんど変更がなく、内裏殿舎の基本構成は第Ⅱ期内裏を踏襲している。すなわち、後期難波宮内裏と平城宮第Ⅲ期内裏のモデルは共に平城宮第Ⅱ期内裏であった。

しかし、後期難波宮の大極殿院の壇正積基壇を備えた礎石建ち建物で本瓦葺きというその建築様式は、全て掘立柱建物である平城宮第Ⅰ-2・3期の下層建物とは大きくその様相を異にしている。

奈良時代前半期の平城宮では第一次地区(中央区)に即位・朝賀・蕃客辞見などの国家的儀式の場としての第一次大極殿、饗宴の場としての四朝堂が礎石建ち・瓦葺き基壇建物として造立された。一方、第二次地区(東区)には、天皇の御在所である内裏、政務のための場である十二朝堂とその正殿である「大安殿」が、掘立柱・檜皮葺き建物として造営されていた。

後期難波宮は、こうした奈良時代前半期の用途の異なる二つの朝堂院を藤原宮朝堂院に倣って内裏南方に一つにまとめたものであった。後期難波宮の構造や、その朝堂院が八堂になるのは、複都制下における首都と副都の関係が反映したものであると考えておきたい。

後期難波宮の直接的なモデルは奈良時代前半期の平城宮であったと思われるが、平城宮第二次大極殿院(第Ⅱ期)との共通点として挙げた大極殿院回廊の平面が横長になること、北面回廊の一郭にある後殿が大極殿と軒廊で結ばれることなどは後期難波宮で採用された新しい要素であり、中軸線上北に内裏、南に大極殿院・朝堂院を配置するのは藤原宮の殿舎配置を復活させたことになる。

上層の大極殿院は下層のそれを基準として設定されており、大極殿をはじめとする建物の南北の位置も、下層建物を平行移動することによって決められているなど、平城宮第二次大極殿院の殿舎配置が下層建物の地割に規制されていることは明らかであるが、上記の大極殿院回廊を横長に構成する点や大極殿と後殿を軒廊で連結することなどは、後期難波宮の要素を採用したものであろう。

難波宮を再建した聖武天皇は、在世中に7回も難波宮に幸幸して、難波宮や難波の地にひときわ深い愛着をいだいていた。聖武による大規模な難波宮再興事業の背景には「天武直系」と自負する聖武が、天武によって整備されて副都となった難波宮を「国を知らず都」として再興しようとする強い思い入れがあったことが想定されている[山本幸男1988]。

また、聖武の難波宮再興と難波遷都を難波の歴史における一つの画期とみて、そこに聖武の天武朝回帰をみようとする意見がある[直木孝次郎1995]。

一方、知造難波宮事として難波宮の再建に当たった藤原宇合は、大化の難波遷都と難波長柄豊碕宮造営のプレーンとして大きな役割を果たしたと思われる藤原鎌足の子孫、平城京遷都を主導した藤原不比等の第三男であり、長兄の武智麻呂も養老5年、従三位中納言で平城宮の造宮卿に就いている。宇合はまた、養老元年(717)10月、第9回遣唐使の副使として

唐都洛陽・長安に至り、翌年12月帰朝している。知造難波宮事に任じられた宇合の心中には、祖父や父の功業にならうとともに、朱鳥元年の難波宮焼失によって有名無実になっていた複都制を、彼自身が実際に見聞した唐朝の例にならって名実ともに再興しようとする意図があったと思われる。

造営工事は天平4年(732)ごろ一段落したとみえ、宇合以下仕丁已上に賜物があったが、「昔こそ 難波田舎と言われけめ 今は京引き 都びにけり」(『万葉集』巻3-312)という宇合の歌は、難波宮再建にかけた彼の意気込みと得意のさまをよく示している。

こうした聖武の天武回帰の心情と聖武の意を体した宇合の意気込みとが合まって、重園文軒瓦という斬新なデザインを生み、大極殿院の構成にもそれまでにない新しい要素を採用することになったのではなかろうか。

注目されるのは後期難波宮が前期難波宮と中軸線を同じくするとともに、内裏・朝堂院の位置も前期のそれを踏襲するだけでなく、その寸法も前期の地割を意識していたとみられることである。

この事実は全くの偶然による結果とは到底思われず、前期難波宮の存在、その位置や地割を十分意識した上で後期難波宮が再建されたことを示している。

神亀2年10月の聖武天皇の難波宮行幸に従駕した笠朝臣金村につぎの歌がある。

押し照る 難波の国は 葦垣の 古りにし郷と 人皆の 思い息みて つれもなく
ありし間に 續麻なす 長柄の宮に 真木柱 太高敷きて 食国を 治めたまえば
沖つ鳥 味経の原に もののふの 八十伴の男は 慮して 都なしたり
旅にはあれども (『万葉集』巻6-928)

荒野らに 里はあれども 大君の敷き坐す時は 都となりぬ(同巻6-929)

この歌が難波宮再建の一年前に詠まれたものであることを考えると、聖武は「長柄の宮」、すなわち孝徳朝に創建されて天武朝まで存続し、天武によって整備されて副都となった難波長柄豊碕宮のことを回想するとともに、「長柄の宮」を同位置で再興しようとする意図していたことを暗示するものではなかろうか。金村の歌は聖武の天武朝回帰の心情と、奈良時代の難波宮が長柄豊碕宮と同一の地に再建されたものであることを物語っている。

5. 後期難波宮大極殿院と長岡宮大極殿院の比較 (Fig.54・55)

後期難波宮の長岡宮への移建 後期難波宮と長岡宮との関係については、

- 1 大極殿・同後殿の基壇の規模がほぼ等しい。

- 2 朝堂院が共に八堂型式で、朝堂院築地の東西幅がほぼ等しく、朝堂建物の基壇や柱間寸法に一致がみられる。
- 3 長岡宮では難波宮式の重圏文軒瓦が、大極殿地区で91%、朝堂院地区では87%、朝堂院西辺官衙地区(東部)では73%、朝堂院南方地区では60%を占めている。
- 4 『続日本紀』によれば、長岡宮大極殿・内裏が造長岡宮使が任命された延暦3年6月10日よりわずか7か月後の延暦4年正月に完成している。

などのことからみて、長岡宮大極殿・朝堂院・前期内裏などは、後期難波宮のそれらを移建したものであることが明らかにされた。

『続日本紀』延暦10年9月16日条には「平城宮の諸門を壊し運んで長岡宮に移し作らしめる」とあって、平城宮の諸殿舎が移建されたことは知られていたが、難波宮の諸殿舎も同様であったことが、難波・長岡両宮跡の発掘調査によって実証されたことは、両宮跡における考古学的調査・研究の大きな成果のひとつであると言えよう(註7)。

ただ、難波宮から長岡宮への移建の事実も考古学的には現在のところ、内裏・大極殿・朝堂院など宮中樞部の移建が確認されているに過ぎない。その移建の状況も後期難波宮中樞部をそっくりそのまま移建したという単純なものではない。

内裏に関しては、『続日本紀』延暦8年2月27日条に「西宮より移って始めて東宮に御す」とある「東宮」を、1966年に大極殿の真東200mの位置から発掘された内裏跡に比定して第二次内裏と考え、「西宮」を延暦4年正月に難波宮からの移建が終わっていた第一次内裏と考えてその位置を大極殿北側に想定しているが、遺構の実態は不明である。

大極殿と同後殿の基壇規模は難波宮と長岡宮ではほぼ等しいが、建物規模やその柱間寸法に関してはかなりの相違がある。長岡宮大極殿後殿では礎石据付けのための基礎地業がよく残っていることから建物が7×2間であったことは明らかであるが、その柱間寸法については資料によって数値が異なり確定されていない。難波宮大極殿・同後殿、長岡宮大極殿の建物の柱間寸法は礎石や根石などが全て削平されているために、基壇や階段の輪郭を示す小石敷の状況や一部に残る地覆石などからそれぞれ復元されたもので、あくまでも解釈に基づく推定値である。長岡宮大極殿・同後殿の柱間寸法を推定された福山敏男氏も、それは一案であり、ある範囲での別案も考えられるとしておられる(註5)。特に長岡宮大極殿・同後殿の実測図が公刊されていない現在では、両者の柱間寸法の違いにとらわれずに、長岡宮大極殿・同後殿は難波宮のそれらを移建したのと考えておきたい。

澤村仁氏による難波宮大極殿後殿の復元には7×2間と9×2間の二案がある(註2)、

長岡宮大極殿後殿が7×2間であることは確実であるから、難波宮からの移建の事実を考えると7×2間の復元の方が妥当性があるかも知れない。

大極殿院回廊に関しては難波宮・長岡宮両宮で大きく異なる。難波宮では横長で回廊が大極殿後殿に取付くのに対し、長岡宮では縦長で、回廊は大極殿・同後殿の四面を囲んで北面に門を開く。柱間寸法も難波宮では桁行が12.75尺と12尺、梁間が8.5尺に復元されるのに対し、長岡宮では桁行が12尺、梁間が8尺となり、移建に際してそのプランは大きく改変されたことが注目されよう。

朝堂院に関してはそのプランには共通点が多い。朝堂院の東西幅と南北長は難波宮が161.4mと177.3mに対し、長岡宮は156mと159mで、難波宮が一まわり大きい。朝堂は共に八堂型式で、その配置の状況や朝堂の規模も近似する。難波宮の朝堂の調査は現在のところ一部にとどまっているが移建を否定するような事実はない。

次に長岡宮の朝堂院西方官衙地区からは朝堂院に匹敵する量の難波宮式軒瓦が出土し、その遺構の配置は、後期難波宮朝堂院西方の区画に類似するという〔山中章1991〕。

後期難波宮朝堂院の西方、中軸線から約158mの地点に延長196m(660尺)におよぶ掘立柱塼とその三等分点に位置する2箇所の間門(19.5×6.0m)が検出されている。その区画内は明治以後の軍用地としての開発工事によって削平破壊され、一部の井戸・溝・掘立柱建物・掘立柱穴が検出されているにすぎないが、東辺の2箇所に間門をもつこの区画はきわめて重要な地区であったと思われる〔植木久1986〕。

後期難波宮の内裏・大極殿院・朝堂院に加えてこの西方区画の殿舎も移建された可能性が考えられよう。

問題は、長岡宮では延暦4年8月23日条に「従七位上大秦公忌寸宅守に従五位下を授く。太政官院の垣を築けるを以てなり」とあり、延暦5年7月19日条に「太政官院成る。百官始めて朝座に就く」とあることである。

「太政官院」は朝堂院の別称であると考えられ〔保坂佳男1986、上野邦一1993、奈良国立文化財研究所1993、山中章1995〕、天平13年3月20日条の摂津職の言「今月14日より18日まで、鶴108、宮内殿上に集り或いは樓閣の上に集り或いは太政官の庭に止まる」にみえる「太政官の庭」を太政官院(朝堂院)の庭と解すると、難波宮の太政官院(朝堂院)の長岡宮への移建完了は、大極殿や内裏よりもずっと遅れて延暦5年7月であったことになる。

延暦4年正月条には「天皇、大極殿に御して朝を受く。その儀常の如し。石上・榎井二氏梓楯を立つ。この日、五位已上を内裏に宴して禄を賜う」とあって、従来は大極殿・内裏とと

もに朝堂院もこの時には移建されていたと解されていた。

しかし、前述のように「太政官院」が朝堂院のことだとすると、延暦4年正月の時点ではまだ朝堂を区画する垣も出来上がっていなかったことになる。朝堂院の移建は、恐らく延暦4年9月23日の造長岡宮使で中納言正三位兼式部卿藤原種継の暗殺事件によって大きく遅れることになったと思われる。

天平16年3月の難波宮遷都に際しては、石上・榎井二氏が大櫓と植を難波宮中外門(朝集堂院南門すなわち平安宮応天門)に樹てたことが知られる。後期難波宮の朝集堂院の遺構は現在のところ不明であるが、朝堂院南面回廊の南約80mの朝堂院西外廊築地下の東西方向の奈良時代の暗渠やその南11.4mに東西に走る溝の痕跡などから朝集堂院南面回廊の存在が推定できる[中川信作・八木久栄1981]。

以上からみて、後期難波宮に朝集堂院が存在した可能性は高いと思われる。しかし、長岡宮には発掘調査の結果からみて移建当初に朝集堂院が存在した可能性はない。

それどころか、山中章氏の復元によれば、難波宮中枢部の移建を主とする長岡宮前期造営の段階では、朝堂院南門が宮城門を兼ね、朝堂院南面回廊およびその両脇に取付く築地が宮城大垣を兼ねていたと考えられている[山中章1992]。

難波宮中枢部が長岡宮に移建されたことは事実としても、そっくりそのままの状態で移建されたのではなく、大極殿院や朝集堂院のプランには大きな改変が加えられていることがわかる。

八堂型式の朝堂院 1986年に後期難波宮の朝堂院が八堂型式であることが明らかにされるまでは、八堂型式の朝堂院は長岡宮ではじめて出現したと考えられており、それは複都制の廃止とともに桓武朝における財政緊縮政策・行政改革の一環として十二堂型式を八堂型式に縮小したものと解釈されていた[岸俊男1974]。

しかし、長岡宮に移建されたことが確実である後期難波宮朝堂院が八堂型式であったとすれば、長岡宮が八堂型式であるのは単なる移建の結果にすぎないことになり、改めて後期難波宮で八堂型式が採用されたことの意味が問われることになる。

後期難波宮の朝堂院が八堂であることの理由として「首都十二堂、副都八堂」という複都制下における首都と副都の格差として考えようという意見(直木孝次郎1987)のほかに、後期難波宮と前期難波宮の殿舎の重複状況に単なる偶然とは考えられない密接な関係があることから、殿舎配置の影響があるとみて、後期難波宮の八堂型式の朝堂院は首都平城宮の単なるミニチュア版でなく、「難波宮独自の問題が、時の宮廷制度の改革などと複雑にから

みあって成立した」ものとする意見がある〔植木久1987B〕。

私は、もし朝堂院の型式に首都と副都を区別する象徴的な意味があるとすれば、長岡宮の朝堂院が八堂型式であるのは、副都難波宮からの単なる移建の結果としては片付けられない問題を含んでいることを述べたことがある〔中尾芳治1992〕。

長岡宮への難波宮の移建には、長岡京遷都が急がれる政治的事情とそれに対する首都平城京の強い抵抗の背景があったと思われる。しかし、その移建は蒼惶のうちに行われたのではなく、少なくとも延暦2年3月の和気清麻呂の摂津職大夫任命に始まる周到な準備作業を経て行われたものであった〔清水みき1995〕。

延暦3年6月から同5年7月ごろまでのいわゆる前期造営によって難波宮の内裏・大極殿・朝堂院など中枢部の移建が行われたが、難波宮の殿舎がそのままに移建されたのではなく大極殿院にみられるような重要な改変が行われている。こうした事実や、途中で藤原種継の暗殺事件によって遅延した理由はあるとしても難波宮朝堂院の移建に延暦5年7月までの年月をかけていることから考えると、八堂型式の朝堂院をあえて改変せずにそのままにとどめ、朝集堂院を再建しなかったことについては明確な意図があったものと思われる。

長岡京遷都をめぐるのは、天武系から天智系への皇統交替による遷都説〔瀧川政次郎1967ほか〕が有力であるが、難波宮・難波京との関係については、旧勢力との摩擦をさけるため、陪都＝難波京の移建に擬してなしくずしに行われたとみる説〔笠井純一1967〕、長岡京は後期難波京に代わる平城京の副都(陪都)として計画したものが、ある時点から首都という形になったとする説〔註8〕、長岡京は副都(陪都)難波京の移建として延暦5年7月に完成したが(前期造営)、その後平城京を廃して長岡京を首都として以後充実させる(後期造営)ことに方針が変更されたとする説〔高橋一夫1994〕が出されている。

かつて山中章氏は難波宮・長岡宮の朝堂院が八堂型式である理由について、副都である難波宮では政務をもっぱらとする十二朝堂は必要でなく、政務を行う場としての位置づけはあくまで併用ないし副次的に想定されていたにすぎなかったので八堂に縮小された。一方、政務の場としての太政官院と旧来の朝堂院が並立し、朝堂の機能が低下した長岡宮では、難波宮から移建されたまま八朝堂は十二朝堂として改築されることもなく、儀式・饗宴の主舞台としてそのまま利用されたと考えられた〔山中章1991〕。

しかし、現在では太政官院は朝堂院の別称と考えられているのであるから〔山中章1995〕、副都難波宮で八堂になった理由についてはともかく、首都長岡宮でも八堂のままで終始した理由としては山中氏の論は修正を要することになる。



後期難波宮の朝堂院が八堂型式になった理由、長岡宮への移築に際し難波宮朝堂院の朝集堂院が再建されず八堂型式に止められた理由、平安宮で八堂型式の長岡宮朝堂院が十二堂院型式に復された理由などについては、今後も検討されるべき重要な問題として残っていると思われる。

(なかお よしはる：帝塚山学院大学教授)

註)

- (1) 復元尺は澤村仁氏が復元された1尺=29.58mによる。
澤村仁「後期難波宮大極殿の建物ほか二・三の問題」(本書所収)
- (2) (A案)澤村仁「大極殿院の復元的整備」：『史跡難波宮跡—環境整備事業概要—』大阪市教育委員会 1978
(B案)澤村 仁 監修「難波宮(後期)の復元」：『季刊大林No31—難波宮— 1989
- (3) 奈良国立文化財研究所「平城宮跡発掘調査報告 XIV」1993および金子裕之氏の教示による。
- (4) 長岡宮諸殿舎の規模に関しては山中章氏の教示によって次の諸文献に載せられている数値の一部を訂正した。復元尺は1尺=29.6cmである。
『向日市史』上巻 1983
「長岡宮跡158・165次(7AN9N—I・2地区)～大極殿院北面回廊・大極殿古墳～発掘調査概要」：『向日市埋蔵文化財調査報告書』第18集 1986
「長岡宮跡第255次・大極殿院西面回廊発掘調査概要」：『向日市埋蔵文化財調査報告書』第34集 1992
- (5) 福山敏男「長岡京と宮城の遺跡」(『仏教美術』51—特集・日本の都城遺跡—1963)では、大極殿後殿の基壇規模を正面約104尺、側面約45尺に、建物規模を7×2間で、桁行を13+13+13+15+13+13+13+13=93尺、梁間を14+14=28尺に復元している。
山中章氏の教示によると、3.8m+4.25m×5間+3.8m=28.85m、梁間を4.25m×2間=8.5mとする資料(図面)もあって、後殿建物の梁間を14尺×2間とする点では一致するが、桁行柱間寸法については資料によって異同が多く、確定し難い。実測図の公開を待ちたい。
- (6) 「平城宮発掘調査報告 XIII—内裏の調査II—」1991 447頁
第Ⅲ期内裏の時期は、第Ⅲ期の内裏地区や第二次大極殿院・朝堂院両地で用いられた軒瓦(6225—6663型式)の製作年代から、葛仁宮からの遷都の後と考えることができるが、第二次大極殿院・朝堂院両地区における改作と同時であるか否かは明らかでない、とする。
漆智夫「平城遷都の史的意義」(門脇祐二編『日本古代国家の展開』上巻 1995)は、「平城宮発掘報告 XIV」の年代観に疑問を呈し、「後期難波宮を通して平城宮第二次地上層遺構を見た場合、その造営年代を聖武即位をめざした養老～神亀ごろとし、後期難波宮に先行するか、少なくとも併行すると思われる」とする[植木久1991]の意見を承けて、後期難波宮と平城宮東区大極殿院・朝堂院地上層遺構との密接な関係からして732年頃に完成したと思われる陪都難波宮が首都平城京に先行するとは考えがたいとする。

また、澤村仁氏は平城宮第二次大極殿院回廊から出土した時期の遅れる土器は、改造の時に入った可能性を指摘する(本書所収澤村仁氏考察)。

- (7) 小林清「長岡京と難波京との関連」「長岡京の新研究」1975
「向日市史上巻」1983
向日市教育委員会「3 長岡宮跡第116次(7AN15H地区)～朝堂院西第四堂～発掘調査概要」「向日市埋蔵文化財調査報告書」第10集 1983
中尾芳治「後期難波宮朝堂院について」「中山修一先生古稀記念長岡京文化論叢」1986
- (8) シンポジウム「古代都城を掘る」(「古代都市文化と考古学」季刊考古学・別冊5 1994)での金子哲之氏の説

参考文献

- 植木 久 1986、「難波宮朝堂院西方に五間門」；『葦火』創刊号 (財)大阪市文化財協会
* 1987A、「難波宮朝堂院の調査」；『葦火』7号 (財)大阪市文化財協会
* 1987B、「難波宮朝堂院の発掘調査」；『日本歴史』472号 吉川弘文館
* 1991、「大和への玄関—難波津—」；『新版古代の日本6 近畿Ⅱ』 角川書店
- 上野邦一 1993、「平城宮の大嘗宮再考」；『建築史学』20号
- 笠井純一 1967、「山城遷都」に関する疑問」；『続日本紀』224号 続日本紀研究会
- 岸 俊男 1974、「平城京へ・平城京から」(『日本古代宮都の研究』 岩波書店 所収)
- 清水みき 1995、「桓武朝における遷都の論理」；門脇祿二編『日本古代国家の展開』上巻 思文閣出版
- 高橋一夫 1994、「長岡遷都・平安遷都—桓武天皇への奉獻—」；『文学空間としての平安京』(論集平安文学Ⅰ) 勉誠社
- 瀧川政次郎 1967、「革命思想と長岡京遷都」；『京初並に都城制の研究』 角川書店
- 直木孝次郎 1987、「難波宮の十二朝堂と八朝堂」；『難波宮址を守る会ニュース』100号 難波宮址を守る会
* 1995、「古代難波史論—とくに天武朝難波宮と桓武朝難波宮について」；『相愛大学研究論集』第11号 相愛大学
- 中尾芳治 1970、「後期難波宮内裏殿舎の配置と規模」；『難波宮址の研究』第6 (89頁) 難波宮址顕彰会・難波宮址研究会
* 1992、「難波宮発掘」；『古代を考える 難波』 吉川弘文館
- 中川信作・八木久榮 1981、「第130次発掘調査概報」；『難波宮跡研究調査年報 1975～1979.6』難波宮址顕彰会
- 奈良国立文化財研究所 1993、「平城宮発掘調査報告 XIV」149頁
- 保坂佳男 1984、「朝堂院の変遷について」；『国史研究会年報』5 慶応義塾大学大学院国史研究会
- 山中 章 1991、「長岡京から平安京へ—都城造営にみる律令体制の変質」；『新版古代の日本6 近畿Ⅱ』
* 1992、「長岡宮城南面と北辺の造営」；『系里制研究』8号 系里制研究会
* 1995、「八世紀の宮都研究」；考古学研究会40周年記念論集『展望考古学』 考古学研究会
- 山本幸男 1988、「桓武朝の難波宮再興」；『続日本紀研究』第259号 続日本紀研究会

第4節 後期難波宮大極殿院の屋瓦

1. 後期難波宮大極殿院の屋瓦

大極殿院は重圓文系の瓦 大極殿院からは軒丸瓦113点のうち重圓文は111点、蓮華文は2点で、軒平瓦は103点のうち重圓文99点(註1)、唐草文4点が出土している(Tab.3)。軒瓦の出土量は多くないが、重圓文と蓮華・唐草文の割合は軒丸瓦が98.2%、軒平瓦は96.1%と圧倒的に重圓文軒瓦が多い。

重圓文軒丸瓦は13型式、軒平瓦は14型式で出土数の割に型式が多く、大きさも大小4種類に分けることができる。また軒廊周辺からは小型の軒瓦が、大極殿や後殿・北面・西面回廊付近からは直径18.0cm位の平城宮に比べると大型の軒瓦が多くみられ、後期難波宮の屋瓦は建物の規模に合わせて瓦の大きさを決めていたことがわかる。

鬼板は11点出土しており、全て3本の線からなる文様で軒瓦と同じ意匠である。大小4型式あり、大極殿と6920のように建物との関係や軒瓦との組合せがわかる。

以上のように重圓文系の瓦が後期難波宮大極殿院に計画的につくられ、葺かれていたといえよう。さらに重圓文には後出とみられるものもあり、創建から補修まで重圓文系で統一する意図が窺える。それらについて具体的に述べていきたい。

軒瓦の大きさ 瓦をみていくに当り、軒丸瓦の直径が17~18cmのものを大型とし、15cm大を中型、13cm大を小型と仮に呼んでおく。同様に軒平瓦は弦幅が27~28cmのものを大型、24~25cmを中型、21~22cmを小型としておく。型式毎の個数が少ないので、大きさでまとめ、分布と合わせて建物との関係をみていきたい。軒丸瓦と軒平瓦とを組合せると大型は軒丸瓦が約1尺、小型は約8寸の間隔で軒を飾ったと考えられる。なお、瓦の製作技法や特徴・出土状態については第IV章第2節を参照されたい。

大極殿所用の瓦 軒丸瓦は30点出土し、そのうち蓮華文は6241型式が1点である。重圓文軒丸瓦29点のうち型式分類ができたのは23点、6型式である。軒丸瓦の大型は9点で6015Aが5点と6016が2点、6015Aと6016の区別がつかず6015Aor6016としたものが2点である。中型は6014が5点と6022が4点で、小型は6021が1点である。後述するが中型・小型は軒廊所用の瓦とみられるので、大極殿には大型の6015A、6016、6015Aor6016と直径19.8cmでさらに大きい6017の3型式が葺かれていたといえる。6017については次項でより大きな瓦としてまとめたい。単層の寄棟造りと考える大極殿には軒丸瓦は約460点が葺

かれていたとみられる。大型の瓦の出土数が9点では2%にも満たず、資料数としてはあまりにも少ないが、6015A、6016を大極殿所用の軒丸瓦としておきたい。

軒平瓦についても軒丸瓦と同様にみえていくと、大型の瓦は6572Aが2点、6572Bが6点、6573A・B・Cが各1点、6574Bが2点で合わせて6型式13点である。出土数が少なく型式が多いことは軒丸瓦と同じであるが、6572Bと6572A・6574Bを主な大極殿所用の軒平瓦としておきたい。

軒瓦の組合せは6015Aと6572Aが内裏西外郭築地で[喜谷美宣1965]、6016と6574Dが東の官衙地域で認められている[八木久栄1989]。6015Aと6572Aは大極殿でも組合せとして認められる。6015Aと6016はほぼ同型同大でよく似ており対比されてきたが、6015Aには文様の中心に左字「右」陽文があり外縁が高く圏線との差が大きくて文様がすっきりしているのに対して、6016は無字でややのっぺりした感じがする。6572Aには瓦当中央に「+」陽字があるがやはりほぼ同型同大の6572Bと対比され、6015Aと6572Aの組合せに対して6016と6572Bの組合せもあると想定されてきた。今回出土した6016 11点のうち後殿の調査で9点、大極殿で2点、6572Bは8点のうち大極殿で6点出土したが後殿地区では出土していない。出土の傾向としては十分とはいえないが、6016と6572Bの組合せを否定するものではないだろう。しかし、これらが具体的にどのような葺かれていたかはわからない。

丸・平瓦は復元された数が少なく、軒瓦以上に分類された数が少ないが、丸瓦は6161B、平瓦は6561Cが6015・6572Aと6016・6572Bの軒瓦との組合せで考えられる。

面戸瓦は6973Aで回廊よりはやや大きいものが用いられている。

鬼板は高さ約40cm、最大幅約44cmの大型6920が使用されている。

大極殿所用瓦としてあげた瓦のうち、鬼板6920と面戸瓦6973Aはより大きくて特に大極殿のために作られたと考えられるが、軒瓦や丸・平瓦は後殿や回廊にも使われているものと同じ大きさで特別のものとはみられない。しかしほかにも大極殿所用とみられる、より大型の瓦類があるので次にみたい。

大極殿に葺かれたより大型の瓦類 より大型の瓦は軒丸瓦6017・軒平瓦6572C・丸瓦6369・平瓦6561A・B・面戸瓦6972である。軒丸瓦6017は直径が19.8cmで4点、軒平瓦6572Cは瓦当が厚く弧線も大きく弦幅は30cm以上あるとみられ、この5点は大極殿の北東から出土している。大きさからみると一つの組合せとしてよからう。

丸瓦6369は径18cm・厚さ2cm以上で凹面は幅広い面取りをする。6369Aは筒部の長さが約24cmの棟瓦である。6369Bは筒部が35.6cmあり、6369Aと同じ径・技法で6369Aと同じ棟瓦

とみられ、丸瓦の原体が6369Bとみられる軒丸瓦6017は組合せから鳥会に当たると考えられる。平瓦には長さが40cmを越える6561A・Bがあり、6561Aは幅が約30cmある。鬘斗瓦の出土が認められないので、6561A・Bがそれに当る可能性がある。面戸瓦6972は特に大きく最大幅は25～28cm、高さ17cmもあり、側縁と下端部に打欠きを多用している。下端部幅も13～16cmと大きく側縁が急に広がる所は6979の簷面戸と似ており、四隅へ降る降棟に使われた簷面戸であろう。

このようにみるとより大型の瓦類は棟用としてつくられたものであるといえる。

軒廊所用の瓦 軒廊の瓦については小型鬼板6922が1点と軒隅平瓦6572Fの2点1組が、後殿と軒廊の東・西両入隅付近で出土しており、瓦の出土地点と軒先で葺かれた位置との関係を示す例として注意をひいた[八木久栄1972]。軒廊北端には蟻羽・降棟があったことがわかる。軒廊の東・西の脇から出土した小型の瓦類は、上記のほかに軒丸瓦は6012、6015B、6021が各1点、軒平瓦は6573Bが2点、丸瓦は6262B、平瓦は6561G・Hと6761などである。面戸瓦は両側縁の大半を打欠いた6970Bが1点、側縁を打欠いて幅を狭くした6976C、6976が出土している。

次に軒廊両脇から大極殿北辺の東・西階段までの範囲に分布する中型の瓦類も軒廊に葺かれていたと思われる。軒丸瓦6014、6022と軒平瓦6572D・Hである。この型式の瓦は後殿や回廊からも出土しているがこの付近での密度が高い。軒丸瓦6014と6022はほぼ同大で圓線の配置が異なるが全体としてよく似ている。軒平瓦6572Dと6572Hも弧線の太さや頭つけ方にちがいがあがるが、文様はよく似ている。6022と6572Hは共に新型式であるから軒瓦の組合せとしては6022と6572H、6014と6572Dが考えられる(註2)。しかし、軒平瓦6572Dは1点で6572Hが多いし、軒丸瓦は6014と6022が混在して分布するので2組の使いわけがあったかどうかはわからない。

中型の瓦類は大極殿北辺の東～西階段間の東西に長く分布している。しかし攪乱からとはいえず大極殿南部でも1点出土しているので、棟瓦あるいは補修の瓦という見方もできる。しかし軒平瓦のうち6572Hに隅瓦が1点と隅瓦の可能性のあるものが1点あり、瓦当は欠損している軒隅平瓦が1点含まれているので、後殿側と同様に蟻羽・降り棟がつくられ、蟻羽の隅瓦に6572Hが使われたとみるべきであろう。

軒廊に小型と中型の軒瓦がどのように葺かれていたのか。分布では小型は北半に多く、中型は南半に多いが北半にもみられるから、軒廊には中型6014、6022と6572D・Hが葺かれ、後殿側の蟻羽に小型を用いたと推定しておく。また6573Bは後述するが後出の瓦とみ

られるから補修もなされていたことがわかる。

大極殿後殿所用の瓦 瓦類は後殿地区の第33・34次調査で最も多量に出土しているが、多くは後殿に取付く回廊付近からで、後殿とわかるものは少ない。軒丸瓦は6015Aと6016が各1点と、軒平瓦6572Aが3点、6574AとDが各1点である。大極殿の6572Bがなく6574が加わる。6574Aは後殿の北西隅辺から出土した隅瓦である。これらの軒瓦は大型に属する。平瓦は6561Cが認められる。面戸瓦は6970が後殿の南辺と北西隅から、6975は東半部から出土している。鬼板は6921が北東隅・北西隅と後殿西端の中央から各1点出土している。大極殿院北面東回廊所用の瓦 北面東回廊は後殿の取付き部のみの調査である。軒丸瓦は6016が7点・6022が1点、軒平瓦は6572D・Hと、6574B・D・6574CorDと6573Aが各1点である。面戸瓦は6975と6971が1点ずつである。鬼板6920が南雨落溝から出土している。後殿南西隅のものというより大極殿の可能性がある。面戸瓦6971は薄手で蓮華文軒丸瓦6303系とみられる。

東回廊の瓦の組合せは軒丸瓦6016・軒平瓦6574・面戸瓦6975が考えられる。

大極殿院北面西回廊、西面回廊所用の瓦 大極殿院北面西回廊から西面回廊・南西隅は基本的には大型の同じ瓦類を葺いて、北西隅と南西隅に特色のある瓦がみられる。

軒丸瓦は6015Aの12点が最も多く、6016が1点、6015Aor6016が10点である。6015Aor6016の多くは6015Aである可能性が高い。軒平瓦は6572Aと6574Bが各10点と多く出土地点に片寄りもみられない。ほかには6572Bと分類のできない6572が各2点で、6574はAが1点、CとDが4点で合わせて5点である。全体としてみても軒平瓦は6572と6574が相半ばしているといえる。平瓦は6561C・Dと6563が多い。6561は軒平瓦6572と6563は軒平瓦6574との組合わせが考えられており[大阪市文化財協会1981]、それらと6015Aが葺かれたことになる。面戸瓦は6970である。

回廊北西出隅からは軒平瓦6572Dの隅瓦が1組と塋面戸6点が出土している。6572Dは2点とも割れた范でつくられており、軒丸瓦6010と共に補修用として使われたことが窺える。

回廊南西隅はほかと同じ回廊の瓦に小型瓦の組合せがある。軒丸瓦は6012が4点、6013が1点で、軒平瓦は6572Fが6点で、鬼板6923が3点のほか鰐尾の小珠文1片である。大極殿院回廊と朝堂院北面回廊とが接合する所であり、大型の組合せと小型の組合せがどのように葺かれていたのか興味もたれる。

閤門と南面回廊所用の瓦 南面回廊の瓦は遺構がほとんど消失していてわからない。閤門の推定地から軒丸瓦は6015Aが1点、軒平瓦は6574Bと6574CorDが各1点いずれも後世層

から出土している。このことから推測すると間門の瓦は大極殿院の他の建物とほぼ同じであろう。

大極殿院所用瓦の特徴 大極殿院の各建物に葺かれた瓦をみてきたが、大極殿・同後殿・回廊には仮に大型とした軒丸瓦6015A・6016・軒平瓦6572A・6572B・6574Bと6574A・C・Dなどとそれに合わせた丸・平瓦や道具瓦が用いられている。大極殿の棟にはより大きな瓦類、鬼板6920、軒丸瓦6017、丸瓦6369、面戸瓦6972などを使用し、小規模な軒廊や回廊南西隅の建物には小型の鬼板6922・6923や軒丸瓦6012、軒平瓦6572F、中型の軒丸瓦6014、6022、軒平瓦6572D・Hが葺かれている。

軒瓦の組合せは一つの建物に複数が見られる。大極殿には軒丸瓦6015A、6016、軒平瓦6572A、6572B、6574Bであり、軒廊では6014、6022、と6572D・Hである。軒先では軒平瓦6572の弧線が2本で6574は3本である位の差は問題にはならなかったのか、あるいは使いわけをしたのかはわからない。しかし回廊については中軸線の東と西とは異なっていたのではなかろうか。北面東回廊では軒丸瓦6016・軒平瓦6574で、北面西回廊から西面回廊は軒丸瓦6015A・軒平瓦6575A・6574Bが多く、回廊東半の調査が極く一部に限られているが、中軸線より東と西では異なっている。このようにみると各建物の軒先が、少なくとも後期難波宮の廃絶した時点では内裏西外郭築地でみるような軒丸瓦6015A・軒平瓦6572Aと同一型式で統一されている状態ではなかったといえよう。

大極殿院から出土した瓦類は軒瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦のどれも型式が多く、そのうち出土数の多いものはこれまでに整理された難波宮瓦の出土数の多いものとはほぼ一致する。大極殿院では重圓文軒丸瓦17型式のうち13型式、軒平瓦18型式中の14型式で、面戸瓦も10種を越える。出土数の多い軒丸瓦はTab.3にある通り6015Aが最も多く、6016・6014・6022・6012と続く。新出の6022を除くと、従来の6012・6016・6014・6015Aの出土数(Tab.7)の多い軒瓦と順位は違わず合致する。軒平瓦でも大極殿院では6572Aが16点で、6574B・6572F・6572H・6574C・Dと多く、これまでの出土例では6573A・6572A・6574B・D・C・6572Dの出土が多い。6573Aを除くと6572Dは大極殿院でも4点出土しているので軒丸瓦と同じといえる。このことは主な軒瓦は大極殿院でも他の地区でも同様で、後期難波宮の中心になる軒瓦であるといえる。軒瓦と組合せてつくる丸・平瓦や道具瓦についても恐らく同様であろう。出土数の少ない型式の瓦は棟瓦のように特殊なものと補修に使われた瓦類が考えられる。

2. 造営時の瓦、補修の瓦

造営時の瓦 後期難波宮は神亀3(726)年10月に従三位式部卿藤原宇合を知造難波宮事に任じて造営にかかり、天平4(732)年9月に石川朝臣牧夫が造難波宮長官となる6年の間に工事は一段落したと考えられる。後期難波宮の重圓文瓦はかつて天平時代以降に比定されていたが、中尾芳治氏は「聖武朝難波宮造営を契機として新たに案出されたデザイン」であるとされており[中尾芳治1972]、神亀3年～天平初年頃に製作されたと考えるのが妥当であろう。しかし、重圓文瓦の全てが後期難波宮造営期のものではなく、補修用として後出のものもあると思われる。

創建時の瓦を出土率の多いものとする見方があるように、後期難波宮の瓦も先述した軒丸瓦6012、6014、6015A、6016、軒平瓦6572A、6572D、6574B、6574C、6574Dは出土数の8%以上を占めており、造営時に製作された軒瓦とみてよいであろう。

瓦の組合せからみても矛盾はないようだ。これまでにわかっている重圓文瓦の組合せは④内裏回廊では軒丸瓦6014と軒平瓦6574で、東面回廊は軒平瓦6574B・Cと平瓦6563が組み合わせとなる。⑤内裏東内郭橋は軒丸瓦6012、軒平瓦6572D、丸瓦6261B・C、平瓦6551B、面戸瓦6976の組合せ、⑥内裏西方外郭築地では軒丸瓦6015A、軒平瓦6572A、丸瓦6161B、平瓦6561C、面戸瓦6970Aがあり、⑦東方官衙は軒丸瓦6016と軒平瓦6574Dである。これらは蓮華文6303と唐草文6664A・Bの組合せと合わせて創建時のものと考えている[大阪市文化財協会1981、八木久榮1989]。

次に出土数・組合せだけでなく別の面からもみていきたい。

軒平瓦の特徴 軒平瓦は弧線の数と形によって6571～6576に分けている。6572は出土数が最も多く148点で重圓文軒平瓦の44%を占め、大きさも大・中・小とあってA～Hに分類できる。出土数が次に多いのは6574で118点(35%)であるが、6574A～Dは大型のみである。6573はAが突出して多いほかB～Cは各々数点で合わせて55点(16.4%)になる。6571と6576はごく少数である。

軒平瓦6572の文様は2本の弧線を両端でつないだ一見簡素なものだが、弧線の太さ・高さ・間隔に配慮があり中央は大きく両脇は小さくし、直立する高い外縁と均衡をとっている。白鳳期の重圓文とは趣を異にするもので、聖武朝難波宮のために案出されたデザインとするのに最もふさわしい。A～Hと大きさに大小あるのは後期難波宮の特徴である建物によって瓦の設計をしているためで、6572は難波宮の最も中心になる軒平瓦である。

軒平瓦6574は両端がつながった2本の弧線の中にもう1本の弧線を配するものである。6572とは弧線の数がちがうだけでなく、6574は弧線の太さ高さが中央から両脇まで同じで間隔も変わらない。大きさは弦幅27~28cmの大型のみである。6574AとBは半円状の弧線に高くて厚い外縁とを対比させているのに対し、6574CとDは外縁と弧線が高さも太さもほぼ同じで文様としては5重弧にみえて、A・BとC・Dとはかなり違った印象を受ける。従って6572と6574は弧線の数だけでなく意匠の根底にも違いがあるのではなからうか。6574B・C・Dは数も多く、C・Dは中軸線より東でBはどの地区でも比較的片寄りに出土している。6574Aの出土数は少ない。文様の中心に「+」があること、凸面に「忒瓦也」と銘書きするものがあり[藤原光輝1956]、6572Aや6015Aと関連が深くしかも特殊な所に使われた可能性がある。軒平瓦6572と6574の製作技法の相異は明らかにされていない。また重圓文瓦の瓦窯と推定される宮の東方に所在する森の宮遺跡からは6572と6574の両者が出土している[森の宮遺跡発掘調査団1972、難波宮址顕彰会1978]。従って軒平瓦6572と6574は意匠の相異はあるが製作は同じ集団で行われたとみるべきで、基本的には創建時生産の軒平瓦であろう。

軒平瓦6573はA~DのうちBが小型である。6573Bの弧線は細く半円形で平行し外縁は低い。1枚作りで色調は褐色を帯び他の瓦とは異なっている。6573AとDは弧線の断面は低い台形であるが、弧線の中央が脇部より厚い所は6572と共通している。6573Cは弧線がAやDに比べて細くてやや高く断面は角のとれた台形状で、瓦当脇より中央がやや大きい。6573の外縁は低く、全体として瓦当文様は平板である。6573A・C・Dは6572、6573Bは6574A・Bの模倣の感がある。6573C・Dの凹面は模骨痕は明らかでなくヘラケズリは四周のみにみられる。Dには布織目痕がある。凸面は縄タキ上にほぼ全面スリ消し、Dは側縁が

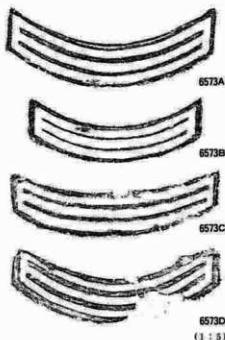


Fig.56 後期難波宮軒平瓦6573拓影

わと側縁を面取りし、Cは側縁との角をケズって丸くしている。以上のような6573C・Dの技法は6572・6574にはみられないものである。出土数も10点以下と少なく、6573Bとも合わせて後出の瓦であろう。6573AはDとよく似ているが上外縁に小さな段がついている。出土数は最も多く特に中軸線より東に片寄っているのと各所から1～2点出土するのが注目される。量的には多く製作されたが主として補修にあてられた軒瓦ではなかろうか。

平瓦についてみると6561はA～Hまで大小があり、6561Cが6572Aの原体でもあるから6572と組合せになり創建時から平瓦とみられる。しかし内裏東内郭櫓では6572Dは6551Bと組合せとなっており、6572型式と組合う平瓦はさらに増えるのであろう。平瓦6563も軒平瓦6574B・Cとの組合わせから6574系で造営時のものといえよう。

後出の軒丸瓦 軒丸瓦は軒平瓦のように弧線の本数や特徴ある形で分類する方法はみつっていない。出土数の多い軒丸瓦6012・6014・6015A・6016は圓線の断面が半円形で、軒平瓦6573と同様に台形状のものは軒丸瓦6010である。半円形に近いが線が太いとか内傾しているのが6008・6009である。これらは主流とは別の一群といえよう。軒丸瓦6011Bと6020は丸瓦の接合技法が6015Aなどとは異なる。主な重圓文軒丸瓦は瓦当裏面に半円形の溝をつけて丸瓦を当て内側の補強粘土も円弧状に仕上げるが、6011Bは内側補強粘土を瓦当裏面から丸瓦部に左右にナデわけ。軒丸瓦6020は圓線は整っているが接合部内側が円弧状ではなく逆U字状である。出土数をみても6011Bが19点とやや多いが、他は数点であることも合わせて6008～6011Bと6020は後出の補修用軒丸瓦であるといえよう。

丸瓦は6161A～Cが平瓦6561と組合せになるが、丸瓦6261B・Cも軒丸瓦6012と組合せになる。中・小型の丸瓦には玉縁や筒部側端の面取りを多用しており、後出の軒瓦と組合せになる瓦の抽出は難しい。

以上のように重圓文系の瓦は出土数の多いもの、組合せがわかるもの、軒平瓦6572・6574とそれに組合せられる瓦類が宮造営時につくられたもので、軒平瓦6573や軒丸瓦6008・6011B・6020は後出補修用瓦といえる。また、造営時に製作された瓦が補修用に使われたり、補修のために同じ范型で焼かれることもあったであろう。回廊北西出隅に使われた軒隅平瓦6572Dは范が割れており、傷みやすい箇所からしてもその可能性が十分ある。

蓮華文・唐草文軒瓦 唐草文軒平瓦6664Bは創建時に廻る瓦だが、大極殿院から出土するものは基本的に補修用に使われたのであろう。蓮華文軒丸瓦6241は大きな中房に1+4+8の珠文、弁端の細い蓮弁、外縁に重圓かとみられる細線など、古式を模倣している。唐草文軒平瓦6673は上外区に杏仁形連珠文、下外区に線鋸齒文があって、退化した中心飾りや

唐草文と合わせて興福寺式の垂流というか模倣をしている。二つの軒瓦6241と6673は蓮華文の間弁と唐草の縁を線で現わすことや、古式のを模倣する共通性があり組合せになるのであろう。蓮華文軒丸瓦は小石敷上から出土しており、奈良時代後半に属する補修用の瓦であろう。

補修の時期 後期難波宮大極殿院の出土瓦の分析結果から考えると大規模な建替えや修理はみられなかったといえる。『続日本紀』にもそのような記載はなく、他から類推するしかない。先ずは天平16(744)年2月「皇都と定める」記事で、翌年9月には平城に遷都するから短期間ではあったが、宮の造営から20年近く経っており、皇都としての体裁を整えるためにも修理・修繕が行われたであろう。つぎに孝謙天皇が「東南新宮に御す」とある天平勝宝8(756)年で、太上天皇(聖武)も同行しており、新宮の造営と元からの難波宮の修理を行った可能性もある。中軸線よりも東部で多く出土し、大極殿院や他の地区でも少しずつ出土する軒平瓦6573A、軒丸瓦6011Bなどをこの時の瓦とするには無理であろうか。可能性としてあげておきたい。一方、『続日本紀』天平勝宝5(753)年9月条によれば「摂津国御津村に南風大いに吹き、盧舎一百十余区を壊損」しているように難波宮でも天災によって修理を必要とすることもあったであろう。しかしこのような記事と出土した瓦とを具体的に関連づける資料は得られていない。

以上、出土した瓦類から大極殿院の各建物所用の瓦を比定し、後期難波宮の創建時につくられた重圏文系瓦類と後出の補修用瓦との分類を試みてきた。書かれていた瓦の数量に対して出土量が非常に少ないことや、年代観の根拠が具体的にないなど問題は残るが一案として提示しておきたい。

後期難波宮の瓦が重圏文系で、重圏文は聖武朝難波宮造営のために案出されたデザインであるという中尾説は、難波宮の主殿である大極殿及び大極殿院所用瓦が重圏文系であることによってより明確であるといえる〔中尾芳治1972〕。そして、難波宮の瓦は軒瓦だけでなく鬼板にも同じ重圏文の意匠で統一し、しかも建物に合わせて瓦類も鬼板、軒瓦、丸・平瓦、面戸瓦と大きさを決めるなど細かいところまで設計をしている。軒平瓦6572の文様にはそれが顕著に表われている。また、難波宮の軒瓦は平城宮と同范がなく、あくまでも難波宮の瓦としてつくられている。このような難波宮の瓦類の特徴は、従三位という高位の藤原宇合を知造難波宮事とすることと合わせて、難波宮造営の意図が表われているとみるべきであろう。

本稿の作成にあたっては都城制研究会の方々、森郁夫氏、前田洋子氏ほか当協会調査員から多くの貴重なご教示を得ることができた。深く感謝の意を表する。

(八木)

註)

- (1) 重圓文軒平瓦の呼称について、『難波宮址の研究』第4 1961年以降‘重圓文’を用いている。弧線の形状によって重弧文・重郭文・重圓文の呼び方がより一般的の中で難波宮の軒平瓦を‘重圓文’とするのは、①白鳳期の重弧文軒平瓦とは文様・製作技法が異なっており明確に区別できる。②6573は重弧文、6572は重郭文、6574は重弧・重郭文と個別で呼ぶよりは総称して‘重圓文’と呼ぶ方がわかりやすい。③重圓文軒平瓦と組合せてつくられた文様である、などの理由によるものである。
- (2) 軒平瓦6014は内裏回廊では大型の軒平瓦6574Bと、軒平瓦6572Dは内裏東内郭では小型の軒平瓦6012と組合わせがみられた。大型は大型とだけでなく大型と中型、中型と小型の組合わせでも言われることがわかる。

参考文献

- 大阪市文化財協会1981、『難波宮址の研究』第7 第V章2節、pp 177～180
- 喜谷美実1965、『難波宮址第13次・14次・15次発掘調査出土遺物』：『難波宮址の研究』第5-2 難波宮址図彰会
- 中尾芳治1972、『重圓文軒平瓦の製作年代と系譜についての覚書』：『難波宮跡研究調査年報1971』 難波宮址図彰会
- 難波宮址図彰会1978、『森の宮遺跡—第3・4次調査報告—』第V章3節
- 藤原光輝1956、『法円坂町の考古学的調査(続)』：『難波宮址の研究』第1
- 森の宮遺跡発掘調査団1972、『森の宮遺跡—第1・2次調査報告—』
- 八木久栄1972、『難波宮の瓦について』：『難波宮跡研究調査年報1971』
- * 1989、『難波宮の軒瓦についての覚書』：『郵政考古紀要』XIV 大阪・郵政考古学会

第5節 後期難波宮大極殿の建物ほか二・三の問題

澤 村 仁

後期難波宮の大極殿については、すでに復原図も公表されている。しかしこのような復原となる根拠、残る問題はないか、など、論ずべき点はまだ多い。発掘報告が公にされる機会にこれらの問題点をあげ、疑問点やいくつかの仮説を述べてみたい。

1. 建築時期の問題

(1) 平城宮との関係

後期難波宮については、神亀3年(726)から知造難波宮事藤原宇合の指導下に造営され、これが天平4年(732)にはかなりの完成をみて、造難波宮長官は石川牧夫に交替し、さらに造営を続けて天平6年(734)に難波京の宅地が班給された。その後天平16年(744)には都が恭仁京から難波に移された、とされている。

したがって、現在知られる宮殿中心部の配置は神亀年間の計画によるとされる。これが、いわゆる平城宮第二次朝堂院や内裏の配置と同じ原則で、やや小型、簡略なものとなっているのは、天武朝以来の副都という性格から、平城宮の配置にならい、これを簡略にしたもの、と解釈されてきた(本報告第V章第3節参照)。

ところが、近年の平城宮に関する報告では、平城宮の第二次朝堂院を、恭仁京・難波京から平城に還都した天平17年以降のこととしている。これは前述の仮説と矛盾することは本文にも述べられている通りである。

そこで、議論としては三つの途がある。一つは、平城宮での新説を尊重し、難波宮についての年代帳も残して、難波宮が先に建設され、第二次平城宮は難波宮を本格的かつ大規模に改めた計画を用いた、とするものである。本報告書でもそのような仮説によって議論が展開されている。

その二は平城京の新造説を信じ、難波宮はこれにならってこれ以後の建設とする考え方である。続日本紀にはその後の難波宮大造営は記載されないが、孝謙天皇が天平勝宝8年(756)に難波宮を使用しているので、その頃とでも想像するわけである。

その三はあくまで旧説を信頼し、平城宮第二次朝堂院の建設を聖武天皇の即位した神亀年間とし、難波宮はこれよりやや遅れて同じ意匠でやや小規模に造営された、とするものである。

この場合、平城宮の第二次朝堂院の創建時期を神亀年間とすることで、第二次朝堂院大極殿院回廊の出土の土器の時期や使用瓦の形式などと矛盾する問題が起こる。ただし、例えば第二次朝堂院には改築のあとが、1955(昭和30)年の第一次発掘などでも認められており、これは天平宝字5年(761)頃の平城宮大改造との関連も考えられる。すると、時期の遅れる土器や瓦は改造の時にいった可能性が考えられる。

なお、この改造では朝集堂を撤去、唐招提寺に移築して講堂とされている(註1)。

本書では第一の説をとっているが、第三説の可能性も否定できないであろう。第二説は難波宮の後期大極殿造営が遅かったとすると、造営以前にどうなっていたのか、説明がつかない。天平16年に遷都されたとき、なにもないところに都が移って来たのか、ということになる。前期難波宮を神亀年間の造営とでもしないかぎり、成立困難であろう。

(2) 遺構自体のもつ問題点

以上は配置計画と造営時期、平城宮との関係からおこる疑問であるが、難波宮後期大極殿遺構自体のもつ問題がある。

第三章第3節にも述べられているように、大極殿の基壇の築成は一気になされたものではなく、最初、やや小型で築成層の粗い壇Aが築かれ西南隅にのみ残り、次いでAの一方と周辺の下層を削り成型するように、やや細かい築成層による壇Bが造成され、さらにこれを北方に拡張するように北方約2.5mの線上で地山を削り出して最終的な基壇輪郭を設定し、先に築いた土積みBとこの地山削り出し輪郭との間に粗い土積みCを行って基壇土積を完成させている。さらにこの基壇回りに凝灰岩石材による壇正積化粧が行われ、周囲に小石敷が行われる。なお土積みBの周囲には化粧の痕跡は見られない。土積みCの下には、前期遺構の地表面と見られる小石敷が残り、表面に焼土の碎片が散布している。土積みBはこの小石敷を東西一直線に切込み破壊するとともに下層に若干の小石と焼土片を混入している。そこで、土積みBは前身遺跡の火災後の建設であることがわかる。ところが土積みAは下に小石敷も焼土片もその混入も見られない。これは後から作られた土積みBの築成時には小石敷や焼土層があったのに、なぜか先に作られたA築成の際にはなかったのか、またはA自体が火災で失われた建物の基壇の一部であった可能性を示している。

したがって、後期大極殿は単純に聖武朝に計画造営されたものではなく、何らかの前身遺跡を利用したか、或いは計画変更があったとみられる。その場合、前身遺跡はなんであったか、前期難波宮の建物か、或いは存在した筈なのに遺構の検出されない前期と後期の間、持統～元正間の記録にみられる難波宮の一部なのか、単純に聖武朝造営時の計画変更なの

か、断定しにくい。ただし、聖武朝造営の際の計画変更としても、基壇土積Aの下に前期の小石敷がないことは、ここに何らかの建物があった可能性を示している。この土積Aは調査中から存在が知られていたが、後期基壇の残存部を破壊しないと調査できないので、後世の掘乱墳の断面からしか見られず、範囲や性格について詳細な資料が得られなかったのである。やむをえない調査の限界であった。

2. 大極殿基壇の技術的問題

基壇化粧は2個所に地覆石を残しているので、東石を用いない、初期的な壇正積基壇であったこと、地覆石の断面寸法からみて、最大級の格式を持つものであったことが想定できる。

すなわち、地覆石として、奥行約60cm・厚さ30cmというのは東大寺南大門の創建期の地覆石の断面・厚さ30.7cm・奥行約41cm(註2)より大きく、東大寺大仏殿の現状葛石の寸法、厚さ33.5cm・奥行60cm(註3)に近い。

ただし、使用技法としてはやや予想と違う点があった。すなわち、この大型の地覆石は前面上方角を化粧のしゃくり面(奥行9.4cm、深さ6cm)で欠取り、後上部を羽目石仕口(奥行22cm、深さ7.5cm)に欠取って凸字形断面に作ることは8世紀の地覆石として普通であるが、地覆石上面には羽目石前部下端の当たり跡がみえ、これによると、羽目石前面は仕口端より8cm北外にずれて立てられていた。そのため、巨大な地覆石を用いながら、化粧として羽目石より外に見える地覆石上面幅は29～30cmほどになっていた。

地覆石の周囲に一段低く延石があったかどうか、寺院の主要建物跡では壇正積基壇には地覆石の周囲に延石が回る例は多い。難波宮大極殿でも地覆石と周囲の小石敷の間が約20cmほど空いている。第13次発掘の際にはこの空き間に延石が入るかと推定したが、全周が出て見ると、ここに凝灰岩の痕跡が見られるところはなく、輪郭にもやや乱れて不正確なところがあり、延石の抜取り跡ではなく、地覆石を抜くための掘形とみられるようになった。すなわち、この大極殿の壇正積基壇は延石を使わない、地覆石のみ用いるタイプと考えられる。

また、この大極殿北側基壇地覆石と北面軒廊地覆石の取り付け方は単なる突付けではなく、大極殿地覆石のほうに軒廊地覆石を大入れにする仕口を設けている。

すなわち、大極殿北側基壇の残存していた個所に後殿とつなぐ軒廊の西側地覆石の入る仕口を切込んでいる。これは大極殿地覆石の二石にわたって設けられており、残存してい

る地覆石の東から二番目のものの東北端が南北16cm、東西9cm切欠かれ、東隣の地覆石は前面をこの切欠きに合わせ、南北幅の狭い石を使用し、上面に軒廊基壇羽目石の収まる切込みを作っている。すなわち、軒廊地覆石の西端の収まりから30.0cmのところから、東西幅12cm、南北奥行15cmほど、深さ・西面で7.8cm、東面で5.4cmと、羽目石の外面を深く収める溝をつくっている。この溝の突止まりはちょうど大極殿地覆石上面にみられる羽目石前面の当たり位置と一致する。

すなわち、軒廊地覆石は大極殿地覆石に16cm食込み、羽目石はさらに15cmほど大極殿地覆石に食込んで、大極殿羽目石に突当たる収まりとなる(Fig.57)。

入り隅に東石を使用しないので、このような収まりが必要となったのであろう。

これで見ると、第13次発掘で検出し、全面調査でも露出した大極殿北面東階段東入り隅のL字型地覆石は階段耳石が大入れとなって取付く切込み部分が残存していたことになるのであろうか。南北全長56cmほどというのは北面地覆石の奥行きに近く、西北の出張り13cmほどというのは軒廊地覆石を収める切込み深さに近い。また、北上角のしゃくり面は単純に地覆石の化粧と考えていたが、こうなると、この場所には階段耳石が取付くので化粧のしゃくり面は意味が

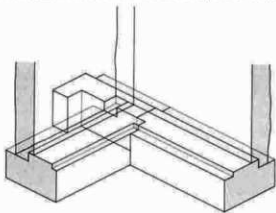


Fig.57 大極殿(右)・軒廊(左)入隅基壇復元図

ない。或いは階段の脇羽目石が取付く仕口なのであろうか。とすると階段脇羽目石の厚さはこの切欠き長さの25cmほどあったのであろうか。階段耳石自体は残っていないが、耳石の抜き跡は痕跡のきれいなところで幅60cm近いので、羽目石幅として可能性はあろう。

3. 大極殿の規模と使用尺度

大極殿の規模については、従来から遺跡による測定寸法があったが、これが造営当時の何尺に当たるか、については必ずしも厳密ではなかった。この点について吟味してみたい。周囲の状況は大方攪乱された地覆石の抜き跡によっていて、厳密な測定にはやや適当ではない点がある。また、柱間寸法も概略の推定を用いることも多かった。

もう少し細かく推定できないであろうか。

やや精密に痕跡を吟味できる部分として、南北両面の階段の抜き跡がある。階段は南面では東・中央・西の3箇所、北面では東・西の2箇所がみられる。いずれも耳石の抜き取り痕跡と周囲の小石敷、ならびに階段の芯であった土積み残存部からなっている。ただし階段痕跡は5箇所ともかなりの攪乱があり、どこが痕跡として生きているか、それぞれに吟味してみる必要がある。また、これらの階段の耳石はほぼ建築の柱筋上にあることも、7世紀後期から実際の建築や保存度の良い遺跡から知られている。特に中央の格式の高い建築ほどこのような決まりはよく守られているようである。

後期難波宮大極殿では南北両面の階段跡から、桁行中央間は15尺、東西階段の正面柱間は13.5尺とみられ、東西面の階段跡から、渠行最南端の間は11尺と考えられている。もう少し丁寧にみると南面の東西階段中心間距離は24.65m、北面の東西階段中心間距離は24.75mとわずかに違う。これはいずれも中央間+左右両脇2間ずつ+東西階段の柱間1間、計6間分の柱間寸法と等しくなる筈である。実物の建築でも少々の誤差はあるので、平均で24.7mとすると柱間をどのくらいに推定できるだろうか。中央間15尺、階段正面は13.5尺であろうから、あいだの2間をどうみるか、14尺か、13.5尺か、中央間の左右脇を14尺、次も14尺とすると6間で84.5尺となる。これが24.7mなら1尺の実寸法は29.23cmとなり、やや短かすぎる。この各2間が13.5尺ずつなら6間で82.5尺、1尺は29.93cmで長い。したがって中央間の両脇を14尺、次を13.5尺とすれば合計83.5尺、復原1尺は29.58cm(0.976尺)となり、8世紀前期の尺度として適当である。したがって、基壇全長、奥行もこの尺度で検討する必要がある。

大極殿本体の基壇東西面地覆石による外面間距離は抜き取り跡から41.71mと測定されている。これを1尺を29.58cmとすると、141.007尺となる。したがって地覆石外面間が完数に計画されたのなら、大極殿東西全長は141尺となり、南北は地覆石抜き取り跡の外面間距離が21.16mなので71.535尺つまり71.5尺と計画されたのであろう。余りの数値0.035尺は実寸法で1cmほどなので、痕跡からの推定には無視できる(Fig.58)。

ただし、地覆石外面間距離が完数に計画されたというのは、一つの仮定で、実例をみると奈良時代の大安寺中門遺跡では、地覆石外面間ではなく、羽目石用仕口切欠き間が100尺と50尺の完数に計画されたようにみえる。この大極殿の場合、地覆石外面間で東西全長が完数に一致するので、これをとってよいのではなかろうか。

すると建物本体は桁行9間で西から11尺・13.5尺・13.5尺・14尺・15尺・14尺・

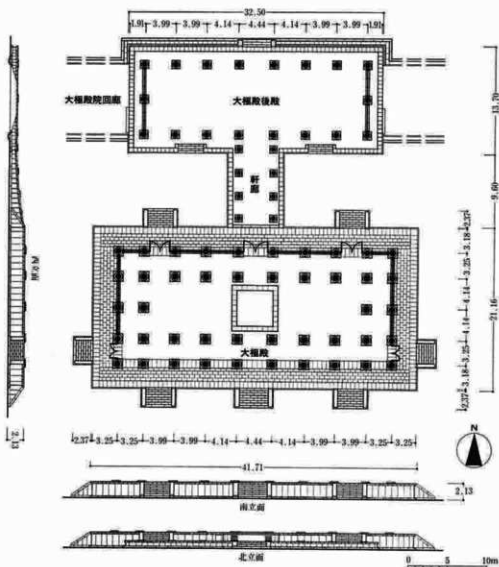


Fig.58 後期難波宮大極殿・同後殿復元(平面図)

13.5 尺・13.5 尺・11 尺、全長合計 119 尺、東西の基壇の出は 11 尺ずつとなろう。

南北梁行は 4 間で 11 尺・14 尺・14 尺・11 尺、合計 50 尺・基壇の出は 10.75 尺ずつであろうか。

これは長岡宮大極殿跡とも著しい相違はなく、出土瓦とともに難波宮から長岡宮への大極殿の移築を裏付けしている。

4. 大極殿後殿の問題

大極殿の後殿は軒廊によって大極殿北面と連結し、左右妻には大極殿院回廊が取り付けられている。第13次発掘で東妻と東回廊取り付け部が検出され、さらに全面発掘によって全貌が明らかになった。すなわち、周囲は南側は壇正積基壇、北面は壇正積基壇の外周に雨落溝をめぐる。基壇規模は東西32.5m、南北13.7mとされる。これは当時の尺では109.87尺と46.3尺となり、おそらく110尺と46.5尺であろうか。

一方、長岡宮では周囲の小石敷の残存形から基壇規模が推定され、柱礎石下の地業跡から柱位置が推定されている。規模としては基壇東西31.2m、南北13.5m。建物については桁行7間で98尺、梁行2間で28尺とされている(註4)。

これはいずれも遺跡からの推定寸法であるが、難波宮後殿の基壇に長岡宮後殿の建物を乗せると、東西の基壇の出が6尺ずつということになり、これは可能ではあるが、妻としてはやや長すぎる感がある。また、長岡宮後殿の梁行と難波宮基壇の差は18.5尺で軒出は9.5尺ほどとなり、切妻建物としてやや大きい。斗拱に手先が必要であろう。また、長岡の建物には厳重な柱基礎があるが、難波の後殿には柱の基礎は残っていない。これらからみて、後殿はあるいは難波と長岡とで、移築ではなく別の構造体だったかと思わせる。難波宮後殿は単層でやや平面が大きく、長岡宮後殿は平面がやや小さく、重層であったかもしれない。これらを考慮して、難波宮後殿の推定復原に桁行7間の案と9間の案がつくられたのである。これは今のところ、どちらとも決め手がない。しばらくは疑問とせざるを得ない。

なお、後殿の階段は大極殿のように周囲の小石敷に凸型の輪郭跡を残さず、周囲は南面は地覆石、北面は雨落溝を地覆石の外に回らす痕跡だけであった。調査途中で観察したところでは、基壇痕跡の南北縁辺の一部にわずかに凹部があり、ごくわずかに凝灰岩粉末がみられた。ただし、このような微妙な痕跡は調査中の雨や乾燥で失われ、実測図にも写真にも記録されなかった。おそらく、基壇に切込んだ階段があったものと推定して復原図を作成した。

これは「年中行事絵巻」などの大極殿周囲の図に軒廊の基壇に切込んだ階段が描かれていることから想像したのであるが、後に平城宮の後殿が発掘されると、実際にそのように切込んだ階段痕跡が発見され、難波宮でもあり得たとみられる。

5. 大極殿建物の構造復原

奈良時代に建立された単層で寄棟造りの主要建物という点、現在みられる代表的建物としては、奈良唐招提寺金堂が、まず想像される。しかし、大極殿としてはそれでよいであろうか。

奈良時代の日本が手本とした唐では、同時代の建築は大型のものは一例しか残っていない。すなわち山西省五台の仏光寺大殿(857)で、これは復原される外観などは唐招提寺金堂と類似しているが、主体構造には違いがある(Fig.59)。

すなわち、唐招提寺金堂では身舎柱が高く、庇柱が低い構造で、庇柱上の繋ぎ梁が身舎柱の上端近くに納刺しとなる。ところが仏光寺大殿では身舎柱と庇柱は同高で、庇柱上の組物が身舎柱上にかかる。このような構造は遼・金時代の主要建物にも見られ、建築群中の主要なものに用いられたらしい。

宋代に編集された『營造法式』(李誠・1103)によると、公式建築の主体構造には、格式により「殿堂」「厅堂」などの段階があり、「殿堂」では身舎と庇の柱が同高で、「厅堂」の場合に庇に低い柱を使う。我が国でも、法隆寺金堂では重層であるが、初層の柱は身舎と庇を同じ高さとし、中世の復興堂であるが単層の興福寺東金堂も同様な柱高構成をもつ(註5)(Fig.60)。

文献で知られる奈良時代の大寺では、興福寺の中金堂で、中央柱間は16尺なのに記録(『興福寺流記』)によると高は23尺5寸と

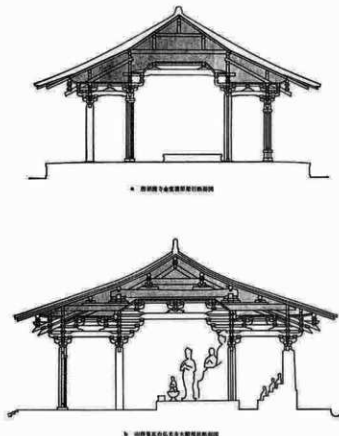


Fig.59 唐招提寺金堂の断面(上)と五台仏光寺大殿の断面(下)

し、薬師寺金堂では中央柱間が12.5尺なのに醍醐寺本「諸寺縁起集」では金堂の高は19尺5寸という。これらの文献上の「高」はいずれも柱高として理解されている。

ところで現在知られている奈良時代仏堂では正面柱高は中央柱間とほぼ等しいものが多い

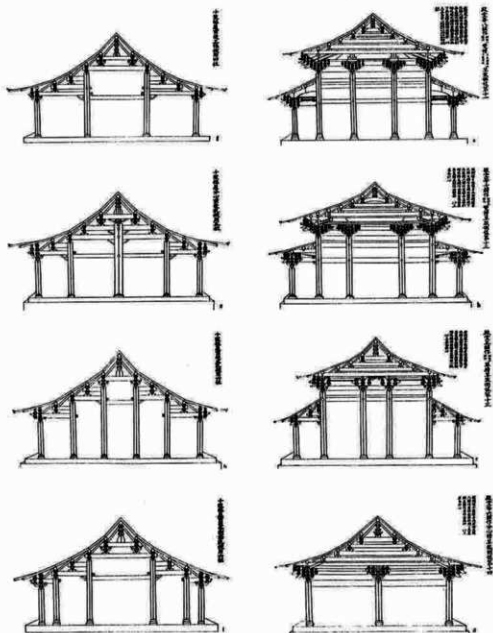


Fig.60 「营造方式」にみられる殿堂(右)と序堂(左)の構造

い。ただし、裳層があれば、裳層柱高が中央柱間に近く、板床があると、床上の柱高が柱間に近い場合と柱全高が柱間に近い場合があるようである。

すなわち、興福寺、薬師寺いずれも金堂は重層と記録され、その柱高は中央柱間よりかなり高い。特に興福寺の場合、付属仏堂である東金堂に身舎と庇の柱高が等しい「殿堂」形式の構造が残されている。これで見ると寺院金堂でも大寺では殿堂式構造があったのでは

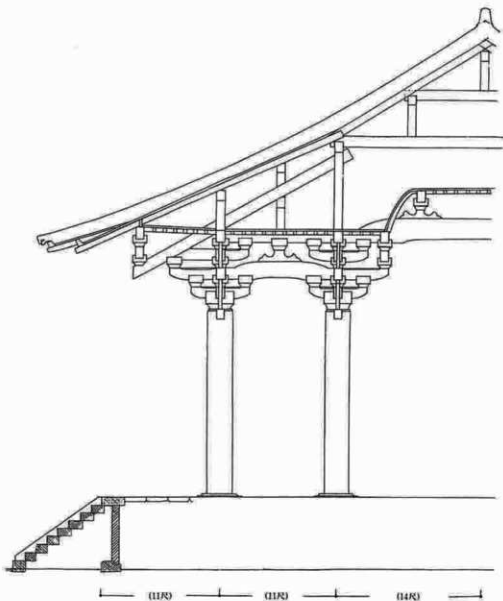
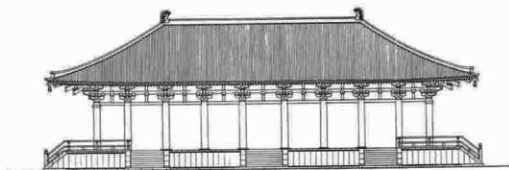


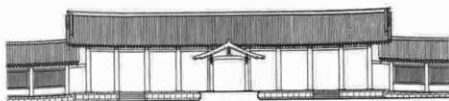
Fig.61 後期難波宮大極殿復元断面図

なかろうか。すると、宮殿建築で最も格式の高い大極殿の場合は庁堂形式ではなく、殿堂形式の構造であるべきではなかろうか。

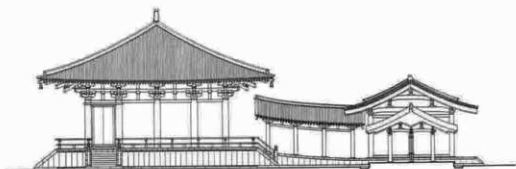
具体的には、大極殿の場合、中央柱間15尺より、組物一段分高いと想定すると約3尺強高い柱高、すなわちほぼ19尺の柱高と推定できる。すると柱径はその八分の一前後、約2.



大極殿正面図



大極殿後殿立面図



大極殿・大極殿後殿側面図

0 1 2 3 4 5 10m

Fig.62 後期難波宮大極殿・同後殿復元想定図（『季刊大林No31特集 難波宮』株式会社大林組、1989年）

3尺強であろうか。

この規模と格式ならびに基壇の出が11尺あることと考え合わせ、組物には三手先斗拱を用いたと推定させる。

基壇高さは階段の出が約2.4mあるので、階段の踏み面が基壇地覆石の有効見かけと同じ1尺、一段の高さは地覆石の高さ1尺より小石敷の厚さを引いた約8寸とすると、階段の段数は9段あるので、全高7尺2寸(2.13m)ほどとなる(Fig.61)。

資料としては鵝尾の破片が出土している。調査開始時に難波宮跡の存在を確信させた記念の遺物であるが、表面に文様彫刻の剥がれた痕跡があり、平安宮のものと同様、唐草文様が鱗近くの胴部にあったことがわかる。文様の一部も出土している。

また、遺跡周囲から特に直径の大きい軒丸瓦が出土しており、鳥衾や隅軒丸瓦に特別な大型瓦を使用していたことが推定できる(Fig.62)。

平面としては『年中行事絵巻』にみられるような前面吹放し、周囲三方壁、ただし背面中央と階段前を扉で開く。屋根は絵巻物と違って寄棟造りとする。平安京の大極殿も当初は寄棟造りであった、との伝があったようである(註6)。

内部は組入れ天井とする。中央に高御座があるべきであるが、省略した。

以上のような資料から基礎的な考察はできるので、これに若干の意匠を考慮してつくられたのが「難波宮」(澤村仁監修 大林組発行 1989)に掲載された図面である。

(さわむら まさし；九州芸術工科大学名誉教授・愛知みずほ大学教授)

(註)

- (1) 『唐招提寺講堂』：『日本建築史基礎資料集成4 仏堂1』中央公論美術出版 1981 他
- (2) 『東大寺南大門史并昭和修理要録』昭和5年・東大寺南大門修理工事事務所
- (3) 『国宝東大寺金堂(大仏殿)修理工事報告書』昭和55年・奈良県文化財保存事務所
- (4) 福山敏男『長岡京と宮城の遺構』：『仏教芸術』51、1963、毎日新聞社
- (5) 澤村仁『仏堂概説』：『日本建築史基礎資料集成4 仏堂1』中央公論美術出版 1986
- (6) 『左経記』長元元年七月十二日

引用・参考文献

- 網 伸也 1992、「後期難波宮と古代寺院」：『古代』第93号
- 伊藤 純 1991、「スタンプのある土器三例」：『葦火』34号 p.8 大阪市文化財協会
- 植本 久 1986、「難波宮朝堂院地下に切石積階基」：『葦火』2号 大阪市文化財協会
- 1991、「大和への玄関—難波津」：『新版古代の日本』6 角川書店
- 江浦 洋 1994、「海をわたった新羅の土器—土器からみた古代日羅交流の考古学的研究—」：荒木敏夫編『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5 名著出版 pp.233-259
- 岡田茂弘 1961、「難波宮址第10・11次発掘調査出土遺物」：『難波宮址の研究』第4
- 大阪市教育委員会1967、「難波宮跡第23次(緊急)・第25次調査概報」：『昭和41年度(第23(緊急)第25次)難波宮跡調査報告書』
- 1969、「昭和43年度(第31次・第32次・第33次)難波宮跡調査報告書』
- 1970、「昭和44年度(第34次・第35次・第36次)難波宮跡報告書』
- 1971、「昭和45年度(第37次・第38次)難波宮跡報告書』
- 1972、「昭和46年度(第39次・第40次)難波宮跡報告書』
- 1978、「史跡 難波宮跡—環境整備事業概要—」
- 1984、「史跡 難波宮跡—環境整備事業中間報告—」
- 1987、「史跡 難波宮跡—環境整備事業報告(4)—」
- 大阪市文化財協会1981、「難波宮址の研究」第7
- 1984、「難波宮址の研究」第8 pp. 116~119
- 1986、「葦火」2号
- 喜谷美宣 1965、「難波宮址第13次・14次・15次発掘調査出土遺物」：『難波宮址の研究』第5-2
- 1970、「難波宮址第16・17・18・21・31次発掘調査出土遺物」：『難波宮址の研究』第6
- 京嶋 覚 1989、「難波地域の土師器とその地域色」：『韓式系土器研究』Ⅱ pp.12-22 韓式系土器研究会
- 1994、「『難波宮下層』土器の再検討」：『大阪市文化財論集』, pp.193-216 大阪市文化財協会
- 澤村 仁 1961、「難波宮址第10次・第11次・第12次発掘調査報告、附第13次発掘調査略報(大極殿跡発見通報)」：『難波宮址の研究』第4 難波宮址顕彰会・難波宮址研究会
- 1964、「難波宮址第13次・14次・15次発掘調査報告」：『難波宮址の研究』第5-1 難波宮址顕彰会・難波宮址研究会
- 1966、「難波宮址第22次(緊急)発掘調査概報」：『難波宮址の研究』中間報告Ⅲ 難波宮址顕彰会
- 直木孝次郎1965、「難波宮址保護運動の経過」：『難波宮址の研究』第5-2 難波宮址顕彰会・難波宮址研究会
- 中尾芳治 1970、「難波宮址第16・17・18・21・31次発掘調査報告」：『難波宮址の研究』第6 難波宮址顕彰会・難波宮址研究会
- 1972、「前期難波宮をめぐる諸問題」：『考古学雑誌』58-1

- 1981、「前期難波宮の遺構」：『難波宮の研究』第7 大阪市文化財協会
- 1986、『難波京』 ニューサイエンス社
- 難波宮址顕彰会1972、「第39次発掘調査概報」：『難波宮跡研究調査年報 1971』
- 1973、「第37次補足調査概報」：『難波宮跡研究調査年報 1972』
- 奈良国立文化財研究所1978、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ
- 1985、「石神道跡第4次調査」：『飛鳥・藤原宮調査概報』15 pp.55-67?
- 藤沢一夫 1965、「四天王寺出土の古代屋瓦」：『仏教芸術』56
- 1967、「古瓦類」：『四天王寺』文化財保護委員会
- 藤原光輝 1960、「難波宮址第8次・第9次発掘調査報告」：『難波宮址の研究』第3 難波宮址研究会
- 南 秀雄 1992、「難波宮下層遺跡の土器と集落」：『難波宮址の研究』第9 pp.320-339 大阪市文化財協会
- 八木久榮 1973、「大極殿出土の新型軒瓦二点」：『難波宮跡研究調査年報 1972』 難波宮址顕彰会

あ と が き

後期難波宮大極殿院地域の調査報告が、四半世紀を経てようやく刊行されることになった。当時、難波宮の中心部を発掘調査によって明らかにし、保存整備を行うのであるから、調査に参加する者はみな意欲的であった。調査毎に得られる成果によって遺構表示の計画も立てられた。研究者にも注目され、また市民の難波宮に対する関心も高まって見学者も多く、説明や資料づくりなどの普及活動も盛んに行い、現在の歴史ブームには及ばないが、現場に熱気があったように思う。

しかし、今資料を見直すと、宮の遺構保存が大原則であるために整地層や下層の遺構についての調査が不十分なことはしかたないとしても、現在の水準からすると未熟なところもあり残念である。やはり報告書はやく刊行すべきであると痛感している。

遺物・資料整理から報告書作成には、発掘を担当された中尾芳治氏、長山雅一氏と共に進めることができた。そして、直木孝次郎先生、澤村仁先生には調査の頃と同様にご指導を賜ることができた。心よりお礼を申し上げる次第である。また、報告書の完成には本協会調査員・職員、補助員の協力が大きかったことも記しておきたい。

ご支援くださった多くの方々に改めて感謝の意を表したい。本書が新しい歴史公園づくりの基本資料となれば幸いである。(八木久栄)

第33～37・39次発掘調査参加者

山根徳太郎(難波宮址顕彰会専門委員、文学博士)

中尾芳治、八木久栄(大阪市立博物館)

吉本堯俊(～仏教大学)、長山雅一、宮本郁雄、中川信作、吉光佐知子、村上保二(難波宮址顕彰会)

林紀昭(京都大学大学院～滋賀大学)、山崎道治、庵丁道明、木原克司(大阪市立大学大学院)、

大地敬三、黒沢陽一、渡辺徹、長谷川幸一、清水泰明、吉岡敏幸、中村善則、福田計子、小松幸子、

柳沢やよい、松坂隆広、荻野雄二、広瀬義見、吉長明子、島田隆司、梅北幸義、川口隆子、金藤まり、

山田秀成、松本孝子、辻裕美、米田信子、後藤容子、岩本篤子、原久子、高嶋俊二、田村康生、

清田誠二、中口敬一(大阪市立大学)、井守徳男、松岡崇介(立命館大学)、岡本一士、清原いつ子、

仲田恵美子、竜野静世、小林貴美恵、高辻佐知子、中村とし子(龍谷大学)、近藤進(国学院大学)、

八木下好子(大阪教育大学)、福田裕(近畿大学)、北山惇(大阪経済大学)、岡田務、栗山修二、

岡部俊介、東雲均、花田光子、足立卓雄、巽朋子(関西学院大学)、上谷貴子(同志社女子大学)、

久保博子(京都女子大学)、萬本圭石、河本良一、河本健二(河内歴史研究会)。

奈良商業高等学校考古学部

第33～37・39次遺物・資料整理、報告書作成参加者

池田仁美、井上由美子、今西真由美、鍵伸時子、金村史子、河田裕司、木村勇、木下衛、坂上理恵子、

坂本歌子、酒向淑子、末金広子、岡志代、妹尾優子、曾木康代、田中美千代、近清路子、

竹田久仁子、福山たまえ、藤原照美、松浦江津子、三浦多美子、養部重紀子、八木慶子、吉田信子

索引

索引は、遺構・遺物・建物に関するもの、地名・遺跡名など、人名・官職・その他に分けて収録した。

<遺構・遺物・建物に関するもの>

い 入母屋造	162,164	前期大極殿相当建物	34,39,43,45,90
板蓋宮伝承地宮跡Ⅲ-B期遺構			
	131,136,137,140,142	そ 礎石建物	17,18,23,24,28,80,161,162
え 縁束	152	た 大安殿	141,142,144,145,146,167
お 鬼板	12,13,40,43,54,97,110,111,175, 176,177,178,179,183	太極宮	151
か 外安殿	142,143	大極殿開門	143,146,160,162,164
外門	143	大極殿門	135,143,145,150,156,157
仮設庇(土庇)	162	大門	131
唐草文	5,43,97,107,175,180,182,183	内裏後殿	16,133,141,142,145,151
唐草文軒平瓦	28,107,117,182	内裏前殿	15,16,27,45,133,135,136,140,141, 142,145,146,151
瓦(6225-6663型式)	165,173	内裏大殿	133,141
き 基壇化粧	11,12,13,14,15,17,18,39,42,72,75, 77,115,159,161,162,163,187	太政官院	146,147,170,171,172
宮城門	143,171	太政官の(之)庭	147,170
宮門	143,155	壇正積基壇	17,40,42,72,75,76,77,115,159, 161,162,163,165,167,187,191
凝灰岩地覆石	39,40,42,47,72,75,159,163	壇正積化粧	186
切妻造	162,164	単層	175,191,192
さ 西宮	169	ち 中庭	132,133,154,155
し 四天王寺式軒九瓦	50	中門	143,189
鰐尾	54,97,110,178,196	朝集堂	186
紫門	132,133,135,154,155	朝集堂院	171,172,173
重圓文軒平瓦	87,180,184	朝庭	150,154,155,156,157
重圓文軒九瓦	28,87,91,97,99,100,101,175,179, 182,184	庁堂	192,195
重層	191,192,194	朝堂院南門	135,149,150,151,153,166,171
新羅土器	94	つ 東石	187,188
す 須恵器	11,16,19,36,38,46,58,59,87,93,97, 125,127,163,165	て 殿堂	192,194,195
朱雀門・「朱雀門」	149,151,153	と 東宮	169
隅平瓦	97,113	土鍾	129
せ 正寝	154	土壇A	42,70,186
		土壇B	42,70
		土壇C	42,70
		土積みB	186
		土積みC	186
		土庇	65,162

な 内安殿	142	へ 平安宮迄天門	171
内門	143	平城宮第二次大極殿院	77,141,161,164,167,174
長岡宮大極殿	34,169,190	ほ 掘立柱建物	5, 9, 26,145,167,170
長岡宮大極殿院	163,164,168,169	む 棟瓦	108,109,176,177,179
難波宮中外門	171	め 面戸瓦	87,97,111,112,113,176,177,178, 179,180,183
南庭	154,156,157	も 木製基壇	68,69,152,153
ぬ 布石	42,75,159	裳	194
の 軒支柱	65,152	裳階	65,152
軒隅平瓦	18,104,105,106,177,182	よ 寄棟造	164,175,192,196
軒平瓦	12,54,97,102,105,106,107,110, 175,176,177,178,179,180,181, 182,183,184	り 竜尾壇	164
軒丸瓦	97,99,100,101,106,107,109,117, 130,175,176,177,178,179,180, 182,183,184,196	両儀殿	151
延石	42,75,159,187	れ 蓮華文	97,175,180,182,183
は 土師器	46,58,59,87,93,96,97,125,127,163	蓮華文軒丸瓦	102,130,178,182,183
羽目石	40,42,75,77,115,116,163,187,188, 189		
ひ 東長殿	22,27,67		

＜地名・遺跡名など＞

難波宮跡		板蓋宮	131,132,136,140,147,148
第8次調査	20,25,26,27,66,67,102	板蓋宮伝承地宮跡	131,136,142
第10次調査	27,67	え エビノコ郭	136,137,138,140,141,142,143, 155
第11次調査	20,22,67,91	お 大坂城跡下層	94
第13次調査	1, 2, 8, 9, 11,12,13,15,18,19,34,36, 39,43,45,48,62,65,75,79,85,90,97, 116,184,187,188,191	大津宮	131,136
第15次調査	2,20,48,51,53,54,84,97,111,117, 184	小郡宮	131,132,133,135,136,137,147, 150,154,158
第17次調査	2, 8, 20,24,27,97,158	小懸田宮	131,133,135,136,137,147,151
第42次調査	29,69	き 浄御原宮	131,136,137,138,140,141,142, 155
あ 飛鳥	131,137,144,147,148,155	く 恭仁京	185
飛鳥宮上層遺跡	155		
い 石神遺跡	94		

藤仁宮	131,165,173	ふ 藤原宮	131,135,136,137,140,141,142, 143,144,145,150,151,156, 164,167
こ 興福寺	107,183,192,194	藤原京	94
し 四天王寺	102,130	仏光寺	192
ち 長安	168	へ 平安宮	131,144,146,164,173,196
長安城	150	平安京	174,196
と 唐招提寺	186,192	平城宮	1,5,23,34,77,131,143,144,145, 146,148,149,156,159,160, 163,164,165,166,167,169,171, 173,174,175,183,185,186,191
東市新宮	183	平城宮跡	1,14,173
鳥取寺	87	平城京	144,148,167,172,185
な 長岡宮	75,131,159,160,165,168,169,170, 171,172,173,190,191	ほ 法隆寺	192
長岡宮跡	173,174	や 薬師寺	40,193,194
長岡京	17,172,173,174	ら 洛陽	168
七尾瓦窯	107		
難波長柄意駒宮	6,46,95,149,154,167,168		
難波宮下府遺跡	29,41,45,46,54,55,58,59,83, 89,90,91,125		
の 後岡本宮	136		

<人名・官職・その他>

あ 荒田井直比羅夫	154	聖武天皇	5,143,167,168,185
い 石川牧夫	180,185	壬申の乱	137
乙巳の変	132	す 推古朝	135,136
き 浄御原令	140,141	推古天皇	131
こ 孝謙天皇	183,185	せ 摂津職大夫	172
孝徳朝	6,135,136,140,141,147,149,155, 156,168	そ 造宮卿	145,146,167
孝徳天皇	131	造長岡宮使	169,171
さ 三朝制	151,157	造難波宮長官	180,185
し 教有儀礼	150,151	蘇我入鹿	131,132
首都	145,172,173	蘇我倉山田石川麻呂	132
持作大匠	154	た 大化改新	133,135,147
聖武朝	1,5,6,8,20,24,30,34,40,43,47,48, 51,52,91,180,183,186,187	大宝令	138,140,143
		大射	155,156
		大尺	62,151,157

ち 知造難波宮事	5, 145, 167, 168, 180, 183, 185	藤原宇合	5, 145, 167, 168, 180, 183, 185
て 天武天皇	5, 131, 136, 137, 140, 147, 155	藤原種継	171, 172
天武朝	5, 6, 8, 20, 30, 34, 69, 136, 137, 138, 140, 141, 149, 167, 168, 185	藤原武智麻呂	145
と 唐制	151	ま 万葉集	168
な 中大兄皇子	132, 136	も 類	154, 156, 157
は 白雉	132, 133, 135, 150, 154, 156	よ 養老令	143
ふ 複都制	165, 167, 168, 171	り 令集解	143
副都(陪都)	140, 145, 165, 166, 167, 168, 171, 172, 185		

**The Excavation Report
of
the Naniwa Palace Site**

**(The Historical Investigation of
the Forbidden City of Naniwa: Volume X)**

A Report of Excavations
undertaken at the
Audience Hall Compound of the Latter Naniwa Palace
between 1969 and 1973
in Osaka, Japan.

September 1995

Osaka City Cultural Properties Association

Note

The following symbols are used to represent archaeological features in this text;

SA: Palisade or Fence	SB: Building	SC: Corridor	SD: Ditch
SK: Pit	SS: Small Pit	SX: Unidentified, Other	SZ: Post Hole

Feature Numbers

1~20	Former Naniwa Palace	mid to late 7th century
21~40	Latter Naniwa Palace	8th century
41~60	Prior to Former Palace	6th - early 7th centuries
61~80	Medieval and Early-Modern	
81~99	Unknown and others	

Contents

Foreword

Explanatory notes

I. Project background	1
1. Excavation and preservation of the Naniwa Palace site	1
2. Excavation of the Latter <i>Daigokuden'in</i> (Audience Hall Compound)	2
3. The beginnings of the Naniwa Palace project	2
4. Nomenclature of the Former and Latter Naniwa Palaces	5
II. Progress and outline of research	7
1. 33rd and 34th investigations	8
1. Purpose of research	8
2. Principles of research	8
3. Progress of research	9
4. Outline of features	16
(i) Former Naniwa Palace	16
(ii) Latter Naniwa Palace	17
(iii) Others	19
2. 35th investigation	20
1. Purpose of research	20
2. Progress of research	20
3. Outline of features	26
(i) Former Naniwa Palace	26
(ii) Northern corridor of Latter Naniwa Palace, western extension	27
(iii) Others	29
3. 36th investigation	30
1. Purpose of research	30
2. Progress of research	30
3. Outline of features	31
(i) Former Naniwa Palace	31
(ii) Latter Naniwa Palace	32
(iii) Others	33
4. 37th investigation	34
1. Purpose of research	34
2. Progress of research	34
3. Outline of features	42
(i) <i>Daigokuden</i> (Audience Hall) of the Latter Naniwa Palace	42
(ii) Verifying the nonexistence of a <i>Daigokuden</i> at the	

Former Naniwa Palace	43
(iii) Others	45
5. 37th investigation, supplementary	47
1. Purpose of research	47
2. Results of research	47
6. 39th investigation	48
1. Purpose of research	48
2. Progress of research	48
3. Outline of features	53
(i) <i>Daigokuden</i> Forecourt	53
(ii) South gate and southern corridor of the <i>Daigokuden'in</i>	53
(iii) Others	54
III. Features	55
1. Stratigraphy	55
1. 37th investigation	55
2. Stratigraphy of the <i>Daigokuden'in</i>	58
2. Archaeological features of the Former Naniwa Palace	62
1. South Gate of the <i>Dairi</i> (Imperial Residential Compound)	62
2. Southern Corridor of the <i>Dairi</i>	65
(i) Southern corridor, eastern extension	65
(ii) Southern corridor, western extension	66
3. Western Corridor	66
4. Western building of the <i>Dairi</i>	67
5. Eastern corridor of the Western Octagonal Complex	67
6. Northern corridor of the Western Octagonal Complex	68
7. Southern corridor of the Western Octagonal Complex	68
3. Features of the Latter Naniwa Palace	70
1. <i>Daigokuden</i>	70
2. Connecting corridor	76
3. Rear building of the <i>Daigokuden</i>	76
4. Northern corridor of the <i>Daigokuden'in</i>	79
(i) Eastern extension	79
(ii) Western extension	80
5. Western corridor of the <i>Daigokuden'in</i>	85
6. South gate and the southern corridor of the <i>Daigokuden'in</i>	87
7. Others	88
4. Palace site prior to the construction of <i>Naniwa-no-Miya</i> (6th - early 7th century)	89
5. Other features	91

IV. Artefacts	93
1. Former Naniwa Palace	93
1. Pottery	93
2. Roof tiles and bricks	95
(i) Roof tiles	95
(ii) Bricks	95
2. Latter Naniwa Palace	96
1. Pottery	96
2. Roof tiles and bricks	97
(i) Round eaves tiles	97
(ii) Flat eaves tiles	102
(iii) Round and flat tiles	108
(iv) Other roof tiles	110
(v) Bricks	114
3. Tuff	115
3. Prior to the Palace	125
1. Pottery	125
2. Roof tiles	130
3. Others	130
V. Discussion	131
1. The Birth of the Naniwa Palace <i>Daigokuden</i> . Dr. Kojiro Naoki	131
Introduction	
1. <i>Daigokuden</i> from <i>Owarida-no-Miya</i> to the Former Naniwa Palace.	131
2. The political situation during the reign of Tenmu, and the structure of <i>Asuka-Kiyomihara-no-Miya</i>	136
3. The political situation during the reign of Jito, and the <i>Daigokuden</i> of Fujiwara Palace.	140
4. The Relationship between the <i>Daigokuden</i> of the Latter Naniwa, and Heijo Palaces	143
Appendix: <i>Dajokan'in</i> or <i>Chodo'in</i> : A Review of Nomenclature	146
2. The South Gate of the Former Naniwa Palace's <i>Dairi</i> . Prof. Masakazu Nagayama	149
1. Issues	150
2. Layout of the Former Naniwa Palace	151
3. The Small Post Holes of the Former Naniwa Palace	151
4. The Scale and Structure of the <i>Dairi</i> South Gate	152
5. The Function and Role of the <i>Dairi</i> South Gate	153
3. The Scale and Structure of the Latter Naniwa Palace <i>Daigokuden'in</i> . Prof. Yoshiharu Nakao	159
Introduction	
1. The Scale and Structure of the Latter Naniwa Palace <i>Daigokuden'in</i> ...	159

2. Features of the secondary <i>Daigokuden'in</i> of Heijo Palace	161
3. Features of the Nagaoka Palace <i>Daigokuden'in</i>	163
4. The comparison between the <i>Daigokuden'in</i> of the Latter Naniwa Palace and the secondary <i>Daigokuden'in</i> of Heijo Palace.	164
5. The comparison between the <i>Daigokuden'in</i> of the Latter Naniwa and Nagaoka Palaces.	168
4. Roof Tiles of the Latter Naniwa Palace <i>Daigokuden'in</i> . Ms. Hisae Yagi	175
1. Roof Tiles of the Latter Naniwa Palace <i>Daigokuden'in</i>	175
2. Roof Tiles at the time of construction, and later restoration of the Palace	180
5. Several Issues on the Buildings of the Latter Naniwa Palace <i>Daigokuden</i> , and Others. Dr. Masashi Sawamura	185
1. Issues on the time of Construction	185
(i) In Relation to the Heijo Palace	185
(ii) Issues concerning the features of the <i>Daigokuden</i>	186
2. Technical issues concerning the <i>Daigokuden</i> Platform	187
3. The scale and the standard unit of the <i>Daigokuden</i>	188
4. Issues concerning the Rear Building of the <i>Daigokuden</i>	191
5. Reconstruction of the <i>Daigokuden</i>	192

References

Postscript

Index

English Table of Contents and Summary

Contents

Site Background

Excavation Results: The Former Naniwa Palace

Discussion

Excavation Results: The Latter Naniwa Palace

Discussion

References

Reference Card

Figures

Colour Plates

Plates

ENGLISH SUMMARY

SITE BACKGROUND

Excavations began at the Naniwa Palace (難波宮: *Naniwa-no-Miya*) site in 1954, after the discovery of a Nara period roofing tile in the previous year. Subsequent investigations revealed the existence of two palaces at the site; one constructed on the ruins of the other. These have since been identified as two of ancient Japan's earliest palaces. In 1964, the *Dairi* (内裏: Imperial Residence) and the *Daigokuden'in* (大極殿院: Audience Hall Compound) were registered as National Historical Monuments, the total area of which was 17,500 m². Between March 1969 and February 1973, the Osaka City Government carried out excavations in the *Daigokuden'in* of the latter palace and *Dairi* of the former palace. A total of 5,603 m² was investigated to further clarify the features of the site and to gather information as to how the site might best be utilized for the general public. These Site Investigations, No.s 33-37 and 39, will be discussed in this report (Illus. 2; Fig. 3; Tab. 1).

EXCAVATION RESULTS: The Former Naniwa Palace

The remains of the large *Dairi* south gate (SB3301) was discovered (Pls. 1-9; Illus. 4; Fig. 22). The gate ran east-west and measured 32.68 m in length and 12.26 m in width. The excavation also served to clarify the appearance of the surrounding walls. The western extension of the southern wall (SC3304), was a double corridor, running from the south gate and connecting to the western wall (SC3501) (Pls. 21-24; Illus. 4, 5), which laid approximately 57 m west of the central axis of the Palace. The western wall was also a double corridor, and served both as the western wall of the *Dairi*, and to separate the *Dairi* and Octagonal Complex.

The long, north-south running building (SB1101), located in the southwestern corner of the *Dairi*, was found to have originally been a 16 by 2 bay structure, which had been rebuilt as a smaller, 11 by 2 bay structure (SB1102) (Pl. 25; Fig. 22).

All of the buildings of the former Palace were found to be *hottatebashira* (structures with main support piles imbedded directly in the ground) in style. Early 7th century pottery was unearthed from the Naniwa Palace site and from the strata directly below the Palace (Pls. 72, 73).

DISCUSSION

From the excavation results and documentary evidence (*Nihonshoki* [日本書紀]), this structure was identified as "*Naniwa Nagara Toyosaki-no-Miya*", the capital established by Emperor Kotoku (孝德) after the Taika Reform. Construction of the Palace commenced in AD 645 and occupation began in AD 652. The Palace functioned as both the capital and the Imperial residence until its destruction by fire during the reign of Emperor Tenmu (天武) in AD 686.

This palace was substantially larger than previous structures.

EXCAVATION RESULTS: The Latter Naniwa Palace

Excavations revealed several differences between the two palaces. The posts of the *Daigokuden* (大極殿: Audience Hall) (SB1321) were placed onto foundation stones and the structure was constructed on a raised stone platform (Pls. 34~35, 46, 59, 60; Illus. 7). The platform ran east-west, measuring 41.7 m in length and 21.2 m in width, and featured three stairways in front, two in the rear and one on both the east and west sides. The *Daigokuden* was joined to a smaller structure (SB1326) (Pls. 5~7, 16, 18; Illus. 4), laying immediately to the north, by a covered corridor (SC3321) (Pls. 2-1, 3-2, 42). This rear building was connected to the eastern and western extensions of the northern enclosing wall (SC1323 and SC3324) (Pls. 23; Illus. 4, 5). Although disturbances in the local strata had destroyed the remains of the *Daigokuden'in* gate, the scale of the enclosure could be determined as 101.05 m east to west, and 77.95 m north to south (Pls. 21, 22; Illus. 3). The remains of the forecourt indicated extensive pebble-stone paving.

DISCUSSION

The construction of the latter Palace began during the reign of Emperor Shomu (聖武) in AD 726 on the ruins of the previous palace, and was occupied until ca. AD 784. It operated primarily as a sub-capital of the Heijo Palace-Capital (平城宮), though it was briefly used as the main capital again in AD 744.

The palace was constructed utilizing a layout (Fig. 54, 55) and several architectural features which originated, in Japan, with this structure. This is most notably visible with the fore and rear buildings of the *Daigokuden'in* and with the joining of the rear building to the northern corridor of the enclosure's wall. The use of concentric roof-tiles also originates with this palace.

One of the major differences between the two palaces can be seen in their layout. In the latter palace, the *Dairi* and *Daigokuden'in* are completely separate compounds. The former palace featured no *Daigokuden*, and instead, combined the Imperial residence and an Audience Hall (a prototype *Daigokuden*) in the *Dairi*. The two structures were separated by a small wall, but were adjoined by a corridor, within the same compound. The difference in the layout of the two palaces may indicate a change in the political system between the two periods.

References

Yamane, T., Editor

1956-1970

The Reports of Historical Investigation of the Forbidden City of Naniwa, Vols I-VI. Historical Research Association for the Site of the Forbidden City of Naniwa in Osaka City University and Naniwa-

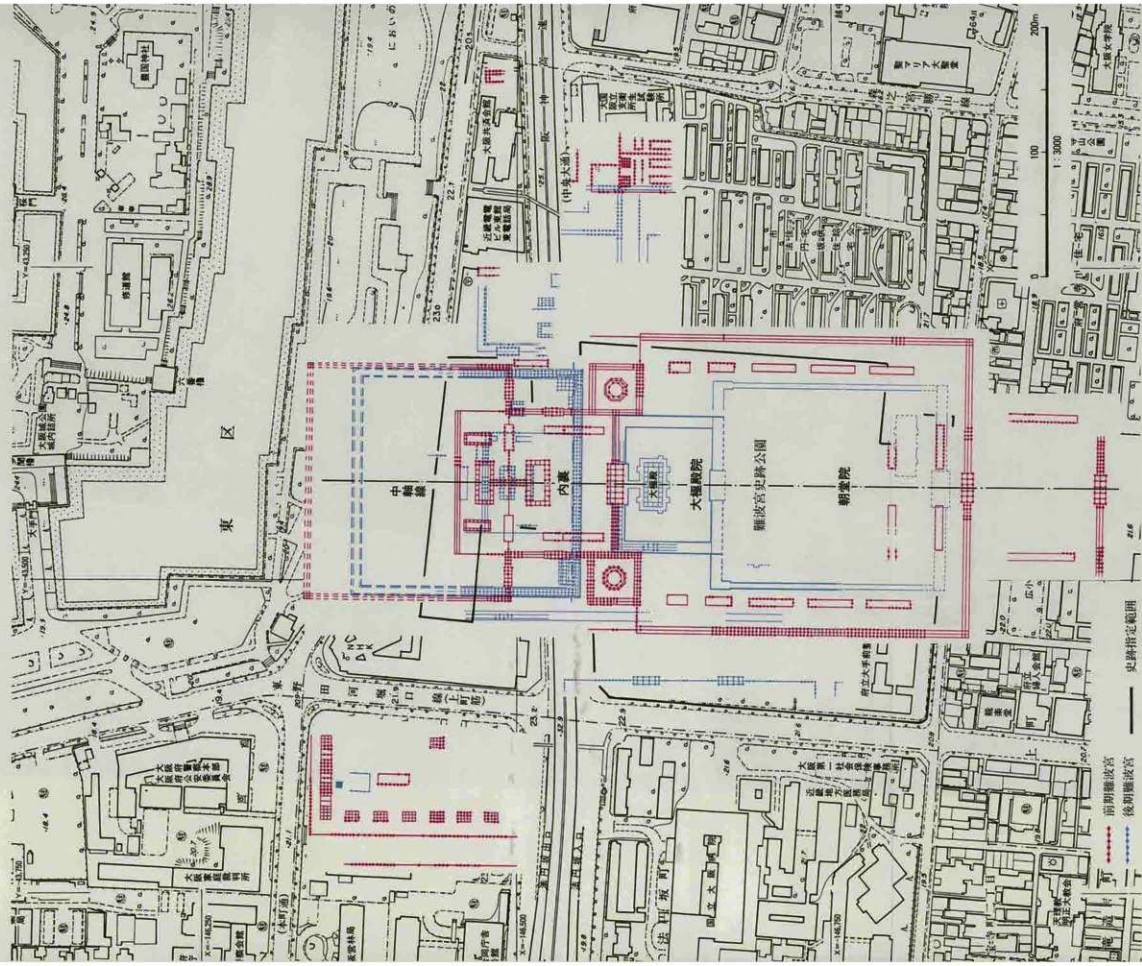
- no-miya Commemorative Society in Osaka City Educational Committee, Osaka.
- Nakao, Y., Editor
1981 & 1984 *The Reports of Historical Investigation of the Forbidden City of Naniwa*, Vols VII-VIII. Osaka City Cultural Properties Association, Osaka
- Yagi, H., Editor
1992 *The Excavation Report of the Naniwa Palace Site: The Historical Investigation of the Forbidden City of Naniwa*, Vol. IX. Osaka City Cultural Properties Association, Osaka
- Kaneko, H., Editor
1993 *Nara Imperial Palace Site Excavation Report: Investigation into the Second Imperial Audience Hall Compound*, Vol. XIV. Nara Cultural Properties Research Institute (Nabuken), Nara.
- Nakao, Y.
1995 *A Study of the Naniwa Palace Site*. Yoshikawa Kobunkan, Tokyo.
- Pearson, R. J., G. L. Barnes and K. L. Hutterer, Editors
1986 *Windows on the Japanese Past: Studies in Archaeology and Prehistory*. Centre for Japanese Studies, University of Michigan, Ann Arbor.
- Tsuboi, K., Editor
1987 *Recent Archaeological Discoveries in Japan*. UNESCO, Paris and Centre for East Asian Culture Studies, Tokyo.

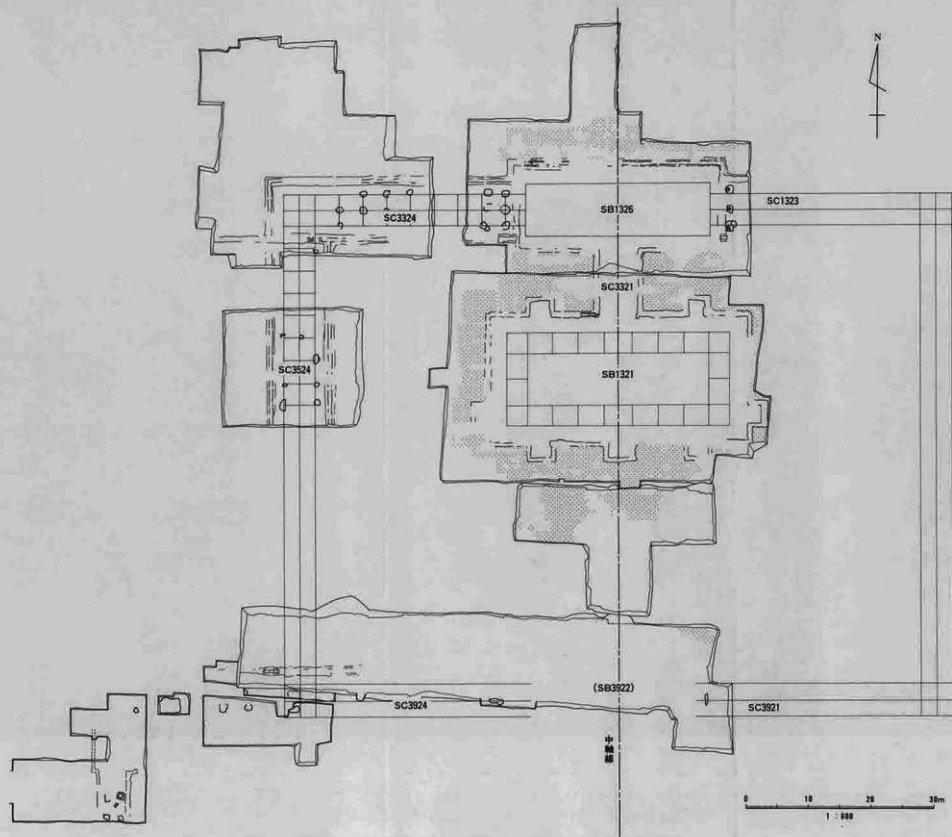
報告書抄録

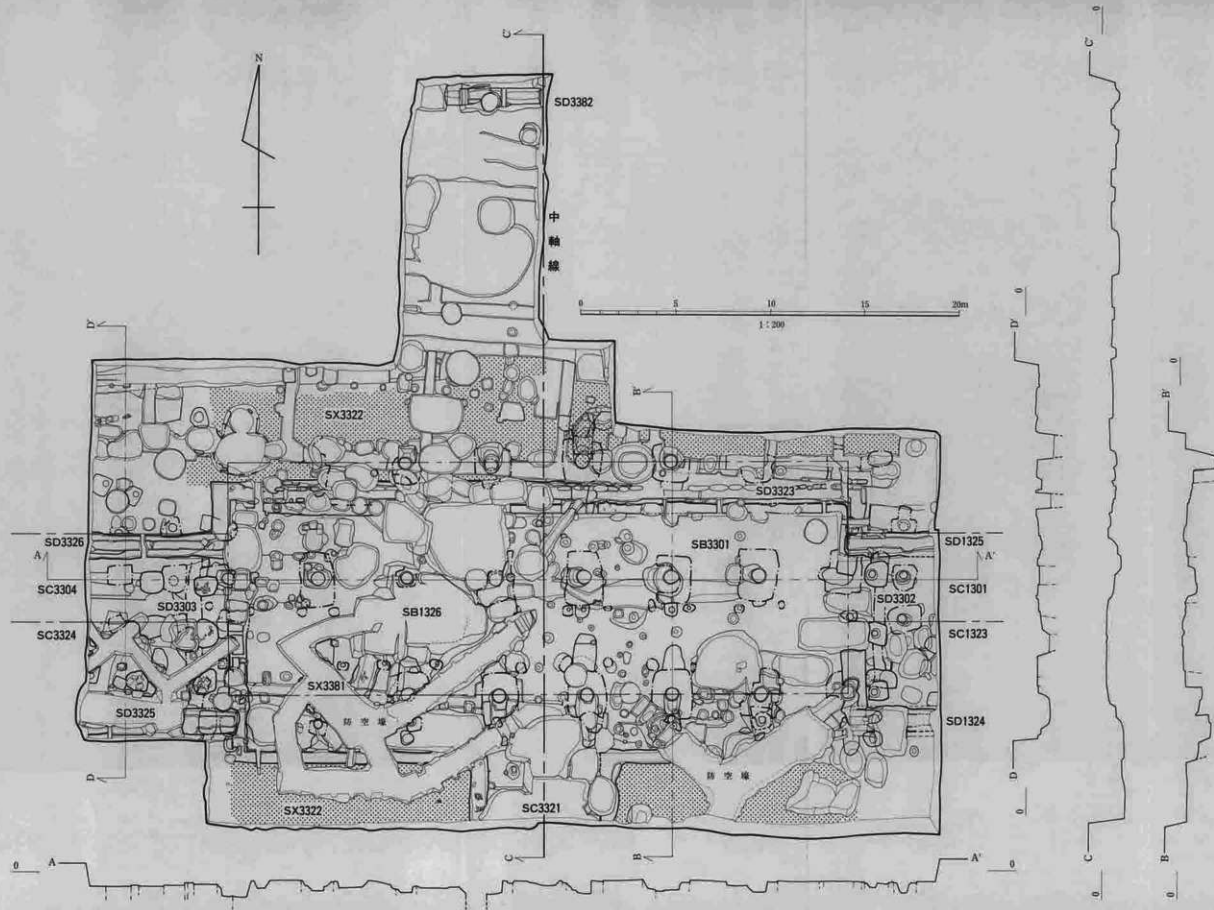
ふりがな	なにわきゅうしゆけんきゅう だい10						
書名	難波宮址の研究 第10						
副書名	後期難波宮大極殿院地域の調査						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	八木久栄・中尾芳治・長山雅一・佐藤隆・直木孝次郎・澤村仁						
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会						
所在地	〒540 大阪市中央区法円坂1丁目1-35 Tel 06-943-6833						
発行年月日	西暦 1995年 9月 30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なにわきゅうしゆけん 難波宮跡	大阪府大阪市 ちゅうく区ちゅうくほうぎんぎやう 中央区法円坂1丁目	27128 — 					

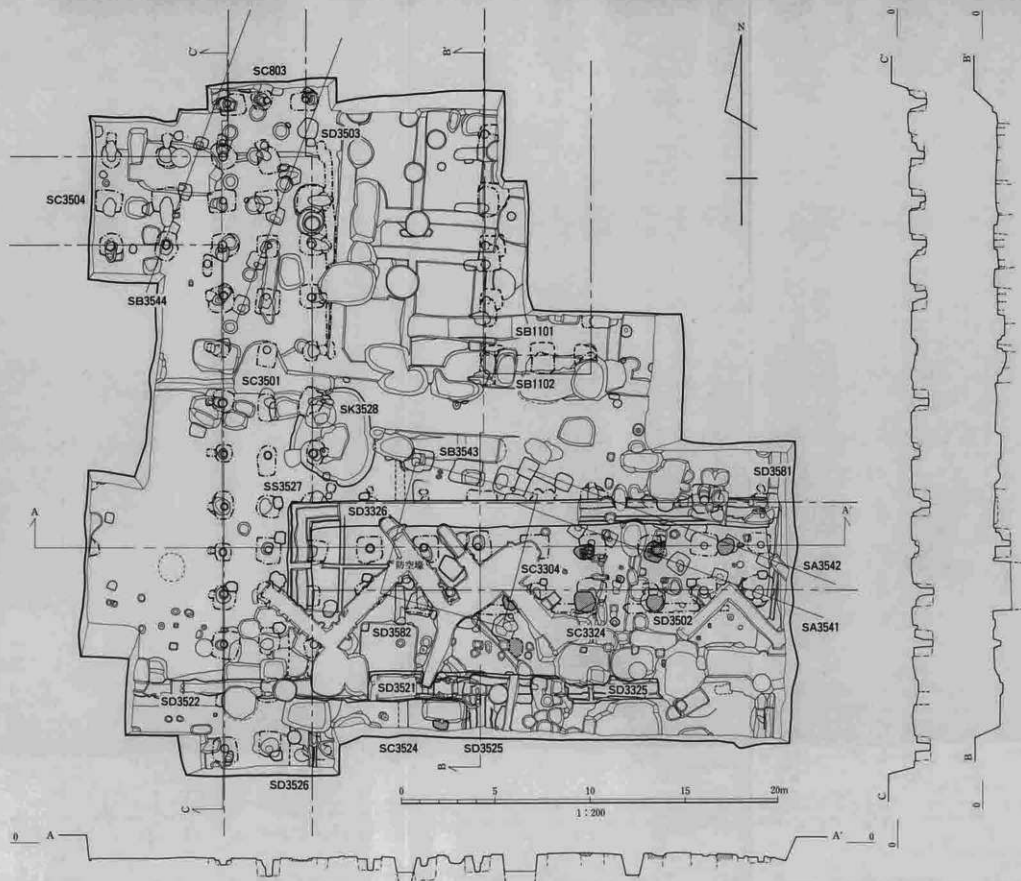
圖 面

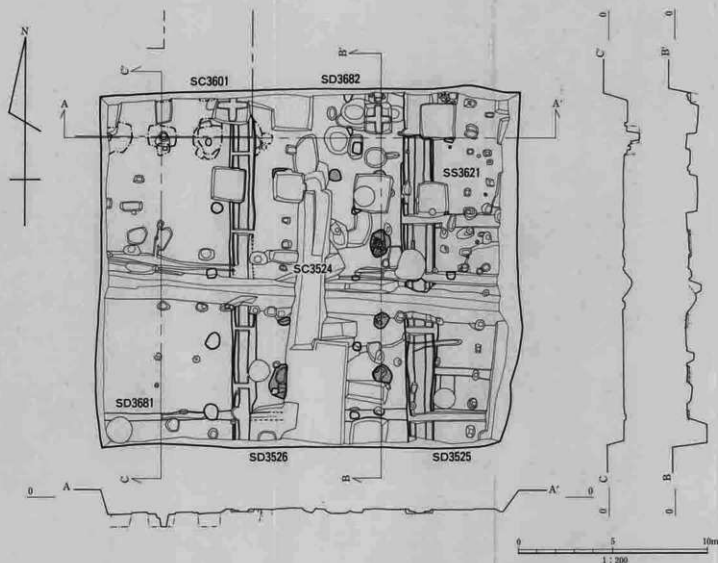
図面一 前期・後期難波宮内裏・朝堂院構造配置図

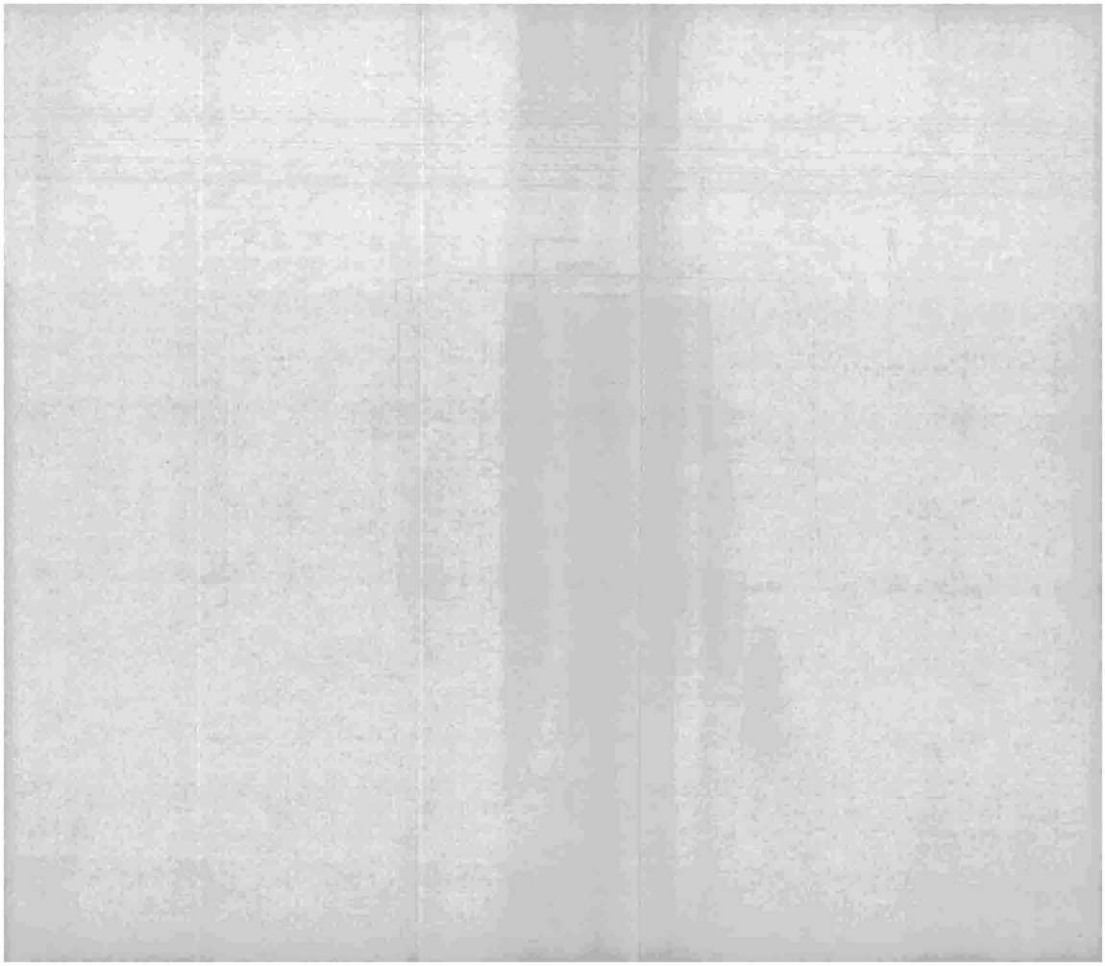


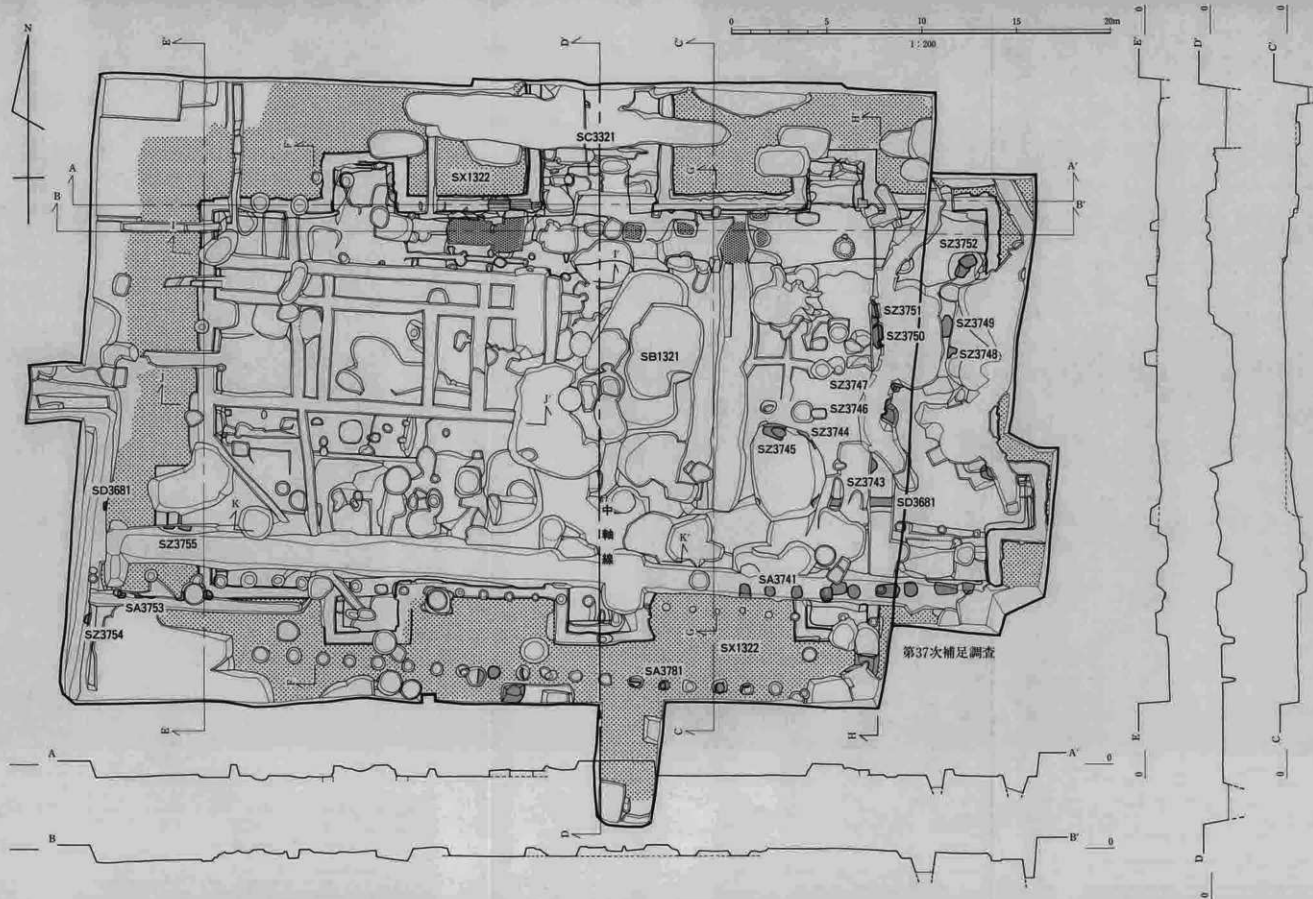


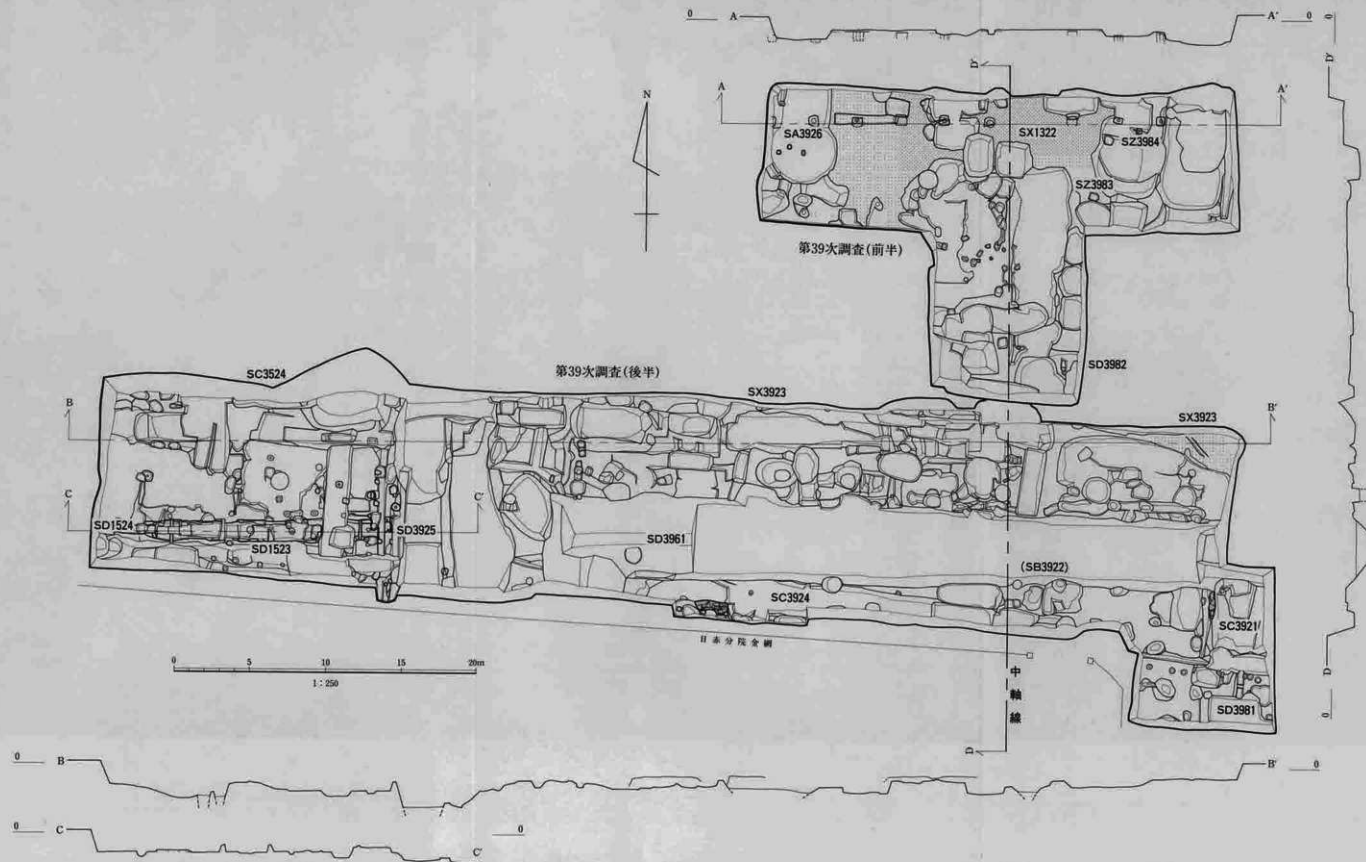


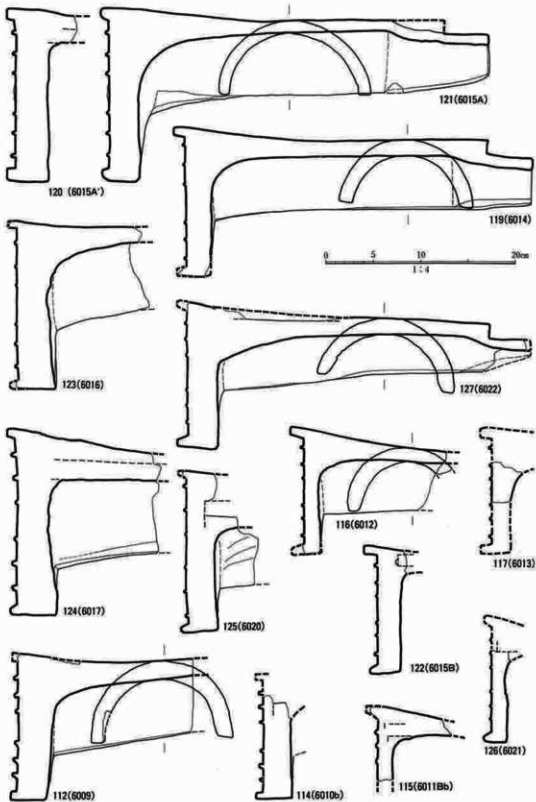


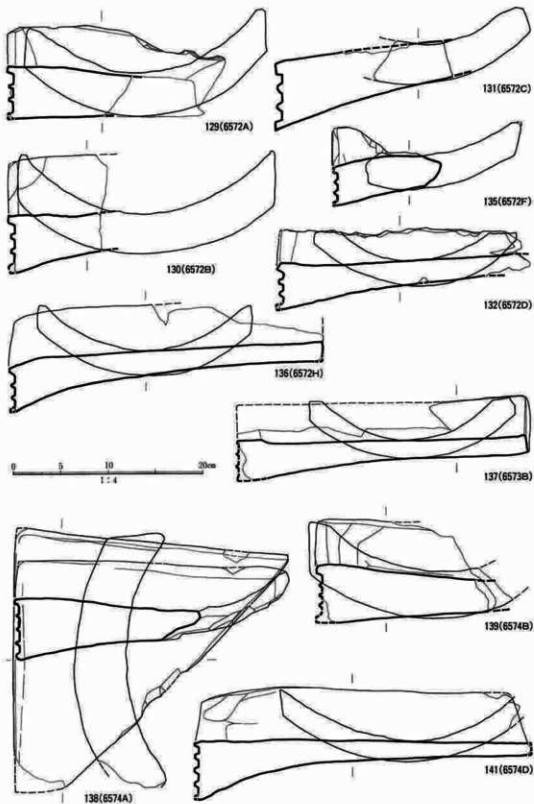


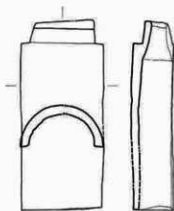




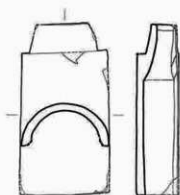




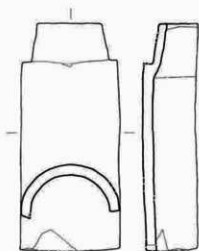




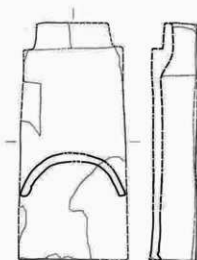
145(6262B)



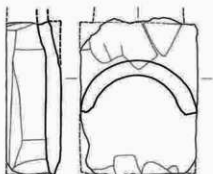
146(6361)



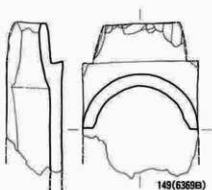
144(6161B)



147(6362)

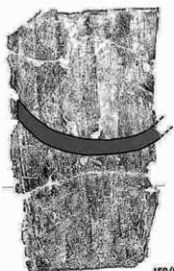


148(6369A)



149(6369B)

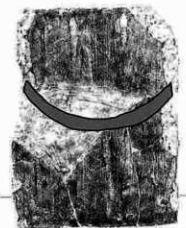




150 (6561A)

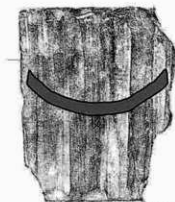


151 (6561C)



152 (6561D)

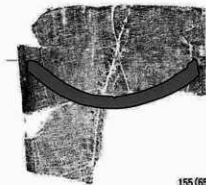




153 (6561G)

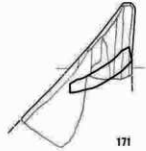
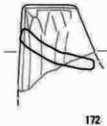
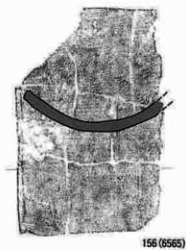


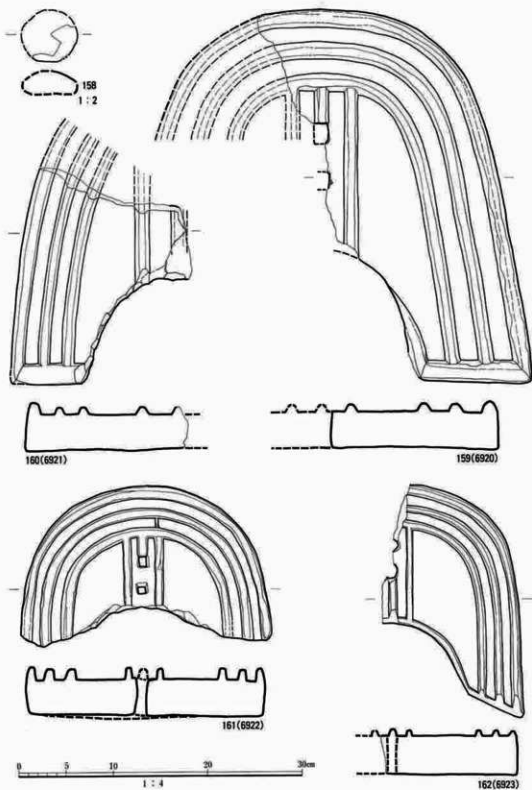
154 (6561H)

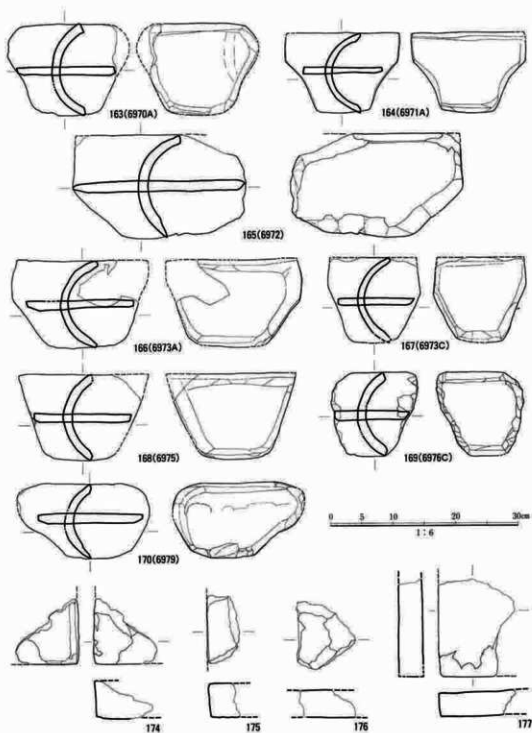


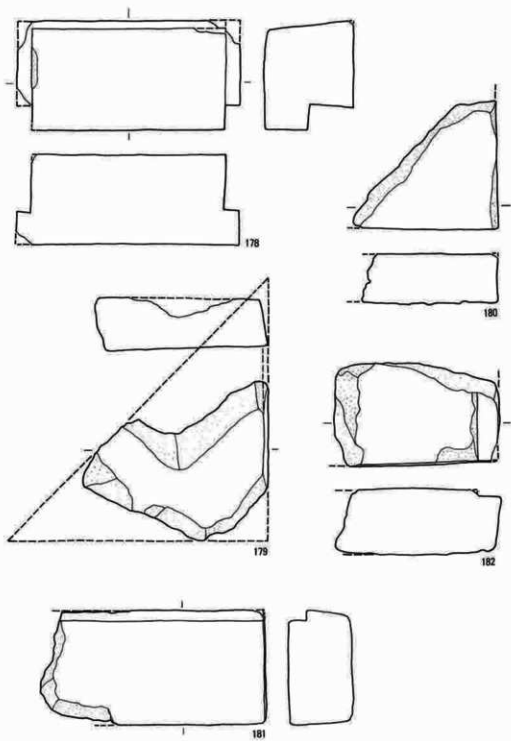
155 (6563)











0 5 10 50cm
1:8

原色図版



後期難波宮大極殿跡(北から)



コンピューターグラフィックスによって復元された後期難波宮大極殿(南西から)

圖 版



1. 調査地遠景(北東から)



2. 調査地遠景(南から)



1. 調査地全景(南から)



2. 調査地全景(北から)



1. 調査地全景
(西から)



2. 調査中央部(南から)



2. 調査西部(東から)



1. 調査東部(西から)



1. 調査地全景(東から)



2. 調査東部(東から)



1. 調査地全景(西から)



2. 調査西部(西から)



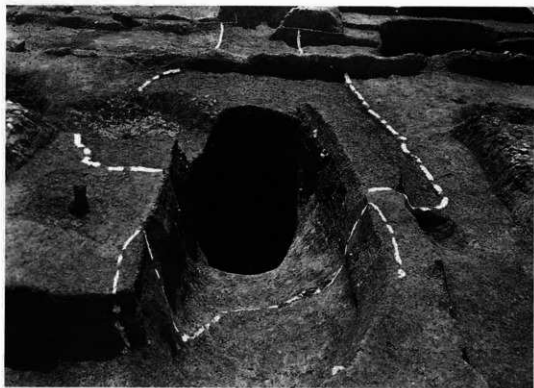
1. 前期内裏南門SB3301と後期大極殿後殿SB1326(西から)



2. 前期内裏南門SB3301と後期大極殿後殿SB1326に取付く前期回廊SC3304と後期回廊SC3324(北から)

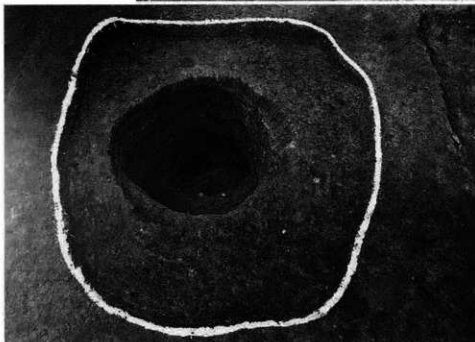


1. 前期内裏南門の掘立柱群、3列に並び手前の南側柱には小柱穴、2つの足場穴、さらに先行する掘形がみられる(南から)



2. 前期内裏南門北側柱(北から)

1. 前期内裏南門小柱穴を伴う南銅柱(南から)



2. 前期北面東回廊SC1301の掘立柱、柱穴には礎板が残っていた



1. 後期大極殿後殿南西隅と回廊取付き部(北西から)



2. 後期大極殿後殿西端と北面西回廊取付き部(南から)

1. 後期大極殿後殿
から回廊の北半
部(東から)



2. 後期大極殿後殿背面の雨落溝SD3323からつづく回廊雨落溝SD1325(北から)



1. 後期大極殿後殿
背面の雨落溝と
北辺の小石敷
SX3322
(東から)



2. 後期大極殿後殿土壇と背面雨落溝(北から)



1. 後期大極殿後殿背面雨落溝(東から)



2. 後期大極殿後殿西北部土壇と雨落溝(北から)



2. 後期大極殿後殿土壇・背面開落溝と北辺の小石敷 細部(西から)



1. 後期大極殿後殿土壇・背面開落溝と北辺の小石敷(西から)



1. 後期大極殿後殿土壇・背面雨落溝と前期内裏南門掘立柱(東から)



2. 後期大極殿後殿土壇・背面雨落溝と前期内裏南門掘立柱 細部(北から)



1. 後期大極殿後殿から軒廊への入隅部分(南東から)



2. 後期大極殿後殿前面の地覆石拔取り跡(東から)



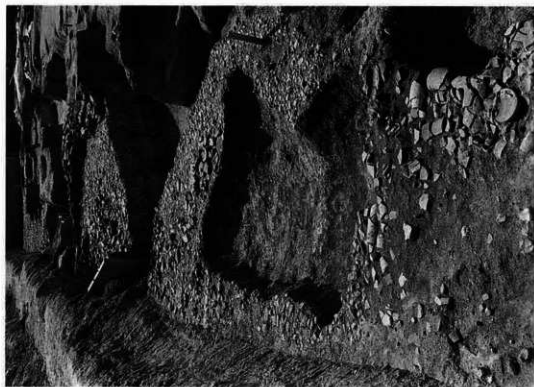
1. 後期軒廊SC3321から後殿へ地覆石抜き跡に堆積した瓦類(南西から)



2. 後期軒廊西礎石抜き跡から小石敷上の瓦類、隅軒平・鬼板もみられる(南から)



2. 後期後殿南西辺の小石敷と散在する瓦(西から)



1. 後期後殿南東辺の小石敷と散在する瓦(東から)



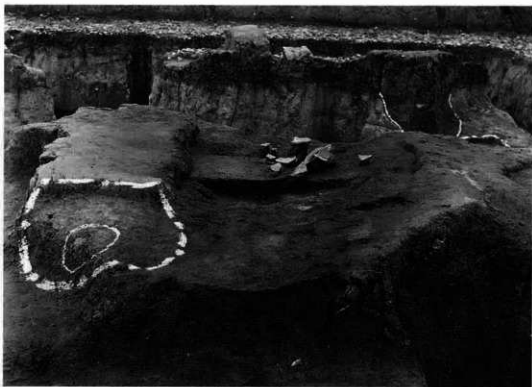
1. 基壇西部の状況と5世紀竈状遺構SX3381(南から)



2. 5世紀竈状遺構SX3381(東から)



1. 5世紀竈状遺構SX3381(西から)



2. 5世紀竈状遺構SX3381(北から)



1. 調査地遠景(南から)



2. 調査地全景(東から)



1. 前期・後期難波宮回廊(東から)



2. 前期・後期難波宮回廊(西から)



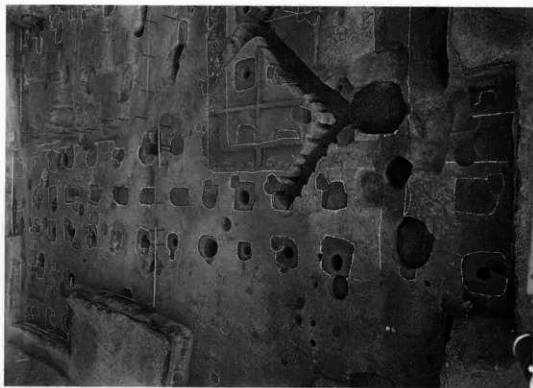
2. 前期内裏南面西回廊SC3304と後期大極殿院北面西回廊SC3324の重複(西から)



1. 前期内裏南面西回廊SC3304と後期大極殿院北面西回廊SC3324の重複(東から)



2. 前期西八角殿院東面回廊SC3301と後期大無殿院北西隅(北から)

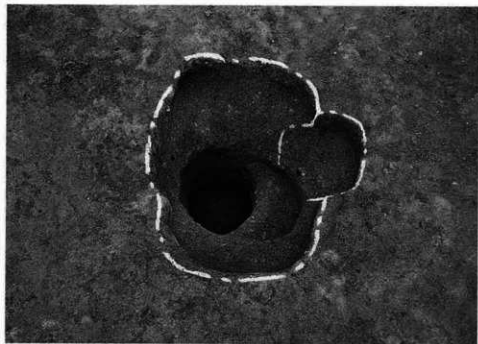


1. 前期西八角殿院東面回廊SC3301と後期大無殿院北西隅(南から)

1. 前期内裏西面回廊SC803・西八角殿院東面回廊と同北面回廊SC3504、手前は内裏西長殿SB1101・SB1102の南端部(東から)



2. 前期内裏西長殿(西から)



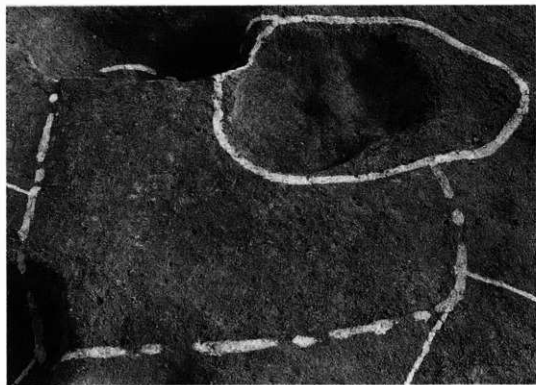
1. 前期西八角殿院
東面回廊柱穴



2. 前期内裏南面西回廊柱穴



1. 前期と後期回廊柱跡の重複(東から)



2. 前期と後期回廊柱跡の重複、後期礎石根石抜き取り跡

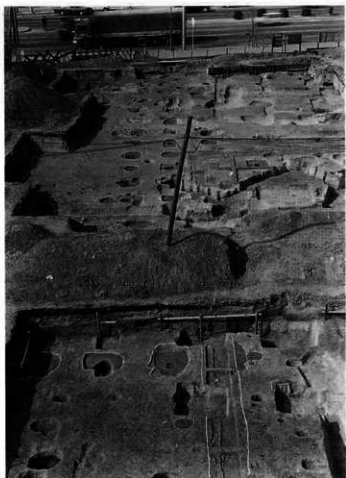


1. 後期大極殿院北
西入隅の雨落溝
SD3325・SD3525
と暗渠SD3521
(南から)



2. 後期大極殿院北西入隅の雨落溝と暗渠凝灰岩切石の底石(西から)

1. 調査地遠景
(第35次・第36次
調査) (南から)



2. 調査地遠景(第35次・第36次調査)(北西から)



1. 調査地全景(南から)



2. 調査地全景(北西から)



1. 調査地全景(西から)



2. 調査地全景(東から)



1. 後期西面回廊東雨落溝SD3525と瓦の出土状況(北から)



2. 後期西面回廊東雨落溝SD3525と瓦の出土状況(東から)



1. 発掘前現状写真(北西から)



2. 調査地全景(南から)



1. 調査地全景(南から)



2. 調査地全景(北から)



1. 調査地全景(東から)



2. 調査地全景(西から)



1. 大極殿南面東階段
段(西から)



2. 大極殿南面東階段(東から)

1. 大極殿南面中央
階段と小石敷
(南から)



2. 大極殿南面中央階段(南から)



1. 大極殿南面西階段(南から)



2. 大極殿南面西階段(南から)



1. 大極殿北面東階段(南東から)



2. 大極殿北面東階段(北から)



1. 大極殿北面西階段(北から)



2. 大極殿北面西階段(北から)



1. 大極殿西面西階段(西から)



2. 大極殿西面西階段(西から)



1. 軒廊SC3321(北から)



2. 軒廊SC3321(北から)



1. 大極殿土壇西面
(北から)



2. 大極殿土壇西面(南から)



2. 大極殿土壇南側と近世柱列(西から)



1. 大極殿土壇北側(西から)



1. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(東から)



2. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(北西から)



1. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(北から)



2. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(北から)



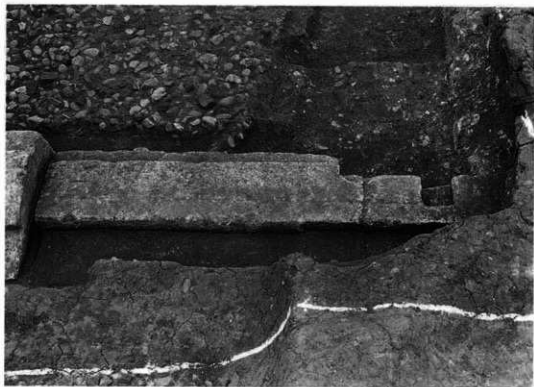
1. 大極殿基壇北面
の凝灰岩地覆石
(西から)



2. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(東から)



1. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(北から)



2. 大極殿基壇北面の凝灰岩地覆石(南から)



1. 前期難波宮小石敷SX3701(左)と後期難波宮小石敷SX1321(右)(東から)



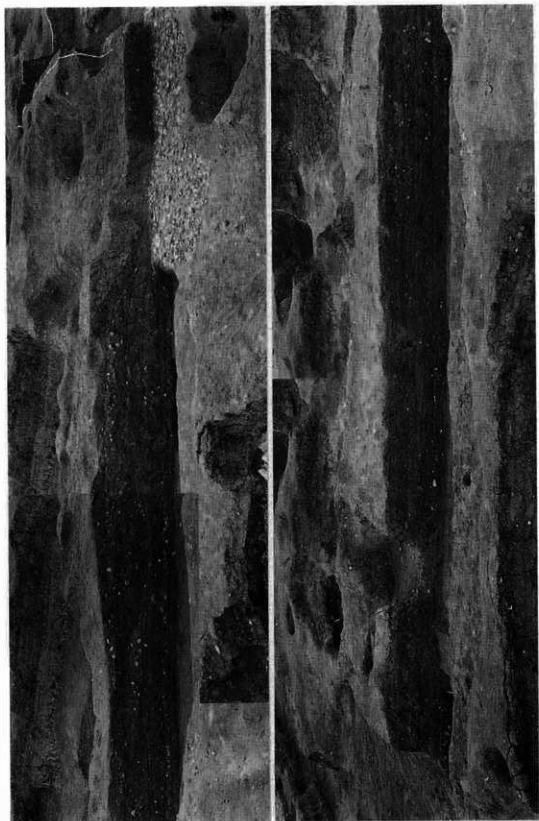
2. 大極殿北面東階段南東部の前期難波宮小石敷(東から)



1. 後期難波宮大極殿土壇下の前期難波宮小石敷(東から)



2. 後期難波宮大極殿土壇下の前期難波宮小石敷 部分(東から)



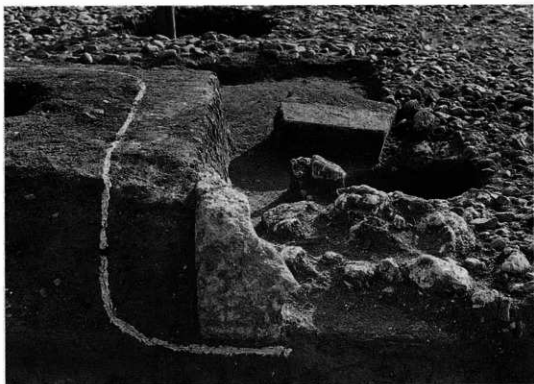
後期難波宮大塚段土壇の断面の版築状況(東から)



1. 近世攪乱墳の壁面にみえる後期難波宮大極殿土壇の版築状況全景(南から)



2. 近世攪乱墳の壁面にみえる後期難波宮大極殿土壇の版築状況 部分(西から)



1. 大極殿南面東階段西側の凝灰岩出土状況(北から)



2. 軒廊SC3321東側の瓦出土状況

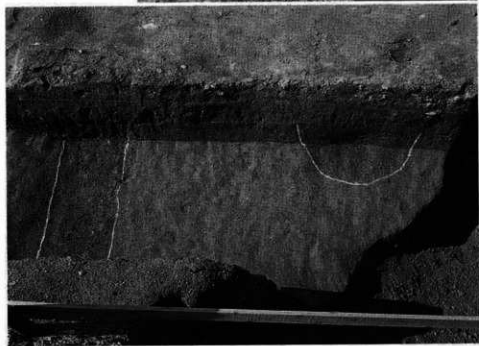


1. 大極殿鬼板6920
出土状況



2. 大極殿土壇北西隅の瓦出土状況(北から)

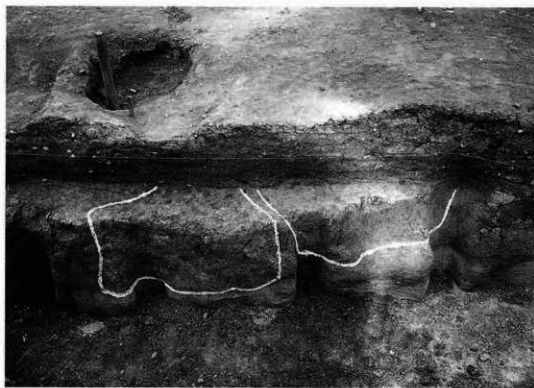
1. 難波宮下層遺跡
柱穴(右下)と
時期不明溝
SD3681(左上)
(北から)



2. 難波宮下層遺跡柱穴(右)と時期不明溝SD3681(左)(東から)



1. 難波宮下層遺跡柱穴SZ3750(東から)



2. 難波宮下層遺跡柱穴SZ3750・51(東から)



1. 後期難波宮小石敷下層の掘形SA3781(南から)



2. 後期難波宮小石敷下層の掘形SA3781(南から)



1. 大極殿南面東階段と難波宮下層遺跡柱列SA3741(北東から)



2. 難波宮下層遺跡柱列SA3741(東から)



1. 擾乱墳埋戻し後の大極殿土壇(北東から)



2. 擾乱墳埋戻し後の大極殿土壇(南から)



1. 攪乱墳埋戻し後の大極殿土壇(北から)



2. 攪乱墳埋戻し後の大極殿土壇(東から)



2. 調査地全景とSA374-1(南から)



1. 調査地全景(北から)



1. 大極殿土壇北東隅(北から)



2. 大極殿土壇北東隅(西から)



1. 大極殿東面階段(東から)



2. 大極殿東面階段(西から)



1. 調査地全景(北から)



2. 調査地全景(東から)



1. 後期大極殿前庭
小石敷SX1321
(東から)



2. 後期大極殿前庭小石敷と掘立柱柵SA3926(西から)



1. 調査地全景(北から)



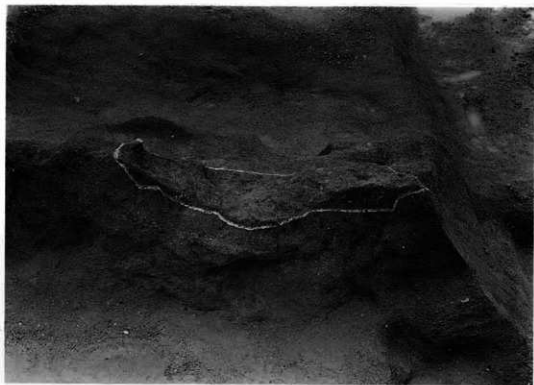
2. 調査地全景(東から)



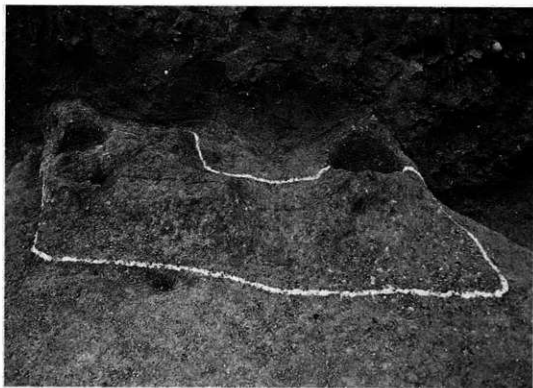
1. 調査地東部(北から)



2. 後期間門北方の小石敷SX3923(南から)



1. 後期南面東回廊柱跡(東から)



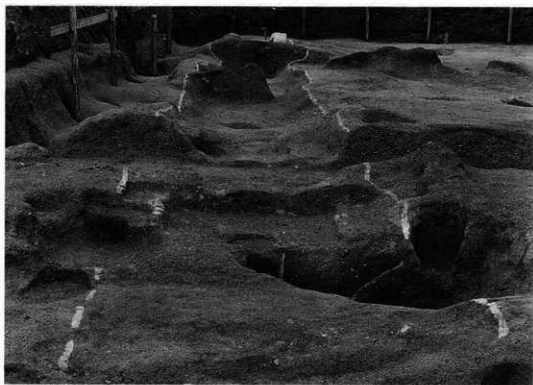
2. 後期南面西回廊柱跡(北から)



1. 後期大極殿院回廊南西隅
(北から)



2. 後期大極殿院回廊南西隅、暗渠SD1523と回廊北雨落溝SD3925(西から)



1. 後期大極殿院回廊南西隅暗渠(東から)



2. 後期南面西回廊北隅落溝(南から)



1. 後期暗渠凝灰岩切石の底石と側石(南から)



2. 後期暗渠凝灰岩切石の底石と側石(西から)



2



202



204



102



213



201



210



238

2：前期難波宮、102：後期難波宮、201・202・204・210・213・238：難波宮下層遺跡



219



237



222



226



229



240



231



241



233



242



235



112
(6009)



113
(6010a)



115
(6011Bb)



116
(6012)



118
(6013)



117
(6013)



122
(6015B)



126
(6021)



119
(6014)



127
(6022)



120
(6015A')



123
(6016)



124
(6017)



125
(6020)



129(6572A)



130(6572B)



131(6572C)



132(6572D)



133(6572D)



134(6572E)



135(6572F)



136(6572H)



137(6573B)



138(6574A)



139(6574B)



141(6574D)



128(6241)



143(6673)



142(6664B)

1:3



250

1:3



119(6014)



127(6022)



128
(6241)



124
(6017)



125
(6020)



124
(6017)



132
(6572D)



133
(6572D)



136
(6572H)



137
(6573B)



145(6262B)



146(6361)



144(6161B)



147(6362)



148
(6369A)



149(6369B)



150
(6561A)



151
(6561C)



152
(6561D)



153
(6561G)



154
(6561H)



155
(6563)



156
(6565)



157
(6761)



172



173



171



159
(6920)



160
(6921)



162 (6923)



158
1:2



161
(6922)



163(6970A)



164(6971A)



165(6972)



166(6973A)



168(6975)



167(6973C)



170(6979)



169(6976C)

難波宮址の研究 第十

ISBN4-900687-12-4

1995年9月30日 発行

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL 06-943-6833 FAX 06-920-2272)

印刷・製本 岡村印刷工業株式会社

〒558 大阪市住吉区長居東3-4-17

**The Excavation Report
of
the Naniwa Palace Site**

**(The Historical Investigation of
the Forbidden City of Naniwa: Volume X)**

A Report of Excavations
undertaken at the
Audience Hall Compound of the Latter Naniwa Palace
between 1969 and 1973
in Osaka, Japan.

September 1995

Osaka City Cultural Properties Association

**The Excavation Report
of
the Naniwa Palace Site**

**(The Historical Investigation of
the Forbidden City of Naniwa: Volume X)**

A Report of Excavations
undertaken at the
Audience Hall Compound of the Latter Naniwa Palace
between 1969 and 1973
in Osaka, Japan.

September 1995

Osaka City Cultural Properties Association